SNEAKER BUNKO
シャイニング・フォース
神竜の血脈
篠崎砂美
角川スニーカー文庫

●篠崎砂美(しのさきさみ)

1960年、東京に生れる。B型。典型的な蟹座。小説家めざし、大芸大文芸学科に進む。卒業後なぜかコンピュータの販売にたずさわり、八年間の冬眠の後、コンピュータ通信がきっかけとなって、念願をかなえる。トールキン、キャロル、中山星香の世界にどっぷりと浸かっている。

カバーイラスト／SUEZEN
カバーデザイン／小林博明(K Plus artworks)

SHINING FORCE
シャイニング・フォース
神竜の血脈

シャイニング・フォース

神竜の血脈

篠崎砂美

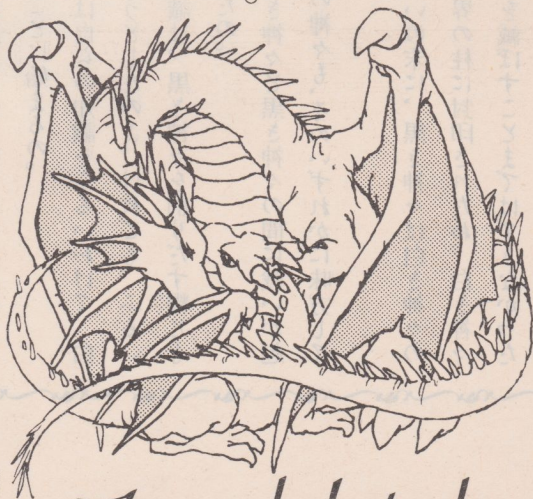
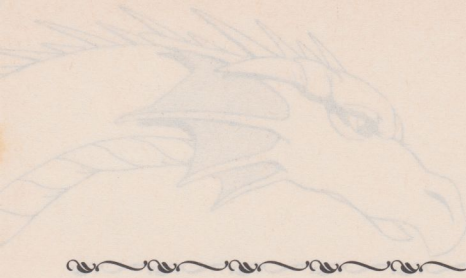
角川文庫 9402

口絵・本文イラスト　SUEZEN
地図作成　渡辺てるこ
本文レイアウト　小林博明

目次

ドラゴニア
ルドドル村
ーン大陸

ウランバートル
パオ平原
バストーク
マナリナ
リンドリンド

パルメキア大陸
グランドシール
ボルカノ山
火竜のしっぽ
ハッサン

ぼうや、
よくお聞きなさい。
An old tale

神々の黄昏(たそがれ)は遥かな昔。神々の手で、新たな神々を創ったことに始まるの。

灰色の神々は自らの知識をふるいわけて、白き神々を創ろうとしたのよ。けれども、ふるいわけられた知識は、黒き神々を創りだす糧(かて)ともなってしまったの。

やがて、白き神々と黒き神々の間に戦いが起きたわ。灰色の神々も、そのいずれかに味方して戦ったの。

長い長い戦いの末に、黒き神々は白き神々の力によって世界の柱に封印されたわ。白き神々は、黒き神々を滅ぼすことまではできなかったのね。

後に悪魔王とも呼ばれる黒き神々を封印するために、白き神々たちはその力を使い果たしてしまった。黒き神々を眠りにつかせた代償として、白き神々もまた眠りにつかねばならなかったの。

そして、灰色の神々は、その戦いでほとんどが死んでしまった。

残ったわずかな灰色の神々はお考えになったわ。世界に残された、灰色の神々の子供たちの未来を、白き神々の子供たちの未来を、黒き神々の子供たちの未来を……、つまり、この世界の生き物たちすべての未来を。

千年の時が経てば、眠りについていた白き

神々も黒き神々もその力を蘇(よみがえ)らせるでしょう。その永き眠りの果てに目を覚ますものは、新たなる戦いの炎だとわかっていらしたから。そして、そのときには、灰色の神々は残ってはいないことを知っていらしたから。

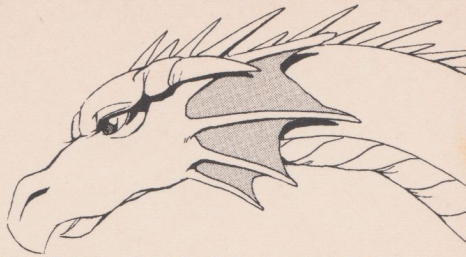
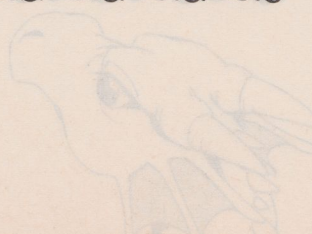
白き神々の眠る地と黒き神々の封印された地とに、灰色の神々は守り人(もりびと)を住まわせることにしたの。そこには町ができ、やがて国となったわ。

灰色の神々は自らの知識を伝え残すために、いくつかの秘伝の書(マヌアル)をお作りになったわ。光り輝く魔法の書には、神々の遺産を解封(かいふう)する方法と、それを封印する方法が記されていたのよ。

そして、秘伝（マヌアル）の書を守り、正しくそれを求める者に伝えるようにと、灰色の神々は新たな命をお創りになった。

それが、気高き神竜の一族。それが私たち。

秘伝（マヌアル）の書を守ること、それが神竜のたった一つの使命。千年の間、一族はそれをよく守り通したわ。すべては使命のためにあり、使命こそがすべてだったの。

けれども、困ったことが一つだけあったわ。そのころの一族には、子供がいなかったのよ。今から思えば、すごく不思議なことなのだけれども、そのころの一族は子供というものを知らなかったの。それどころか、夫婦という考えす

らなかったのよ。しかたがないわよね、彼らは灰色の神々の手から生み出されたのだもの。お母さんもお父さんも見たことも聞いたこともなかったのだから。
神竜の数は年とともに減っていき、その数は増えることはなかったわ。
東ルーン大陸の神竜の国ドラゴニアでは、問題は深刻だったわ。このままでは、神竜の一族は滅びてしまう。誰もが、初めての不安というものに恐れをいだいたわ。
そんなとき、彼らが現れたの。ルドル村の人間たちが。
彼らは、神竜の一族を神の嫡子として崇めた

わ。ほとんど盲信的につくしてくれたの。一族は初めは戸惑ったけれど、やがて彼らを受け入れたわ。彼らには邪心がないことがすぐにわかったし、それに、他を支配するということは一族の使命には入っていなかったから考えもしなかったのね。

人々は一族から多くを学び、また、一族も人々から多くを学んだわ。

やがて、千年近くを経た一族に、初めての子供が生まれたの。

仔竜は全身が真っ白で、バリュウと名づけられたわ。それは、大きな喜びであるとともに、最後の希望でもあったの。

数年後、彼は最後の神竜となったわ。

そのバリュウの最初の冒険は、神竜が灰色の神々に創られてからちょうど千年のときだった。黒き竜（ダーク・ドラゴン）の封印を解くために、ダークソルという男が秘伝（マヌアル）の書を盗みだしたの。バリュウは、魔軍と戦うシャイニング・フォースの一員としてドラゴニアを旅立ったわ。それは、数々の勲（いさおし）の物語よ。

バリュウをはじめとするシャイニング・フォースの勇者たちによって、ダークソルも、復活した黒き竜（ダーク・ドラゴン）も最後には倒された。けれども、戦いの中、秘伝（マヌアル）の書はその行方がわからなくなり、一族の手からは失われてしまったわ。

バリュウはシャイニング・フォースの仲間たちと別れると、一人ドラゴニアに戻って静かな生活を営んだそうよ。
十年の間それは続いたわ。
そしてある日……。
海のむこうから、新たな冒険が彼を誘(いざな)いにきたの。私たち神竜の血族の命運(めいうん)を決める、大いなる冒険が……。

シャイニング・フォース
神竜の血脈

第一章　ドラゴニアの白き神竜

1

ことりと、小さな物音がした。いや、したと思う。

「バリュウにとって、それはどちらでもよいことであった。だから、振り返って確かめることもしない。

風の音さと、心の中で自分の声がする。その声は、決して口からは発せられなかった。なぜなら、語りかける相手が存在しないからだ。

神竜の最後の生き残りとなったバリュウに、今や同族はいない。独りには、もうなれすぎていた。

彼は平穏を求め、時は彼の望む以上にそれを与えてくれた。読書にふける静かな生活。およそ、猛き竜の生活としては、人々が想像し難い穏やかな暮らしを彼は営んでいた。

さきほどから、バリュウは紙の上でペン先をひとしきり遊ばせていた。まるで、文字にする

ことのできない想いを描こうとしているかのように。やがて、彼は疲れたようにインク壷の中にペン先を戻した。

たまに途切れつつも、ずっと書き続けてきた日記。その冊数も、二桁を数えてからひさしい。最近は、今日のように何も書くことのない日が多くなってきていた。いつからであろうか。思い出せないほど昔ではないはずなのだが。

丸椅子の上で同じ姿勢をしいられてきた背筋を解放するかのように、バリュウは長い首ごと大きく後ろに身体を反らせて伸びをした。その目に、ふってわいたように一人の娘の姿が逆さまに映る。

「バリュウ」

若き神竜の長の名を呼ぶ声が静寂を破り、人間の娘が彼の首にしなやかな両腕を絡ませてきた。

かろうじて無様に椅子から転げ落ちることをまぬがれたバリュウは、ささやかな幸運に短く感謝した。たくましい首の筋肉で娘を持ちあげるようにして姿勢を戻すと、ゆっくりと椅子の上で純白の身体を後ろへと回す。

「カリンじゃないか。いつの間にやってきたんだ!?」

バリュウが、呼び慣れた名前を口にする。

背の高い娘のはきはきとした顔が、肩先からバリュウを見上げていた。狩人の服装が、健康

的でしなやかな肢体によく似合っている。ここへくるまでの間に、きっと野や森をかけまわってきたのだろう。バリュウは、娘の茶色の髪に絡んでいた枯れ葉を、そっと爪（つめ）の先でつまんで取り除いてやった。

神竜は、大型ではあるが巨大な生き物ではない。他の下等な竜と違って、二足歩行である。人間の頭が、ちょうど翼のつけ根ほどの高さになる。

「あまり僕を驚かさないでくれよ。まったく。そのだきつく癖も、ちっともなおしてくれないんだから」

いつまでも仔竜のままではないと、バリュウはささやかな抗議をする。

「あら、あたしが部屋に入ってきたのに気づかないバリュウがいけないのよ。とても、あのシャイニング・フォースにいたとは思えないわ」

娘が軽く唇（くちびる）をとがらせた。

ルーン大陸全土を救った光の軍団（シャイニング・フォース）。かつてその一員だったとしても、バリュウにとってそれは過去の称号でしかなかった。その名をもちだされると、どうも鼻の頭あたりがむずがゆくなる。まして、カリンから肩書きつきで呼ばれることは不本意だった。

カリンはバリュウの首筋をなでるようにして身を引くと、くるりと後ろをむいた。後ろで一つに束ねた明るい茶色の髪が、ひゅんと弧を描く。皮の上着の後ろに背負った矢筒の中で、数本の矢がからんと乾いた音をたてた。

「そうそう。ここへくる途中で山鳥を仕留めたの。夕食にはおいしい煮込みを作ってあげるわね」

両手を後ろで組んで背を反らせると、カリンは肩先からひょっこりとかわいい横顔をのぞかせた。そのまま、バリュウの返事を待たずにかけだしていく。

「煮込みって、また泊まっていく気なのかい？」

料理に要する手間と時間を思って、バリュウは呆れ顔を作った。でき上がるころは夜になってしまうではないか。

「真夜中にルドル村まで独りで帰れなんて言わないわよね。それに、泊まる部屋が余ってないなんていいわけはなしよ」

姿を見せずに、カリンの声だけが返ってくる。

やれやれと、バリュウは心の中で白旗をあげた。

カリンは、西にあるルドル村から月に一度の割でやってくる。快活を絵に描いたようなこの人間の娘に、バリュウはどうしても逆らうことができない。力では圧倒しているはずなのに、口では一度も勝利を得ることができないのだ。

まだ幼体のときに、彼はカリンたちルドル村の子供たちと一緒に育てられていた。特に村長の娘であるカリンは、昔も今も変わらぬバリュウの唯一の友達だ。もし人間の娘と神竜の子との間に使ってもよい言葉ならば、幼馴染と呼べる存在だろう。

魔軍がドラゴニアを襲ったときも、彼女だけはシャイニング・フォースの後を追って彼を助けにきてくれた。自分の身の危険よりも、バリュウのことを案じてくれたのだ。だから、バリュウは、カリンを守るためにシャイニング・フォースに加わった。

戦いが終わって戻ってきてからも、何物にも物怖じしない性格のカリンは、精神的にも実年齢でもバリュウの姉的存在であり続けている。

彼女のもたらしてくれる変化は、彼にとって時がとまっていないことを教えてくれる唯一のものであった。騒がしくもあわただしい活気に満ちた一時と、それをもたらしてくれるカリン。そのどちらもが、バリュウは好きだったのだ。

バリュウは、笑いとも溜め息ともつかない息を、ふうと深く吐きだした。

書きかけの日記帳を閉じると、バリュウは静かに重い腰をあげた。

しばらくして、遅い夕食ができあがる。

食卓の上の煮込みの椀を間にはさんで、二人はいつものようにむかいあった。

「明日、クリンが帰ってくるんだ」

唐突に、カリンは正面に座っているバリュウに切りだした。かなり高いところに位置するバリュウの顔を、自然と見上げる形になる。

「へえ、あの物知りクリンがかい」

飲んでいた葡萄酒の盃から、乱暴に顔をあげてバリュウが聞き返した。よすぎた勢いに、盃

の中の葡萄酒がテーブルの上とバリュウの顎に飛び散る。

「もう、何をやってるのよ。いくつになっても行儀が悪いんだから」

カリンは椅子の上に立ち上がると、布でバリュウの口をぬぐってやった。

「よしてくれよ、子供じゃないんだから、みっともないじゃないか」

照れて嫌がるそぶりをしながらも、バリュウはじっとしている。それはもう、習慣による条件反射といってもいいのかもしれない。

「誰が見てるっていうのよ。それに、あなたが赤ちゃんのときには、私がいつもこうしてふいてあげたんだから」

カリンがバリュウの小さいときのことを持ちだす。

母乳の出なかったバリュウの母に代わって、ルドル村の人々が牛や山羊の乳を生まれたばかりのバリュウに与えていたときがある。そのころ、カリンはバリュウに何度も授乳させたと言いはるのだった。当時の彼女は三歳のはずだからできるわけはないと、バリュウが反論する。カリンの錯覚だと。すると、彼女は事細かにそのときの様子を語って聞かせるのが常だった。記憶がまるでないぶん、いつもバリュウの方が分が悪い。

「それで、クリンが帰ってくるって話だったっけ」

たまらず、バリュウが話をもとに戻そうと試みた。

「そうそう、そうなのよ」

カリンが椅子に腰を戻す。

「マナリナで魔法の修行をしているって聞いてたけど。やっと帰ってくるんだ」

バリュウは、カリンの妹の成長した姿を思い浮かべた。弓を片手に野山をかけまわる女丈夫のカリンとは違って、クリンは正反対の本の虫だ。姉妹で、きれいに内と外に性格が分かれている。

古い文献の中からマヌアルについての正しい記述を探しだしたのは彼女だった。その知識は、ガーディアナ国の軍師ノーバでさえも部分的には一目(いちもく)おいたほどだ。実際、バリュウよりもマヌアルについては詳しいといえた。なにしろ、ダークソルに奪われるまで神殿の奥深く封印され続けていたマヌアルを、バリュウたちは一度も目にする機会がなかったのだから。

「もちろん、バリュウもあたしと一緒にクリンを迎えにいくわよね」

当然よねと言いたげに、組み合わせた両手の指の上でカリンは唇(くちびる)を少し横に広げた。

「そうだなあ……」

バリュウは軽く言いよどんだ。クリンに会うのに異存はない。しかし、そのためにはルドル村にいかなくてはならなかった。

「バリュウにきてほしいというのは、クリンからのお願いでもあるのよ。なんでも、ぜひ直接伝えたい大切なことがあるんですって」

「なんだい、その大切なことというのは」

「それが、ウランバートルから先にきた伝書鳩（でんしょばと）の手紙には、それしか書いてなかったの。手紙でなく、直接伝えたいみたいね。まったく、実の姉が信用できないのかしら、あの子は」
むくれてみせるカリンを、バリュウは笑いながらなだめた。
「クリンのことだ、鳩の持つ手紙が他の人の手に渡るのを嫌がったのだろうさ。だとしたら、よっぽど重要な用件なんだろうなあ。しかたない……」
「しかたない？」
カリンが、ちょっぴりいじわるに聞き返す。
「いえいえ、喜んで参りますとも」
少しおどけながらバリュウは答えた。それは、半分は本当であり、半分はうそであった。
かくして、バリュウは数年振りにドラゴニアの地を離れることになった。それは、新たな旅の始まりであった。

2

ルドル村は、ドラゴニアの神竜たちに魅（み）せられた人々が興した小さな港だ。小さいながらも、西大陸のウランバートル港やその中間にある島国ワーラルと定期的な船の行き来があり、東大陸の北の窓口の役目を果たしている。
昼を少し回るころ、バリュウとカリンはルドル村にたどりついた。狩りで野山を走りまわる

カリンの脚力は、ドラゴニアからの道程にも疲れをみせない。
村の門のところで、マロンが二人を出迎えてくれた。十年前の戦いのときに石壁を築いて村を守った力自慢の男の子は、成人して屈強な体格の青年となっていた。
「カリン様、バリュウ様、ちょうどクリンさんの船が入ってくるところですよ。ご案内いたします」
門番を他の者に頼むと、マロンは二人を案内するように港へむかって歩きだした。彼には、クリンを迎えにいきたいちょっとした理由があるのだ。それを知っているカリンは、人さし指で唇（くちびる）を隠してくすりと笑った。
「お願いするわ」
村の代表の娘としての威厳をたたえて、カリンはマロンに答えた。彼女と歳の近い者たちにとっては、子供たちの力を集めて魔軍に抵抗したことのあるカリンは、やはり一人の英雄なのであった。それは、本人が望むかどうかは別として、バリュウがシャイニング・フォースであったことと同じくらいに確かなことであった。
海風よけの高い垣根に囲まれた家並みの間を縫うようにして、彼らは海辺へとむかった。
三人が進んでいくたびに、道ゆく人々がはたと足をとめる。そして、次の瞬間には深々と頭（こうべ）を垂れるのだった。中には、あからさまに母親の陰に隠れる小さな子供もいる。それらの人々を見て、神竜と一緒に歩いている青年は、誇らしげに厚い胸をぐんと反らした。

カリンは、そっとバリュウを盗み見てみた。神竜の長は、平静を装いながらもそっと何かを噛み殺しているようだった。少なくとも、カリンの目にはそう映った。

遙か昔から、ルドル村の人々はドラゴニアの神竜たちを崇め、彼らの力になってきた。両親が亡くなった後の数年間、シャイニング・フォースの仲間たちと出会うまで、バリュウがたった独りでも生きてこられたのは、カリンをはじめとするルドル村の人々の力があってのことだった。

だからこそだ。バリュウにとって、ルドル村の人々は感謝の対象でこそあれ、畏怖を与えるべき対象ではない。ドラゴニアの最初の神竜たちはどうであったにしろ、バリュウはカリンをはじめとするルドル村の子供たちと対等であった。対等でありたいと願い続けていた。

だが、時の流れとともに、仲間であった子供たちも成長し、神竜に仕える大人へと成長していった。変わってしまったのは彼らであろうか、それとも、バリュウ自身が変わってしまったのだろうか。唯一、昔と態度を変えないのは、カリンたち姉妹だけであった。

絡みつく人々の視線を振り払うようにして、バリュウは港へと急いだ。

潮の香が強くなる。

桟橋が見えてきた。船が一隻、すでに桟橋についている。

渡り板がかけられ、乗客たちが船から降り始めていた。

数人の乗客の後に続いて、一人の娘が桟橋に降り立った。重そうな荷物の入った袋をどんと

下におろすと、中央に頭を出す穴をあけた一枚布の外套の横から手を出した。小さな鼻からずり落ちかけた丸眼鏡を、右の中指でひょいと持ちあげなおす。

「クリン！」

カリンが、久方振りの妹の名を呼んで走りだした。

ばつが悪そうに乱れた栗色の短い髪をしきりに手櫛で整えながら、クリンは姉が自分をだきしめにくるのを待った。

「やあ、物知りクリン、おひさしぶり」

バリュウが親愛を込めて、その風変わりな娘を愛称で呼ぶ。

「おひさしぶり、バリュウ」

姉の抱擁から解放されたクリンが、手をのばしてバリュウの首にだきついた。やはり姉妹だと、バリュウは密かに苦笑した。

「お帰り、クリン」

青年が、忘れられないうちにとクリンに挨拶する。

「ただいま、マロン」

「ちぇっ、俺は言葉だけかよ」

青年が小さくぼやいた。

「あなた、何期待してたのよ」

クリンは、眼鏡の奥からちろりとマロンを横目で睨んだ。

「そんなことより、早く荷物運んでよ」

半分命令口調でクリンがマロンに言いつけた。変わらないなとぼやきつつ、マロンは彼女の荷物に手をのばした。下にむけた視線が、クリンの後についてきた生き物の視線とぶつかる。思わず、金縛りにあったかのようにマロンの動作がとまった。

「いいのよ、ケルベロスちゃん。彼は単なる荷物運びなんだから」

クリンの声に、双頭の魔犬はマロンから四つの瞳を逸らした。一声鳴いて、御主人様の下へ尻尾を振りながら走っていく。緊張から解き放たれたマロンは、どっととめていた息を吐きだした。

「話すことがたくさんあるの、カリンにも、マロンにも。そして、バリュウに……。早く家にいきましょ」

クリンは姉とバリュウの手をとると、先頭に立って歩きだした。その後を、マロンとケルベロスがついていく。

彼らが港を離れようとしたとき、ふいに周りの人々がざわめきだした。

振り返ったバリュウの目に、一隻の船が映った。沖合いからゆっくりとこちらに近づいてくる。だが、遠目にも艦首部分が壊れ、マストが途中で折れているのがわかる。意志をもってこちらへむかっているのではなく、潮に流されているのは間違いない。

何か聞こえるのだろうか、突然ケルベロスが、難破船にむかって激しく吠えたて始めた。よく見ると、難破船の上空を何かが群をなして飛びまわっている。
「沿岸の掃除屋だわ。だとしたら、あの船には何かがあるわね、あるいは誰かがいるか……」
いつの間に荷物の中から取りだしたのか、クリンが遠眼鏡の細い筒を片目にあてがっていた。
「確かめてみる必要があるな」
バリュウはつぶやくと、背中の翼を広げた。すぐ後ろにいたカリンの視界が、真っ白な翼ですべて覆われる。ふいに、彼の身体は三倍にもふくれあがったように見えた。その姿は、間近にいた人間たちをも圧倒してやまない。
神竜の肩の筋肉が大きく盛りあがり、白い翼が大気を打った。数度の羽ばたきで、一気に上空へと舞いあがる。風をとらえると、バリュウはさらなる高みへと昇り、難破船にむかって滑空に移った。
近づいてくる白き飛竜に、シーバットたちが蜘蛛の子を散らすように船の上から逃げだしていく。
バリュウは船の上を軽く旋回すると、ふわりと甲板に降り立った。
「あたしたちもいってみましょう。船を出しなさい」
カリンが命令する。マロンは、小舟に飛び乗るとオールを構えた。姉妹を乗せると、すぐに

力強く漕ぎ始める。

三人は、バリュウの後を追って難破船へと急いだ。

たどりついたときには、すでにシーバットたちは姿かたちもない。どだい、シーバットごとき魔物が神竜の相手になるはずがなかった。本能的に逃げだした彼らは、賢かったといえるだろう。

甲板で待っていたバリュウはふたたび舞い上がると、三人を船の甲板へと引きあげた。

間近で見ると、船の損傷は予想した以上にひどい。嵐や戦闘でもここまでひどくはならないだろう。まるで、巨大な腕で叩かれるかむしり取られるかしたような傷跡が、船体のそこかしこに刻まれている。

甲板の裂け目から船内に降りていくと、中も外に負けないくらいめちゃめちゃに荒されていた。未だにこの船の浮いていることが、不思議に思えるほどの損傷だ。

乗員の姿はどこにもなかった。船体の裂け目などから海へと投げだされたのか。何者かによって外へと引きずりだされたのか。

「難破船というよりは、まるで幽霊船ね」

クリンの言葉に、バリュウは小さくうなずいた。

そろそろ引きあげようとしたとき、ふいにマロンが床の大きな裂け目を指さして叫んだ。船体の裂け目からわずかにさしこむ薄明かりに、バリュウたちは目を凝らした。船底に一人の娘

が半身を水につけながら倒れている。
「マロン、お願い」
カリンに指示されて、マロンが下に降りた。
娘の胸に手をあてて確かめる。幸いにして、心臓は力強く動いていた。運よくここへ転落して気を失い、難を逃れることができたのだろう。マロンは、持ち前の力で娘を軽々とだきあげた。濡(ぬ)れた長い髪から、船底にたまっていた海水が音をたてて流れ落ちた。
「バリュウ様、受け取ってください」
マロンの持ちあげた娘の身体(からだ)を床下から引きあげながら、バリュウは不安にも似た漠然(ばくぜん)とした予感を感じずにはいられなかった。一瞬動きがぎこちなくなるバリュウに、カリンは彼の腕の中の娘に視線を落とした。
黒髪の娘はまだ何も語らず、バリュウの腕の中で微(かす)かに胸を上下させるのみであった。

3

カリンの家に運ばれた娘が意識を取り戻したのは、日も暮れてからずいぶんと経(た)ったころだった。おかげで、バリュウはドラゴニアに戻るきっかけをなくし、カリンの家に泊まることになってしまった。もっとも、最初からクリンとカリンの姉妹が、すんなりとバリュウを手放してくれようはずもなかったが。

寝台の上で半身を起こした娘は、最初、バリュウの姿を見てひどく驚いた。そんなに驚くことはないのにと思いながら、カリンはバリュウと自分を娘に紹介した。
もっとも、初めて神竜を目のあたりにした者としては、それが普通の反応であろう。誰もが、ルドル村の人々のように普段から神竜を知る生活をしているわけではない。
カリンが、神竜――バリュウに慣れ過ぎているのだ。
「では、私は漂流していたところを、あなたたちに助けられたのですね」
しっかりとした口調で、娘は言った。少し端整すぎる顔立ちに似合った、涼しい声音だった。
「私は、ボルカノン神に仕える神官兵で、カマリアと申します」
彼女は、慇懃に自らの名をバリュウたちに告げた。
「――遥か北にあるパルメキア大陸から、神竜の一族を訪ねに海を越えて参りました」
「私を訪ねに?」
バリュウが聞き返した。
カリンと、マロンに呼ばれて離れの書庫からかけつけてきたばかりのクリンが、驚きと疑問のまなざしでバリュウを振り仰ぐ。
「パルメキア……、ボルカノン……。聞いたことのない名前だわ」
クリンは、ひょいと眼鏡をあげなおした。
「ちょっと待ってください、ボルカノン神殿でいただいた書状が……」

カマリアは、傍らの丸椅子（スツール）の上におかれた衣服に手をのばした。カリンたちが乾かしてたたんでおいてくれたものだ。上体がひねられる。長い黒髪の零（こぼ）れ落ちた白い背中がこちらをむき、掛け布団（ふとん）が滑り落ちて豊かな胸があらわになった。

絶妙の間合い（タイミング）でクリンが片腕を振りあげた。外套（マント）の裾（すそ）が舞いあがり、すっぽりとマロンを頭から覆（おお）った。

マロンが非難の声をあげて布を払い取ったときには、カリンに衣服を手渡されたカマリアは、すでにいずまいを正していた。

カリンはそっとバリュウの様子をうかがい見た。神竜はカマリアという異種族の娘よりも、その話の方に興味があるらしく、じっと続く言葉を待っていた。心なしほっとする自分が、カリンは妙におかしかった。

「――残念ながら、書状は失われてしまったようです」

自分の衣服を調べたカマリアは、落胆の吐息をついた。

「今は、私の言葉を信じていただくしかありません」

カマリアはバリュウの目を見据えると、身を乗りだして懇願（こんがん）した。

「どうか、あなたがたの守っている秘伝の書（マヌアル）を私にお貸しください。そして、貴き神竜の一族をお救いください」

真摯（しんし）な言葉が、バリュウを射た。

「マヌアルを!? なぜ、そのような物が必要なのですか。それに、神竜の一族を救うだなどと。神竜は、すでに滅びゆくことが決まった種族です。私がその最後の一人ということからも明らかでしょう。いまさら、どうすることもできません」
バリュウの言葉に、カリンはふたたびそっと横目で彼の表情をうかがい見た。そして、その心情をさっして深く視線を伏せるのだった。
「異なことを……。あなたが最後の一人だなどと誰が決めたのですか。もっとも、このままでは本当にそうなってしまいますが。――どうか、パルメキアの神竜たちをお救いください」
カマリアは怪訝（けげん）そうにバリュウを見返すと、ふたたび助力を請い願った。
「そのパルメキアというところに、バリュウ以外の神竜が住んでいる。あなたはそう言いたいわけね。そして、彼らは助けを求めていると……」
クリンの問いに、異国の娘はこくりとうなずいた。バリュウが驚きを隠せず、思わず一歩前に進み出る。カリンは、彼の巨体を支えようとでもするかのようにそっとバリュウの身体（からだ）に手をそえた。この時初めて、彼女の心に不安が根を下ろしたのかもしれない。
「詳しく話してくれないか。パルメキアには私の仲間が、神竜たちがまだいると言うのか」
「では、私の見た神託（ビジョン）をあなたにお伝えしましょう」
カマリアは、バリュウの手を誘（いざな）った。応（こた）えてさしだされた神竜の手をしっかりと握り締める。彼女の額で、飾環（サークレット）にはめこまれた赤い宝玉がほのかな光を放ち始めた。

目を閉じるバリュウの脳裏に、銀色の竜の姿が浮かびあがった。鎧に身をかためたたくさんの竜たちを、その背後に控えさせている。透き通った宝石のような蒼い瞳が、真摯にこちらを見つめている。同時に、威厳をもった言葉が聞こえてきた。

――遠き大陸の同胞よ。我は、火の山の神竜が長、銀竜。我らは今、魔族と戦っている。だが、戦いによって、我らは守護すべきマヌアルを失ってしまった。ために、我らは命の炎を弱め、大地の力は異常に増大を続けている。このままでは、我らは滅び、抑えきれなくなった大地の力によって、ふたたび厄災が解き放たれることだろう。まだ見ぬ同胞よ、我らは救いの手を求めている。この大地に生きるすべての命を守るために、そなたたちの持つ力を――マヌアルの力をかしてくれ。我らは、そなたたちがきてくれることを信じ、魔物と戦いながら時を待とう。同胞よ……。

言葉が途切れると同時に、神竜の姿はバリュウの脳裏から消え去った。

「これは……」

バリュウの問いに、カマリアは順をおって話し始めた。

「パルメキア大陸南端に、火竜の尻尾という半島があります。そこに、神竜の一族が隠れ棲んでいるのです。私はボルカノン神様から、さきほどの御神託をたまわりました。そして、密命を帯びた私たちはこの大陸へむかったのです。遥か南の大陸にいる神竜を見つけだし、彼らの持っている秘伝の書をパルメキアへ借りだしてくること。そして、火竜の尻尾にいる神竜たち

にマヌアルを渡して彼らを救うようにと。――けれども、途中、船が怪物に襲(おそ)われ……。結局、私一人が助かったのですね」

自分の一族が、まだ他にも生きている。その言葉は、バリュウに大きな喜びを与えた。神竜の一族はまだ滅んでしまったわけではないのだ。バリュウの心の中に、同族へのあこがれと、神竜としての誇りと自覚が強くよみがえってきた。

けれども、それはすぐに落胆にとってかわられる。

「残念だが、秘伝の書(マヌアル)はないんだ。だから、私は仲間たちを救うことはできない」

カマリアが、なぜとバリュウに問い返した。バリュウは、神々の遺産である黒き竜(ダーク・ドラゴン)をめぐる戦いの顛末(てんまつ)を話して聞かせた。話の中にダークソルの名が出てきたとき、カマリアはびくんと表情を強ばらせた。

「ダークソルとは、ゼノンやルシファーとならぶ悪魔王の名です。同一人物か、ただの騙(かた)りかはわかりませんが。その男によって、秘伝の書(マヌアル)が失われたと言うのですか」

「残念なことだけど……」

バリュウが答えると、カマリアは頭にはめた飾環(サークレット)に指をあてた。飾環(サークレット)中央の紅玉(ルビー)が微(かす)かに淡い光を帯びる。クリンは、それが魔石(ジュエル)であることを見抜いた。

「秘伝の書(マヌアル)は失われてはいないはず。ここから……、そう、西に秘伝の書はあるはずです。あなたは嘘(うそ)をついている」

「バリュウは、嘘なんかつかない。秘伝の書(マヌアル)はダークソルとともに失われたのよ」

カリンが、バリュウに先んじてカマリアに言い返した。けれども、神官兵を務める娘は端整な顔を神竜にむけたまま、射るような視線を一時も外さなかった。

「その魔石(ジュエル)の力で、マヌアルの位置がわかるのね」

クリンの言葉にカマリアはわずかに眉(まゆ)を顰(ひそ)めたが、すぐにこくりとうなずいた。

「確かに、あなたの言うように、秘伝の書(マヌアル)は失われてはいないわ」

張り詰めた空気の中、一同は驚いて声の主であるクリンを振り返った。

「――秘伝の書(マヌアル)は、マナリナにある。私は、そのことをバリュウに告げるために戻ってきたのよ」

妹の声は、カリンにはひどく虚(うつ)ろで不吉(ふきつ)なもののように聞こえた。

「本当かい、クリン」

バリュウが、クリンに詰めよった。彼女の言葉による衝撃は、当然のごとくに彼が一番強かった。

「秘伝の書(マヌアル)は、ダークソルの城に巧妙に隠されていたの。ところが、ルーンファウストの戦後の混乱で、東方大陸の盗賊たちによって盗みだされてしまったのよ。でも、ガーディアナのアンリ陛下の依頼を受けたムサシとハンゾウという方が、長い年月をかけて無事とり返してくれたわ」

ふいにクリンの口からもれた懐かしい仲間たちの名に、バリュウはわずかに目を細めた。

「けれども、復興なったとはいえ、今のガーディアナでは秘伝の書(マヌアル)を絶対に守れるという確証はなかったわ。アンリ陛下は軍師ノーバ殿や魔道士長タオ殿の意見を入れて、マナリナの魔道士の長であるオトラント様に相談したの。秘伝の書(マヌアル)を受け取ったオトラント様の出した結論は、マナリナの魔道士の全力をもってしてふたたびドラゴニアの神殿に封印(ふういん)するというものよ。その相談のために、オトラント様はバリュウをマナリナに呼んでいるの」

「封印など、とんでもないことだわ」

挑(いど)むようなカマリアの声が、クリンの言葉を途切(とぎ)れさせた。

「いえ、秘伝の書(マヌアル)は封印すべきだわ」

真っ向から、クリンはカマリアと対立した。

「秘伝の書(マヌアル)には、善(よ)きことも悪(あ)しきことも収められているのよ。表と裏。何かの力を引き出せるとしたら、それを消滅させることもできる。悪しき者を封印することもできれば、復活させることもできるわ。手にする者の心によって、世界を救う書にもなれば、また、滅ぼす書にもなるのよ」

「だから、神竜を救うために必要なのです。神々の秘所を守る神竜が滅びてしまえば、守部のいなくなった大地の力を、悪しき者たちが自由に使うことでしょう」

「大地の力、それは何？」

クリンが聞き返した。聞き及んでいない単語には、すぐに反応してしまう。

「無闇にその真の意味を語ることは、私には許されておりません」

カマリアは、口を噤んだ。

「賢明ね。で、神竜たちの救済だけですむと誰が保証してくれるの」

クリンは、質問を変えた。

「――私が」

誇りと自信を前面に出してカマリアが請けおった。けれども、それだけではクリンは納得しない。

「実証例の伴わない保証は、保証たり得ないわ」

クリンが、必要以上に論拠を求めた。簡単には妥協しない彼女の姿勢が、こんなところで強く出てしまっていた。

必要以上の緊張を増していくやりとりに、カリンとマロンがもう少し穏やかにと二人の間に割って入った。

「必要な部分だけを書き写すことはできないのかな。その後で秘伝の書を封印してしまえば、悪しきことに使われることはないだろう」

とりなすように、バリュウがきりだした。クリンの方を見て意見を求める。

「無理ね。秘伝の書は書き写せるような物ではないわ。オトラント様の話では、巨人の読める物

でもないそうよ。——封印するしかないわ」
「あなたは、神竜たちを見捨てろと言うのですか」
　カマリアは、強くクリンを責めた。
「たとえ一つの種族を見捨てても、ふたたび悪しきものの復活に使われるよりはまし……」
言いかけたクリンの口をカリンの手が押さえた。その手に込められた力の思いのほかの強さに、クリンは姉の言わんとすることを痛烈に理解した。彼女は、今ここで言ってはいけない言葉を口にしてしまったのだ。クリンは泣きそうに目を細めると、そばにいるバリュウの顔を見上げた。神竜は、必死に心情を外へ出さないようにつとめているように見える。
「白き神竜よ、あなたはどうお考えか」
　カマリアは、バリュウに問いただした。
「秘伝の書は神竜の一族に託された物。それを神竜のために使って何がいけないのです。いえ、それ以前に、あなたには自分の一族を救う義務があります。それが、神竜として生まれたあなたの使命です」
「決めつけたりしないで」
　カリンは、ぴしゃりとカマリアに言い返した。バリュウが責められるのは理不尽だ。カリンは、その思いを顔に隠さなかった。
　バリュウは、即答を避けた。いや、即答できなかったというのが正しいだろう。はたして、

神竜としてはどう答えるのが正しいのだろうか。
ややあって、彼は口を開いた。
「とにかく、オトラント殿に会いにいこう。ルーン大陸とパルメキア大陸の両方を危険にさらすかもしれないようなことを、私たちだけで決めていいはずがない。それに、肝心の秘伝の書(マヌアル)はマナリナにあるのだから、そこにいかない限りどうしようもないだろう。魔道士たちなら、きっと何かいい知恵を授けてくれるかもしれない。カマリア、あなたの身体(からだ)が回復したらマナリナへ出発しよう」
バリュウは結論を先のばしにして、出発だけを決めた。

4

バリュウたちが実際に船に乗れたのは、それから三日後のことだった。
カマリアの回復が遅れたわけではない。彼女は幸いにして怪我(けが)もかすり傷程度で、翌日には自由に動きまわっていたのだから。神官兵として、厳しく鍛えあげられているのだろう。その肢体はみごとなプロポーションを保ちつつ、一分の無駄や隙(すき)もない。
問題は、人ではなく船であった。
カマリアの船を襲(おそ)ったと思われる怪物が、どうやらまだ近海にいすわっているらしい。幾艘(いくそう)もの漁(いさ)り舟が、襲われて行方不明になっていた。島国ワーラルの国王からは、ウランバートル

とルドル村に注意を促す親書が送られてきている。

そのため、船乗りたちはルドルの港から一歩も外へ出ようとはしなかった。彼らにしてみれば、大切な財産である船を壊されてはたまらないというのが、偽らざる本音であったろう。特に、怪物に襲われた漂流船を目のあたりにしていては、彼らの勇気も萎えて当然だった。

だが、カリンの父であるルドル村の村長がまさに助け船を出してくれた。村長の口添えで、クリンを乗せてきた船の船長が重い腰をあげてくれたのだ。条件は、内海を南西に進んでリンドリンドにむかうならというものだった。危険な海域を、迂回していこうというわけだ。

船には、バリュウとカマリア、そして、クリンとカリンが乗り込んだ。マロンは最後まで一緒にいくと言いはったが、村の門番という仕事を投げだしていくことを誰も認めてはくれなかった。出発の日まで、彼はケルベロスに御主人をしっかり守るんだぞと何度も繰り返していた。

船は無事出発すると、一路リンドリンドの港への航路をとった。順調に進めば、数日の海の旅だ。

甲板の上にはボートが一艘、灰色の布をかけておかれていた。その縁に腰掛けながら、カリンは足を前に投げだして、ゆらゆらとあやういバランスを楽しんでいる。中に落ちて気を失いでもしたら、陸に着くまで誰も見つけてくれないぞとバリュウはいくどか注意した。そんなへまはしないわとカリンは笑った。

「西大陸にいくなんて初めて。もしかしたら、バリュウもそうなんじゃない?」

胸を反らして空を仰ぎながらカリンが訊ねる。
「ああ。僕も初めてだ。だから、ちょっぴり怖い」
「よく言うわよ。バリュウなら自分の翼を使って、いつでも海峡を飛んで渡れるじゃない。あーあ。あたしもそんなのがほしいな」
少しうらやましそうに、カリンがバリュウの翼を見つめた。
「無茶を言うなよ。取り外しがきくもんでもないんだから。それに、飛びっぱなしでいるというのは結構難しいんだよ。できないとは言わないけれど、とても無理してまでやる気にはならないよ」
「あら、鳥は平気で渡ってるわよ」
鳥にできて神竜にできないはずはないと、カリンは目を細めた。
「彼らは身軽だからね。僕の身体は大きくて重たいから、思う以上に大変なんだぞ」
「へえ、いったい何を詰めこんでいるのかしら」
言ってみなさいよと、カリンは聞き返した。
「とりあえず、今朝は干し魚を数匹かな」
バリュウは微かに頬をほころばせた。あわせるようにカリンも微笑む。微笑みの中に、二人は互いの心をさぐりあてようとしていた。
バリュウは微かに後悔していた。クリンとカマリアが同行するのは必要なことだった。だが、

カリンがついてくることは、彼にとって予想外のできごとだったのである。
もちろん、当然のごとく反対はした。だが、ルドルの村長に村の代表としてカリンを連れていくことが船を出す条件の一つだと言われては、バリュウも了承せざるをえなかった。もちろん、裏でカリンが父親を味方につけたのは明白だった。説き伏せたのか脅迫したのか、そのいずれなのかははっきりとはしないが。
なぜ、もっと強く反対しなかったのだろうかと、バリュウは自問した。神竜やカマリアを襲(おそ)った魔物たちがいる以上、この旅は危険とまったくの無縁ではない。
秘伝の書(マヌアル)をめぐる問題に、神竜でないカリンを巻き込みたくはなかった。けれども、自分はカリンを巻き込んでしまったのだという自責の念が、バリュウの心を強く苛(さいな)んだ。彼は神竜だった。そして、マヌアルを守り続けることこそが、神竜だけに課せられた唯一無二の使命なのだ。それを、神竜以外の者に肩代わりさせることはできない。
それに、バリュウはすでに同族を救うために大海を渡る決心をしかけていた。秘伝の書(マヌアル)を持っていくにしろいかないにしろ、仲間を見殺しにすることは彼にはできなかった。
だが、それは一つの逃避なのかもしれない、同族の中に逃げこむという。そして、一度仲間の中に入りこんだら、バリュウははたして戻ってこられるのだろうか。神竜たちの住む地から、カリンたち人間のもとへと……。
カリンが、そんなバリュウを許してくれるはずがない。海を渡ることは、たぶんカリンとの

別離を意味するだろうから。だから、カリンに来てほしくなかったのだ。彼女の口から、直接に非難の言葉などは聞きたくない。

バリュウは、黙って旅立つつもりだった。だが、カリンは黙ってそれを許してはくれなかったわけだ。

彼の瞳に、まだ子供だったころのカリンの怒った顔が今の彼女の笑顔に重なって見えた。子供のころはふっくらとしていた少女の顔も、いまでは細く大人びたものに変わっていた。時によって、いったい何が変わり、そして、何が変わらなかったのだろう……。

自分以外の世界を恐れていた幼いころの自分と今の自分とでは、いったい何が成長したと言えるのだろうか。

「君は、なんで僕についてきたんだい？」

バリュウは、口に出して聞いてみた。

「あなたを、ほっとけないからよ」

声に出して、カリンも答えた。

「私は、こおんな小さいころからあなたを見てきたんですからね。あなたの考えていることなんかすべてお見通しなんだから。私をおいてどこかいっちゃおうとしても、そんなこと絶対に許しませんからね。十年前とは違うんだから。待ってるのは嫌だから、それだから、私はバリュウについていけるように強くなったのよ」

なんと答えたらいいのか、バリュウは言葉につまってしまった。
「別に、僕は君をおいてきぼりにしていったつもりはないんだけれど」
そうかしらと、カリンは軽く顔をしかめた。
「以前のように、一度手放してしまったら、あなたはいつドラゴニアに戻ってくるか知れたもんじゃないし……」
「僕は根無し草じゃないさ」
やっと、バリュウはそれだけ言う。
「でも、前にシャイニング・フォースとして戦いに出てから、バリュウが戻ってくるまでどれだけの時間がかかったと思ってるの。北の大陸に渡るつもりなら、それと同じか、もっと多くの月日がかかるはずよ。それを考えていなかったなんて言わせないんだから」
かつてシャイニング・フォースに加わる決心をしたのは、カリンを守りたい一心からであった。彼女に危害が及ぶ前に、世界に平和をもたらそう。そう考えてこそのことだ。
あのときは、カリンは喜んで送り出してくれていたものと思っていた。それは、バリュウにだけ都合のいい考えだったのかもしれない。彼女がどんな思いでバリュウの帰りを待っていたのか、彼には想像しきれなかった。成長したカリンは、待つことに甘んじる娘ではなくなっていた。それは、彼女の望んだ変化だった。
言いたいことを言って満足したのか、カリンは静かにしている。

「バリュウ殿」

マストの脇のロープの山を避けながら、カマリアが二人の方へやってきた。微かに青みを帯びて見える黒髪を赤い宝玉のついた飾環でとめたカマリアは、動きやすい紺の肌着の上から、光沢のある紫色の上衣を羽織っていた。上衣の金糸の縫箔は、ボルカノンの紋章であろうか。腕にはシナモン色の指先を出す形の皮の長手袋をはめ、足には同じ色の長靴を履いている。

「お邪魔をしてしまったかしら」

カリンの方を見て、カマリアが訊ねた。いいえと、若い娘は微笑み返した。

「お話があるみたいだから、席を外しましょうか？」

言うなり、カリンはボートの縁からぽんと飛び降りた。編みあげの長靴が、微かな音をたてて甲板を打つ。いましめを解かれた掛け布が風にめくれ、空っぽのボートの中をかいま見せた。

「ええ。よろしければ、神竜殿との話があるのでそうなさってください」

カマリアは、丁寧にカリンを追い払った。

自分から申し出た以上、断るわけにもいかない。カリンは後ろ髪を引かれつつその場から立ち去った。

「カリンに聞かれてまずいような話なのかな」

「いえ、そういうわけではありません。けれども、私は神竜殿に話があったのです」

目の端でカリンのいないことを確かめてから、カマリアは話し始めた。

「バリュウでいい」

カマリアの言葉に堅苦しさを感じたバリュウは、軽く眉根に皺をよせてから彼女に言った。

「一つだけ確かめたいことがあって。……神竜殿――いえ、バリュウ殿は、ごく最近御両親から生まれた最も若い神竜でおられるとのことですが、本当でしょうか」

バリュウは、間違いないとカマリアに答えた。

「それが何か？」

白き神竜は訊ね返した。

「いえ、神竜を継ぐ者――神竜の新しい世代を見たのは初めてだったものですから。パルメキアの神竜は、次の世代を持たぬ一代限りの不死の一族と聞き及んでおりました。その、なんというか、あなたは特別で、私にとって驚きなのです」

「その話は、実際の私たちとはずいぶん異なるようだね。確かに、私は物珍しい存在だろうけど」

バリュウはカマリアの言いかねていた言葉を口にすると、軽く彼女に笑ってみせた。そうではないと、カマリアは言い添えた。

「私は、長い年月をかかってやっと生まれたんだ。たぶん、パルメキアの神竜たちは、それだけの時間が経っていないのかもしれない」

「時が、バリュウ殿を生んだと？」

カマリアは問い返した。それだけではないだろうという思いは、バリュウの胸の奥にもわだかまっている。なぜ自分だけが生まれたのだろうか。神竜の一族とは何者で、自分は何者なのだろう。

「パルメキアの神竜の長に会えば、バリュウ殿の出生の謎も解けるかもしれません。あるいは、マヌアルの中にその答があればよいのですが。——今は、期待するしかないのですね」

訊ねるべきは訊ねたと、カマリアはその場から去っていった。

彼女がその答を見いだすには、まだしばらくの時を必要としていた。

5

東風は、夜になっても順調に船を運んでくれていた。

「ええ。信じられないことですが、確かに二世代目の神竜です」

甲板に独り立ったカマリアは、海面に映る星の影にむかって他人には聞き取れないほど小さな声でささやいていた。

「……確かに、失われた戦士を補うことができるかもしれません。かの者ならば、まちがいなく数と力にこだわることでしょう」

波間に見える星影の中に、ひときわ明るい二つの光がある。それは、まるで銀と紅の瞳のように水面でまたたいていた。

「……けれども、かの神竜には、神々の思惑を超えた何かを感じます。もしかしたら、それはかの者の想像をも超える存在かもしれません。少なくとも、牽制にはなりましょう」

星がまたまたたいた。

「……はい。おおせのままに、我らが長よ。神竜をパルメキアへ、あなた様の下へ……」

カマリアは、深々と頭を垂れた。

海面の双星の輝きが、水鏡から顔を遠ざけたかのように薄れて消えていく。

娘はほっと溜め息をつくと、火照った頬をさますかのように漆黒の髪をかきあげた。

髪が靡き、うなじをかかえるようにして風が過ぎ去っていった。

カマリアは船縁に背中を持たせかけながら、胸を反らせて夜空の星辰を見上げた。

夜はまだこれから。旅もまだこれから。そう、すべてはこれから始まるのだ。そして、結末は誰の想い描くものになるのか。

娘は、なにものとも知れぬ期待に、ほのかに口元をほころばせた。

6

右手にバストークの山地をのぞみながら、速度を落とした船はゆうるりとリンドリンドの港に入っていく。

バリュウたちは、甲板から夕陽に赤く染まった町並みを眺め渡した。町を囲む壁の手前に、

大小の家がひしめきあっている。夕餉の煙が家々からたちのぼり、家路を急ぐ人影がまばらに通りを過ぎていくのが見える。

栈橋が近づいてくる。

甲板のバリュウの姿を認めたからだろうか、栈橋に腰をおろして釣り糸を垂れていた男が、ふいに立ちあがって大きく左右に手を振りだした。

「バリュウさーん」

男がバリュウの名を呼んだ。

「知り合い？」

カリンは、隣にいるバリュウに訊ねた。神竜は、小首をかしげながら気のない返事をした。

リンドリンドにいる彼の知り合いといえば、かつての戦友であるライルとガンツだけのはずだ。

渡り板を渡って栈橋に降り立っても、バリュウはまだ思い出せずにいた。対して、顔の半分を金茶の髯で覆った男は、にこやかに彼を見つめていた。

「お忘れですか、ボーケンですよ」

名乗られて、やっとバリュウは思い出した。かつて、プロンプトの町で一度だけ会ったことのある冒険家だ。バリュウたちシャイニング・フォースを追いかけるようにルーン大陸を巡り、何冊もの旅行記や風土記や戦記を書き記している。

「私だって、年はとりますからね。もう、大陸中をかけまわったころの若者じゃありませんよ」

ボーケンは、右手で顔の髯をなでながら笑った。

バリュウたちがまだ宿を決めていないことを告げると、ボーケンは半ば強引に自分の家に泊まるように勧めた。現在、彼は発明家のクロックの家の隣に住んでいるという。クロックといえば、ライルやガンツの師匠のはずだ。懐かしさも手伝って、バリュウは二つ返事で彼の好意に甘えることに決めた。

その日の夜は、ちょっとしたパーティーになった。ライルもやってきて、昔話に花が咲く。惜しむらくは、ガンツがパオトレインの研究のために留守だったことだ。

「ガンツの奴は、今じゃ発明家として独立したんだ。俺はまだ、クロックさんの手伝いだがね」

バリュウの顔の前で、ライルの顔が笑った。馬の身体に人の上半身を持ったケンタウロスであるライルは、その場にいる者たちの中で唯一バリュウと同じだけの上背がある。天井の高いボーケンの家は、二人にとって助かる造りをしていた。

「みんな元気でやっているんだろうか」

「ああ。王位を継いだアンリは、ガーディアナのみんなとともに国をたてなおしたし、ザッパもバストークをちゃんと治めてる。アーネストはウランバートルの総督としてアーサーたちと

忙しい毎日だそうだ。旅が好きな奴らは、今ごろどこの空の下かなあ。まあ、よろしくやってるには違いないさ。隠居して引っ込んじまったのはお前さんぐらいだ」

ライルは、エールを満たしたジョッキで軽くバリュウの鼻先をついた。鼻の頭に白い泡が残る。陽気な笑い声があがった。バリュウは照れ笑いをすると、長い舌先でぺろりと泡をなめ取った。

「しかし、こんな妙齢の御婦人たちを連れて、どんな旅をしているんです？」

ボーケンがバリュウに訊ねた。

「そうだそうだ、なんで今ごろ古巣を出てきたんだ。なんか面白いことでも起こったのか」

ライルにも聞かれて、バリュウは返答に困った。マヌアルのことは、今はまだ明かすべきではないだろう。だが、ライルたちにならば……。バリュウは、口を開きかけた。寸前でそれをさえぎったのはカマリアだった。

「私たちはマナリナへいく途中なのです。異国からやってきた私のために、彼らは道案内をしてくれています。マナリナで学んでいるクリンさんを案内役に、その姉であるカリン殿とバリュウ殿に守り手として同行していただいているのです」

そうですねと同意を求められて、バリュウはこくりとうなずいた。カリンたち姉妹も黙っているところを見ると、話すべきではないと考えているのだろう。

「ほう、異国から。それはそれは。いったい、どこからいらっしゃったのですか？」

ボーケンは、カマリアの故郷の方にいたく心をひかれたようだった。あるいは、気をきかせてくれたのかもしれない。

カマリアは酒には強く、ボーケンやバリュウと幾杯も酌み交わしながらパルメキアのことをいろいろと話してくれた。

時間はゆるやかにすぎ、アルコールに免疫の少ない姉妹は早々と寝室に退散していった。ライルも、仕事があるからとすでに暇を告げている。

「すごい本ですこと。これをすべてあなたが書かれたのですか？」

頬を薔薇色に染めながら、カマリアがボーケンに訊ねた。

ボーケンの家は、壁が本でできているのではないだろうかと思えるほどだ。天井まである本棚には、蔵書がびっしりと詰めこまれている。似たような部屋で育ったバリュウにとって、この元冒険家の部屋は妙に心が落ち着く空間であった。酒の効果なのか、目の前の二人の話が面白いからなのか、バリュウは久々に和やかな気分に浸ることができた。

「半分は資料ですよ。それらの本を読んで、私は旅に出ようと思ったんです。実際にそれらの物語の地を訪ねてみようとね。残りの本は、それらの旅の結果を自分で書き記した物です。土地の紹介もあれば、そこで聞き集めた物語もある。まあ、雑多な夢の塊ですね」

暖炉の明かりで、ボーケンは室内を見回してみせた。

「では、私たちのことも本になさるのですか？」

「御希望とあれば。それに、今日は本が何冊も書けるほどの珍しい話を聞かせていただきましたから」
「ふふふ、本当に変わった御方」
カマリアはふいに立ちあがった。よろけたのか、それともわざとなのか、倒れこむようにしてボーケンにしなだれた。慌(あわ)ててボーケンが彼女をささえる。さすがの彼女にもようやっと酔いが回ったようだ。
「そろそろお開きにしたほうがいいかな」
バリュウが言うと、ボーケンがしどろもどろに同意した。
「お開きですか？　では、これから世界に起こる変化を見届けるであろう冒険家に、お休みのキスを……」
ボーケンの首に腕を絡(から)ませたカマリアは、うむも言わさず彼に口づけした。そのまま、目を閉じて静かな寝息をたて始める。
バリュウは、苦笑しながらカマリアをボーケンから引き剝(は)がした。よいしょと、大柄なカマリアの身体(からだ)をかかえあげる。ちょっぴり名残惜(なごりお)しそうなボーケンの顔は、髯(ひげ)の上からでもそれとわかるほどに赤くなっていた。
バリュウはカマリアを両手でだきかかえたまま、ゆっくりと部屋の外へとむかった。扉をくぐりしな、彼はボーケンの方を振り返った。

「私はあなたがうらやましいですよ、ボーケンさん。あなたは夢に取り込まれることなく、夢を形にしている」

「自分の夢は自分のものですからね。そのうち、あなたも自分の夢を書き記すときがきますよ。――そのときは、真っ先にこの私に見せてくださいね。いいですか、約束ですよ」

バリュウはボーケンに約束の証しとも取れる微笑みを返すと、彼のいる部屋を後にした。

だが、彼が書きあげるべき書はまだない。神竜が読むべきものは、過去も、そして、これから続く未来も、たった一冊の秘伝の書だけなのであろう。それが神竜の一族に課せられた使命であり、夢でもあるのだから。

せめて、それが悪夢でないようにと、バリュウは密かに祈った。

7

「カリン、まだ起きてるかい。起きてたらここをあけてくれないか」

女性たちにあてがわれた部屋の前で、バリュウはそっとささやいた。カマリアを起こさないように気遣いながら、できる限りの大きな声をだそうとする。

「どうしたのよ」

ややあって、カリンが部屋の扉を開けて顔をのぞかせた。薄い素通しの夜着を身につけただけのカリンが、ぐったりとした娘をだきかかえたバリュウを見てまあという顔になる。

「酔い潰れちゃったんだよ、寝台に運ぶから通してくれないか」
バリュウは、カマリアの身体をよいしょっとかかえなおしながらカリンに頼んだ。
「私が運ぶからいいわ」
少しむっとした顔をしながらカリンが答える。
「君じゃ無理だよ」
バリュウが口の端をわずかにほころばせた。神官ではなくて神官兵を名乗るだけあって、カマリアはかなりの女丈夫だ。それに、自分からだきあげられようとしない人間は、思う以上に重たい。
「バリュウにできて私にできないわけがないじゃない。ほら、早くかしなさい」
声を荒だてたカリンは、部屋から出てくるとバリュウの方へ手をのばした。その声に、カマリアがバリュウの腕の中で寝返りをうつ。
突然バランスを崩されたバリュウがよろけて、くしくもカリンにカマリアを渡すような格好になる。
準備のできていなかったカリンは、さしだされたカマリアの体重をささえきれずに、後ろむきに倒れた。
ごんという鈍い音が響いた。
「……っっっっ」

カリンが後頭部をかかえながら、半目だった目を大きく見開いた。火花が飛んだかどうかは、彼女のみぞ知るだ。
「大丈夫かい、カリン」
思いもかけない展開に、バリュウが狼狽(ろうばい)した。ふさがった両手がもどかしいと、長い首を回してカリンの頭の後ろを見ようとする。
「いっ、いったくなんか、ないわよお」
目尻(めじり)にうっすらと涙を浮かべながら、カリンが強がった。よけいな心配はしないでと、バリュウの頭を上へ押し上げる。
「なあに、お姉ちゃん、何やってるのお」
カリンが壁に頭をぶつけた音で、クリンが目を覚ます。
「なんでもないわよ。——さっさと、運んじゃってよ、バリュウ」
寝ぼけ声の妹に答えると、カリンはさっとバリュウに耳打ちした。
最初からそうさせてくれればいいのにとぼやきながら、バリュウはカマリアをかかえたまま部屋の中に入った。カリンが、横をすり抜けていく。
「さあ、いいわよ」
小さなお尻(しり)を突き出すようにして屈(かが)むと、カリンはさっと布団(ふとん)をなおした。バリュウが、正体不明になったカマリアをそこへ下ろす。

「やれやれ。じゃ、僕ももう寝るよ。おやすみ、カリン」
バリュウはほっと安堵の息をつくと、扉へとむかった。
「おやすみ、バリュウ」
扉を閉める神竜に、カリンが挨拶を返す。
「ねえ、何かあったのお……」
眼鏡を外した焦点のあわない眼で、クリンがうわごとのように姉に訊ねた。
「なんにもないわよ、早くもう一回寝ちゃいなさい」
カリンはクリンのおでこに手をやって彼女を布団に押し倒すと、隣の寝台に眠るカマリアに目をむけた。見知らぬ国の娘は、何も知らずに小さな寝息をたてている。
「なによ」
カリンはクリンの隣にすべり込むと、頭から毛布をかぶった。

第二章　秘伝(マヌアル)の書を巡って……

1

翌日、ボーケンの口添えでリンドリンドの西の門を朝一番に開けてもらったバリュウたちは、魔道士たちの国マナリナへの旅を再開した。
神竜とケルベロスがいるとはいえ女ばかりの一行に、リンドリンドの門番は道中気をつけていくように忠告してくれた。一昨日にも、不審な一団が町のそばをバストーク山地へむかっていったという。
クリンはケルベロスの頭をなでながら、いらぬ心配よねと姉に笑いかけた。
先日までの船の旅とはうって変わって、今度は自分の脚で一歩一歩進んでいく地上の旅だ。所々に森が点在する草原を、喜んでかけまわっている。きっと、狭い船の中でずっとくすぶっていたのであろう。たまりすぎた力を一気に発散させるかのように、とっとと先行しては戻ってくるということを繰り返している。結果的には斥候(せっこう)を出しているのと同じことなので、クリンた

ちは彼女(ケルベロスちゃん)の好きにさせていた。
何度目の往復か、クリン以外の者が数えるのに疲れてしまったころ、ケルベロスは戻ってくるなりふいに激しく吠(ほ)え始めた。首を振って一行の進行方向をしきりにさし示す。
「何かいるのかしら」
カリンは背中にしょっていた長弓を外すと、矢筒から矢を一本引き抜いた。ゆだんなくあたりに狩人(かりうど)の目を走らせる。
「ええ、たぶん、あまりよくない何かね」
クリンは一時的にケルベロスを黙らせると、間断なく前方を見据えた。
「私が周りの様子を見てこよう」
バリュウは翼を広げると、一陣の風を残して空へと舞いあがった。
森や川がその形を上から確かめられる高さまで上昇する。
川にかかる大橋のそばに、一群の影が見えた。
かなり速く移動している。
先頭は人間の少女のようだ。そして、その後を複数の霧状の魔物(ダークスモーク)と吸血大蝙蝠(バンパイアバット)が追いかけている。
バリュウの中で、忘れかけていた怒りが燃えあがり始めた。眼下の魔物たちには、悪意が満ちている。バリュウは、空中で竜(ドラゴン)の咆哮(ほうこう)をあげた。

翼を半分にたたむと、神竜は魔物たちめがけて急降下していった。

「バリュウが降りたわ。いくわよ、ついてらっしゃい」

カリンは、クリンたちを促すと走りだした。

2

ツィッギーは、橋の手前で息を切らして走っていた。心臓は、今にも破裂しそうだ。回復(ヒール)の魔法を唱えたい強い衝動にかられたが、すぐ後ろにまで迫っている魔物たちはその暇を与えてくれそうになかった。

法衣(ほうえ)の裾(すそ)をまくりあげて走る自分の姿を想像すると、なんてはしたない格好なんだろうと思う。だが、今はそんなことにかまっている余裕はなかった。

ツィッギーは若い健康的な脚を衣の裾から目一杯のぞかせながら走り続けた。

橋が見える。同時に人影が見えた。

助かった。

そう思った瞬間、なんとも場違いな羞恥心(しゅうちしん)が彼女の中で爆発した。裾を握り締めた手の力がわずかに抜ける。ずり落ちた法衣の裾はツィッギーの脚に絡(から)みつき、橋を目前にして彼女は無様にも大転倒した。

魔物に追いつかれる!

ツィッギーは身体を捻って後ろを振り返った。霧状の魔物が、空中に恐ろしい形相の笑い顔を作りあげていた。獲物をいたぶる喜びを含んだ嘲笑に、ツィッギーは身をすくめた。

ダークスモークが、彼女におおいかぶさるように広がる。

もうだめかと思ったとき、白い大きな影が死の霧を切り裂いた。散り散りになった霧が、魔性の命を失って消えていく。

ツィッギーは顔をあげると、魔物を切り裂いた者の正体を見た。とたん、思わずお尻をつけたまま地面の上を後退りする。目の前には、猛々しいドラゴンの姿があった。ドラゴンに比べたら、さきほどの魔物など仔猫のようなものだ。助かるどころか、さらに悪い状況に追い込まれてしまったらしい。

「今、仲間がくる。君はそこを動くな」

白い竜は予想もしなかった優しい声で言うと、翼を広げて魔物たちにむかって飛び立っていった。巻き起こる風から腕で顔をかばうツィッギーの下へ、橋を越えてきた娘たちの声が聞こえた。

「大丈夫？」

カリンは、目の前に倒れている少女を助け起こした。

「ええ、大丈夫ですわ。それよりも、あの白い竜はなんですのお」

ツィッギーは、バリュウをさして訊ねた。

「彼は神竜のバリュウ。かつてのシャイニング・フォースの一人よ」
「シャイニング・フォースの……」
カリンの言葉に、ツィッギーは期待に目を輝かせた。
「バリュウの援護をするわよ」
少女をクリンに預けると、カリンは矢筒から矢を引き抜いた。流れるような動作で指先に矢をとらえ、頭上にあげた長弓を振り下ろしながら引き絞る。ぶんと弓弦が鳴った。長弓がカリンの手の中で半回転する。放たれた矢は、吸いこまれるようにしてバンパイアバットの身体を貫いた。
澱みのない一連の美しい動作に、ツィッギーがほうと溜め息をついて見とれる。
「次は……」
カリンが二の矢を継ごうとする。
「その必要はないでしょう。下手な手出しは、バリュウ殿の邪魔になるだけです」
興味に満ちた目でバリュウを見つめながら　冷静な声でカマリアがカリンを制した。
カリンが、ゆっくりと長弓を下げる。
彼女の言うとおり、魔物たちはバリュウの敵ではなかった。その爪の一振りで、生きた霧であるダークスモークは散り散りに切り裂かれて文字通り霧散する。雷光の一吹きは、バンパイアバットを一瞬にして黒焦げにした。

その圧倒的な強さに、カリンは、離れたところで戦っている生き物があのバリュウであるのかを一瞬疑った。そこには、読書好きな穏和で内向的であった幼い神竜の姿はなかった。かつて、カリンがいつも面倒をみていなければだめであった仔竜のバリュウは、もはやどこにもいないのだ。

「つまらないわ。私たちの出る幕はなしね」

炎撃（ブレイズ）の魔法を唱えたくてしかたないとでも言いたげに、クリンが片手を閉じたり開いたりしている。

「――そうね、淋（さび）しいわね」

時の流れの速さの違いを、カリンは嫌というほどに思い知った。

3

「ゴングのお弟子（でし）さんだって!?」

ツィッギーの自己紹介を聞いて、バリュウは頓狂（とんきょう）な声をあげた。それほどまでに、かつてシャイニング・フォースの仲間であった大男の修道僧（マスターモンク）と、この見るからに華奢（きゃしゃ）な少女との取り合わせは奇妙なものに思えたのだった。

「そんなに驚くことはないと思うんですけどお……」

焚火（たきび）の明かりに頬（ほお）を染めながら、ツィッギーは微（かす）かに唇（くちびる）をとがらせた。高く結いあげたほの

かに薄紅色を帯びた銀髪が、夜の闇を背景にオレンジ色に輝いて見える。
「それに、まだ正式な弟子入りはしていないんですの。だからこそ、ちゃんとしたお許しを得るために道士様をおっかけてるんですよお」
草色の肩掛けを掛けなおすと、ツィッギーは金糸の刺繍をほどこした白い法衣の上から膝をかかえた。
「ゴングは、決まった所に長く住んだことはないから。探すのは大変だろうに」
バリュウは、いつも難しい顔をして黙々と歩いていたゴングの姿を思い浮かべて苦笑した。屋根のある場所よりも星の見える場所の方が好きだという、一風変わった男だった。
「ええ。マナリナにいるとわかるまで、とおっても苦労したんですよお。それなのにい……。マナリナの魔道士たちは、国を守るために怪物を操っているとは聞いていたんですけどお、ここまでひどいとは思ってもみませんでしたわ」
「それは誤解よ」
炎のむこう側で、クリンが大きな声で否定した。突然の御主人の声に、地面に伏せていたケルベロスがピンと耳を立てる。双頭の片方が心配そうにクリンの方を見やった。
「ここからマナリナまでは、まるまる一日分の距離が離れているのよ。そんな広い範囲を守るためには、どれだけの怪物が必要になると思うの。いくらなんでも、そんな無駄なことはしないわ。そして、むやみに人を襲うようなまねもね。だいいち、今のマナリナには町を封鎖して

守らなければならない理由なんて……」
言いかけて、クリンは言葉を切った。
「理由ならあるわね。今ならば……」
カリンが、妹の考えていることを暗に指摘した。
「でも、あんな霧みたいな化け物はマナリナで見たことはないわ。そんなものの召喚魔法はないはずよ」
「そうでしょうね。あの魔物は、ダークスモークと呼ばれる悪意が形を持ったものですから」
それまで黙っていたカマリアが、クリンたちに魔物の名前を告げた。
「あなたが知っているということは、あれはパルメキアに棲む魔物か」
バリュウの問いに、彼女はうなずいた。
「ルーン大陸に、何かがやってきているのは間違いないでしょう」
何かを思うように、カマリアはエメラルドグリーンの瞳を細めた。
「マナリナで何も起きていなければいいが。——明日はなるべく早く出発しよう」
バリュウの提案で、一同はすぐに睡眠をとることにした。
見張りに立ったバリュウとカリンをのぞいて、それぞれは旅の外套に身をつつんで横になった。温かい夜だ。厚手の外套と焚火のおかげで遠ざけられた夜気は、少なくとも娘たちの身体を凍えさせることはなかった。

ときおり焚火の中の小枝のはぜる音が響き、ケルベロスが耳をピクリと回した。それ以外に物音はせず、静かに時は過ぎていった。

「カリン……」

バリュウは、焚火をはさんで背をむけているカリンにむかってささやいた。周囲の闇を見張るため、二人は反対の方向に目をむけ続けていた。すぐそばでは、クリンたちが静かな寝息をたてている。

「カリン……」

ふたたびバリュウがささやいた。返事はない。

「――何を怒っているんだ」

「怒ってなんかいないわ」

今度は返事があった。

「そう見えるとしたら、たぶん私が眠いせいよ。月がもう少し昇ったら、カマリアに交代してもらうわ」

背中をむけたままカリンは答えた。が、ふいに思いついたようにバリュウの方を振り返る。

「それより、バリュウは眠らなくてもいいの？」

「はは、僕はみんなとは違うからね。なんともないさ」

炎を間にはさんで、バリュウはカリンに笑いかけた。

「そうね……、そうよね。バリュウは私たちとは違うものね。神竜ですものね。――ごめん、疲れたからカマリアに代わってもらう」
　カリンはバリュウに話す暇を与えないようにして、カマリアにかけよって彼女をゆり起こした。とろんとした目で起きあがったカマリアが、声をたてずにうーんと伸びをする。その横で外套(マント)にくるまって丸くなるカリンに、バリュウはそれ以上声をかけられずに終わった。
　バリュウの瞳(ひとみ)に映る炎が、微(かす)かに風にゆれていた。

4

　翌日の早朝。ツィッギーを加えた一行は、マナリナを目指して旅を急いだ。
　神竜と一緒にいれば、マナリナまでの道中は安全を保証されたも同然だとツィッギーは言う。それならばと、バリュウは彼女の同行を認めた。彼としては、そのときは単にマナリナまでの護衛をかってでただけのつもりであった。ツィッギーが、どれほどの深い感謝と興味を彼らにいだいたかなど、バリュウとカリンはまだ知るよしもない。
　バリュウは、行手を確かめるために大空にその肢体を舞わせていた。左右に広げられた翼と、まっすぐにのばされた首と尾が、均整のとれた美しい十字を作りだしている。
　一行は、マナリナ周辺の砂漠地帯を抜けていった。ちゃっかりケルベロスの背中に乗っているクリンはいいにしても、ツィッギーは砂に足をとられて文字通りみんなの足を引っ張った。

彼女ほどでないにしろ、初めての砂漠にカリンやカマリアも苦労をしいられる。

やがて、目前にマナリナを囲む外壁が見えてきた。全面に幾何学的なレリーフを施された、美しい壁だ。要所要所に呪紋や魔石が埋めこまれている。この魔壁が、強力な結界を張って町を守っているのだろう。

マナリナに到着した一行は、休む間もなくオトラントの屋敷へとむかった。

壁の中には、様々な形の家々がよりかたまるようにして建っている。まるで、家の品評会のようだ。それらの家の集合体の中心に、オトラントの屋敷があった。

迎えに出た魔道士は神竜とクリンだけを中に入れようとしたが、バリュウはそれを拒んだ。

「彼女たちはオトラント殿に伝えるべき知らせを持ってきている」

神竜としての威厳をもって答えるバリュウに、くすんだ緑色の髯をたたえた魔道士は渋々全員を中に通した。

堂々と中に入っていくカマリアやカリンたちの最後から、咎められないのをいいことにツィッギーまでもがついていく。少女は戸口のところで厳つい髯の魔道士に悪戯っぽい勝利の微笑みを投げかけると、そそくさと中に入っていった。

魔道士はむすりとした顔をすると、音をたてないように扉を閉めた。

無言で控えている数人の魔道士たちに囲まれて、マナリナ最高位の魔道士は寝台にその身を横たえていた。

「すまぬ、バリュウ殿」

開口一番、オトラントはバリュウにわびた。

「いったいどうなされたのですか。オトラント殿が御病気とは、聞きおよんでおりませんでしたが」

バリュウが訊ねた。

「いや、病気ではない。先日魔物と戦い、恥ずかしいことだが不覚をとってしまったのだよ。どうか、寝ながらの無礼を許してほしい。いや、そんなことよりも、魔物にマヌアルを奪われてしまったことを許してもらわねばなるまい」

「今、なんと……」

驚いたカマリアが、大魔道士に詰めよった。先を越されたという思いが、彼女の柳眉を逆立てさせる。

「パイパー、関係のない者は入れるなと言っておいたはずだが……」

あらためてバリュウの陰にいた娘たちの存在に気づいて、オトラントは例の厳つい魔道士に問いただした。

パイパーと呼ばれた魔道士が恐縮する。バリュウは、慌ててその場をとりなした。いまさらながらに、カマリアたちを紹介する。

「では、はるばると遠き大陸からマヌアルを求めてルーン大陸にこられたと申されるのか」

オトラントに、カマリアはうなずいた。
「だが、マヌアルは所有する者によっては大変危険な物になる。我々は、そこのバリュウ殿の同意をもって、永久に封印するつもりでいたのだが」
「確かに。悪魔王ダークソルや、彼の魂を宿した黒き竜などの復活に、マヌアルを使われるようなことがあってはなりません。それは避けねばならないことです。けれども、北の地には、今すぐマヌアルを必要としている者たちがいるのです。大地の力を守っている神竜たちには、マヌアルの力が必要なのです。もし彼らが滅びてしまえば、管理する者のいなくなった大地の力は暴走し、無意味な破壊を呼び起こすことになるでしょう」
「意味のある破壊などこの世には存在しないが……。ところで、その大地の力とはどのようなものなのか、説明していただけるだろうか」
「大地そのものの持つ力ですわ。上手に使えば人々に多大な恵みを与え、悪しきことに使えば大地を裂いてすべてを呑みこむといわれているものです。その力を求めて、悪しき者がこの大陸に渡ってきていることは間違いないでしょう。私の乗ってきた船が襲われましたし、この町にたどりつく前にも追っ手を足留めさせるためと思われるパルメキアの魔物たちに襲われましたから」
「カマリア殿やバリュウ殿を襲った魔物とマヌアルを奪っていった魔物は同じか、あるいは仲間かもしれぬということなのだな。遠く、異国からとは……」

オトラントは、いや増す不安に顔を曇らせた。
「では、黒き竜を復活させようとしている者たちの仕業ではないとおっしゃるのですか?」
いならぶ魔道士の中から、パイパーがオトラントに聞き返した。求められていない発言をするなどとはと、他の魔道士が彼の非礼をたしなめた。
「魔物たちは、リンドリンドからシェードの方にむかった。黒き竜の復活を望むのならば、まっすぐに南方の古の城へむかうはずだ。方角がまったく逆ではないかな。北の大陸を目指すとすれば、船に乗らなければならない。だが、リンドリンドにも西の入り江にも我らの力が及んでいる。だとすれば、北へ渡る船とおちあう場所はただ一つ」
「ウランバートル、あるいは、ワーラルですね。マヌアルを奪った魔物たちはそこへむかうと」
クリンに、オトラントはそうだと答えた。
「カマリアなら、正確なマヌアルの場所を調べることができるんじゃないかな」
ルドル村でのことを思い出して、バリュウはカマリアに頼んだ。
「いえ、ここでは無理でしょう。結界がはられているようですから、いったん町の外に出ないことには……」
カマリアは、少し怯えるように額の飾環の宝玉に指をあてた。
「それでは、追いかけるのは少し難しいな……」

バリュウは独り言のように言った。すかさず、カリンがそれを聞き咎める。
「まさか、追いかける気でいるの。無理よ、追いつけっこないわ」
「だが、ここでじっとしているわけにはいかないじゃないか」
「でも、魔物たちは、すでにシェードを過ぎているはずよ。いまさら、私たちが追いつけるはずがないじゃない」
「空を飛んでいけば、パオ平原の手前で間違いなく追いつけるさ。それに、こんな危険なことに君たちを連れていけるわけがないだろう。いくのは、私一人だけだ」
聞き分けのないだだっ子に言い含めるようにバリュウが言った。あるいは、聞き分けのないのは、言い訳で自分を正当化しようとしている彼の方だったかもしれない。
「独りでは意味がないわ。独りで何ができるというのよ」
声を荒げるカリンを見て、クリンとツィッギーが慌てて二人の間に割って入った。
「バリュウ殿、カリン殿の言う通りです」
淡々とした声で、カマリアがカリンを支持した。
「マヌアルは、一人あなただけの物ではありません」
言葉に詰まったバリュウは、所在なげにカリンとカマリアの間を、いくどとなく視線で往復した。
そんなバリュウに思いがけない助け船を出したのは、他ならぬオトラントだった。

「マヌアルは、長い間神竜の管理下におかれてきた物だ。その義務と権利は、神竜であるバリュウ殿の上にいまもってある。バリュウ殿は、かつての勇者殿や機神アダムのように、最初からシャイニング・フォースとして定められていた存在なのだ。神竜としての使命は、マヌアルを守ることにこそある。それを妨げる権利は我々にはない」
「でも、無茶を強要する権利も看過する理由も、私たちは持ちあわせてはいないはずだわ」
カリンは、真っ向からオトラントに反論した。黙らせようとするクリンを払いのけて、一歩前に出る。板ばさみになったクリンは、姉の勝ち気な性格にひどく頭を痛めることになった。
「では、無理・無茶・無謀でない追跡ならばよいのですな」
その場の誰もが予期せぬ台詞を、パイパーが述べた。さしでがましいともとれるその行動に、他の魔道士たちが一様に顔をしかめる。オトラントはそれをおさえると、パイパーに続けさせた。
「私の知り合いのドワーフが、北の山脈の抜け道を知っているのです。そこを抜けてパオ平原へ先回りし、パオトレインの傭兵たちを雇って魔物を待ち伏せするというのはどうでしょうか。安全、かつ必要な策かと」
パイパーの提案に、オトラントは興味を示した。
「悪くない考えではあるな。暦では、パオトレインは西側に滞在しているはずだ。うまくいけば、先に派遣した追跡隊、もしくは、バストークの兵士とはさみうちにすることもできるだろ

う。だが、そなたの言うほどに早く山脈を越える道が、本当に存在するのか？」

「越えるのではありません。ドワーフの道を使って、抜けていくのです。いずれにしろ、マナリナからはこれ以上の戦力を出せません。シェードやバストークに援軍を求めるには、すでに遅すぎます。ここは、パオの民(たみ)の力を借りるのが賢明かと考えます」

「一理ある。それでよろしいかな、バリュウ殿、そして、ルドル村のカリンよ」

すぐに出発できるのならば、バリュウに異存はなかった。パオ平原にむかうかバストークにとって返すかは、状況をみて考えればいい。

名指しで呼ばれたカリンは、渋々その提案を了承した。彼女には、ここでかたくなに拒(こば)む理由がなかった。少なくとも、一人で先走ったバリュウが、マヌアルに魅入(みい)られることのないようにすることはできるはずだ。カリンは、つなぎとめるようにバリュウの翼の端を握り締めた。

絶対一緒についていくというカリンの意志表示に、バリュウは今ここで抗(あらが)うことは避けた。娘の手を振り解(ほど)いたりせず、逆に翼を少し開いて彼女の方によせた。

「では、バリュウ殿と一緒にいく者の人選はパイパーに一任しよう。パオのコロン女王への使者の証(あかし)と旅の装備はおって渡す。そなたは私の代理として、マヌアルのゆくすえを見とどけるまでバリュウ殿に同行するように」

オトラントに、パイパーはうやうやしく頭を下げた。

「バリュウ殿、このパイパーを同行させるが、よろしいか」

同意を求められて、バリュウは小さくうなずいた。今ここで断るわけにもいかない。
「首尾よく魔物と出会えたならば、敵を倒すことよりもまずマヌアルを取り戻すことを優先するように。マヌアルを奪還した後のことは、バリュウ殿が決めることだ。我らの力を借りてドラゴニアに封印するも、その場で破壊するも、バリュウ殿の好きになされるがいい」
「今、なんと……。破壊しろと……!?」
バリュウは、驚いて寝台の上の大魔道士を見た。他の者たちも、同じようにオトラントに視線を集める。カマリアは、あえて言葉を発しなかった。
「今後も悪しきことに使われるのならば、封印せずに破壊するしかないということだ。これは一人、バリュウ殿にしかできないことだと私は考えている。よいかな、そのときにはためらうことのないようにするのだぞ」
オトラントは強くバリュウに言うと、疲れたかのように深く息をついた。今の大魔道士は、話すだけでもかなりの体力と気力を消耗するようであった。伝えるべきことはほぼ伝えられた。あとは、何をすべきかである。魔道士たちに促され、バリュウたちはオトラントの部屋を退出していった。
「では、いきましょうか」
一行と一緒に外へ出てきたパイパーが、軽く伸びをする。あれでも、オトラントの前ではかしこまって我慢していたらしい。そして、ここにもう一人、じっと喋るのを我慢していた少女

がいた。
「やっと解放されましたわ。ああいうかしこまった雰囲気は苦手ですわ」
ツィッギーは大げさに息をつくと、唐突にパイパーに話しかけた。
「おじさん、おじさん」
「こらこら、誰がおじさんですか。わしはまだ若いんですぞ、年寄り扱いはしないでもらいたいものですな。見たところあんたはエルフの血縁のようだが、あんただって結構な齢を数えておるでしょうが」
パイパーは、ひどく心外だという顔をしてツィッギーに訊ね返した。とはいえ、彼の風貌は、二十歳を数年前に超えたカリンから見てもりっぱなおじさん以外の何者にも見えないのだが。
「もうすぐ十七になりますけどお……」
聞いて、パイパーは絶句した。長命なエルフの感覚から言ったら、生まれていないにも等しい。
溜め息をつくパイパーを見て、カリンたち姉妹がおかしそうに笑った。声を出して笑わないにしても、バリュウとカマリアの口元もゆるんでいる。
「それで、ゴングという修道僧の人を知ってるかお聞きしたいんですけどお」
パイパーの精神的ダメージにはかまわず、ツィッギーはやっと本題に入った。
「修道僧? それなら見かけたような気もしますな」

パイパーは、髯をこすりながら微かな記憶を掘り起こした。その答に、ツィッギーの顔が、ぱっと明るくなった。
「どこどこどこ、どこですかあ」
「これからいくところですよ」
つかみかからんばかりの勢いの少女から、パイパーは慌てて飛びすさった。
「私たちをどこに案内してくれるんですか」
いきなり飛んできた魔道士の身体を、両手で押し返しながらクリンが訊ねた。
「あんたが、一番よく知っているところだと思いますがな。さあ、急ぐとしましょう」
パイパーはクリンに片目をつぶると、足早に歩きだした。

5

「嫌じゃ」
オババ様はあっさりと言ってのけた。
「そんな、お師匠様。わがまま言わないでくださいよお。ドンゴさんをちょっと借りるだけなんですから」
クリンは、両手を合わせて自分の師匠であるオババ様に頼みこんだ。
マナリナの魔道士たちから実験バーさんと呼ばれているこの老婆こそ、マナリナでのクリン

の師匠であり、パイパーの友人であるドワーフのドンゴの雇い主であった。変わり者の魔道士たちの中でも、とびきりの変わり者として名が通っている。

雇い主として、ドンゴを手放すつもりはないとオババ様はごねた。どうひいきめに見ても、パイパーたちを困らせて楽しんでいるようにしか見えない。

クリンとパイパーは、年寄りのわがまま攻撃に途方に暮れた。

オババ様の研究室の外で待っていた他の四人は、半開きの扉の中からもれてくる会話に思わず顔を見あわせた。

「嫌なものは嫌じゃと言っておる。ドンゴに留守されたら、このオババ様の崇高なる研究が進まないではないか」

「オババ様よ、これはオトラント様の命令なのですぞ」

パイパーが威厳を込めて言い渡した。そのつもりであった。だが、オババ様にはいっこうに効果がない。

「オトラントなど、悪戯（いたずら）な悪ガキのころに、さんざ殴（なぐ）って懲（こ）らしめてやったことがあるわい。このオババ様に命令するなど百年早いわ」

かんらからと笑うオババ様に、パイパーは汗だくになって説得を始めた。

「あのこったら、あんなののところで修行してたのかしら？」

「らしいね」

小声でささやくカリンの言葉に、バリュウはぽりぽりと鼻の頭を掻いた。

「誰がこんなのじゃと。そこに、誰かおるのか」

耳聡くカリンの言葉を聞きつけたオババ様が部屋の外を睨んだ。年をとっても、耳は達者らしい。迂闊なお喋りに少し後悔しながら、バリュウたちは部屋の中へと入っていった。

「おお、なんと神竜ではないか。これはいい。これはいいぞ。よし、お前たち全員がわしの実験に協力するなら、そこのドワーフをくれてやってもいい」

バリュウの姿を見て目を輝かせるオババ様の台詞に、ドンゴはむっとして片方の眉をつりあげた。

「おいおいおい、わしは物じゃないんだぞ。勝手にくれてやるもないもんだ。だいいち、実験の手伝いって、オババ様はこの竜の姿を何かに変えるつもりなのか。それとも、誰かを竜にしてしまうとか……」

ドンゴは、バリュウ越しに部屋の隅の大きな機械をみた。そこにでんと居座っているのは、透明なコップを逆さに伏せたような形の変身マシンだった。

オババ様が実験バーさんと呼ばれるのも、この機械を使って人をいろいろな動物に変えてしまうからだ。それゆえ、マナリナの伝言版には『実験バーさんに注意』と張り紙までされている。

「いくらわしでも、人を神竜に変えたりはできんさ。だから研究してるんじゃよ。こんな珍し

い実験材料は、めったに手に入らんからのお。ほっほっほっ」
「バリュウは、実験用の動物なんかじゃないわ」
カリンがオババ様に怒鳴り返した。
「わしにとっては、自分も含めて、すべての生き物は実験材料じゃよ。あんたも、あんたも、あんたも、あんたも……」
　オババ様は、順繰りに全員をさしてまわった。
「この機械〝プロンプトの古の塔にあった物によく似ているな……。私にこれに入れと言うのですか」
「バリュウは、オババ様を見下ろして訊ねた。カマリアも何か言いかけたが、オババ様の喋りだすほうが彼女よりも早かった。
「古の塔にあったのは、黒き竜のような模造の生き物に生命力を吹きこむためだけの物じゃよ。中に入った生き物の命を吸いあげて他の者に送りこむための物じゃ。この機械とは大違いじゃぞ。これは、ずいぶんと前にバストークの採掘場の地下から掘りだされた物でな。このオババ様がなおして、使えるようにしたのじゃ」
　弟子ならそこで偉いと合の手を入れんかと、オババ様はクリンを叱った。かわいそうなクリンが、絶妙に間を外してオババ様を誉めた。少しむっとしながらも、オババ様が機械の説明を続ける。

「この機械はな、生き物を他の生き物に変えてしまうのじゃ。たとえば、大ミミズ（ウォーム）などを、かわいらしい鶏や牛に変えてしまえるのじゃぞ。おお、なんと画期的なことなんじゃろう」
自らの言葉に酔って、オババ様が恍惚（こうこつ）とした表情をする。
「でも、元大ミミズだった牛の乳とかシチューとかは、あんまり食べたくはないわよね、普通は……」
カリンが、呆（あき）れてつぶやいた。ツィッギーが、口元を少しひきつらせながら彼女にうなずく。
「この偉大な研究がわからんとは。愚かな小娘どもじゃ」
オババ様の物言いに、ツィッギーはひどく腹を立ててその頬（ほお）をふくらませた。が、ふいに自分の用向きを思い出して、すぐにその怒りをおさめた。
「おばあさんは、ゴングという方を御存知ありませんかあ」
「ゴング？　さて……。ああ、あのでっかい坊主かな。二日ほど、ここでわしの手伝いをしていったが」
小首をかしげながらとっ散らかった記憶を引っ張りだしたオババ様に、ツィッギーがぱっと顔を明るくした。
「たぶんそうですわ。それで、今、どこにいらっしゃいますの？」
「もう、ここにはおらんよ」
「へっ？」

急転直下、喜んで飛び跳ねかけたツィッギーの身体がこちんと固まった。
「ついこの間、出ていっちまったよ。どこへいったかは知らんね」
逃げだしたんだよと、パイパーがツィッギーに耳打ちした。さもあらんと、そのささやき声を聞きつけた者たちは思った。
さすがのバリュウも、ゴングのようにここから逃げだしたくなり始めていた。それに、彼には時間を無駄にしている余裕はない。
「私たちは、あまりゆっくりとはしていられないんです。この中に入れば、彼を貸してくださるのですね」
「よしなさいよ、バリュウ。それこそ時間の無駄だわ」
変身マシンに手をかけるバリュウを見て、カリンは慌てて彼を引きとめた。
「こらこらこら、誰が中に入れと言った。わしがほしいのは、お前たちの細胞じゃ。神竜を蛙や蛇に変えたって、たいして面白くもなんともないじゃないかね」
箱の中をごそごそやりながら、オババ様が早とちりな神竜をしかった。じきに、あったあったと言って先に針のついた奇妙な道具を取り出してくる。
「なあに、ちょっとちくってするだけじゃて」
オババ様は、巨大な注射針のような物をかかえてすごく嬉しそうに顔を歪ませた。
「おいおい、わしにまで針を突き刺すつもりじゃないだろうな」

ドンゴが、オババ様から後退りした。

「ちょうどいい。ドワーフの細胞はまだもっとらんかったからのお」

いいかげんうんざりしてきたバリュウとパイパーに急かされて、一同は渋々オババ様の細胞採取に協力した。ドンゴやケルベロスまでもが、オババ様の毒牙にかけられるはめになる。一番抵抗したのはカマリアであったが、宗教的理由だと言おうが異国の者だと言おうが、オババ様にとってそんなことは関係がなかった。最後には、半ばみんなに押さえつけられるようにして彼女も針を刺された。

「神竜が一つ、ドワーフが一つ、エルフが一つ、ハーフエルフが一つ、人間が三つ、ケルベロスが一つと……。ほっほっほっ。さてさて、どの輝水晶が対応するのか……」

オババ様は、今度は虹色に光る水晶板のたくさん入った箱をかきまわし始めた。すでに、バリュウたちの存在は意識の外におき忘れてしまったらしい。

「ほれ、研究の邪魔だ。外に出ていっとくれ」

オババ様は、バリュウたちを乱暴に実験室の外へと追い出した。カマリアは心の中で、自分たちの細胞を採取したこの老いた魔道士の研究が永遠に完成しないことを切に願った。

「さて、では案内してくれ」

パイパーはやれやれと肩の力を抜いてから、旧知のドワーフに頼んだ。

「ちょっと待て、なぜわしがそんなことをしなくちゃならんのだ」

ドンゴはパイパーの枯れ葉色の長衣(ローブ)の端を引っ張って、先を急ごうとする魔道士を引きとめた。
「なぜと言われても、説明はさっきしたではないか。それに、オババ様はいいと言ってくれたぞ」
「オババ様はオババ様、わしはわしだ。この年になって保護者を頼んだ覚えはないわい。わしには、わしの意志というものがある」
「では、あらためて引き受けてはくれまいか」
パイパーが、再度頼んだ。
「断る。秘密の地下道に、ドワーフ以外を連れていくわけにはいかんからな。それに、マヌアルが何に使われようと、わしの知ったことじゃない。一銭にもならんというのに、そんな面倒なことには首を突っ込みたくないからな」
ドワーフは、かたくなにパイパーの申し出をはねつけた。
「ケチ」
ぼそりと声がした。
「なんだと」
ドンゴが振り返ると、そこには頰(ほお)をぱんぱんにふくらませてむくれたツィッギーの姿があった。

「ケチだからケチって言ってるんですわ。困っている人たちには、手をさしのべるのが正しき道なのですわ」

僧侶の本分にかえって、ツィッギーが頑固なドワーフに説教を始める。

「そんなことは、わしの勝手だろうが」

「ケチ」

ふたたびツィッギーは頰をふくらませた。どだい、若い少女が自分の数倍の歳の者に説教をしようというところに無理がある。まして、それがツィッギーであれば、威厳が持続しようはずもない。

「こらこら、年の若い娘がそんな口を利いてはいかん。まして、見たところお嬢ちゃんは僧侶であろう」

「じゃ、ドワーフならなんでも言ってもいいんですの。そんなの、神様はお許しにならないと思いますわ」

「やれやれ、聞き分けのない」

「聞き分けのないのはそちらですわ」

怒りのあまりうっすらと涙さえ浮かべたツィッギーを、カリンが慌ててなだめた。少女が、カリンの胸に顔を押しつけながらだきついてくる。

泣かすつもりはなかったが、結果的にそうなってしまったため、ドンゴはわずかに狼狽した。

うつむいて困っていた彼がふたたび顔をあげると、目の前に白い神竜が立っていた。
「ドワーフのドンゴ殿、あらためて私からお願いいたします。あなたの力をお貸し願いたい」
長い首が大きく曲がり、細長い頭が上背(うわぜい)のないドワーフの頭の下にまでさがった。
「バリュウ、何もあなたがそこまですることはないのよ」
カリンが、神竜の頭をあげさせようとした。かつての英雄の一人である誇り高き神竜の長(おさ)が、一介(いっかい)のドワーフにここまで身を低くするいわれはない。だが、バリュウは頭をあげなかった。
「頭なら、私がさげるから」
お願いしますと、カリンはバリュウの横で彼に負けないくらい深々とドンゴに頭を下げた。姉にばかりそんな真似(まね)はさせられないと、クリンもその横で頭を下げる。
「ドワーフ殿、私からもお願いします」
少し遅れて、カマリアもバリュウたちに加わった。もっとも、こちらは頭をさげて懇願(こんがん)するというよりも、少し腰を引いて身を沈めた優雅なお辞儀というものに近かった。
「さて、どうするかな、畏友(いゆう)よ。再度わしからも懇請(こんせい)する。マヌアル奪還のために、ドワーフ族の助力を……」
パイパーが頭をさげる。
カリンの横でべそをかいたツィッギーもぺこりと頭をさげた。
「わかった、わかったから、みんなでそうわしを責めんでくれ。ちゃんと案内するから、いい

かげんに頭をあげてくれんか」
　ついにドンゴは、一同に降参した。

6

「なんで、また君たちがついてくるんだ」
「あたしたちをおいていこうなんて、虫がよすぎるわよ。そうそうバリュウの好きにはさせないわ」
「そういう問題じゃないだろう」
　バリュウとカリンは、パイパーが都合してくれた砂漠用の自走砲（サンドローダー）を前にしてえんえん言い争っていた。カリンのそばには、クリンとツィッギーも一緒に立っている。
　いつの間にか妹分が一人増えてしまったカリンは、いつにもまして強気であった。
　バリュウとしては、当然のようにカリンたち姉妹とツィッギーはマナリナにおいていくつもりだった。彼の認識が甘かったと言えばそれまでかもしれない。この姉妹が足手まといとして残されることを承服するわけがないことぐらい、少し考えれば容易に予想がついたはずだ。
　一方のツィッギーも、無理矢理にでもついてくるつもりでいた。彼女としては、ゴングのいないことがわかった以上、これ以上マナリナにいる理由はなかった。
「だいたい、なんでツィッギーまで……」

バリュウが矛先を変えた。
「だって、道士様の手掛かりは切れてしまったのですもの。おっかけるのが無駄でしたから、今度は待つことにしたのですわ。バリュウ様についていけば、シャイニング・フォースのお仲間として道士様とあえるかもしれないですもの」
「そんなに都合よくいくわけないじゃないか」
呆れて、バリュウが大声を出した。
「それに、道士様と会うまでに、カリンお姉様に弟子入りして身体を鍛えようと思ってますの。モンクになる前の基礎作りですわ」
言いながら、ツィッギーが細い腕で力こぶを作ってみせる。
「はあ!? 何よそれ。あなたってば、何を考えてるのよ」
「何も考えてないと思う……」
筋肉隆々の化け物女のような言われ方をされて怒るカリンの横で、ぼそりとクリンがつぶやいた。
「ああん、違いますう。だって、カリンお姉様の方が、神竜であるバリュウ様よりも強いんですもの」
いらぬ怒りをかってしまったツィッギーが、慌てて訂正する。だが、ちっとも訂正になっていない。

「負けん気と言うことでは、それは言えるかもしれない」
腕を組んだまま、バリュウがこっくりとうなずいた。
「だったら、私たちを連れていきなさいったら、バリュウ！」
カリンが、話をもとへと戻した。
いたずらに時間は過ぎていき、バリュウたちは苛立ちを深めていった。
「どうするんだ。わしはもうこれ以上待てんぞ。夜中に突っ立っている趣味などないからな。パイパー、こいつらは残してわしら三人で出発しようではないか」
とうとう、ドンゴが堪忍袋の緒を切った。それは困ると、言い争っていた四人が声を揃えて言い返した。
「だったら、早く決めろ。そうだ、パイパーよ、人選はお前に一任されておるのだろう。貴様が決めろ、決めちまえ」
いきなりドンゴに名指しされて、パイパーはひどく狼狽した。その場にいあわせた全員の視線が、大きな圧力として彼にのしかかる。
「それは……。わしが、決めるのか!?」
しどろもどろになるパイパーに、ドンゴはそうだと言い切った。
「とにかく、ここで話し合っていても時間の無駄だと思うが……。とりあえず荷台に乗って、移動しながら話し合ってみてはどうかの」

冗談じゃないとバリュウはパイパーに言い返そうとした。だが、時すでに遅く、娘たちはちゃっかりとサンドローダーの後ろに連結された荷台に乗りこんでしまった。
バリュウは、心底パイパーを恨んだ。マナリナを出てしまっては、彼女たちに帰れと言えるはずがない。
「さあ、出発するぞ」
ドンゴの言葉で、二台あるサンドローダーのうちの片方が動きだした。バリュウは、渋々残る一台に乗りこんだ。
サンドローダーを操る兵士たちの慣れた運転で、一行は月明かりの中を北の山脈目指して進んでいった。
「よく飽きないわね」
クリンが隣に乗るツィッギーに同意を求めると、彼女はこっくりとうなずいた。
後続のサンドローダーに乗ったバリュウとカリンは、出発してからもずっと言い争っている。すかさずこちらに乗ったパイパーやドンゴと違って、むこうに乗りあわせたカマリアと運転の兵士はさぞかし迷惑していることだろう。ツィッギーは、静かに彼らの安息を祈った。
彼女たちの心配をよそに、カマリアはこの状況を楽しんでいるらしかった。荷台の縁に片腕を預けたまま、ずっと二人の会話に耳を傾け続けている。
結局のところ、二人は互いを心配しているだけなのだ。一緒にいることが危険なのか、一緒

にいないことが危険なのか。食い違っているのは、その点だけである。

　肉体的な戦闘力だけを見れば、バリュウは正しい。だが、はたして本当にそうだろうか。まともに戦えば、バリュウに勝つことは自分にとってできない相談ではないとカマリアは自負する。そのことに、いかほどの価値があるのかは別として……。バリュウとカリンのとなえる力の本質的な違いに気づいている自分自身に、カマリアは微かな戸惑いと驚きを感じていた。

　バリュウ一人を観察する心づもりだったものが、どうしても二人を一組として見始めていることに、カマリアは密かに自嘲した。バリュウとカリン、そして、その周りの者たち。彼らをこうして見守っているだけで、何かが少しずつ変わっていくような気がする。それは、以前なら思いもしなかった考えであり、物の見方であった。カマリアはその変化に戸惑いつつ、本来とはまったく別の意味での旅を続けることに違和感を感じなくなりつつあった。

　カリンの声が嗄れ始めてきたころ、ようやくカマリアは二人の間に割って入った。

「バリュウ殿、今回はあなたの負けですわ。カリン殿も、少し休憩されてはいかがですか」

　言いつつ、カマリアは二人に木の実を投げて渡した。マナリナで買い求めたもので、アクウィンスと呼ばれる、硬い殻の中に水分を含んだ果肉を持つ乾燥地特有の木の実だ。

　これで喉を潤せというのだろう。カリンは、おとなしくそれをいただくことにした。けれども殻が硬くて、中の実を取り出すことができない。見かねたバリュウが、実を二つに割ってくれた。だが、バリュウの手では、中の果肉をうまく取り出せない。カリンは殻から取り出した

果肉の房の渋皮をきれいに取り除き、はいとバリュウに手渡した。
バリュウにとって、口の中の甘い果肉はまるでほろ苦いもののように感じられた。彼はカリンの頭越しにカマリアの方に顔をむけた。おせっかいな娘の視線を捉（とら）えて、わずかに目をしかめる。
神竜の青い瞳（ひとみ）は、夜の落ち着きを吸い込んで、その色合いをより深いものへと変えていった。
「やれやれ、殿、この次は私に加勢してほしいな」
そのままどすんと荷台に腰をおろす。反動で荷台とサンドローダーが軽く飛び跳ねた。運転の兵士に静かに動いてほしいと怒られ、バリュウはさらに顔をしかめた。娘たちが、顔を見あわせてくすくすと笑う。
「カリン殿、バリュウ殿はいつもああなのですか?」
カマリアは、そっとカリンに耳打ちした。どういうことかと、カリンが聞き返す。
「いえ、いつもあのように優しいのかと」
「私は、そんなに優しくはないぞ」
聞き咎（とが）めたバリュウが言った。それを聞いたカリンがくすりと笑う。
「本人はああ言ってるけど」
「いえ、私の知っている竜族はもっと猛々（たけだけ）しいものだと思いまして。古（いにしえ）より、竜族は最高の守護獣（ガーディアン）とされています。なのに、バリュウ殿はなんというか……、その、妙に人間臭いところ

があって……」
「どうせ、私は変わり者だよ」
バリュウは、ますますふてくされてしまった。
「確かにバリュウは変わってるかもしれないわね。ずっと私たち人間と一緒に育てられたせいかもしれないけれど。でも、あたしは、バリュウ以外の神竜は知らないから。あたしにとって神竜といえば、バリュウのことなの。だから、よくはわからない」
カマリアは納得しかねたようだが、それきり同じ話題を持ちだすことはなかった。
夜の闇の中を、サンドローダーは走り続けていった。
先に進むに連れて木立は増え、やがてサンドローダーでは地形的に進めなくなった。
「ここから先は、引き返せないぞ」
地面に降りると、ドンゴが一同を見回して言った。特にツィッギーとクリンに怖い顔をむける。
「彼の言う通りだ。これから先には戦いがあるかもしれない。特に、ツィッギーは帰った方がいい」
バリュウの言葉に、ツィッギーが毅然とした顔つきになった。
「皆様は、誤解していますわ。私はそんなに柔じゃありませんですの。これでも、旅の仲間と一緒に、どろぼうさんと戦ったこともあるんですよお。僧侶というものは、試練を求めるもの

なのですの。特に、私のように修行中の者は、進んで危険に飛びこんでいかなければならないのですわ。それに、他人が危険にたちむかおうとしているときに、一人だけ逃げだすことは許されておりませんですの。ここで私に帰れと言うことは、私に僧侶であることを捨てろと言っているようなものですわ。それは、大いなる侮辱ですの。カマリアさんなら、おわかりになりますですわ」

ツィッギーに同意を求められて、カマリアは曖昧にうなずいた。

「だが、自分の実力をわきまえるのも才覚のうちですぞ」

パイパーの言葉に、ツィッギーは太い眉を逆立てた。

「人を信じる心があれば、何が起きても大丈夫ですわ。それに、たとえ死んだとしても、信念の上の行動ならそれは聖なる犠牲としてたたえられるべきですわ」

「わしは教義などに興味はないが、時間の無駄な使い方には一家言持っておるぞ。信念を曲げぬ者には、何を言っても無駄だということも知っておるつもりだ。さあ、ここからは歩くぞ」

ドンゴは乗物をマナリナへ帰すと、先頭に立って歩きだした。

足元を見る必要もないほど通い慣れた道を進むドワーフに、バリュウたちは苦労しながらつき従った。特に身体の大きなバリュウは、木の枝で翼を傷つけないように注意しなければならなかった。見かねたカリンは、自分の外套でバリュウの翼をつつんでやった。

しばらく進むと、森は起伏にとみ始めた。ドンゴは起伏と起伏の谷間を選ぶように進んでい

のようだ。

「ここが入口だ。ついてこい」

ドンゴは木の根をカーテンのようにかき分けると、その中に入っていった。中は洞窟か何か

目の前には、盛りあがった大地をびっしりと蓋うようにして生えた細い木の根があった。

き、そして立ち止まった。

クリンが角燈をかかげた。短い通路の先に下への階段が見える。

「ずるいわよ、パイパーには教えたくせに、今まで私には隠していたなんて」

角燈の細い光では先が見通せないほど深い階段を見て、クリンが悔しがった。自分の知らないことが存在していた悔しさに、研究者としての怒りがふつふつとわいてくる。

「パイパーをここに連れてくるのは、これが初めてだ」

ドンゴに、パイパーはうんうんとうなずく。ドワーフは、そんな友の顔を確かめようともせず、ずんずんと階段を下り始めた。

かなり下に降りたところで、道は平坦な通路になった。長年にたまったのであろう土や苔に被われてはいるが、明らかに人工の隧道だ。

「いくら近道といっても、こう暗いところをずっと進んでいくのはあまりぞっとしないわね」

ツィッギーにぴったりと背中にはりつかれながら、カリンは闇の中に目を凝らした。まるで、妹がもう一人できたような気分だった。あまりなつかれ過ぎるのも考えものだ。

「心配するな、ちゃんと乗物がある」

ドンゴは途中の壁に忽然と現れた扉をさし示すと、両手を押しあててそれを開いた。ついてこいと首で合図しながら、中へと入っていく。

彼に続いて中に入った一行は、あまりのまぶしさに目をしかめた。闇に慣れた目が強い光を拒んで悲鳴をあげる。

やがて視力を取り戻した一行は、ドンゴをのぞいて一様に驚きの声をあげた。

そこは、王宮の広間ほどもある広い部屋だった。部屋の中央から放射線状に何本もの黒い線が延び、それぞれが壁面に開いたアーチ状のトンネルの入口から奥の方へと消えている。

「いったい、ここはなんなの?」

クリンが、曇った眼鏡を拭きながら訊ねた。

「箱船の中継地としか、わしらは伝え聞いていないがな」

ぶっきらぼうにドンゴは答えた。

「古の城以外にも、まだこんなものがあったんだ」

バリュウは、驚きと不安と懐かしさの綯交ぜになった表情で、広間の壁沿いに歩いていった。所々に、真っ黒な絵を飾った額がある。

「なんでこんな物を飾ってるんだろう。それとも、ここにあった絵は外してしまったのかい」

神竜は壁の張りだした部分の埃を吹き払うと、そこに手をついて壁に顔を近づけた。とたん、

漆黒(しっこく)の絵だと思っていた物が明るい光を放った。驚いたバリュウが慌(あわ)てて身を退(ひ)く。
「おい、何をしでかしたんだ」
ドンゴがすっ飛んできた。
明るく輝く絵には、不思議な模様が浮かび上がっている。同時に、高音の抜けた軽い感じの女性の声が、広間にこだました。不思議な抑揚(イントネーション)をもった言葉は、バリュウたちの聞いたことのないものだった。
「同じパターンの繰り返しがある。これは文字ね」
クリンが、目を皿のようにして壁面に顔を近づけた。
「読めないのが、なんとも悔しいですな」
パイパーの言葉に、クリンがうなずく。
やがて、文字が消えて、地図が浮かび上がってきた。
「ここの地図のようですね。これは、ここの案内板でしょう」
「よくわかるな」
ドンゴが訝(いぶか)しげにカマリアを見た。
「パルメキアの神竜の地に、似たような物がありましたから」
「なんと。あんたの故郷にもここと同じようなものがあるというのか。だが、わしらの先祖がいくら調べても、今みたいなことはなかったぞ」

「それは、バリュウ殿を管理者と認めたからでしょう。ここも、昔は神竜の管理する場所だったのではないでしょうか。だとすれば、神竜の命令には迷わず動くはずです」

「この神竜なら、ここを自由に動かせるというのか。閉じられている坑道も、彼なら開けられると」

ドンゴは、カマリアに詰めよった。その瞳には、好奇心とも野心ともつかない光が宿っている。

「私は、命令なんかしていない。ただ、触ったら勝手に動きだしただけだ」

戸惑いがちに、バリュウは突然自分に集められた期待を否定してみせた。

「動かせるのに、なぜ使い方を知らんのだ」

「バリュウは、両親からそういったことを教わる暇がなかったのよ。きっとそうだと思うわ」

カリンが、バリュウをかばってドンゴの前に立った。

「ならば、パルメキアとかいうところにいる神竜なら、ここの使い方を知っているというのだな」

「ええ、おそらくは」

カマリアがうなずいた。

「ならば、わしもパルメキアにいこう。いって、ここの秘密を全部教えてもらうつもりだ。そうすれば、封印されている坑道を使うこともできる。新しい鉱脈を手にいれることもできるで

はないか。これは、一山あてられるかもしれん。さあ、さっさと箱船に乗りこまんか。わしが知る限りでは、あれに乗れば、寝ている間に山脈の向こう側へついてしまうのだからな」

ドンゴはみんなを急きたてると、線の上においてあった乗物をさした。彼が箱船と呼んだ乗物は、大型のボートを逆さに伏せたような格好をしていた。車輪のような物はどこにもない。これで本当に移動できるのかと、カリンは密かに訝しんだ。

箱船の背後にある扉を開くと、一行は中に乗り込んだ。がらんとして何もない内部は、いかにも運搬用の貨物室のようであった。

ドンゴが前の方にある操作盤を動かすと、一行を乗せた箱船がふわりとわずかに浮きあがった。そして、床の黒い線に沿って流れるような速さで動き始めた。

「すごいすごおい、目が回りますう。これをみんなあなたの御先祖様が作ったんですの!?」

流れ飛ぶトンネル内の照明の明滅を見つめながら、ツィッギーがドンゴに訊ねた。

「作ったのではない、見つけたのだと言っているだろうが。これは、古き神々の遺産だ。わしだって、この中全部を探検したわけじゃない。いくつか探検した洞窟の先で、山脈の向こう側の出口と、貴金属や輝水晶の採掘場を見つけただけだ」

「輝水晶？」

訊ね返すカリンに、ドンゴは虹色に輝く薄い結晶を見せた。

「これはね、オババ様の機械を動かす鍵なの」

クリンが姉に説明した。この輝く結晶を変身マシンにセットすることによって、あの機械は動くのだという。

「どうも、いくつかの種類があるようで、輝水晶(クリスタル)によって違った動きをするの。でも、完全な形のは少なくて、たいていはどこかが欠けているからただの綺麗(きれい)な石で終わっちゃうんだけどもね」

「なんでもいいさ、こんな石っころにオババ様はいい金を払ってくれるんだからな。削(けず)って細工物にするよりはよっぽど儲(もう)かる」

輝水晶(クリスタル)をしまうと、ドンゴはからからと笑った。

「それよりも、宝石や金や銀の鉱脈が見つかれば、こんな得体(えたい)の知れないものを掘りだすことをせんでも暮らしていける。まして銀の中の銀でも見つかれば、一気に大金持ちだ。わけのわからん遺跡のお守りに飽(あ)きて出ていった親類を呼び戻すこともできるというものだ。ここに、ドワーフらしい地下の町を作ることも夢じゃないだろうよ。わしは、がぜん海を渡る意欲がわいてきたぞ」

ドンゴの言葉に、カリンとバリュウは顔を見あわせた。

「おいおい、なんともげんきん過ぎやしないか」

諌(いさ)めぎみの口調で、パイパーが旧友に声をかけた。

「それに、パルメキアの神竜は魔物たちと戦っている真っ最中なんだよ」

バリュウが、ドンゴを思いとどまらせようとする。ツィッギー一人でも厄介なのに、みんな、なんで彼についてきたがるのだろうか。
「面白い。その程度の障害がなくては。わしは、ただでここの秘密を手に入れようとは思っとらんよ。そこまで馬鹿じゃないつもりだ。ドワーフは一流の戦士でもあるのだぞ。どうかな、神竜殿、わしをあんたの護衛として雇わんかな」
ドンゴの申し出に、バリュウたちは目をぱちくりさせた。神竜の護衛だなど、なんと大胆な申し出だろう。
「バリュウ殿には必要ないと思うがな。どちらが強いかは一目瞭然だろう」
パイパーがドンゴをたしなめた。
「いや、頼もう」
神竜の言葉に、ドンゴ以外の者は意外そうに彼を振り返った。ふいに神竜は考え方を変えたようだ。
いつでもバリュウがカリンのそばにいられるわけではない。カリンをパルメキアまで連れていくつもりはなかったが、パオまでの道程も安心とはいいがたい。万一のとき、彼女たちを守ってくれる者がパイパー以外にも必要だった。
「そうこなくては」
ドンゴは、パイパーの背中を力いっぱい叩いた。たまらず魔道士が咳き込む。

「さて、ほっておけばこの箱船は勝手に着くから、みんな今のうちに寝たほうがいい。そこの娘みたいにな」

ドンゴは、床で外套（マント）にくるまって丸くなっているツィッギーを顎（あご）でさした。どうやら、慣れない乗物に早くも酔ってしまったらしい。おとなしくて助かると笑いながら、ドンゴはごろんと横になった。

轍（わだち）のゆれのまったくない箱船は、静かに光の縞模様（しまもよう）の中を高速で突き進んでいった。スピード酔いのツィッギーをのぞけば、それぞれが好きな場所で終点までの時間を潰（つぶ）している。

飽（あ）きもせずに操作盤（コンソールパネル）を観察しているパイパーとクリンから離れて、カリンはバリュウとカマリアのそばに腰をおろした。

「パルメキアの神竜たちは、みんなここみたいなところに住んでいるのかい」

バリュウは、異国の娘に訊（たず）ねていた。

「気になりますか？」

神竜の反応を観察するようにカマリアが聞き返した。

「ならないといえば嘘（うそ）だろうね。不思議だとは思わないかい。神々は、これだけの物を造ることができたんだ。そんな彼らに選ばれたはずの神竜の一族が、なぜに滅びの道を歩んでいるのだろう。ルーン大陸の神竜も、パルメキア大陸の神竜も……」

「でも、バリュウがいるじゃない。パルメキアの神竜だってまだ滅んではいないし。先に姿を

消してしまったのは神々の方よ」
「ああ、神々でさえ滅んでしまったのだから、神竜が滅んだとしてもちっとも不思議じゃないんだ」
バリュウを励まそうとして、カリンは逆のことをしてしまったことに気づいた。
「問題は、その理由だよ」
神竜は言葉を継いだ。
「それは、マヌアルを遠ざけてしまったからでしょう。神竜とマヌアルの間には、切っても切れない宿命があるのです」
「宿命だなんて、そんなことはないと思う」
カマリアに、カリンは言葉を選んで反論した。
「いいえ、パルメキアの神竜たちは大地の力から命の炎をもらっていました」
「命の炎？」
聞き慣れぬ言葉に、バリュウが聞き返す。
ええと、カマリアはうなずいた。
「マヌアルの秘法によって、彼らは生きる力を与えられるのです。それは、太古に神々がお決めになったこと。神々によって大地の力をその身に受け続ける限り、彼らは不死です。それこそが、彼ら、いいえ、あなたたちが神の竜と呼ばれる由縁なのですよ。あなたは、御存じなかっ

たのですか」

バリュウにむかってカマリアが反問する。

そんなことも知らなかった自分はなんなのだと、バリュウは自分自身に訊ねた。自分はいったい何者なのだろう。そして、神竜とはいったいどんな存在であるのか。その明確な答を彼は知り得ないでいた。それを見つけだすことが、バリュウにとっての命題なのだろう。

だが、つきつめればつきつめるほどに、神竜と人間との、バリュウとカリンとの違いがはっきりとしていく。特に、肉体的な差異は、知れば知るほどに彼の中でいかんともし難いものになっていた。

そんなバリュウに、カリンは何か声をかけようとした。だが、神竜たちと深くかかわってきたルドル村の住人である彼女も、知識においては彼と大差ない。ただ、彼女はバリュウのように違いを認めていくのではなく、同じ部分を見出すことに悲しみ以外のものを感じていた。

「マヌアルを魔物の手から奪い返した後で、パルメキアの神竜たちと出会えれば謎は解けるかもしれません。あなたが知りそこねた知識もそこにならあるでしょう。パルメキアの神竜の山にならーー私はとても知りたいのです、なぜルーン大陸最後の神竜が、他の誰でもなく、バリュウ、あなたなのか……」

カマリアの翠の双眸が、バリュウを強く囚えた。

神竜は軽く息を詰まらせた。魂が、身体の内から溶けだしていくような気がする。

うとした。

「もう寝ましょ」

呪縛を断ち切ったのはカリンだった。二人の間に入ると、無理矢理バリュウを横にならせようとした。

「そうですね、カリン殿。私たちも休みましょう」

カマリアは笑みを浮かべると、サッシュを解いて上衣を脱ぎ始めた。長手袋やブーツも脱いで、なるべく素肌が露出するようにする。安全な場所では、そうして寝た方が疲れもとれるし気分もよかった。長い脚を床になげだして横になると、カマリアは床に広げた外套の裾をめくって身体に巻きつけた。

「明日からは強行軍だからね。十分に身体を休めておこう」

バリュウはうつぶせに床に寝そべった。

そばによりそうようにして、カリンも横になる。バリュウは長い尾を回すと、枕代わりに彼女の頭を支えた。そして、布団の代わりに翼をカリンの上に広げる。あたかも、それが当然の習慣であるかのように。

カマリアは組んだ両手の上に頭を載せると、よりそって眠る二人の方に顔をむけた。眠りに落ちるまでの間ずっと、彼女は二人の姿を興味深げに見つめ続けた。

7

無事に山脈を越えた一行は、ふたたび地上へと出てきた。パオ平原を目指して、旅の続きを急ぐ。

クリンとパイパーの計算では、魔物たちよりも一日ほどの行程を先回りしているはずだ。パオの傭兵たちを連れてすぐにとって返せば、パオ平原に入る直前の山道で待ち伏せることができるだろう。狭い山道に罠を張れば、敵を逃がすことはまずない。

森の中では、ドンゴに替わってカリンが先頭に立って進んだ。パイパーが横で方角を指示し、カリンが草などの様子から通れる道筋を決めていく。バリュウは、わずかな違いをも見逃さない彼女の観察力に舌を巻いた。

密集した木立の中では、バリュウが一番の足手まといであった。カマリアやツィッギーのように、仲間の疲れを癒す力も持ちあわせてはいない。バリュウは、自分でも知らないうちに苛立ちをつのらせていた。広い場所か街道に出れば翼を広げることができるだろう。バリュウはそれまでは我慢に徹することとした。

やがて陽も傾いてきたころ、森を抜けた一行はパオ平原とバストークの間を結ぶ街道筋に出ることができた。

そこで計算外のことが起きた。

マヌアルを奪っていった魔物たちの一団と遭遇したのだ。それは、まさに出会い頭と言ってもいい状況だった。

「こんなところでかち合う計算じゃないはずなのに、なぜ……」

予想外のできごとにうめきながら、クリンは目の前に現れた二十四ほどの魔物の一団を見据えた。

バリュウたちに負けず劣らず、魔物たちも驚いていた。

「馬鹿な、なぜここに神竜がいる！」

女面鳥と武装した蜥蜴の戦士の一団を従えた魔物は、バリュウの姿を見て光彩のない虚ろな瞳を大きく見開いた。その目が、神竜の傍らにいるカマリアを捉える。魔物は、それですべてを了解したようだった。

「生きていたとはな。そうか、貴様が手引きしたのか。いつもいつも……。いいだろう、あくまでもこのズィドゥールの邪魔をするならば、追いかけてきたあの魔道士たちのように始末してやろう」

魔物は唇の端をめくって牙をのぞかせると、蛾の触角のように額から突き出した双つの角を威嚇するように後ろへと振った。首筋から背中にかけて鬣のようにのびた深紅の蓬髪がざわめく。呼応するように、リザードマンたちがぬめりとした三角の頭をもたげ、二股の舌をちろちろとその口先からのぞかせた。ハーピーたちが耳障りな金切り声をあげる。

「これがほしいのならば、力で奪うがいい」

ズィドゥールは、黒檀でできた箱をかかげて見せた。異国風の細かな象眼が施された、極めて装飾的な入れ物だった。

「バリュウ殿、間違いない、あの中に秘伝の書が！」

パイパーの声が引金になった。

「ドンゴ、パイパー、カリンたちを頼む！」

叫ぶなり、バリュウはマヌアルに吸いよせられるようにズィドゥールにむかって突っ込んでいった。追うようにして、ケルベロスが後に続く。

「待て、迂闊に飛びだすな。ばらばらになっては不利だ」

同様に飛びこんでいこうとするカマリアを、ドンゴが慌てて引きとめた。

「バリュウ、戻ってきなさい。バリュウ！」

カリンの声も届かず、バリュウはハーピーたちとの空中戦に入っていった。

くすぶっていた気を、一気に発散させる。同時に、先陣を切るのはいつも自分だという自負もあった。この程度の数の敵ならば、一気に指揮官を叩いて戦闘を終わらせる自信がある。何も全滅させる必要はない。マヌアルを取り戻し、残る敵は蹴散らしてしまえばいい。戦いが短ければ、それだけカリンたちの危険も減るというものだ。それに、自分一人で敵を倒してみせれば、カリンたちに自分の力を示すこともできる。そうすれば、彼女たちもおとなしく残って

くれるかもしれないとバリュウは考えた。
　だが、迂闊な突進は、バリュウの思惑（おもわく）とはほど遠いものとなった。
　速さ（スピード）と数でまさるハーピーに、バリュウは苦戦を余儀なくされる。一気にズィドゥールに近づくつもりが、仲間たちから引き離される結果となっていた。
　ドンゴとカマリアは他の者の盾になって、むかってくるリザードマンたちを迎え撃っていた。
「バリュウ、敵を焼き払うから避（よ）けて！」
　炎熱流（ブレイズ）の呪文（じゅもん）を唱えかけたクリンを、カリンが遮（さえぎ）った。炎の魔法で広範囲を焼き払えば、バリュウを巻き込まずにはいられない。
「クリン、諦（あきら）めて個別に狙（ねら）いなさい」
　バリュウから離れた敵を矢で確実に仕留めながら、カリンは妹に命じた。連携のまずさは効率に現れる。カリンは、突出したバリュウの迂闊さへの怒りを、口の中で苦く噛（か）みつぶした。
「邪魔する者に容赦はせぬ。この地に眠る亡者の怨念（おんねん）の仲間とされるがいい」
　ズィドゥールは深紅の宝玉（ジュエル）のかけらを取り出すと、左手できつく握り締めた。絞られるようにして指の隙間（すきま）から数条の強い光がもれる。
「あの輝きは！」
　カマリアが、みんなに警戒するように叫んだ。
　ズィドゥールが、拳（こぶし）を大地に叩（たた）きつけた。紅の細い雷光が、一瞬、大地の上をかけ抜けてい

った。

「いったい、何をしたんですの？」

不思議がるツィッギーの目前の大地が突然隆起し、地中から何かが飛びだした。

「ひっ」

突然地面から生えてきた骸骨（スケルトン）と顔を突きあわせて、ツィッギーはひきつった悲鳴をあげた。

「しゃがんで！」

背後からの声に、ツィッギーは両手で頭をかかえながらその場にしゃがみこんだ。頭上を連接棍（フレイル）の先端が通り過ぎ、スケルトンの頭蓋骨（ずがいこつ）が鞠（まり）のように打ち飛ばされていく。返すフレイルで、カマリアは骨だけの上半身を打ち砕いた。

ツィッギーがほっとしたのも束（つか）の間、大地から次々とスケルトンが飛びだしてきた。それぞれが別の得物を持った骸骨（がいこつ）の戦士たちは、かつてここで倒された魔物たち、あるいは、彼らに殺された旅人たちの変わり果てた姿なのであろう。

「囲まれたか」

二重三重に周りに群がったスケルトンとリザードマンを見て、ドンゴは戦斧（バトルアックス）を握りなおした。一斉に襲（おそ）いかかられたら、とてもすべては防ぎ切れない。

ツィッギーが、みんなにもっと近くに集まるように叫んだ。

「すべてを慈しむ御方よ、我が祈りをお聞き届けください。——我らの心の正しき光集めて、

聖なる輝きの光盾(こうじゅん)となさしめよ!!」

少女の口からもれる光盾の呪文(じゅもん)によって、身体(からだ)の中からもれいずるほのかな護光(サポート)の輝きが一同をつつみこむ。血肉を持たぬ魔物が、その光に押されて後退(あとずさ)った。

機会を逃さず、ドンゴとカマリアが攻勢に出た。二人の隙間(すきま)は、パイパーが凍気(フリーズ)で凍らせた敵を盾とし、クリンが火炎壁(ブレイズ)で防いだ。よく守ってはいるものの、多勢に無勢では旗色はあまりよくない。

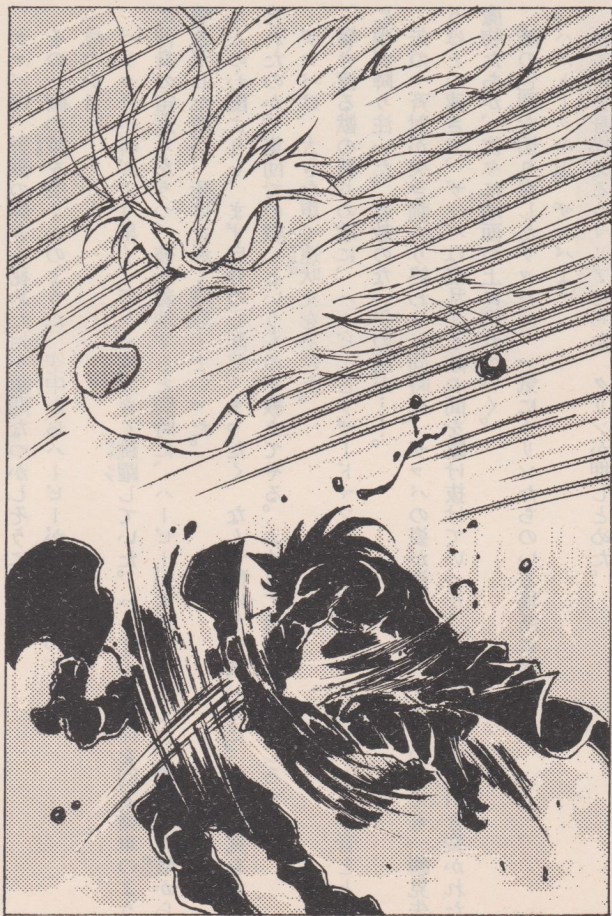
カマリアの揮(ふ)ったフレイルが、スケルトンの振り下ろしたフレイルと絡(から)みあった。反動で、両者の手から得物がすべり落ちた。すかさず盾の裏から短剣を取り出したスケルトンが、素手になったカマリアに襲いかかろうとする。そこへ、大振りの短剣が魔物めがけて投げつけられた。反射的に、スケルトンが盾で短剣を叩(たた)き落とした。カマリアは地面に落ちた短剣に飛びつくと、つかみざまにスケルトンの足を薙(な)いだ。バランスを失って倒れる魔物の骨だけの身体(からだ)を、盾の上から渾身(こんしん)の力を込めて踏み砕く。

「ありがとう、ドンゴ殿」

フレイルを拾ったカマリアは、いったん後ろに退(ひ)いてドンゴと背中合わせに立った。後ろ手に、窮地を救ってくれたドワーフに彼の短剣を返そうとする。

「かまわん。持ってろ。予備の武器がないと、いつ今みたいなことになるかわからんからな」

答えるなり、ドンゴは新たな魔物と刃を交えにいった。

そのころ、バリュウも以前に倍する敵に囲まれて窮地に陥っていた。
神竜は強靭(きょうじん)な肉体と高い攻撃力をあわせ持つが、決して無敵というわけではない。堅固な皮膚は刃物を通しにくいが、いつかは傷つき血を流す。片手に余るハーピーを屠(ほふ)った見返りに、バリュウは翼をやられていた。たいした傷ではないが、ハーピー相手の空中戦は無理になった。
地上に落ちたバリュウは、魔物の集中攻撃にさらされた。
全身に浅手を負いながらも、バリュウは自分の周りに敵の死体の山を築いた。だが、さすがに疲れが見えてくる。盾を前面に構えたリザードマンの体当たりを受けて、バリュウは地面に片手を突いた。胸を打ちすえられ、激しく咳(せ)き込む。
まずいと思ったときには、リザードマンは大型の戦斧(ラージアックス)を振りかぶっていた。今の体勢では、避けることもブレスを吐くこともできない。
魔物たちもざわめいた。
バリュウが致命傷を覚悟したとき、灰白色(シルバーグレイ)の影が視界の端を横切った。青い鮮血がほとばしる。脇腹(わきばら)を深くえぐられたリザードマンが振り返るところを、ふたたび鋭い爪(つめ)が紙人形のように胸板を切り裂(さ)いた。
「ザッパ!?」
倒れゆくリザードマンの後ろから現れた狼男(ワーウルフ)を見て、バリュウが驚きの声をあげた。
「ひさしぶりだな、バリュウ」

ザッパは、野獣の輝きを秘めた目を瞬間なつかしそうに細めた。
その一瞬の隙を突くかのように、空中からハーピーが襲いかかってきた。
「危ない!!」
バリュウが叫ぶより早く、ザッパは大きく跳躍していた。ハーピーの身体を回る歯車のように伸身の宙返りをうつ。彼が着地すると同時に、ハーピーが大地に激突した。裂かれた喉から噴きだした血が、死体を赤く縁取っていった。
「人の心配よりも、まず自分の心配だ。まったく、なんて情けない戦い方だ。昔の感覚をもう忘れたのか。集団での戦いというものを教えてやる。よく見て自分のものにしろ」
ザッパは、大きな声で遠吠えをあげた。
響き渡る獣の狩りの歌に、ハーピーとリザードマンが怯んだ。そこへ、ザッという音とともに雨が降り注いだ。容赦のない矢の雨が……。
矢の一斉射が突き刺さり終わると同時に、ザッパの姿が消えた。バリュウの目でも一瞬見失うほどの速さで、ザッパは混乱する敵の間を駆け抜けていった。すれ違いざまに引き裂かれた魔物たちが、次々に地面の上に倒れていく。
敵の包囲を切り崩したザッパは、一気にカリンたちのいる場所に達した。
「バストークの王、ザッパよ」
新手かと身構えるカマリアたちを、クリンが押しとめた。

「バリュウと合流するぞ。遅れずについてこい」

ザッパは命令すると、返事を待たずしてカリンたちに背をむけた。ついてくるのが当然といった口ぶりだ。横暴ではない。ゆるぎない自信の表れだった。

「ディアーネ!!」

バストークの王が叫んだ。呼応して、エルフの娘に率いられた弓兵隊が森の陰から姿を現す。弓弦が鳴り響き、ふたたび一斉に矢が放たれた。

スケルトンの集団に、ディアーネたちの攻撃は集中した。矢に結びつけられていた縄が、みごとに魔物の身体を絡めとっていく。矢を受けたスケルトンたちが、次々に地面に倒れて転がった。まるで敵を知っていたかのような用意のよさに、クリンは感心するとともに微かな疑問をいだいた。

「いくぞ!」

ザッパが走りだした。体勢を立てなおし、孤軍奮闘しているバリュウの下へむかう。カリンたちは、全力疾走で彼の後に続いた。

「ツィッギー、カマリア、早くバリュウの治療を」

ザッパとドンゴが周りの敵を蹴散らすと、カリンは真っ先にバリュウの治療を僧侶たちに頼んだ。バストークの弓隊が援護している間に、カマリアは怪我をした者全員に治癒の上位魔法をかけた。

「ありがとう、カマリア、そして、カリン……」

バリュウが二人に礼を述べた。

「のんびりしてる暇はない。このまま一気に秘伝の書(マヌアル)を奪い返すぞ」

ザッパはバリュウたちを促した。

狼王を先頭に、バリュウたちは混乱した敵を分断していった。はぐれた小集団の敵は、態勢を立てなおそうとする暇(いとま)もなく、ディアーネたちの弓によって次々にしとめられていった。

「今です。バリュウ殿、秘伝の書(マヌアル)を！」

パイパーが叫んだ。

傷の治った翼を広げると、バリュウはスケルトンたちの頭上を一気に飛び越えた。被(おお)いかぶさるような白い翼と突風に、魔物たちが薙(な)ぎ倒される。

ズィドゥールが手の中の紅玉(ルビー)をかかげる。彼の身体(からだ)が、赤い光につつまれ始めた。

「転移するつもりか！」

バリュウの爪(つめ)が、後ろへ飛びすさる魔物を切り裂(さ)いた。

手応(てごた)えがある。魔物の片腕が宙に舞った。黒檀(こくたん)の箱を重心として、切り飛ばされた腕が弧を描く。

バリュウの注意が、一瞬マヌアルの方にそれた。その一瞬を逃さず、ズィドゥールが炎撃(ブレイズ)を放つ。両腕を交差させたバリュウの眼前で爆炎が広がった。

「バリュウ!!」

カリンとカマリアが、残りわずかな魔物をザッパに任せて神竜の下へかけつけた。

神竜は、ズィドゥールの転移した後の空間を悔しげに見据えた。陽炎のような空間のゆらめきが、直前までそこに魔物がいたことを物語っていた。

バリュウがマヌアルの入った黒檀の箱を拾いあげるのを見たカマリアは、その二の腕から血が流れているのに気づいた。

「怪我をしたのですか」

カマリアは、彼に歩みよると訊ねた。

「たいしたことはないさ。かすり傷だ」

「小さい傷だからと、放っておいてはいけませんわ」

大丈夫だと言う彼の傷口に、カマリアはそっと口づけた。

バリュウは、ふいに痛い視線を感じて腕を引こうとした。

「――じっとしていてください」

バリュウの肌の上で、カマリアの温かい唇がそう動いた。熱い舌が傷口をなぞり、流れ出た血をなめとっていった。こくんとカマリアの喉が鳴った。唇が震えるように動き、聞き取ることのできない詠唱が吐息とともに傷口の上で躍った。

しばらくしてカマリアが離れると、バリュウの傷は跡形もなくなっていた。

「バリュウ、バストーク王が呼んでいるわ」

カリンは、それだけ告げるとバリュウに背をむけて走り去った。

8

焚火の中で小枝がパチンと弾けた。

すでに陽は落ち、周りには夜の闇が押しよせている。

神竜とその仲間たちは、バストークの兵士たちによって夜の闇から幾重にも守られていた。

「これがマヌアルか……」

黒檀の箱を開けたバリュウは、中に入っているマヌアルを見つめた。フェルトで内張りされた箱の中には、数枚の半透明の板が納められている。

マヌアルの発する畏怖の感覚に、バリュウは微かに顔をしかめた。この結晶のもつ威圧感を感じているのは、神竜である彼だけであるようだ。

のばした指先がマヌアルに触れようとした刹那、いきなり魂を握り締められたかのような衝撃に、神竜は慌てて指を引っ込めた。そのままふれていたならば魂を握り潰されていたかのような感覚に、神竜はぶるんと身震いする。

触れざるべき物という認識がバリュウの心をしめた。しかし、それは聖なる物に対しての感覚とは少し違っていた。

「どうしたの、取れないなら私が出してあげるわ」
神竜の様子に、カリンが気をまわして訊ねた。
「ああ、頼むよ」
バリュウが、黒檀の箱をカリンに手渡す。
手と手が触れあったとき、神竜の怯えにもにた感覚をカリンは本能的に読み取った。カリンは、訝しげにマヌアルへ目をやった。美しく輝く結晶板は、カリンにとって見た通りの存在にしか思えない。カリンはなんなく箱の中の物を取り出すと、それを焚火の光にかかげてみせた。
「これのどこが書物なのだ？」
ザッパは、カリンの持つ物体を見て首をかしげた。
書物というよりは、石板と呼んだほうがふさわしいだろう。三枚ある長方形の結晶板は、きらきらと光を乱反射しながら不思議な虹色に輝いて見える。成分が均一でないのか、あるいは目にみえない紋様が描かれているのか。正しい理由は、誰にもわからなかった。ただし、これが一般に呼ぶところの書物とは似てもにつかない物であることだけは、誰の目にもはっきりとしていた。
「輝水晶に似てはいるが、形も大きさもくらべるべくもないな」
ドンゴは、懐から輝水晶のかけらを取り出すと、カリンの手の中の物と比べてみた。人の両手のひらを広げたよりも大きなマヌアルと爪より大きい程度のかけらでは、そもそも比較する

ことすら馬鹿馬鹿しい。
「もしかしたら、輝水晶(クリスタル)はマヌアルと同じ物のかけらかもしれないわね。そうでないとしても、古(いにしえ)の神々が同じようにして作ったものだと思うわ」
マヌアルに顔をくっつけんばかりに近づけたクリンは、文字も何も書かれていない表面をなめるようにして観察していた。
「だとしたら、マヌアルは何かの鍵(かぎ)なのかな。ふむ。その可能性は高い。実に高いぞ」
クリンを押しのけるようにして、パイパーがマヌアルに鼻をくっつける。
「ちょっと、あんまりくっつかないでよ。クリンも、やめなさいったら」
困っているカリンの姿を見て、ドンゴが遠慮のない研究者たちの襟首を両手でつかんで彼女から引き剝(は)がした。
「鍵ね。確かに、秘伝の書(マヌアル)は黒き竜(ダーク・ドラゴン)を目覚めさせる一つの鍵だったものね。だとすれば、この三枚はみんな同じ物なのかしら。それとも、別の物なのかしら」
ディアーネが、バリュウやザッパと一緒に戦った昔を思い出しながらつぶやいた。彼女の隣には、妹である魔道士のウェンディが座っている。
「――たぶん、違う物でしょう。パルメキアには、黒き竜(ダーク・ドラゴン)などおりませんから。暴走しかけている大地の力を、神竜たちが安定させるためにのみマヌアルが必要なのです」
ややあってから、カマリアがエルフの娘に答えた。

「鍵は、扉を閉ざすこともできれば開放することもできる。そうだったな、ルドル村のクリンよ」

「ええ、おっしゃる通りです、バストークの王様。昔みなさんに伝えたとおり、マヌアルは封印と解封の両方の魔力をもつ諸刃の剣です」

ザッパに名指されて、クリンはかつて古文書の中から見つけた記述をあらためて一同に語って聞かせた。

「危険な物であるならば、一刻も早く我らマナリナの魔道士たちの手でドラゴニアの神殿に再度封印すべきですな」

パイパーの言葉に、カマリアがきつい視線で彼を振り返った。

「それでは、パルメキアの神竜たちはどうなるのです。使命を託されてこの地に渡ってきた私の立場はどうなるのです」

「どのみち、このルーン大陸の物を他の土地にもっていくことは許されんことだ」

「……なんと視野の狭いこと。世界の黄金律を求める魔道士が、そのようなことでどうなさるのですか」

「賢明であると言ってほしいものですな」

むっとして、パイパーは口をへの字に曲げた。

「一人、あなたの世界で賢明であっても、それになんの意味がありましょうや」

カマリアは、一歩も退(ひ)かずに言い返した。
ドンゴは隣に座ったカリンに、やれやれ困ったものだという顔をした。
「私(わたくし)はカマリアさんに賛成ですわ。困っている人を見捨てるのはいけないことなのですわ」
ツィッギーが、いつになく真剣な顔で話に割りこんできた。なんだかんだいっても、彼女も立派な僧侶(そうりょ)であった。
「どうも、僧侶というものは教えに忠実すぎていかんようですな。我々魔道士のように、物事は客観的に見なければ」
パイパーは、クリンとウェンディに同意を求めて目配せした。
「そうね。だから客観的に見て、ここはバリュウに決めてもらいましょ。これから、このマヌアルをどうするのか」
クリンは、パイパーが期待したのとはまるで違う提案をした。
一同は、難しい顔をして黙ったままの神竜と、カリンの手の中のマヌアルに視線を集めた。
「バリュウも災難ね、こんな厄介な物の処理を押しつけられちゃって」
ディアーネは、同情ともなぐさめともつかない言葉を神竜になげかけた。
「それは違うな、ディアーネ」
ザッパが訂正する。
「押しつけられたのではない。彼は託されたのだ。神竜として、マヌアルを受け継(つ)ぐ者とし

て」

バリュウは顔をあげてザッパを見た。

――僕はどうしたらいいのですか。

救いを求める言葉が、喉元まで出かかる。

バリュウの心中を見透かしていたザッパは、彼が声を発する前にそれを制した。

「お前が自分で決めるのだよ。それが、務めだ。誰も、強要することはできぬ」

バリュウは悩んだ。だが、いくら悩んだところで、遥か深淵の底にある答はようとして見出すことはできない。

神竜として、古の盟約に従ってマヌアルを封印して守るのがいいのだろうか。同族を救うために、危険を冒してまでもパルメキアに渡るのがいいのだろうか。あるいは、ここでマヌアルを破壊してしまうことこそが正しい道なのか。

そもそも、神竜とはどのような存在なのだろう。それすら、バリュウにははっきりとすることができない。神竜とは、このような重大なことを決定できる存在なのだろうか。すべての人の上に立って、物事を決めていいのだろうか。

かつて、パルメキアへ渡ろうと決めていた決心が、ここへきて崩れかけていた。

一人で決めることは、とても危険なことに思われる。

もし、マヌアルが魔物に奪われれば、世界は破滅に導かれるであろう。その危険を完全にな

くすためには、同族を見捨てなければならない。

実際には、神竜を救い、かつマヌアルを封印する方法もなくはない。だが、そのためには、一つ条件があった。バリュウが、すべての魔手からマヌアルを守り抜くという条件が……。

そのための自信というものを、バリュウはもちあわせてはいなかった。

仲間の助けを借りなければカリン一人を守ることも容易でなかったバリュウに、マヌアルを守り抜く自信などなかったのだ。

「バリュウ……」

カリンには、バリュウの痛みがせつないほどによくわかった。

「あなたは、神竜としてではなく、バリュウとして選ぶべきよ。だって、神竜である前に、バリュウはバリュウなのだから。あたしはあなたを信じてる」

カリンの言葉に、ザッパが深くうなずいた。

「私もバリュウを信じるからこそ、すべてをまかせているのだぞ。もっと、仲間を信頼することだな。かつて一人の勇者が黒き竜（ダーク・ドラゴン）を封印できたのも、多くの仲間がいたからだ。彼一人では、とうてい何もできなかっただろう。多くの仲間がいてこそ、力は輝きを増すもの。それこそが、我々がシャイニング・フォースと呼ばれた由縁であろうが」

ザッパに、ディアーネも同意した。

バリュウは、二人とともに戦った昔を懐かしく思い出した。あのころは、彼らの他にもゴー

トやアレフをはじめ、たくさんの仲間たちがいた。そして、今現在も、彼は多くの仲間たちに囲まれていた。さらに、彼は銀竜の蒼い瞳を思い出した。彼を待ちわびている仲間たちが海のむこうにもいるのだ。

「そうよ、人を信じているのならば、頼ることだってできるはずよ。バリュウは、もっと他人を、私たちを、頼ってくれてもいいはずよ」

クリンの言葉が、決定的にバリュウを打った。そうだ、人を頼ることができないのは、人を信じていないということに相違ない。

「ウランバートルへいこう……」

バリュウは決断を下した。

「近海の怪物を倒して、パルメキアへ渡ろう」

誰も反対しなかった。ほっとする者、静かにうなずく者、難しい顔をする者、それぞれの思いはまちまちであったが。道は、決まったのだ。

パイパーだけはまだ少しごねてはいたが、ザッパがオトラントに使者をたてて連絡すると言うのを聞いて安心したようだ。

「我々は、明日にはバストークに戻る。突然侵入してきた魔物たちを追撃して、自分の国から離れすぎてしまったようだ。昔のように、いつまでも国を空っぽにするわけにもいかんのでな。それに、助けだしたマナリナの負傷者を送り返すこともやらねばならん」

ザッパの言葉を聞いて、クリンがそうかと手を打ち合わせた。

「バストークに追われて、魔物たちは先を急いだのね。だから、予想よりも早く出会ってしまったんだ」

「結果的には、それがよいこととなったようだな。だが、まだ安心はできん。付近一帯で魔物を捜してから戻ることにはするが、狩りだすのは難しいだろう。パオ平原までの行程には、このウェンディの一隊を護衛としてつけよう」

ザッパに言われて、快活そうなエルフの娘は、よろしくとバリュウたちに告げた。

「道中マヌアルを守るために、簡単な封印(ふういん)をしておきましょうよ」

ウェンディの提案で、三人の魔道士たちがマヌアルを入れた黒檀(こくたん)の箱に封印をほどこすことになった。

クゥアル・ヴァン・クゥールの封印。

封印としては、簡単な部類に入る。だが、簡単ゆえに、触媒(しょくばい)によってその封印の強さはいかようにも変化した。その最強のものは、竜の血をもってなされる。それゆえ、特別に竜血晶の封印とも呼ばれるものだ。

カマリアたちの見つめる中、封印の儀式が行われる。

ウェンディはバリュウから数滴の血をもらうと、黒檀の箱に封印をほどこした。神竜の血を媒体(ばいたい)に、ウェンディ、クリン、パイパーの三人が、何重にも呪文(じゅもん)の鎖を巻きつけていく。

「これで、ふたたびあなたの血をもって解封しない限り、マヌアルの入った箱は開かないわ。箱そのものを壊してしまえば取り出せるけど、よほどうまくやらない限り中のマヌアルもろともに砕けてしまうでしょうね」
小さなガーネットのように、輝く三つの血痕が黒檀の箱に残った。ウェンディは黒檀の箱を手に取ると、バリュウに渡した。
焚火に小枝をたすと、パオ平原にむかう者たちはその周りで眠りについていった。
「彼らだけをいかせて、よろしいのですか?」
見張りと交代するときに、ディアーネはザッパに訊ねた。
「あの僧侶が言っていたズィドゥールという魔物の存在が気になります」
「手傷は負ったようだから、すぐにまた襲ってくるようなことはせんだろう。万一のために、ウェンディを同行させるのだから心配には及ばんよ。それとも、一緒にいきたいのかね」
ザッパが意味あり気に笑った。
「さあ、どうでしょうか」
ディアーネがとぼける。
「居残り組のステトラやコーキチじいさんにまかせたまま、これ以上バストークを留守にするわけにもいかんだろう。それに、助力を請われない限り、彼らのことに口だしすることはない。彼らは、自分たちで決め、そして、自分たちで解決していくだろう。これはバリュウの旅であ

って、我々のものではないのだ。残念ながら、新たなシャイニング・フォースに我々が加わらなければならぬ理由は今回はないのだよ。それに、バストークでディアーネにやってもらうことは、まだまだたくさんあるのだから」

「お手やわらかに、ザップ様」

やんわりとその場を離れると、ディアーネは自分の持ち場へとむかっていった。

9

バリュウは夜中にふと目を覚ますと、自分の周りで眠る仲間たちを見渡してみた。

それぞれの思惑（おもわく）は違えど、彼らはバリュウを信じてついてきてくれている。そんな彼らを守らなければと思う。

いつか、カマリアが言っていたはずだ。神竜は最高の守護獣（ガーディアン）だと。

だとすれば、何を守ればいい。決して今まで彼の一族がそうであったように、マヌアルだけを守ればいいというものではないはずだ。

だが、マヌアルは復活した。

バリュウは、翼の下で寝息をたてるカリンの顔をそっとのぞきこんだ。

彼女を守ることが、バリュウとしての務めだろう。だが、もしも、カリンとマヌアルを天秤（てんびん）にかけなければならない事態におちいったら……。

神竜としての自分と、バリュウとしての自分との間で、いったいどちらを選択するのだろうか。

バリュウは、カリンのかかえている黒檀(こくたん)の箱の黒さに、夜の闇(やみ)にも似た不安を募らせていくのだった。

第三章　草原を渡る風と光

1

パオ平原は、西ルーン大陸の北東部に位置する広大な草原だ。

この地には、定まった住居をかまえない遊牧民たちが部族ごとに点在して住んでいる。独楽（こま）を逆さにした形に似た彼らのテント状の移動式住居が、包（パオ）と呼ばれるものである。季節とともに移りゆく包（パオ）は、草原に咲く素焼（ビスク）色の花にもたとえられる。

だが、このパオ平原最大の部族は、他の少数の部族とは決定的に違っていた。

彼らは、大陸横断重機動列車（パオトレイン）という巨大な乗物でパオ平原の西と東を定期的に移動するのだ。圧倒的な巨体で草原に轍（わだち）の跡を深く長く刻みこみながら、古代遺跡から発掘された乗物が隊商（キャラバン）として草の海を渡っていく。それは、広大な草原にのみ許される風景だった。

バリュウたちは、そのパオトレインを訪れていた。草原の西端にとまったパオトレインの周りには、東の地から運んできた装飾品や食料をならべた店がいくつもできている。いくつもの包（パオ）が連なる見慣れぬ異国の市場（バザー）の風景に目を奪われながら、一行は女王のいるパオトレインの

先頭車両を目指した。
武装した兵士が、車両の乗降口を警備している。
バリュウとウェンディは、パオトレインの女王あての親書を兵士たちに見せた。二通の書簡には、それぞれマナリナのオトラントとバストークのザッパの署名がなされている。
しばらく待たされた後に、女王の側近の者がバリュウたちを迎えにきた。
ウェンディについてきた兵士たちは、パオトレインの外で待つこととした。だが、バリュウについてきた者たちの中には、おとなしく外で待っているような者は一人もいなかった。当然のようにバリュウとともにパオトレインの中に入っていく。
トレインの内部は、ドワーフの隠し通路によく似た雰囲気であった。金属の壁や床が、天井から降り注ぐ熱くない光によって照らされている。通路は車両の左右に幅の違う二本が走っており、他の車両の連結部の直前で合流していた。
バリュウたちは、広い通路を順序よく進んでいった。通路にはさまれた大小の個室(コンパートメント)の扉が、整然とならんでいる。
側近の案内で、彼らは女王コロンの待つ部屋の前に立った。
「シャイニング・フォースの方々をお連れいたしました」
側近の言葉に呼応するように、部屋の扉がひとりでに左右に分かれた。
バリュウがいるからとはいえ、シャイニング・フォースと呼ばれたことに、カリンたちはそ

れぞれ奇妙な感覚を味わった。
不思議な二本の輝く柱を背にして、パオの女王コロンは静かに玉座に座していた。その顔は若々しくも落ち着きと威厳を兼ね備え、訊ねる声は澄んで抑揚に富んでいた。
親書の内容に関する二、三の質問の後、バリュウたちは心よく滞在を許可された。
「シャイニング・フォースの方々の頼みを、なぜに断る理由がありましょうか。明日にもここを発ち、あなたがたをウランバートルまでお連れいたしましょう」
コロンの申し出に、バリュウは感謝の意を表した。その顔を見て、女王はふと顔に戸惑いを見せた。
「バリュウ殿、何かお悩みでもおありですか」
「――いいえ。別にそのような……」
訊ねるコロンに、バリュウは少し間をおいてから答えた。
「不安があるのならば、ささやかな助言をさしあげますが」
「バリュウ、コロン陛下は予言者でもあらせられるのよ。お言葉に甘えて悪いことはないわ」
クリンがバリュウに勧めた。
「私の言葉がどれほどあなたがたに役立つかはわかりませんが。遠慮なさらずともよろしいのですよ。予言は未来を決定するものではなく、進むべき道をさし示すものですから」
コロンは謙遜しながら微笑んだ。その笑みに、バリュウの緊張は温かくとけていった。

「それでは、お願いいたします」
頭を下げると、バリュウはコロンに願い出た。
ゆっくりとうなずくと、コロンは立ちあがった。玉座に被せるようにして広がっていた薄衣の裾が、返す波のように引かれて持ちあがる。絡ませた両腕が解くようにして左右に広げられた。スクリーンのように広がった淡いラヴェンダー色のドレスに、後ろから投げかけられた光がほっそりとしたコロンの肢体の影を浮かびあがらせる。
両手が頭上にかかげられる。白い両腕が肩口まであらわになった。燃えるような緋色の髪が、肩や背中や胸の上で微かにざわめいた。やがて、何かをつかみ取ったかのように、コロンはゆっくりと両腕をおろした。両手は、何かをつつみこむようにして、胸の前でそっとあわされている。
「若き神竜よ……」
静かに目を閉じたまま、コロンは言葉を紡ぎだす。
「東に迷う心あるのならば、北に目をむけなさい。絆は絶つべきではありません。目を閉じ心開くものの力が、よき友の力となりますでしょう。その後に、あなたは、あなたの心を縛っているものの正体を知ることになりましょう。古きものは失われ、やがて真の書をあなたは見出すはずです。新しき血脈はそこから始まります」
コロンは、目を閉じたまま次にカリンの方をむいた。

「気高き心の娘よ、あなたの決断は、多くのものを救い、そして一つのものを救うでしょう」

次に、コロンは他の者たちをゆっくりと見回した。

「神竜の旅に同行するものたちよ、炎には時が、時には消せぬ炎が、あなたたちの身を救いましょう。炎の中にこそ、焼くべき書は見つかります。欠けることのなき和が、輝竜(きりゅう)を呼ぶのです」

語り終えると、コロンは目を開けた。しばし、まぶしそうに目を細める。その視線が、ふとカマリアにとまった。何かと目で問い返すカマリアに、コロンは何も語らなかった。

「ありがとうございます、コロン陛下。今のお言葉、心にとめおきたいと存じます」

コロンの疲れをさっしたバリュウは、ひとまず退出することに決めた。予言の意味ははかりかねたが、それはゆっくりと解き明かせばいいことだ。

バリュウたちが暇(いとま)を告げると、女王は側近の者にパオトレイン内の客間へ案内するように申しつけた。

一礼の後に順に退出していく中で、カマリアは自分にそそがれている視線に気づいて立ちどまった。

振り返り訊(たず)ねるカマリアに、コロンはすぐには言葉を返さなかった。

先にいっているからと言い残し、カリンが扉を閉めた。

「何か御用がおありでしょうか、陛下」

めた。
「誇り高き娘よ。そなたの誇りは、誰に対してのものか」
　コロンの質問が響いた。
「私の誇りは私のもの、そして、私が敬愛する方のものでもございます」
　ゆるぎない自負をもって、カマリアは答えた。
「ならば、その誇りにかけて、自らが正しくないと思うことには従いませぬな」
「……誓いまして」
　答えながら、カマリアはこの予言者はどこまでを見通しているのだろうと訝しんだ。
「彼らにとって、あなたは必要な存在なのです。願わくば、あなたにとっても、彼らが必要な存在となりますように。あなたが真の姿を取り戻す日まで、学ぶべきは学びなさい、遠き世界の娘よ」
「それだけですか」
　カマリアは、聞き返した。この部屋には、今現在二人の他には誰もいないことを視線で物語る。

「——それだけなのですか？」
ふたたび問うカマリアに、コロンはやさしくうなずいた。
「あなたは、信頼には、何をもって応えますか？」
コロンは、純粋な質問を目の前の娘に投げかけた。その言葉の含むものと含まないものを、カマリアは認めざるをえない。視線は投げかけられている。唐突に、カマリアは悟った。コロンは、その者の目を使ってその者自身の心の中を見ているのだと。
「……信頼をもってして」
カマリアは、深々とコロンに頭を下げた。
「失礼いたします、コロン陛下」
一礼すると、カマリアは退出していった。

2

翌日、周囲に展開していた包をすべて収容して、パオトレインは出発した。
バストークの兵士たちとはそこで別れ、彼らは自国へと戻っていった。ウェンディだけはバリュウたちと一緒にいきたがっていたが、そんなわがままを許してくれるほどザッパは甘くない。彼女は、渋々帰国の道を選んだ。
別れがあれば、出会いがあった。

リンドリンドでライルが言っていたように、かつてシャイニング・フォースの一員であったガンツがパオトレインに乗りあわせていた。この巨大な乗物を研究するために、もうずいぶんと前から住みこませてもらっているらしい。

心から再会を喜びあったものの、ガンツの語る機械の話はバリュウにはほとんど理解できなかった。代わりに、その話題に飛びついたのはクリンであった。彼女は、空いている時間のほぼすべてをパオトレインの操縦室や動力部にいりびたってすごした。

パイパーは、オトラントの命あるまでバリュウとマヌアルから決して離れないと宣言していた。目付役として適任かどうかは怪しいものだが、オトラントの手前、バリュウは無下に彼を追い払うこともできなかった。ドンゴは、契約を盾に、パルメキアの神竜たちに会うまでは頑としてバリュウのそばを離れないそぶりでいる。早まった約束をしたとバリュウが後悔しても後の祭りだった。ツィッギーも、ゴングの消息がわかるまではバリュウから離れないつもりらしい。というより、今ではゴングよりも、神竜の手助けをするという勝手な使命に燃えてしまっている。

それぞれの思惑(おもわく)は別であったが、一緒の旅を続ける奇妙な連帯感のようなものが生まれつつあった。あるいは、目的は違えど、旅をする理由は同じであったのかもしれない。その中心にある者は、いつもバリュウであった。

特にカリンは、彼のそばを離れたくないという想(おも)いを、より色濃く面(おもて)に出していた。

行く手を阻(はば)むものもなく、パオトレインは順調に進んでいった。もっとも、この巨大な乗物の前進をとめられるものなど、そうそうあろうはずもなかったが。へたなものが立ちはだかれば、その巨体に踏みしだかれるのは自明の理であった。

だが、実際にこの乗物に轢(ひ)かれるような生き物は、ほとんどいなかった。草原を渡る風のごとく、それが女王コロンを乗せるパオトレインの真の姿だった。

風は、夜になっても走ることをやめない。

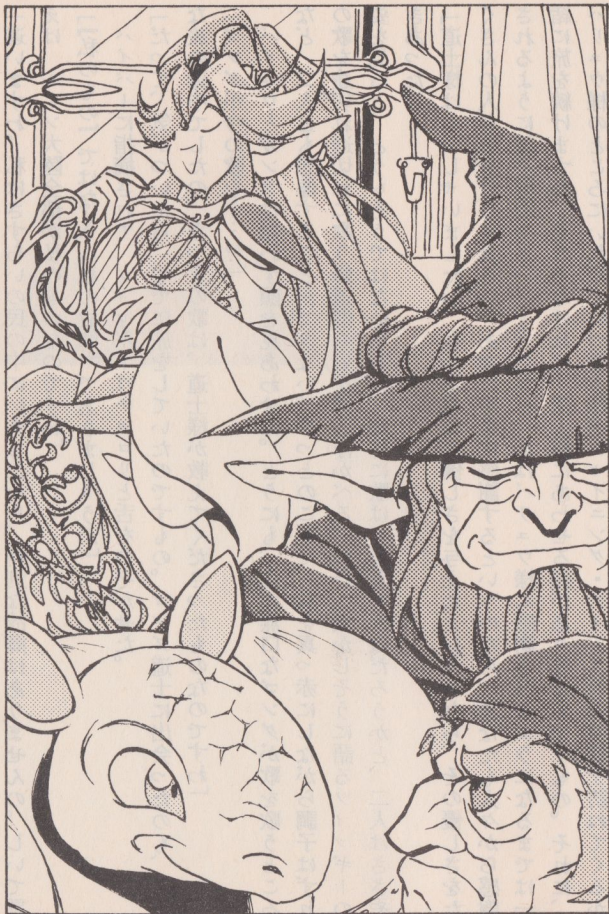
機関車のたてる規則的な音と、窓のそばを吹き抜ける風の音が壁越しに聞こえる。それらの音にもかき消されずに、澄んだ竪琴(たてごと)の音(ね)がこぢんまりとした休息室(ラウンジ)の中に響いていた。

バリュウたちは、夕食後ののどかな一時をすごしていた。

仲間が作る輪の中で、ツィッギーが小さな箱に腰掛けている。白鳥(スワン)が水上をすべる姿を象(かたど)った十六弦の竪琴をかかえ、彼女は澄んだ声で歌を歌っていた。幼さの残る高い声が、ときに元気に、ときに甘く、ときに切なく、歌の糸を紡(つむ)いでいく。

歌の中には、人が現れ、獣が現れ、自然の中で生き物は遊び、風は鳥に、水は魚(うお)に、すべては輪になり、すべては和となり、巡る営みに時は紡がれ、紡ぎ車は歌を歌い、歌声は紡がれ、人は和となり、和は人を生み……。

「それはツィッギーの故郷の歌ですかな」

一節を歌い終わり、喉(のど)を休めるツィッギーにパイパーが訊(たず)ねた。

「違いますわ。私はさすらいの民の中にいましたから。特別な故郷はありませんの。しいて言えば、ルーン大陸全部が私のものなのですわ」

「『私のもの』ではなく、『私の故郷』でありましょうが」

パイパーに指摘されて、ツィッギーはチョロリと舌をのぞかせた。

「だって、気がついたら、すでに旅をしていたのですもの。ゴング道士に出会ったのも、そんな旅の途中でしたの。さっきの歌は、道士様が教えてくださったものなのですわ」

「ゴングが今の歌を……!?」

バリュウとガンツは思わず顔を見あわせた。どうにも、あの無口なゴングが歌を歌うところなど、二人とも想像することができない。やっとのことで、顔を真っ赤にしながら調子はずれの歌を途切れ途切れに歌う修道僧の姿を思い浮かべる。だが、懐かしそうに語るツィッギーの姿を見ると、どうもそうではないらしい。案外に歌はうまかったのだろうかと、二人はささやきあった。

「道士様はおっしゃいましたわ。私があなたに優しさを与えたというのなら、その優しさをたくさんの人々に分け与えなさい。あなたが私に感謝するというのなら、あなたも人々から感謝されるように日々努めなさい。——だから、私はバリュウ様に感謝されるようになるまでは一緒に旅を続けますわ。そうでなければ、道士様にあわせる顔がありませんですもの。それに、バリュウ様のところにいれば、いつ道士様がシャイニング・フォースのお仲間を訪ねてくるか

もしれないのですわ」

ツィッギーは、昔ゴングにもらった白い指輪を何度かさすった。白銀(プラチナ)の指輪(リング)に塡(は)め込まれたアクアマリンの宝石は、治癒(ちゆ)の魔力を秘めて温かく薬指で輝いていた。

「ゴングが、近々私を訪ねてくることはないと思うけれど。それに、私は十分君に感謝しているよ。彼が言いたかったのは、特定の人に恩を受けたのなら、それは不特定の人に対して返すべきだということだろ。ツィッギーは勘違いしてるよ」

「あら、バリュウ様は私が一緒にいると迷惑なのですかあ」

ツィッギーの瞳(ひとみ)がじわりとにじむ。

「そういうわけじゃ……」

思わず、バリュウは天井を仰いだ。

「旅の途中で怪我(けが)をしたときなど、癒(いや)し手は必要だと思いますわ。絶対ですの。足手まといにはならないように、カリンお姉様を見習って強くなりますから」

「だから、私はゴングさんとは似ても似つかないって言ってるでしょ。見習うのなら、カマリアを見習いなさいよ」

ちょっと待ってと、カリンが口をはさんだ。

「そうでなくてえ、凛々(りり)しいお姉様は私の理想なんですわ」

ツィッギーが科(しな)を作る。

「ちょっと、バリュウ、なんとかしてよ」
困ったカリンは、バリュウに救いを求めた。神竜は、隣に座るカマリアと肩をよせあって笑っていた。そのうちとけた様子が、カリンの癇に触った。
カリンは、彼をツィッギーへの盾にするようにしてカマリアから引き離した。
一部始終を見ていたドンゴが、豪快な笑い声をあげた。つられていくつもの笑い声が上がる。
気をとりなおして、ツィッギーはふたたび竪琴を奏で始めた。
歌が流れる。鳥は風に、魚は水に、草木は光に、獣は大地に、人はすべての生き物に……。感謝を捧げ、糧とする。感謝を捧げ、慈しむ。感謝を捧げ、祈りを唱える……。
ツィッギーの歌は、すべての生き物と、それを取り囲む大地と空と海、そのすべてを慈しみ貴ぶ歌だった。
「変わった歌だこと」
ツィッギーが歌い終わると、カマリアが感想をつぶやいた。
「なぜにそのような歌があるのでしょう。すべてのものは均等ではなく、弱き者は強き者の糧となり、その者もまたより強き者の糧となる。そのようなつながりこそ、神が定めしものでしように」
「だとすれば、強き者は弱き者に感謝しなければいけませんわ。ゴング道士がよくおっしゃっていらっしゃいましたの。すべての者は、誰かに生かしてもらっているのだと。支配する者は

支配される者によって存在を許され、守護する者は守護される者によって守られていると。私たちは、野に咲く花や小さき虫にも感謝の祈りを忘れてはいけないのですわ」
「そんなに始終祈っていたら、首が痛くなってしまうわい」
ツィッギーの言葉を、ドンゴはかわいい子供の説法だと笑った。
「そんなふうに言うものじゃないわ」
むくれるツィッギーを、隣に座っていたカリンがかばった。すねた少女が甘えてすりよせてくる頭を、片手で軽くだきよせる。トレインの探検に出かけているクリンがこの場にいたら、姉の取り合いになりそうな光景だ。
「あたしたちは鳥や獣を狩ったりするけれど、決して無意味に彼らを殺したりはしないものよ」
「まあまあ、みんなで言いあうこともないでしょう。それよりも、わしはもう一曲歌を所望したいのですが。よろしいですかな、ツィッギー」
とりもつように、パイパーが間に入る。機嫌をなおしたツィッギーは、いいですわと言ってふたたび竪琴を奏で始めた。
そして、ツィッギーの歌は繰り返されていった。
バリュウは、ドンゴの言葉の方を受け入れたかった。生き物が自分以外の者によって生かされているのなら、それはなんと儚(はかな)くて脆(もろ)いものなのだろう。神竜も、マヌアルを守るためだけ

に今まで存在を許されてきたのだとしたら、泡沫(うたかた)の夢とどれほどの差があるというのだろうか。
それらの思いをバリュウは口にすることはなく、カリンやツィッギーが彼の思い違いを指摘することもその夜はなかった。

3

パオトレインの最後部には、乗降用と車両連結のための小さなデッキがあった。
人も寝静まった深夜、カマリアは一人そこにたたずんでいた。
車体の左右から回りこんでくる風に髪を流しながら、パオ平原を取り囲む外輪山の風景を楽しむ。墨絵のような山々は、夜空の星々と同じようにゆっくりとその表情を変えていく。まったく変わらぬような風景でも、その姿は少しずつ確実に変化していくのだ。
――物見遊山(ゆさん)のために、旅に出たわけではなかろうが。
カマリアは、自嘲(じちょう)した。
カリンやツィッギー、そしてバリュウ。彼らのような者たちと出会うつもりではなかった。自分は、この地へくるべきではなかったのではないのか。そんな想(おも)いがカマリアの心を動揺させた。それとは逆に、自分はくるべくしてこの地を訪れ、会うべき者たちに出会ったのだという確かな想いも心の中にある。いずれの想いが正しいのか、好むと好まざるとにかかわらず、いつか答は出てしまうのだろう。それがいつのことかまではわからないが……。

想いに沈みこむことはやさしい。そしてまた、それを破ることも。
小さな音がして、扉が開いた。中から人影が現れる。
「……ここにいたのね」
カリンは、後ろ手に扉を閉めた。
「私に、何か……？」
愛想よく、カマリアは聞き返した。月明かりの中に、穏やかな微笑(ほほえ)みが浮かぶ。
カリンはすぐには答えなかった。
「もう夜も遅いですよ」
自分のことは棚にあげて、カマリアがカリンにさとした。
「――お願いがあるの……」
かなりの間をおいて、カリンがようやく口を開いた。
「お願いがあるの。バリュウを連れていかないで」
堰(せき)を切ったように彼女は言葉を継(つ)いだ。
「なぜですか」
あからさまにむけられた感情にわずかに顔をしかめながら、カマリアはやんわりと問い返した。
「彼はあなたと一緒にパルメキアへいく気になっているけれど、マヌアルがあればバリュウは

必要ないでしょう。マヌアルだけを、あなたにあげればすむことだわ」
「そうでしょうか」
カマリアは、嘯(うそぶ)いた。
「バリュウ以外の者に、大切なマヌアルを渡すのは賢いことでしょうか。それに、竜血晶の封印はどうするのです。また、パルメキアには彼の同族も待っています。それこそ、理由はいくらでもあるでしょう。それは、引きとめる理由が、わずかにマヌアルへの利己的ともいえる恐れでしかないことと、同じくらいに確かなことですよ。そして何よりも、バリュウ本人がいくと言ってる以上、それをとめることは誰(だれ)にもできはしないでしょう」
「だめよ！」
「なぜ」
カリンの叫びに、カマリアは鋭く言い返した。
「バリュウを取らないで!!」
「変なことを言うのね。私が、いつ、誰から、バリュウを取ろうとしました？　確かに、彼は——神竜は興味ある存在だわ。そう、神竜とは生き物として完成された美しくも気高い生き物よ。神竜にくらべれば、たかが人間など取るに足らない存在ね。だから、私はもう少し彼と一緒にいてみたい。彼が何を感じ、何を考えているのかを、もっとそばで見ていたい。これは、偽(いつわ)らざる今の私の本音よ」

「あたしだって、バリュウのそばにいたいわ。ずっと彼をそばにおいておきたい」
「犬猫と同じようにですか？　神竜は、愛玩(あいがん)するための生き物ではないわよ」
「違うわ！　そんなふうに考えているなんて、あるわけないでしょ」
「いいえ、違わない。神竜は、都合のいい慰みものではないわ」
辛辣(しんらつ)なカマリアに、カリンは言葉を詰まらせた。
「バリュウはあなたのものではないわ」
「そして、あなたのものでもね。――いったい、あなたはバリュウのなんなの？　後見人？母親？　姉？　それとも、恋人……？」
カマリアは、自分でもひどいことをしているとわかっていた。だが、わかっていてなお、問いかけずにはいられなかった。
「――友達……だわ。そう、大切な友達よ」
カリンは、まだ自分の気持ちに名をつけることができないのだろう。人間とは、なんと臆病(おくびょう)で弱い精神の生き物なのか。
「そうね。そうだわね。異なる種族の間に、恋愛感情など芽生えるはずもないものね。私は、あなたや彼のように外見にこだわったりはしないわ。人間であることに、私はこだわったりはしないから」
我ながら、ひどい言い方だとカマリアは思う。恋愛感情よりももっと強い、不思議なつなが

りというものがこの世にはあるのではないだろうか。——そのような問いかけを、さきほどまで星や風に何度も問いかけていたのは誰だったのだ。

カマリアは、ふと思った、自分の中に神竜の血が混じってしまったのかもしれないと。バリュウの傷を癒したときの記憶が、まざまざと脳裏に蘇る。

「守ることと逃がすことは違うわ。カリンのしようとしているのは、彼に逃げるようにしむけているだけよ」

「違う。バリュウはマヌアルに魅入られてしまったのよ。そして、そうしむけたのはあなただわ」

「まさかあ。そんな力を、私がもっているはずがないでしょうに。——でも、バリュウがマヌアルに魅入られたというのなら、その後の彼がどうなるのか、私はこの目で見定めてみたいわね……」

カマリアは前に進み出ると、うつむくカリンの横まで足を運んだ。

「早く独り立ちすることね」

耳元でささやいてから、すっと通りすぎる。

扉を押し開けると、カマリアは車内へ戻った。背後で閉じる扉が、夜の闇とその中に立つカリンの姿を彼女の視界から隠していった。

4

天候はあまりよくなかった。

空は、今にも泣きだしそうなどんよりとした黒い雲を厚くかかえこんでいる。

平原の東端に達したパオトレインは、そこに市場（バザー）を設営し始めた。骨組みが組み立てられ、厚い布地を巻いて壁が造られる。天蓋（てんがい）として、何枚もの布地が被（かぶ）せられれば完成だ。小一時間も経（た）たないうちに、トレインの周りには色とりどりの包（パオ）の花が咲き揃（そろ）った。

包（パオ）の設営が終わったころ、幸か不幸か雨が降り出した。

草原にとっては恵みの雨だった。

だが、バリュウたちにとっては、ただ出発を遅らせるだけのものでしかない。

雨がやみそうにないのを確認すると、バリュウたちは女王（コロン）に暇（いとま）を告げにいった。

彼らがくる時刻を予知していたのか、コロンは主だった側近の者を揃えて謁見（えっけん）の間で待っていた。

「バリュウ殿、ウランバートルへの道は、可能な限り急ぎなさい。この雨は、不吉（ふきつ）なものを孕（はら）んでいます」

予言者であるコロンの言葉は、ひどく不吉なものにバリュウには聞こえた。その懸念がおさまらないうちに、慌（あわ）てふためいた兵士が彼らの前にかけこんできた。

「報告いたします。ただいま、魔物の一団がバザーに乱入いたしました。その数は数十。うち一体は、恐ろしく巨大な烏賊の怪物です」

「クラーケンだわ。ズィドゥールは、まだマヌアルを諦め切れなかったようね」

兵士の報告を聞いたカマリアがつぶやいた。

「マヌアルを奪いに海を渡ってきた魔物たちですか。ならば、私たちに戦いを挑んだことを後悔させねばなりませんね」

女王は側近たちの方を振り返ると、右腕を勢いよく振り、指先で彼らをさした。指に端を結ばれた空色の薄い肩掛けが翻り、金糸の縫箔に飾られた翠色の袖なしのドレスがあらわになる。

「兵士を出して敵を殲滅しなさい。兵士以外の者を収容した後に、パオトレインは後退させ、戦闘区域外で固定します」

コロンの命を受けて、人々は慌ただしく退出していった。

「先頭車両から、敵は確認できるか」

「できます」

近衛の兵士は、コロンの問いに力強く答えた。

「よろしい、ついてまいれ。バリュウ殿、あなたたちはこのトレインから出ないように」

「いえ、私たちも戦います」

バリュウは、女王に申し出た。
「それはなりません。ここは私たちにまかせなさい」
「いいえ、戦える者を無駄に遊ばせていてはならないでしょう。カリンたちとマヌアルをお願いします。パイパー、ドンゴ、ガンツ、カマリア、いくぞ」
バリュウは仲間たちに声をかけると、部屋を出ていこうとした。
「まって、あたしもいく」
カリンが、バリュウを引きとめた。
なぜ自分はだめでカマリアならいいのかと、カリンは心の中でバリュウを責めた。
「君は、マヌアルを守っていてくれ」
言い残して、バリュウはカマリアたちを連れて出ていった。唯一、ガンツだけがコロンに呼びとめられた。
「ガンツ殿にはお願いしたいことがあります。私と一緒にきてください」
女王はガンツを伴うと、先頭車両へとむかった。残されたカリン姉妹とツィッギーも、言われるとはなしにその後につき従っていった。

5

吸盤のついた十本の足を激しくくねらせ、巨大な烏賊(クラーケン)が包(パオ)を次々に叩(たた)き潰(つぶ)しながら前進して

いた。

本来は海の中、それもかなりの深海にいる怪物が、地上にいること自体に無理がある。陸はこの生き物の領域（テリトリー）ではない。その証拠に、地上では巨大な胴体を支えきれずに、移動のたびにずるずると引きずっている。

無理は承知の上だ。

ズィドゥールは、地上に己の血で描いた召喚の魔方陣を見ながら思った。

海で襲（おそ）った方が有利だったことは確かだ。だが、それではマヌアルを水中に失う恐れがあった。水中で散逸してしまったら、半透明のマヌアルを見つけることは至難の業だ。

マヌアルを持ち帰ることができなければ、彼は主によって消滅させられるだろう。確実に。

ズィドゥールは、焦（あせ）り、事を急いだのだった。

せめてもと悪魔のジュエルの力を使って降らせた雨が、クラーケンと魔物たちを召喚した魔方陣の輪郭をにじませ消していく。

「ゆけ、マヌアルを奪い、神竜たちを皆殺しにしてこい」

唯一残った左手を振りあげながら、ズィドゥールは魔物たちに命令した。半魚人（インスマンス）やパープルウォーム、そして、ガーゴイルたちがクラーケンを中心にしてパオトレイン目指して進軍していく。

パオトレインの兵士たちは、よくこれを迎え撃った。

磯巾着(いそぎんちゃく)のようなパープルウォームの触手を避けて槍(ランス)を突き刺し、インスマンスの堅固な鱗(うろこ)を戦斧(バトルアックス)で切り裂(さ)いた。

　厄介なのは、ガーゴイルであった。空を飛ぶ彼らにはバリュウがあたっていたが、数が多すぎる。討ちもらした魔物が、後退し始めたパオトレインにとりついていく。追いかけようとしたバリュウに、兵士たちを薙(な)ぎ倒しながら前進してきたクラーケンが迫った。

　嵐(あらし)の波濤(はとう)のように大きくうねりながら、いくつもの足が空中のバリュウめがけて伸びていった。吸盤つきのそれにつかまれば、逃げる暇なく地面に叩(たた)きつけられることだろう。バリュウは、自らの機動性をいかしてクラーケンの周りを飛びまわった。竜雷気息(ライトニングブレス)にも、クラーケンの巨体は驚くほどの強靭(きょうじん)さで耐えてみせる。

「怪物をバリュウ殿が引きつけているうちに奴(やつ)を狙(ねら)いますぞ」

　パイパーが叫んだ。炸裂弾(さくれつだん)を装備した発射筒(バスターショット)をかついだ兵士たちを率いている。

　バリュウと兵士たちのタイミングをみはからって、パイパーはクラーケンに氷結嵐(フリーズ)の魔法を放った。降りしきる雨を雹(ひょう)に変えながら、冷気の嵐がクラーケンを襲(おそ)った。打撃を受けつけなかった怪物の軟らかな胴の一部が白く凍りつく。そこに、炸裂弾が集中した。プロンプトで神々の遺産から作りだされた兵器の威力は素晴らしく、凍りついたクラーケンの皮膚が砕け散る。

　青い血を滴らせた怪物は、怒りに体色をどす黒く変えながら、パイパーたちに毒の墨(アクアブレス)を吐き

つけた。
避けそこねた一人の兵士が、もろにそれをかぶって絶命した。
「大丈夫か、パイパー」
パープルウォームを輪切りにしてきたドンゴは、転んでいるパイパーの腕をつかむと安全なところまで彼を引きずっていった。
「もっと丁寧に扱えんのか」
髯から滝のように水を滴らせながら、泥だらけになったパイパーがドンゴに怒鳴った。それだけの元気があれば大丈夫だとドンゴが笑う。
「二人とも無事か」
バリュウが心配して戻ってきた。
「カマリアは？」
顔を見渡したバリュウが、その場にいない娘のことを訊ねる。
「ガーゴイルを追って、パオトレインの守りに戻っていったよ。むこうは、彼女たちにまかせよう。それよりも、わしらはあの怪物をなんとかしなくちゃならん」
ドンゴは、後退したパオトレインの方を指で指し示した後、返す親指でぐいとクラーケンをさし示した。開いた口に、容赦なく雨の滴が飛びこんでくる。
篠つく雨に、トレインの巨体は霞んで見えた。そのため、実際よりも遥か遠くにあるように

見え、バリュウは微かな不安に駆られた。手の届かないところにカリンが離れてしまったという感覚が、言い知れぬ不安となってわきあがる。
「心配するな、彼女たちとマヌアルはコロン女王とカマリアがなんとかしてくれるさ。バストーク王が言っておったろう、戦いは個人でするものではないと。われわれは、われわれのできることをできる範囲でやるだけだ。今は、あの怪物を倒すのが先決だな」
バリュウの不安を感じとって、ドンゴが叫んだ。大声を出さないと、会話もままならないほどに雨は強くなってきている。
「よし、もう一度パイパーのやり方で攻撃しよう。ドンゴは生き残っている騎士たちを率いて、できた傷口を広げてくれ。私は、奴の動きと毒液をなんとか抑えてみせる」
短く指示を与えると、バリュウはふたたび空へ舞いあがった。

6

「邪魔だ!」
カマリアは、通路に立ちふさがったガーゴイルをフレイルで打ち砕いた。ガーゴイルは、石像に魔力を吹きこんで造る生き物の模造品だ。頑丈ではあるが、強い力を受ければ元の石となってくだけ散る。
パオトレインの操縦室へむかう通路には、そのようなガーゴイルの破片が無数に散乱してい

た。

　不安に駆られて先を急いだカマリアは、危なくカリンに攻撃されるところだった。クリンが慌(あわ)てて矢の先を押さえたからよかったものの、そうでなかったらガンツ特製の雷弾を装備した矢をあびせかけられていたことだろう。

　カリン姉妹とケルベロスを守り手に残して、ツィッギーは怪我人(けがにん)を看(み)るために後部車両に移っていた。ガンツは女王とともに、機械の細かい操作を続けている。

「このパオトレインを怪物にぶつけます」

　コロンはカマリアに告げた。

「なんという無茶な考えを。確かにこの巨体ならクラーケンを押し潰(つぶ)す事も可能でしょうが、避けられたらそれまでですよ」

　カマリアは、驚きで目を見開いた。前髪から滴り落ちる雨の滴が、目の中に入りそうになる。

「それに、このパオトレインをあずかる女王が、それを破壊するような真似(まね)をしてどうするのですか」

「私は、民を守るためにいるのです。乗物を守るためにいるのではありません。民を救えなくして、なんための女王でしょう」

　コロンは大いなる自負をもって答えると、ガンツに準備ができたかどうか訊(たず)ねた。

「あとは、後部車両を切り離すだけです。身軽になった先頭車両だけなら、バザーの中の包(パオ)が

障害物となって動きのとれない怪物にぶつけそこなうことはないでしょう。ただし、バザーから怪物が抜け出してしまうとまずいことになります」
ガンツは、コロンとカマリアの両方の質問に一度に答えた。
「急ぎましょう。みなさんは、車両を切り離しにいってください。トレイン内に侵入した魔物は一掃できたようですから、私の心配はいりません」
「女王はどうなさるおつもりです」
カリンがコロンのことを心配して聞き返した。
「切り離しを確認したら、トレインを発車させて私も脱出します。ゆっくりと加速させますから、十分時間はあるでしょう。みなさんは切り離すときに後部車両に移り、そこを魔物から守ってください。さあ、時間がありません、急いで行動しなさい」
女王の命令一下、カリンたちは車両の連結部に急いだ。
「カリン、マヌアルは？」
カマリアの問いに、カリンは背嚢（はいのう）を軽く叩（たた）いてみせた。その中に、しっかりとマヌアルは納められている。そのために、矢筒は腰の後ろに下げられていた。カリンが歩くたびに、残り少なくなった矢が寂しい音をたてる。
四人は最後部の扉を開けると、連結部のあるデッキに飛び出していった。とたん、パオトレインの車体を打ち続けていた雨の虚（うつ）ろな音が、痛覚を伴った甲高いものに変わった。叩きつけ

る太鼓(ドラム)のような激しい雨の音にのって、待ち構えていたガーゴイルたちの襲撃が始まった。中に侵入しそびれた魔物たちは、上空を旋回しながらトレインのどこかの扉が開くのを待っていたのだ。

空から急降下してくる敵にはカリンが、デッキにとりついた敵にはカマリアとケルベロスが戦いをしかけた。その間に、ガンツとクリンがデッキの左右にわかれて、車両をつなぐ鎖を外しにかかる。

素早く鎖を外したガンツが、タラップを伝って連結器を外そうとしたとき、突然トレインが動き始めた。

「どうして、まだ早いわよ」

巨大な鎖にてこずっているクリンが叫んだ。重い上に、濡(ぬ)れて手がすべる。両足を踏ん張っても、クリンの力ではデッキにさしこまれた鎖の端の楔(くさび)を引き抜くことができない。

「怪物だ。きっと奴(やつ)が動きを早めたに違いない。コロン女王は、間に合わないと判断して発車させたんだ」

かろうじて片手だけで手すりにつかまりながら、ガンツが叫んだ。大きな身体(からだ)を振り落とされないように懸命になっている。

「客車を連結したまま突っ込もうというのですか！」

カマリアは、さきほどのコロンの言葉との矛盾に言い知れぬ怒りを覚えた。

「女王は信じたんだ、僕たちが車両を切り離してくれると」
加速の振動と指をすべらす雨に耐えながら、ガンツは必死に連結器の開放レバーへ手をのばした。容赦なく目に飛びこんでくる雨に視界が霞む。
左手がレバーをつかんだ。
そこへガーゴイルたちが殺到した。
両手のふさがったガンツには、守りようがなかった。半分までレバーを引きあげたものの、魔物の体当たりを受けて濡れた手がタラップから離れた。ガーゴイルともんどりうつ形になって、地上へと転がり落ちていく。
「ガンツ殿！」
目の前のガーゴイルの頭部を叩き壊したカマリアが叫んだ。車両の間に転落したガーゴイルが、鈍い音をたてながらトレインの巨大な車輪に踏み砕かれていく。先に落ちたガンツの安否はわからない。
「急いで。長引けば、切り離しても車両はとまらないわ」
鎖を持ちあげようと苦戦しているクリンに、カマリアが手をかした。右手でガーゴイルを牽制しながら、左手一本で鎖を持ちあげる。クリン一人ではびくともしなかった留め金の楔が、

カマリアの力で持ちあがっていく。

「いい、放しますよ！」

カマリアは、楔をタラップの外に投げ棄てようとした。そこへ、カリンの弓矢をかいくぐったガーゴイルが飛来する。クリンの鎖を手放すタイミングが遅れた。落ちる鎖の力に、小柄な身体が引きずられて落ちる。

「クリン！」

助けにいこうとしたカリンをガーゴイルが阻んだ。

短い悲鳴とともに、振り子のように振られたクリンの身体が、次の車体に鎖ごと激突した。鎖に腕を絡めとられ、かなりの出血と打ち身を受けながらもクリンはかろうじて鎖にぶら下がっていた。けれども、叩きつける雨に、手が鎖から滑り始める。

その手を、細い腕が伸びてきてつかんだ。

ツィッギーは、クリンを引きあげながら呪文を唱えていた。たった今開け放たれた後部車両のドアからさす明るい光が、風雨の中に浮かぶガーゴイルの姿を照らしだした。

車両の間の空中で、カマリアやカリンと小競合いを繰り返していたガーゴイルの動きがとまった。魔物を中心として細い輝跡が無数に飛び交い、放射状に雨の滴が不自然に飛び散った。ガーゴイルの身体に無数の罅が入る。落下しかけた魔物の身体に、怒りの極致に達したケルベロスが体当たりをかけた。柳刃嵐を受けて脆くなっていたガーゴイルは、その一撃で粉々に砕

け散った。
魔物の最後の一匹を倒したケルベロスは、デッキに引きあげられたクリンの傷を心配そうになめ始めた。
「私が看ますから、あなたは下がってらっしゃい」
ツィッギーはケルベロスの鼻の頭を脇に押しやると、クリンに回復の呪文を唱えた。
「今のうちに」
カリンに促され、渡り板の上にいたカマリアが連結器のところへ降りていこうとした。そのとき、トレインが大きく跳ねた。カチンという音とともに、カマリアの乗っていた渡り板が支えを失って彼女ごと落下した。トレインが、前後に分かれていく。ガンッの外しかけていた連結器が、今の衝撃で外れたのだ。
下に落ちたカマリアは、必死の思いで身を大地に伏せた。頭上すれすれを、パオトレインの底部が猛スピードで通りすぎていく。鼓膜を突き破らんばかりの轟音が、彼女の身体をゆさぶる。踏み砕かれた渡り板の破片や小石が、容赦なく彼女の身体に突き刺さった。まるで生きた心地のしない時間が続いた後に、突然トレインが停止した。ツィッギーかクリンが停止装置を作動させたのだろう。
カマリアはトレインの下から這いだすと、やっと一息ついた。吐きだした吐息が白く冷え、瞬く間に雨にかき消されていった。

ふと後方を見ると、ガンツのずんぐりとしたシルエットがこちらにむかって走ってくる。どうやら彼も悪運は強かったらしい。

切り離された車両の先頭に戻ったカマリアは、そこで狼狽したクリンとツィッギーに出会った。

「カリンが先頭車両に取り残されたですって!?」

カマリアは、雨に霞み始めた先頭車両を追って走りだした。

7

カリンは、雨の中に霞んでいく車両を茫然と見ていた。

なぜ、すぐに飛び移るなりしなかったのかが悔やまれる。カリンの運動神経ならできたはずだ。だが、カマリアが落ちたとき、何かが心に引っ掛かった。その何かが、一瞬の躊躇を生んだのだ。

何に気をとめたのだろうか。自分でも答の出せぬままに、カリンを乗せたトレインは走り続ける。

これ以上躊躇している余裕はなかった。カリンは飛び降りる決心をかためた。

タイミングをはかっていると、ふたたびトレインが大きくゆれた。微かな横への遠心力がカリンの身体を襲った。雨に煙る風景がわずかに横へ流れる。

カリンは、自分の懸念がなんであるかを理解した。
このパオトレインを、今現在、動かしている者がいるのだ。
思いあたる人物は一人しかいない。カリンは、操縦室に急いだ。
カリンの予想通り、そこにはまだコロンの姿があった。
「なぜ、まだこんなところにいるのですか！」
二人の口から、くしくも同じ台詞が飛びだす。
「誰かが直前まで動かしていなければ、怪物にこのトレインを命中させることは不可能でしょう」
わかるはず、そして、わかってほしいとコロンが同意を求めた。
「最初から、怪物と刺し違えるつもりだったのですか。女王自らが自分の身を粗末にしてどうするのですか」
わからないと、カリンは女王を叱責した。
「死ぬつもりはありません。このパオトレインはみかけ以上に頑丈なのですよ。まして、あのような軟らかい生き物などとぶつかっても、ひしゃげてしまうようなことはありませんから」
「無茶です。衝突のときの衝撃にこの乗物が耐えても、中にいる人間が耐えられるとは限らないではないですか。早く逃げましょう」
「それはできません、怪物はすでにバザーを抜け出しつつあります。確実に仕留めるためには、

最後まで誰かが残る必要があるのです」
カリンに、コロンは毅然とした表情を返した。
「女王!」
カリンは必死に女王を説得しようとした。
そのころ、バリュウたちの下へは、コロンからの伝令が到着していた。
「怪物をバザー内に足留めせよ。しかる後に、パオトレインの姿が見えたら、至急散開してその場を離れよ。コロン陛下からの御命令です」
パイパーたちは、すぐにはその真意をはかりかねた。だが、パオの兵士たちにとって、女王の命令は絶対であった。
バリュウは、クラーケンの注意を引きながら爪やブレスで攻撃を続けていた。高速で空を移動するたびに、降りしきる雨が飛礫のように全身を刺す。さすがのバリュウにも疲れが見え始めていた。だが、クラーケンも、度重なる攻撃に弱り始めている。
何度目かの急降下を試みたとき、クラーケンの足が鞭のように一斉にバリュウに襲いかかった。急上昇に転じようとしたバリュウの足首に、怪物の足の先が絡みついた。
しまったとバリュウが思う間もなく、クラーケンは彼をつかんだ足を振りあげた。そのまま一気に、地上へと叩きつけるつもりだ。
バリュウはなんとか首を回すと、ありったけの力を込めてクラーケンの足に竜雷気息を吐

きかけた。雷撃に焼かれた怪物の足の先が振りおろされる勢いによって千切れる。投げ飛ばされる形になったバリュウは、地面すれすれをきりもみしながら飛んでいった。地上にたまった水が、バリュウの起こす風に舞いあげられて飛沫をあげて飛び散る。なんとか姿勢を戻して水平飛行に入ると、勢いを利用して一気に上昇した。
バリュウが空中で荒い息をついたとき、甲高い音があたりに響き渡った。振り返ったバリュウの目に、こちらへ接近してくるパオトレインの姿が見えた。
「女王は、これをやるつもりだったのか」
バリュウは伝令の言葉を思い出し、コロンの意図を読みとった。
突然、その顔が驚きによってひきつった。
パオトレインの前面の硝子越しに、言い争っているらしい女王とカリンの姿が見える。
「馬鹿な！　あの二人は何をやっているんだ」
もう、クラーケンは目前だった。このままぶつかれば、二人が無事ですむわけがない。
バリュウは、パオトレインめがけて突っ込んでいった。
言い争っていたカリンとコロンは、突然の閃光でパオトレインの前面の窓硝子が吹き飛ぶのを目撃した。慌てて、腕で顔を硝子の破片から守る。続いて、巨大なものが中に飛びこんできた。同時に、雨の音と滴がトレインの中に激しく吹きこんでくる。
「こんなところで何をやっているんだ、君たちは!!」

怒鳴(どな)り声に振り返ったカリンたちの目の前に、バリュウが立っていた。雨と自らの血にまみれた神竜は、怒りを顔に隠さなかった。

カリンが何か言おうとするのを聞こうともせず、バリュウはうむを言わさず二人を両手にだきかかえた。

窓の外には、足をあらん限りに広げてトレインを受けとめようとしているクラーケンの姿が目前に迫っている。

バリュウは、急いで自分の破った窓から飛びだしていった。

巨大烏賊(クラーケン)の胴をなめるようにして、バリュウは猛スピードで飛んだ。そのすぐ後ろから、パオトレインが圧倒的な重量をもってクラーケンに激突した。

車体に絡みついた足を引き千切り、巨大な車輪が怪物の目と目の間に食いこんでいく。圧力で押し出された眼球が潰(つぶ)れた包(パオ)の残骸(ざんがい)の間を転がっていった。引き裂(さ)かれて潰された胴体から、墨色の毒液が吹きだしてトレインを黒く染めていく。怪物の内臓を巻き込んだ車輪が、不気味な音をたてて空回りし、やがてとまった。横倒しになったトレインの下で、クラーケンはすでに原形をとどめていなかった。

バリュウは、両腕の中の二人に無理がかからないようにと、ゆっくりと減速しながら周囲が俯瞰(ふかん)できる高さまで昇った。

痛いくらいにだきしめられ、カリンはバリュウの胸に顔を埋めていた。猛烈な風によって遮(さえぎ)

られていた呼吸が、やっと再開できる状態になる。
「やれやれ、やっとかたがついたようだ。まったく、無茶な……!!」
ほっと一息をつきかけたバリュウの身体が、突然横殴りの力を受けて弾き飛ばされた。バリュウの背中で火炎の爆発が広がる。
「のこのことマヌアルを持ちだしてきおったか。我が手に渡ると考えもせずにな」
爆熱波を放ったズィドゥールは、それまで隠していた身をふたたび現した。そして、勝ち誇りながらバリュウたちの落下した場所へとむかった。
墜落しながらも、バリュウは二人を放さなかった。あまつさえ、背中から地面に落ちて自分の身体を二人のためのクッションにした。だが、それで墜落の衝撃が完全になくなるわけではない。地面の上で大きく跳ねたバリュウの身体から、カリンたちは勢いよく投げだされた。
カリンは、全身の痛みにうめきながら顔をあげた。雨のせいなのか、衝撃のせいなのか、視界がおぼろに霞む。
「バリュウ、コロン陛下」
カリンは、二人の姿を捜した。彼女のすぐそばに、二人は気を失って倒れていた。
「ひどい怪我。待ってて、今ツィッギーかカマリアを呼んでくる」
バリュウの焼けただれた背中を見たカリンは、気力を振り絞って立ちあがった。
自分をかばうために傷ついたバリュウをほうってはおけない。カリンは、傷ついている自分

の身体に鞭(むち)をうった。

一歩前に踏みだしたカリンは、激痛に歯を食いしばった。負けずに前を見た彼女は、降り続く雨の中に近づいてくる人影を見つけた。

助かったと言おうとした声が凍りつく。

カリンは、そばに落ちていた長弓を拾いあげると矢をつがえた。

溜(たま)った水をはねあげながら、足音が近づいてくる。

雨の隙間(すきま)を縫うようにして、魔物にむけて矢が放たれた。

ズィドゥールがジュエルのかけらをかかげると、矢は彼の直前で停止した。鏃(やじり)の雷弾が、激しい閃光(せんこう)を伴って爆発する。だが、爆風はすべてカリンの方へと押し返された。

もんどりうって、カリンはバリュウのそばに倒れこんだ。

「負ける……もんか。あたしを助けてくれたバリュウを、今度はあたしが助ける番だ」

カリンは、腰の矢筒に手をのばしてはっとした。矢筒には、もう矢が一本も残ってはいなかった。

「たわいのない」

ズィドゥールがその様を見て低く笑った。それは、次第に哄笑(こうしょう)に変わっていく。

「神竜に切り裂(さ)かれたこの腕の恨み、マヌアルを手に入れた後で存分に晴らさせてもらうぞ」

残虐な悦びを思い描きながら、ズィドゥールはバリュウに近づいてくる。

カリンは、バリュウの身体に自分の身体を覆い被せた。濡れて重くなった髪が零れて、背中があらわになる。マヌアルを納めた背嚢が、渇望する魔物の目をひきつけた。

呪文の詠唱が始まった。ズィドゥールは、封冷波で二人を氷づけにしてからマヌアルを奪うつもりだ。

カリンには、その身をバリュウの盾にすることしかできなかった。

降り注ぐ雨さえも氷の粒と変えながら、冷気がバリュウとカリンにむけて放たれる。

カリンは、バリュウの身体にまわした腕にぎゅっと力を込めてだきしめた。

だが、冷気は二人の直前で霧散した。飛び散る氷片の陰から、人影が現れる。

「貴様は……。そうやって、いつもいつも俺の邪魔をする……」

ズィドゥールがうめいた。カリンは、霞む頭を持ちあげて魔物の方を見た。その目に映ったのは、すらりとした女性の姿だった。カリンは、それがカマリアの姿であることに気づいた。凛々しくも魔物の前に立ちはだかる彼女の髪が艶やかな赤紫に見えるのは、霞みゆく目の錯覚だろうか。緊張の糸が脆くも切れたカリンは、バリュウに折り重なるようにして気を失っていった。

「私の前に、二度も現れるなど、身のほどを知らぬ行いだな」

カマリアは、鋭く言い放った。強大な威圧感に気おされて、ズィドゥールがじりじりと後退る。それよりもやや速く、カマリアは前に進んで間合いを詰めていった。

「貴様らさえ現れなければ、俺はルシファー様の筆頭将軍でいられたものを……」

唸るようなズィドゥールのつぶやきを、カマリアはまったく無視した。

「下がるがいい。貴様ごときに私の邪魔はさせぬ。そうそうに、ここより立ち去れ」

赤い宝玉のついた飾環をかかげながら、カマリアはさらにズィドゥールに詰めよった。

ひきつった悲鳴をあげながら、ズィドゥールはジュエルのかけらを突き出して対抗しようとする。

「往生際の悪いことを。そも、そのジュエルのかけらは貴様にはすぎた物だ」

カマリアの手の中で、飾環の宝玉が強い輝きを放ち始めた。その光を受けたズィドゥールの手の中のジュエルが、引きよせられるようにして彼の指を離れて飛び出した。そのまま、赤い輝きの中に溶けこむようにして、ジュエルのかけらは飾環の宝玉の中にすいこまれていった。

ズィドゥールは悲鳴をあげるとその場を逃げだそうとした。その行手を阻むように、真っ赤な光の柱が彼の前に立ち昇った。驚いてカマリアの方を振り返った彼の眼前に、もう一本光の柱が立ち現れる。彼を取り囲むように次々に六本の光の柱が現れた。

「殺しはしない。貴様はそれに値するとは思えない。このまま、深き地の底で闇にいだかれたまま永劫に生き続けるがいい」

カマリアが印を切る。ズィドゥールの足元には六本の柱を結ぶ六芒の印が浮かびあがった。

光で描かれた封印の聖印の中、魔物の立つ大地がその存在を失っていった。底無しの沼に沈み込むように、ズィドゥールの身体が足元から深淵の闇の中へと消えていく。
「助けてくれ！」
ズィドゥールの顔を見据えたまま、カマリアは彼の命乞いを冷酷に聞き流した。
「助けて……、助……け……」
ズィドゥールを呑み込むと、六芒星は静かに消えていった。後には、何もなかったかのような地面だけが残された。
思い出したかのように、激しい雨の音が耳を打つ。
だが、それもやがては弱まっていくだろう。
カマリアは飾環をふたたびはめると、バリュウたちの下へかけよった。
彼女は微かに安堵の吐息をもらすと、彼らのために祝福の祈りを捧げ始めた。

8

被害は大きかったが、ズィドゥールが倒れたことでルーン大陸にやってきた脅威はひとまずは消え去った。それが、一同の心をわずかにでも軽くしていた。
「こりゃ、またひどく壊れたもんだ」
パオトレインの損傷を調べながら、ガンツが頓狂な声をあげた。心なしか、顔の端が嬉しそ

うにも見える。それもそのはず、パオトレインの修理のために、今まで触れたり分解したりするのをためらっていた内部の機械を思いっきりいじれるのである。

「でもなおしてみせますよ。そうだなあ、三ヶ月もあればすっかり元通りにできると思います」

おおまかな見積もりをたてたガンツは、コロンに報告した。

「そんなにかかりますか、しかたありませんね。なおるだけでも幸いです」

謙虚にコロンは言った。人知れず、その口から小さな溜め息がもれる。

後部車両の居住部分が無事だったのは不幸中の幸いだった。しばらくは隊商として交易をすることはできないが、暮らしに困るようなことはないだろう。

「いいえ、二ヶ月よ。もっとも、私が手伝えばの話ですけれどもね」

唐突にクリンが申し出た。

「それはいい、ついでにクロック師匠やライルたちも呼べばもっとはかどる」

ガンツが尻馬に乗った。

「おまかせします」

微かな不安を感じなくもないが、コロンは彼らにまかせることにした。

「そういうわけだから、私はここに残るわ」

クリンは、あっけらかんとカリンに告げた。

思いついたことはすぐ実行に移す性格は、いくつになっても変わらない。カリンは、妹のわがままに苦笑しただけであった。

「好きにしなさい。あなたはあなたなんだから」

姉の許しを得たクリンは、ガンツとともに彼のかいた図面の束と格闘を始めた。早くも、他のことは目に入らないといった様子だ。そばでは、伏せをしたケルベロスが、つまらなそうに主人が動きまわるのを見つめていた。

「それでは、私たちはウランバートルにむけて出発いたします」

バリュウは、二度目の旅立ちの挨拶(あいさつ)をコロンに告げにいった。クリンとケルベロスが抜け、ウランバートルへむかうのは六人となった。

「お気をつけて、バリュウ殿。――カリン殿、妹君は大切にあずからせていただきます。皆様には、よき出会いと光の加護があらせますように」

草原の女王コロンの言葉に見送られて、一同はパオ平原を後にしていった。

9

かつてバリュウとともに戦ったケンタウロスたちは、ウランバートルに集まっていた。コロン女王の協力のもと、海運を中心にした新たな町造りを行っている。

「大変な旅だったようだな。船の準備ができるまでは、ゆっくりと身体(からだ)を休めるがいいさ」

ウランバートル総督のアーネストは、事務処理の書類にうもれながらにこやかに笑った。その書類の山に、バリュウたちがコロン女王から託された親書が加わる。それには、パオトレイン修復のための資材や生活物資などの援助の要請と、バリュウたちのために外洋航海用の船を都合してほしいむねの連絡が書かれていた。
「それにしても、私たちが討ちもらした海の化け物がそちらで倒されるとはなあ」
「残念だと、貴公は言いたいのであろう？」
　バンガードがアーサーをひやかした。
「ま、戦闘用の大型船の半数をやられたこちらとすれば、止めは我々の手でさしたかったものだがな」
　ペイルが苦笑した。それは本音だったのだろう。
　生命線とも呼ぶべき港が、クラーケンの襲撃によって封じられたのだ。すぐさま軍船を派遣して、怪物を操っていたらしい船を沈めるには成功した。だが、船に乗っていた魔物は、大半が上陸した後であった。
　肝心のクラーケンにいたっては、まったく歯がたたなかったといってもいい。水中からの攻撃になす術もなく半数の船を沈められ、ほうほうの体で退却してきたのだ。
　それ以後クラーケンは姿を消し、彼らは復讐の機会を逸してしまっていた。
「旅に出るのなら、俺たちも一緒にいってやろうか」

ペイルは、くすぶった戦闘心のはけ口を求めるかのようにバリュウにもちかけた。もともと放浪の傭兵だった彼は、未知の大陸に渡るという旅にいたく興味をそそられたらしい。
「それがだめなことは、各人が一番よく知っているだろう」
アーネストがすかさず彼を牽制した。
「忙しいのはお前、いや、総督だけだろ。ああ、アーサーも海軍の再編制で手一杯か。なら、俺とバンガードのじいさんがいこう。な、いいだろう、バリュウ」
ペイルに同意を求められて、バリュウは困ってしまった。アーネストが、わがままを許すなよと目で合図する。
「別に、どこかへ攻めこむわけじゃないんだから……。気持ちだけはありがたくもらっておくよ。ありがとう、ペイル」
バリュウの返事に、ペイルはわざとらしく舌打ちをした。その様子を見て、バンガードが快活な笑い声をあげた。
「ペイルとバンガードには、ウランバートルの使者としてコロン陛下の所へいってもらう。物資の輸送と、修理中のパオトレインの警備が目的だ。なに、運の悪い野盗でもやってきたら、好きなだけ尻を蹴り飛ばしてやればいい。——と、女性の前で言うべき台詞ではなかったかな」
アーネストが笑うと、アーサーが真面目な顔でその通りだと言った。総督が少しむっとして

振り返ると、彼はにやりと笑った。軽く鼻を鳴らすと、アーネストは親友に不敵に笑い返した。
「それで、船はどのくらいで都合がつきますか」
カマリアの問いに、アーサーは三日ほどだと答えた。
「では、細かいことは私が彼と相談することにしよう。船の準備ができるまでは、お言葉に甘えてこの町でゆっくりとさせてもらうさ」
バリュウは、半ば追い払うようにしてカリンたちと別れると、アーサーと別室へ移っていった。

10

三日後、港ではアーサーたちの用意してくれた船が、バリュウたちが乗船するのを今を遅しと待っていた。
「大陸へ渡るにしては、ずいぶんと小さい船ね」
目の前の船を眺めて、カリンがつぶやいた。
「アーサーたちが選んでくれた船だ。間違いはないさ。——さて、僕は総督に挨拶(あいさつ)をしてくるから、君はツィッギーと一緒に先に乗っててくれ。パイパーたちもすぐにやってくるだろうし。いい船室を手に入れるのは早い者勝ちだからね」
カリンたちを促すと、バリュウはそそくさとその場を去っていった。その態度が、どうも腑(ふ)

に落ちない。だが、どこがおかしいとも、カリンは今すぐはっきりと言うことはできなかった。
「いくわよ、ツィッギー」
少女に声をかけると、カリンは指定された船にむかった。
「はい、カリンお姉様」
元気に答えると、ツィッギーが彼女の後について船に乗りこんでいく。結局、少女はバリュウたちと一緒にパルメキアへ渡ることを固く決心していた。今はゴングを探して弟子入りすることよりも、カリンたちと別れ難いという気持ちのほうが強いようだ。
そして、二人を乗せた船は出港していった。
カマリアがバリュウのところに怒鳴りこんできたのは、陽が沈んだ後だった。
出発が明日に延びたと知らされていた彼女は、ようやく二人のいなくなったことに気づいたのである。
バリュウは、パイパーと同じ部屋にいた。
「あなたがこんな策を弄するなんて。それとも、パイパーの入れ知恵ですか」
カマリアの追及は厳しかった。
「しかたなかったんだ。あの二人が、おとなしくルーン大陸に残るはずがないとわかっていたからね。かといって、パルメキアへは彼女たちを連れていきたくない」
理由は理解できるが、方法にはカマリアは承服しかねた。

「あなた方は、カリンやツィッギーを見くびっています。それこそ、この程度のことであの二人が諦めたりするでしょうか」

「大丈夫。ワーラルからとって返したとしても、そのころには我々はパルメキアにむかって出発しています」

軍師気取りでパイパーが答える。

その認識こそが甘いのだと、カマリアは彼をねめつけた。

「では、なぜパイパーやドンゴを連れていくのです」

カマリアがバリュウを問い詰める。答えあぐねるバリュウに代わって、パイパーが口を開いた。

「わしは、オトラント様の命を受けております。ドンゴは、彼の意志で勝手についてくるのですよ。男はですな、冒険を求めるものなのです。それは、男にしかわからない熱病のようなものでしてな。それに、か弱き女性を危険にあわせないようにするのも、また男の務めでありましょう」

「自分勝手な言い訳ですね。わがままな守り方では、真に人は守れませんわ」

諦め混じりに言うと、カマリアは席を外していった。

誉められたやり方でないのは、バリュウも重々承知の上だった。なじられるのを覚悟で、バリュウはパイパーの提案にのったのだ。カリンの安全に比べれば、自分個人の名誉などいかば

かりの価値があろう。

苦さを噛みしめるバリュウから離れたカマリアは、夜の港へとさまよい出ていった。あのままでは、苦虫が自分の口の中にも飛びこみかねなかった。あるいは、上気した頰に風が恋しかったのかもしれない……。

それは正解だったのだろう。なぜなら、彼女は港で嬉しい秘密の再会を果たせたのだから。

11

翌日、バリュウたちを乗せた船はウランバートルを後にした。

アーネストとアーサーが選びだしてくれた船員たちの他には、パイパーにドンゴ、そしてカマリアの姿しかない。パイパーとドンゴは、ここまでかかわっておいて、いまさら手を引くことをよしとしなかった。二人とも乗りかかった船には最後までつきあうつもりのようだ。

船員たちの威勢のいい元気さの代わりに、騒がしい娘たちのもつ華やかさは影をひそめてしまっていた。それを寂しいと呼んでもいいものかどうか、バリュウは考えあぐねていた。

「淋しいのなら、今からでも迎えにいらっしゃればよろしいのに」

バリュウの心を見透かして、カマリアが問いかけた。

「いや、私が決めたことだから」

「そうですね、あなたの決めたことですから、カリンたちが決めたことでも承知したことでも

ありませんでしたわね」

どういう意味だとバリュウは問い返したが、カマリアはさらりと受け流して彼の前から立ち去った。

バリュウがその言葉の意味することを知るのは、ウランバートルを出港してからかなり時間が経ったころのことだった。

突然目の前に現れたカリンとツィッギーを見て、バリュウは我と我が目を疑った。パイパーとドンゴも同様に開いた口がふさがらない。一人、カマリアだけが訳知り顔で微笑んでいた。

「密航者です」

船長がバリュウに告げた。甲板に固定されているボートの中に隠れていたのだという。

「君たちは……、君たちときたら……」

バリュウは、ふるふると肩を震わせた。

「カマリア、君も共犯だな」

涼しい顔の娘を振り返って、彼は叫んだ。

「わざわざ危険を冒してまで途中で船を逃げだして戻ってきた彼女たちの願いを、どうして私が断ることができましょう。密かに手引きしたのは、なすべきことをしたまでのことですわ」

いけしゃあしゃあと言ってのけるカマリアを、バリュウは憎らしげに睨みつけた。だが、その程度のことでカマリアが動じるはずもなかった。

「戻るしかないのか……」
つぶやくバリュウに全員が反対した。
「あなたたちまで」
意外だと言いたげに、バリュウはドンゴとパイパーを見た。どうせ戻っても、繰り返すだけだとパイパーは彼に説明した。
「わしはもう完全に降参しましたよ。もう、これで何度目になるのか、一番よく知っているのはバリュウ殿でありましょうが」
反問されて、バリュウは答えられなかった。答えてしまえば認めることになる。
「なら、せめてツィッギーだけでも……」
「なぜ、私だけのけ者になさるんですの」
少女は、珍しく神竜をキッと睨みつけた。
「困っている者を救って徳を高めるのが、僧侶の務めだと何度も申したはずですの。ここでバリュウ様を見捨てたとあっては、私の徳が下がってしまいますわ」
「では、ゴングを見つけだすという君の目的はどうなるんだい」
バリュウが反問する。
「この旅が終われば、神竜と旅した僧侶——もちろん、私のことですわ——の噂はあちこちに広まっているはずですわ。当然、道士様の耳にも届くはずですの。そうすれば、もしかしたら

道士様の方から会いにきてくれるかもしれないではないですの。少なくとも、私がちゃんと修行していることだけは伝わるはずですわ」

ツィッギーは、頑(かたく)なにそう信じこんでいた。

「どうするのですか、戻りますか？」

船長が困った顔で訊(たず)ねた。

答えなければならなかった。

「――このまま航海を続けてくれ。進路は北へ。目的地はパルメキアだ」

絞りだすように、バリュウは船長に告げた。

娘たちが歓声をあげる。その声をかき消すように、誰(だれ)かのお腹がきゅうと鳴った。ツィッギーが顔を真っ赤に染める。思えば、ボートの中の二人が見つかったのも、彼女のお腹(なか)の虫が騒いだのが原因だった。

「やれやれ、乾麺麭(カンパン)でよければめしあがるかな」

パイパーの申し出に、ツィッギーは二つ返事で彼の後についていった。他の者たちもそれにならう。

船室には、バリュウとカリンだけが残された。

「ごめんなさい」

思いもかけず、カリンが素直に謝った。機先を制されたバリュウが、勢いをそがれる。

「まったく、君は無茶だよ。いつも僕を困らせる。僕は、ついてきてはいけないと言ったんだよ」

優しくさとすようにバリュウは言った。

「――怒ってるの？」

「違うと言えば嘘になる」

端的に答えるバリュウに、カリンは軽く顔を伏せた。

「なぜついていってはいけないの。あたしは、あなたにとって重荷なの」

「そうじゃない。そんなことは言ってないだろう。ただ、心配なんだ。君を危険なめや悲しいめにあわせたくはない」

「遠く離れてしまって、どうしてあたしが悲しくないと言えるのよ。あなたが危険なめにあってるというのに、手助け一つできないことに耐えていられると、どうして思えたりするの」

「君を守りきる自信がないんだ」

思わず、バリュウは本音をもらした。

「やっぱり、あたしはお荷物なのね」

「そうじゃないって言っているだろう」

「だったら、あたしを守ってみなさいよ。あなたの誇りではなく、あたし自身を。あなたならできるはずよ。そうでなければ、あなたはあたしたちの腕の中でいつも泣いていた仔竜のまま

だわ。——ねえ、あなたにあたしの力は必要ないの？」

バリュウは、瞬間返答に困った。

「——君が邪魔なわけじゃない。でも、君に頼ってばかりいた仔竜は、もうどこにもいないと思う。子供は子供という一つの種族だったのだろうけれど、今の僕は神竜のバリュウなんだ。……さあ、みんなのところへいこう。ひとまず、もう追い返したりはしないから。ツィッギーみたいにあっけらかんとしてくれてたほうが僕は気が楽だ」

バリュウがカリンの手を引き、二人は揃（そろ）って船室を出ていった。

第四章 神大陸

1

海原は広かった。

青や緑に彩りを変える水面以外、何も見えない日が何日も続く。かと思えば、渡る鳥たちの群や、海面を銀の鱗の光で埋め尽くす魚の群と出会ったりもした。島はいつも忽然と現れ、水や食料を補給して後にすれば、まるで沈んでしまったかのようにいつの間にか見えなくなっている。光は金波銀波で海面を輝かせ、海流は藍色の水の中を流れる薄青の川として珍しい風景をバリュウたちに見せてくれた。

さしたる危険にも出くわさず、まさに順風満帆で船は北へとむかった。

唯一不満といえば、代わり映えのしない魚料理に飽きた男たちの声と、肌や髪の手入れに貴重な水を使えない娘たちの声ぐらいであった。

月が一巡して元の姿を取り戻すころ、船の前方に陸地が現れた。近づくにつれ、水平線が地平線にとって代わられていく。その広さから、島ではないことがわかる。

大陸だ。
ついに、バリュウたちはパルメキア大陸に到達したのである。
「大陸に着いたのですの?」
開口一番、誰にむかってというわけでもなく、ツィッギーが大声で訊ねた。二言目は、お風呂に入りたいである。三言目には、それは水浴びでもいいからという言葉に変わっていった。
ツィッギーに急かされながら、船は上陸できる場所を探して大陸に近づいていった。
「大きな河の河口みたいですな。右は森林地帯、左は砂丘、あるいは砂漠ですかな?」
パイパーは、几帳面に周りの地形をメモに書き込んでいる。
「神竜たちはどこにいるんだい」
憧憬にも似た思いを込めてバリュウはカマリアに訊ねた。
「この風景からすると、ここはハッサンと呼ばれる土地ですわ。河口近くの豊かな土壌の土地ですが、人はほとんど住んでいません。神竜たちは、ここから遥か西にある火竜の尻尾と呼ばれる山岳地帯の中央付近に住んでいます。ボルカノン神は、その地で大地の力を封印し、そのときに取り出した力で神竜に活力を与えよと御神託をくだされました」
「ボルカノン神か、一体どんな神様なんだろう」
「銀灰色の大きな翼を持った、猛き神ですわ。今はボルカノ火山の頂にあって、時を食んでおられます」

カマリアの言葉が理解できなかったバリュウが聞き返すと、彼女は眠っておられるのですと言いなおした。
パルメキア大陸には、主要な二神がいる。破壊と降魔の男神ボルカノン、創造と守護の女神ミトゥラ。現在は、そのどちらもが休眠期であった。だが、肉体に先んじて目覚めた精神の一部が、神託という形で人々にそれぞれの意志を告げている。
「余裕があれば、訪ねてみたいものだな」
「ルーン大陸とは違った香のする風を嗅ぎながら、バリュウは小さくつぶやいた。ボルカノン神の神殿は、遥か北の山脈にあった。ミトゥラ神の神殿にいたっては、さらにその北に位置する。そちらを訪ねていては、さらに月の満ちかけを一巡り以上見なければならないだろう。カマリアがボルカノン神に会う必要を説かない限り、バリュウは同族に会う機会を先のばしにするつもりはなかった。
沖合いに錨を下ろすと、カリンたちはボートに分乗して陸を目指した。翼を持つバリュウは、一足先に上陸を果たしている。
一番乗りを果たせなかったカリンとツィッギーが、ずるいとバリュウを責めた。
これぱかりは神竜の特権だと、バリュウは翼を広げて答えた。おかげで、パイパーはツィッギーをなだめるのに半日を費やすはめになった。
上陸した者たちは、森や川に食料や水の確保に散っていった。

「ここは結構豊かな土地なのに、なぜ人々が住んでいないのだろう」
樹の梢に生った果実をもぎ取りながら、バリュウがつぶやいた。
「確か、ここには多頭水竜が棲んでおりましたから」
バリュウの落とす果実を上衣の裾を広げて受け取めながら、カマリアは記憶を手繰りよせた。
「ヒドラって、じゃあ、ここは危険なんじゃない？」
果実を籠に入れていたカリンが、まるで木立の間に怪物が潜んでいるのではないかというように周りを見回した。
「大丈夫ですよ。鋼の従者を連れた旅人が、かなり前に退治したそうですから」
ヒドラごときを恐れるなど、カリンらしくないとカマリアは笑った。
「たとえヒドラが姿を消しても、逃げていった人々は簡単には戻ってはこないもの……。バリュウ、手がとまったようですが、どうかしましたか？」
カマリアに問われて、バリュウは慌ててなんでもないと答えた。何事もなかったように、彼はふたたび果実をもぎ続けた。
日が沈むころ、河原では夕餉の仕度ができあがりつつあった。
「一体全体どうしたんじゃ⁉」
びしょ濡れのバリュウを見て、ドンゴが首をかしげた。散らばっていたみんなを集めにいっ

ていたはずだが、神竜である彼が川や海に落ちたとはどうも考えにくい。
神竜の話す理由を聞いて、パイパーとドンゴは腹をかかえて笑いだした。
「笑いごとじゃないよ。なんで人間の裸なんかを見ただけで、こんな目にあわなくちゃいけないんだ」
バリュウは、濡れた身体を火で乾かしながらぼやいた。
彼は水を汲みにいったツィッギーを呼びにいったのだが、周りに人がいないのをいいことに彼女はちゃっかり水浴びを楽しんでいたのだった。異種族の娘の裸などに興味のないバリュウは、平然と彼女の前に姿を現したのだが、ツィッギーにとってはそうではなかったらしい。悲鳴と水飛沫を同時に浴びせられたバリュウは、あっという間に今のような姿になったというわけだ。
当然のように、彼に同情するものは誰一人としていなかった。
「バリュウは不条理だとぶつぶつ言いながらも、その日一日、娘たちにいじめられ続けることとなった。

2

久々の大地を満喫した一行は、翌日、ふたたび船に乗り込んだ。海岸線沿いに、西へ針路をとって進む。

左手に紺碧の海、右手に綿々と連なる砂丘を望みながら船は進んでいった。
丸一日が過ぎようというころ、砂丘が豊かな森林を擁した草原地帯に変わった。このころになって、ようやく遥か前方におぼろに霞む連峰が見え始める。
さらに日を重ねて進むにつれて、山々ははっきりとした姿を一行の前に見せ始めた。やがて、火竜の尻尾と呼ばれる半島が、その勇壮なる姿を現した。
「あの様子では、船をつける場所はなさそうですな」
遠眼鏡をのぞきこんでいたパイパーが、少し困ったように顔をしかめた。半島は切り立った絶壁で囲まれており、海からの来訪者を頑なまでに拒んでいた。荒い波が打ちつける岸壁付近は、ボートで近づくことさえ危険だろう。
「まこと、火竜の尻尾とはよく言ったものですな。近づけば、その鋭い一振りで粉々にされそうだ」
適当なところで、陸路を取るしかなさそうだ。船を山岳地帯手前の海岸に停泊させると、バリュウたちは再上陸の準備に入った。
「ドンゴ、君はツィッギーたちと一緒に残ってはくれないか」
バリュウは、荷作りにいそしむドンゴをつかまえてきりだした。
「おいおい、ここまできてそれはないだろう。わしは最後までつきあうぞ」
背嚢をドンと下に落として、ドンゴが抗議した。

「無理はしなくていいよ」
「自身を過信してはいかんな。お前一人でどうにかなると思っていたら、とんだ考え違いだぞ。それに、わしは、わしのためにここまでついてきたんだ。冒険と、ちょっとした報酬を求めてな。他のみんなも、それぞれ求めるものがあってお前についてきたんだ。それを妨げることはしてはいかん。おいてっても、勝手に後を追いかけていくぞ。——バリュウ、お前さんはわしのくすぶっていた心に冒険心という火をつけてくれたんだ。その責任だけは、最後まできっちりとってもらうぞ」
バリュウは、それ以上説得することを諦めた。
しょせん、仲間から逃げようとしているにも等しい、バリュウの言動は、これまでも、そしてこれからも、うまくいくはずがない。
「カリン……」
バリュウはカリンを呼びとめた。彼女にも、彼の言いたいことはよくわかっていた。
「船に残れというのなら無駄よ。たとえ閉じこめられたってついてくわよ」
機先を制されたバリュウは、用意していたすべての言葉を諦めた。
「マヌアルを頼むよ」
ぽんとカリンの肩を叩くと、バリュウは白い翼を広げた。彼は、マヌアルを他の誰でもないカリンに預けたのだ。そのことをカリンが認識すると同時に、バリュウは空へと舞いあがって

いた。上陸地点が安全かどうか、確かめにいったのだ。

船をウランバートルの船乗りたちにまかせ、バリュウたち六人は火竜の尻尾の奥深く、神竜たちの棲む地を目指して出発した。

カマリアの慣れた案内で、一行は山地の入口へとむかって進んだ。

「今夜はここで野宿しましょう」

森の中の高台で、カマリアが足をとめた。そばには清水の湧く泉があり、間近に迫った火竜の尻尾の山々も一望のもとに見渡せる。

「お水風呂ですわ」

泉を見るなり、ツィッギーは叫んだ。長い船旅の間に、彼女はすっかり水浴びが恋しくなってしまったらしい。

「水浴びするのは勝手だが、この泉は結構深そうだから溺れたりしなさんなよ」

「私は、そんなドジじゃありませんの。こんな泉で溺れる人なんて、いるわけありませんわ」

注意するドンゴに、いらぬおせっかいだとツィッギーは頬を膨らませた。そのまま、娘たちはなし崩しに水浴びに興じ始める。

取り残された男たちは、丘の下の方で食事の準備にとりかかった。

魔法で火を熾せるパイパーは、今までもたびたび食事の当番をかってでていた。てもちぶさたのドンゴが、たいていそれを手伝う。もっとも、そばで見ていないと、パイパーが何を作り

始めるかわからないといった怖さがあるせいではあったが。
「どれ、そろそろッィッギーたちを呼んできてはくれませんか」
パイパーがバリュウに頼んだ。神竜は最初渋っていたが、再度頼まれてしかたなく泉まで飛んでいった。
しばらくして、びしょ濡れのバリュウがすっ飛んで帰ってきたとき、パイパーたちはできあがった料理をひっくり返さんばかりに笑い転げた。
ドンゴにいたっては、学習するということを知らんのかと真顔でバリュウに聞き返すしまっだ。
「カリンがいた……」
バリュウは真っ白な顔を珍しく赤く染めながら、放心したようにつぶやいた。
「そりゃ、いるでしょうが。一緒に水浴びをしていたのでしょうに。どうですかな、眼福を得られましたかな」
パイパーが、にやにやしながら訊ねた。
冷やかしはよしてくれと、バリュウは魔道士に抗議した。
そのころ上の泉では、カリンが耳まで水の中につかっていた。解いた髪が、水中に美しく広がっている。時々、ぶつぶつつぶやいているらしい泡が、目のあたりに浮かんではははじけていた。

「あの反応は侮辱ですわ」

腰の深さのところに立ったツィッギーは、細い腰に手をあてながら怒っていた。下ろした銀髪が、細い背中や豊かな胸元にぴったりとはりついている。結い上げてボリュームをもたせた普段と違って、濡れてぺったりとした今の髪形はツィッギーをまるで別な少女のように見せていた。

彼女のそばでは、カマリアがお腹をかかえて笑っていた。笑いの振動が身体をくすぐるたびに、水面に不規則な波紋が広がっていく。

容姿に関して言えば、カリンよりもツィッギーの方がよほどおうとつがはっきりしている。とはいえ、カマリアと比べてしまえば、体格と色気のともにツィッギーが見劣りしてしまうのは否めないが。

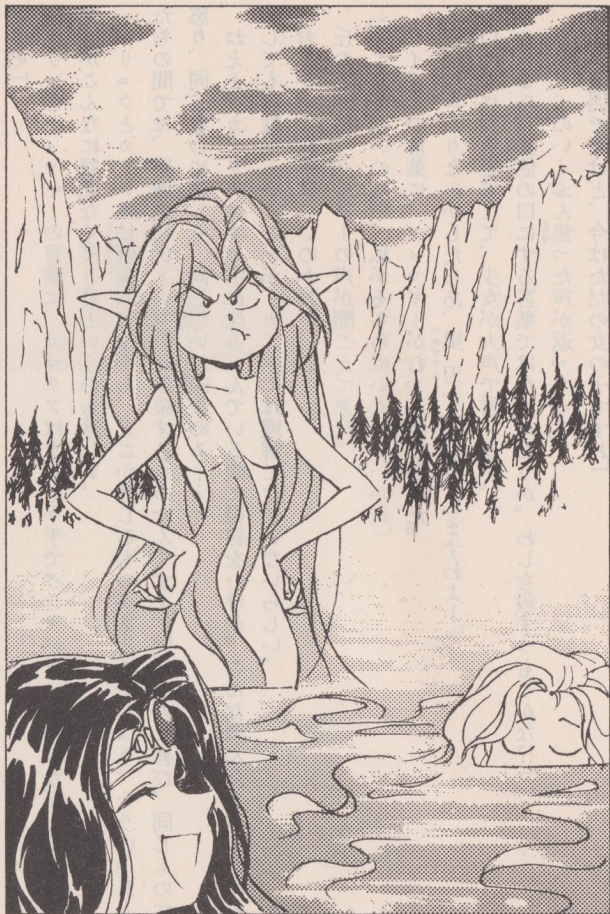
カリンと同等に扱われなかったことが、ツィッギーは不満らしい。羞恥心よりも納得できない怒りの方が前面に出てしまうのが、彼女がまだ少女である証しなのであろう。

「神竜に、人間の女の魅力を理解しろと言う方が無理ですよ。私たちが、ウォームに魅力を感じないのと同じようなものです」

「――ぼぼばぼべば、ばんばびばんびゃばび」

水の中で、カリンが何やら抗議めいた泡を発した。

「じゃ、なんで私のときは平気のへいへいで、カリンお姉様のときは真っ赤っかのかになるん

ですの」

カリンとツィッギーの言葉に、カマリアは水面を平手でパシャパシャと叩きながら笑った。

彼女がこんなに屈託なく笑う姿というのも珍しい。

「バリュウとカリンは幼馴染みですから、どこか通じるものがあるのでしょう。そういった人たちの間では、感情の起伏というのは伝染するものなんですよ。同じものに喜び、同じものに怒り、同じものに悲しみ、同じ想いに頬染める……」

ねえと、カマリアは水の中に沈みこんでいる娘に視線をむけた。こんな澄んだ水の中に何を隠しても無駄だということが、カリンには理解できていないらしい。

「おーうい。食事はいいのかね」

丘の下から、パイパーの声が聞こえてきた。

「聞こえてないのなら、私がそちらにいくがいいかね」

パイパーの言葉に、ツィッギーがむっと唇を曲げた。

「登ってきたりなんかしたらあ、風刃をお見舞いしますわよ!」

口の横に両手をあてて、少女が大声で言い返す。

「こらこら、僧侶の口にする言葉ではないだろうが。わしを殺すつもりかな!?」

パイパーのいくぶん焦った声が返ってくる。

「私は僧侶ですけど、今はただの女の子ですわ」

ツィッギーの返事に、男たちはやれやれと肩をすくめた。それから娘たちが髪を拭き衣服を整えるまでの間、彼らは実に辛抱強く待たねばならなかった。

3

「山に入ったら、周囲に注意してください。平地と違って、多くの怪物が潜んでおります。いつ彼らの領域に迷いこむとも限りません。いつでも戦える準備だけはしておいてください。もっとも、ほとんどは単独か小集団で生活しているので、おそるるにはたりませんけれど」

火竜の尻尾の中央へと続く道で、カマリアはみんなに注意を促した。飾環の宝玉の力を使って、進むべき方向を探りながら慎重に歩いていく。

ここにたどりつくまでに、彼らは何者にも襲われなかった。それが、限りなく不自然なことだと彼女は感じとっていた。

わざと見逃してもらっているのか、あるいは、驚くほどに運がいいのか……。後者の可能性は捨てるべきであると、彼女は賢明な判断をくだした。ズィドゥールがすべての禍の源ではない。神竜たちを脅かす存在は他にある。

道は登りとなり、見るからに植生が変わりだした。

一行は、次第に山地の奥深くへと分け入っていく。

バリュウは、一歩一歩同族たちに近づいているという期待と不安に胸を震わせた。

「こんな山道で野宿するなんて、あまりぞっとしない話ですな」
道をふさぐ小枝を手で払いのけながら、パイパーが木立の間の薄暗がりを不安げに見つめた。
「じきに町が見えてくるはずなのですが……」
木立の間からかいま見える山々の姿を逐一確かめながら、カマリアはバリュウたちを導いていった。
「こんな所に、人が住んでいるのですかな？」
パイパーが周囲に目を走らせる。山も森もひっそりとしていて、とても集落があるとは思えない。
カマリアは間違いなくあると答えると、先を急いだ。
やがて山の中腹に、忽然と小さな町が現れた。
堅い木製の壁が、町の周囲を囲んでいる。カマリアは壁の一部にある閉ざされた扉をどんどんと叩いて、中に入れてくれるように請うた。
反応はなかった。
パイパーが、やはり人がいないのではないかと疑いだす。
壁を飛び越えて内側から扉を開けようと、バリュウが提案した。彼が翼を広げると、ようやっと扉につけられたのぞき窓が誰かの手によって動かされた。とたん、神竜の姿を認めた門番が、慌ててのぞき窓を閉じる。

「待ってください、私たちは怪しい者ではありません」

慌てて娘たちが門番を呼び戻した。何度も叫ぶうちに、ようやっと門番が戻ってくる。

「何者だ、このポンペイの町になんの用だ」

微かに震える門番の声が、壁の向こう側から聞こえてきた。門の扉は堅く閉ざされたままで、町はかたくなにバリュウたちを拒んでいた。

町を目の前にして、こんな所で野宿するのはまっぴらだ。カマリアたちは、ボルカノンの名前を出して懸命に門番を説得した。

ボルカノン神の名前と、外見と違って穏やかなバリュウの様子に、門番はやっと恐怖心を消してくれた。そこへ、ドンゴがだめ押しに輝水晶の細工物を袖の下として彼に渡した。ようやく、門番が上の者にうかがいをたててくれる気になる。

やがて、ポンペイ王の名で都市の門が開かれた。

国と言っても、ポンペイは小さな都市国家だ。王の住まいも、王宮というよりはこぢんまりとした屋敷と呼ぶにふさわしい。バリュウたちは、謁見の間と呼ばれている、屋敷で一番大きな部屋に案内されていった。

ポンペイ王は、ドンゴから献上されたいくつかの細工物を気にいってくれたようだった。玉座に座った顔がにこやかに笑っている。

流暢に挨拶を述べるバリュウに、王はひどく感心した。あるいは、珍しい神竜に対して、子

供っぽい興味に駆られたのだろう。
「この火竜の尻尾に、本当に神竜が棲んでいたとは。いやはや、わしはなんとも嬉しいぞよ。みんな、オデュルーク老の言う通りだな」
ポンペイ王の言葉に、バリュウはカマリアを振り仰いだ。
「私のような神竜を見たことはないのですか……」
バリュウは、王をはじめとするポンペイの人々に訊ねた。同時に、カマリアに対しての反問とする。
「実際に見た者はおらんな。もともと彼らは、この火竜の尻尾に隠れ棲む神聖な種族であるからの。言い伝えによれば、光の降臨を起こす火の山に隠れ棲んでいるということじゃが」
「光の降臨?」
バリュウが、ポンペイ王に聞き返した。
「火竜の尻尾の中心にある火の山は、時々光の柱を噴きあげるんじゃよ。光の噴火とも呼ばれているがな。空に噴きあがった光は、天空の星ではね返っていくつかの細い光の柱としてパルメキアの各地に降臨するのじゃ。それはそれは美しい様でな。我々は、それを光の降臨と呼んでおる。詳しく知りたいのなら、オデュルーク老に訊ねるがいい。彼は、実際に神竜を目にしたこともあるそうだ。不思議の話を、よく我々に聞かせてくれるよい翁でな。ここでは、彼は賢者の称号を持っておる」

ポンペイ王は、バリュウに答えた。
「陛下、もしよろしければ、その賢者の方を紹介してもらえませんでしょうか」
パイパーが、王に頼んだ。カマリアがパルメキアを離れた後の情報がほしいと、彼はバリュウに耳打ちした。
「では、誰かに案内させよう。さらに、今日の宿を提供してくれるようにわしから頼んでやろう」
ポンペイ王は侍従の者に、バリュウたちをオデュルーク老の屋敷に案内するように申しつけた。

4

案内役をかってでたのは、エルリックというケンタウロスだった。
彼は大陸を巡っている旅の途中なのだという。今は、火竜の尻尾のどこかにあるというケンタウロスの光の宝剣を求めているのだそうだ。
「その手掛かりを求めて、今はポンペイ王の所に身をよせているのですよ」
穏やかな口調で、エルリックは語った。素朴でおおらかなポンペイ王とくらべて、遥かに気品のあふれる物腰だ。細かな出身は語らないが、由緒ある家系の出なのかもしれない。
「その賢者という人は、どういう人なの」

「食えない人物ですよ」

カリンの問いに、エルリックは苦笑した。

「あの老人のおかげで、私はずっとここに足留めされているんです。賢者と呼ぶにふさわしい知識を備えてはいますが、なんにせよ変わり者でね。なかなか、こちらの知りたいことを教えてはくれない。宝剣のありかを本当は知っていると睨(にら)んではいるんですが」

話を交わすうちに、バリュウたちは目的地に到着した。

オデュルークの屋敷は、ポンペイ王の住まいに次ぐ大きさを誇っていた。

エルリックが、オデュルークの召使いに主人を呼んでくるように告げる。

やがて現れた老人は、骨ばった顔についた目を大きく見開いて驚いた。

「なんと、神竜とな。これはこれは、なんとしたことだ」

話を聞いたオデュルークは、しばらくぽかんとバリュウを見つめていた。その瞳(ひとみ)が、順に神竜の仲間たちに注がれていく。カリンからカマリアまで全員を眺め渡すと、ふむと片方の眉毛(まゆげ)がつりあがった。

「いや、すまなんだ。話はゆっくりと中で聞かせてもらおう。ささ、遠慮せずに入りなされ」

オデュルークは、バリュウたちを屋敷の中へ招きいれた。エルリックは、また後で参りますよと老人に告げると、王の下へと帰っていった。

「ゴリアス、お客様たちをテーブルにご案内しろ」

光沢のある赤紫のガウンを着たオデュルークは召使いに命じると、節くれだった指で居間のテーブルを指さした。
勧められた椅子に腰を下ろしながら、バリュウたちはあらためて部屋の中を物珍しそうに見回した。
装飾過多といえばよいだろうか。オデュルークの屋敷の中は、様々な家具調度品に埋め尽くされていた。それも、どちらかといえばとりとめがない。間仕切りに使う東方のついたてがあるかと思えば、黒い艶消しの鎧が飾ってあったり、壁際でからくり時計が時を刻んでいたりする。
一つ一つは立派な芸術品なのかもしれない。けれども、こう雑多に集められては、単なるがらくたにしか見えなかった。
召使いが、テーブルの上にあったさしかけのチェスを、崩さないように注意しながら他の場所へ移動していく。
「チェスをおさしになるのですか」
奥まった席に身体を納めたオデュルークに、バリュウが訊ねた。
「王が好きでな。よくさしにくるのだよ。あるいは、わしが王の下に出むいたりと、交互に対戦しとる」
紫の二角帽の下の蓬髪をゆらしながら、オデュルークは答えた。服や帽子の色が照り映えて、

くすんだ銀鼠色の髪が淡い紫に染まって見える。

「特に、そのチェスは一級品でな。黒い部分はボルカノ山の黒曜石、白い部分はミトゥラ神殿と同じ白大理石でできておる。そもそも、これはグランス島のさるドワーフの名匠の作で、わしがこれを手に入れるきっかけとなったのは……」

バリュウはしまったと思ったが遅かった。それからしばらくの間、オデュルークはたっぷりとチェスの自慢話を続けてくれたのだ。収集家にコレクションに関する質問をしてはいけないというよい見本だった。

よけいなことを言うからよと、カリンがバリュウの脚を軽く蹴飛ばした。

バリュウはカリンの方をむいた片目を軽くしかめると、神竜のことをオデュルークに訊ね始めた。

「答える前に訊ねたいが、本当にお前さんは他の大陸からやってきたのだな。この火竜の尻尾に住む神竜ではないのだな」

オデュルークが念を押す。バリュウはそうだと答えた。

「ならば、手ぶらでこの大陸に渡ってきたわけではなかろう」

カマリアにさっと視線を走らせてから、オデュルークは神竜に問い返した。

「――マヌアルを持ってきたと見たが、違うかな」

「御老体は、なんでもお見通しのようだな」

むすりとドンゴが答える。口が軽いと、パイパーが彼を叱った。
この期に及んで隠し通してなんになると、ドワーフは突っぱねた。
「ドワーフの言う通りだ。わしの前で隠し事をしても無駄なことだぞ。まあ、その正直さに免じて、こちらも知っていることをつつみ隠さずに話そうではないか」
オデュルークが指をパチンと鳴らすと、召使いが紅茶を運んできた。
ひとまず、勧められた紅茶をバリュウたちは素直にいただいた。
香と酸味の強い紅茶を何度か口に運んだとき、ふいに皿の上で茶碗が踊りだした。室内の置物たちが、がたがたと一斉に騒ぎだす。
何事かと、バリュウたちは慌てて周りを見回した。
床が動いている。いや、大地そのものがゆれているのだ。
地震というものに馴染みのないバリュウたちは何が起こったのかわからず、椅子に座ったまま狼狽していた。一人、落ち着きを保っているのはカマリアだけである。
何かが倒れる音がした。ツィッギーが、慌てて外へ逃げだそうとする。
「慌てなさんな。小さな地震だ。最近ちょくちょく起こるやつだ」
オデュルークはゆれをものともせず、平然と紅茶を一口すすった。
やがて、始まったときと同様に、ぴたりとゆれはおさまった。
「こんな怖いことが、ここではちょくちょくあるんですのお」

恐る恐る席に戻ったツィッギーが、落ち着き払った老人に訊(たず)ねた。

「火竜の尻尾(しっぽ)には、その名の通りの火の山がいくつもあるからのお。まったくなかったわけではない。しかし、ここしばらくは、頻繁(ひんぱん)に小さな地震が起こるようになっとる。しかも、今のようにだんだんと強くなってきておるのだ」

「なぜ、そんなことが起きるようになったのですか」

「その理由は、そこの娘がよく知っておろう」

バリュウの問いに、オデュルークはすっとカマリアを指さした。

「大地の力の調和が崩れ始めている。――そう言いたいのですね」

「然(しか)り」

カマリアの答に、オデュルークは鋭くうなずいた。

「神竜たちの守る大地の力を、魔に属する者たちが手に入れたということだ。だが、未(いま)だに大いなる力は創造にも破滅にも使われてはいない。つまり、奴(やつ)らは、大地の力を統(す)べるためのマヌアルを手に入れてない。あるいは、途中で失ってしまったかだな」

オデュルークの推測に、カマリアは後者だと述べた。

「ボルカノン神の話では、神竜たちとの戦いで、魔物たちの奪い取ったマヌアルは壊れてしまったということです。そのため、封印を解かれた大地の力は、不完全な形で増大しています。さきほどの地震も、その表れでしょう」

「ボルカノン神とは、また、たいそうな者を持ちだしてきおったの」
オデュルークは、古い記憶を呼びだすかのように軽く小首をかしげた。
「――つまりは、大地の力が暴走しかけていると。それを押さえるために、お前たちは神竜の住む火の山にいこうというのだな」
「そこに神竜たちがいるのですね」
バリュウが身を乗りだした。急激な体重の移動に、彼の下の椅子（いす）が悲鳴をあげた。
「いたというのが正しいだろう。魔物たちと戦ったのなら、敵を撃退したか、あるいは全滅したかだ。大地の力が不完全に働いているところから見て、魔物たちに滅ぼされてしまったとみるのが正しかろう」
老人の答に、バリュウは衝撃を受けた。ここまできて同族が滅んでいたとしたら、バリュウはなんのために海を渡ってきたのだろう。
「それはまた、賢者らしからぬ結論ですな。早計と申してもいい」
パイパーが反論する。
「こうは考えられませんかな。神竜たちは動きだした大地の力を魔物たちから守って、未（いま）だに戦い続けていると。戦いでマヌアルが失われてしまったため、彼らは力をとめることができずにいるのだと。――現に、カマリアは、まだ無事な神竜たちと会っているのでしょうに？」
パイパーは、最後の方の台詞（せりふ）を真向かいに座るカマリアに投げかけた。

「ええ、御神託を受けたときに、神竜たちの幻影(ビジョン)をボルカノン神に見せていただきました。彼らは、火の山の中心で大地の力を守り続けておりました」
自信をもってカマリアが答える。
「直(じか)に顔を合わせたわけではなかろう。それは、確証ではないぞ」
「あなたは、ボルカノン神の御神託をお疑いになるのか」
カマリアは、鋭くオデュルークに言い返した。
「わしは、ボルカノンを疑うことはせんさ。だが、その状況が今も続いているとは言い切れんと述べているにすぎん」
オデュルークとのやりとりに、バリュウは困惑の度を深めていた。同族に会いたい一心でここまでやってきたのに、まるで目の前に築きあげた砂の城が一瞬の波に跡形もなくさらわれてしまったかのような気分だった。
「だったら、確かめればいい。いってみなければわからないのなら、いって確かめるべきよ」
カリンの言葉が、バリュウの迷いを吹き飛ばした。
「いく先には、魔物たちがてぐすね引いて待ち構えているかもしれんのだぞ」
オデュルークが脅す。
「放っておいても、大地の力は自壊する。多少の被害は出るだろうが、すべての力が暴走したり、魔物たちに自由に利用されるよりは遥(はる)かにましだろうよ。火に手を出せば火傷(やけど)をするのが

道理。下手なちょっかいは出さないままでいるのが一番いい……と、わしは思うがな。ここは、人のいい人間ばかりの町だ。しばらくここで暮らすのも悪くはない。あるいは、パルメキアの土産話とともに、母国へ帰るのが最善かもしれんな」

「多少の被害とは、どのくらいのものなのだ？」

ドンゴがオデュルークに訊ねた。

「火の山一つが消し飛ぶか、あるいは火竜の尻尾全部が消えてなくなるか。はっきりとはわからんが、いずれにしろそんなものだろうて。それで、魔物たちの野望が未然に防がれるのだ。世界からくらべれば、微々たる損失だよ」

平然と賢者を名乗る者は答えた。

「冗談じゃないわ、それのどこが微々たるものなの！」

カリンが叫ぶ。彼女の言葉は、全員の気持ちを代弁していた。

「大局を見れば、そういうことになる。破滅よりは、厄災の方が遥かにましだということだ」

相変わらず、オデュルークの表情に変化はなかった。本気でそう思っていることが、バリュウたちには手に取るようにわかった。

「賢者殿、あなたは私たちに帰るように勧めるが、私はそうは思わない。もし、私の仲間がまだ勇敢に戦っているのなら、たとえ一人でも救いだしたい。まして、彼らがすでに滅んでいるのならば、彼らの意志を継いで大地の力を封印するのが、神竜としての私の務めだと思う」

バリュウは、確固たる意志をもって宣言した。神竜がすでに幻影と成り果てているとしても、それを乗り越えなければ彼はいつまでも幻影に悩まされ続けることになる。

「神竜の務めとな」

オデュルークは嘆息した。

「さて、神竜であることに、どれだけの意味があるのかは疑問だが。——大口を開けて待ち構えている獣にむかって、わざわざ餌を放りこんでやる馬鹿もおらんだろうに。やれやれ、少し頭を冷やした方がよさそうだな」

オデュルークは節くれだった指をくねらせながら、バリュウたちをさし示すように手を水平に動かした。

とたん、激しい眠気がバリュウたちを襲った。ふいをつかれ、全員がなす術もなく眠りに落ちていく。

「何をし……た……」

立ちあがりかけたバリュウが、倒れるようにしてテーブルに突っ伏した。

「睡魔の魔法だ。しばらく、旅の疲れを癒すために眠るがいい」

まどろみに囚われたバリュウたちを、オデュルークは静かに見下ろした。

5

頬をなでるひんやりとした冷たさに、バリュウは深い眠りから目覚めた。
「おはよう。ずいぶんとお寝坊さんだったわね」
カリンの顔が、彼の目の前にある。
びっくりして、バリュウは顔をあげた。
彼女の手には、水の入った花瓶が握られていた。さきほどの冷たさは、カリンのちょっとした悪戯だったらしい。
バリュウの完全に目覚めきっていない頭は、ここがドラゴニアの自分の家であるかのような錯覚におちいった。自分はどこにも出かけてはいない、いつもの寝台の中でずっと長い夢を見続けていたのだと。
「いいかげんに目を覚ましなさい」
カリンが、バリュウの頬をぺちぺちと叩く。さすがに、バリュウは身体をしゃきんとのばして周りを再確認した。やはり、自分だけに都合のいい夢など、実際にはありはしない。
カマリアやカリンをはじめ、全員が無事な姿で彼の周りにいる。ひとまず、バリュウは、ほっと安堵の息をついた。
品のいい小部屋の中に彼らは閉じこめられていた。女性用に造られたものであろうか。家具や部屋の色調などが、年頃の娘の好きそうなものになっている。ただ一つ、壁の一方が鉄の格子になっていることをのぞけば……。

「趣味の悪い牢獄(ろうごく)ですな」

鉄格子を調べていたパイパーがつぶやいた。御丁寧に、魔法封じの呪紋(じゅもん)が部屋のあちこちに施されている。

部屋の外は、たった一本の松明(たいまつ)の光でおぼろにうかがうことしかできない。さっするところ、地下室の一画であるように見える。

マヌアルをはじめとする荷物は、すべてどこかに持ち去られていた。

誰(だれ)が悪いわけではない。不覚をとった自分にこそ最大の責任があるとバリュウは反省した。唯一の希望は、オデュルークが魔物たちの仲間ではなさそうだということだけだ。

「なあに、前のときみたいに、取られたものは取り返せばいいんだ」

バリュウは努めて明るくふるまった。

「やっとお目覚めかな」

ふいに松明以外の光がさしこみ、その中からオデュルークが現れた。開けた扉の中からさしこむ室内の光を背に、老人はゆっくりと階段を降りてくる。扉のむこうには、覚えのあるがらくたの姿が見える。ここが屋敷の地下室であることは、間違いなさそうだ。

「荒っぽいまねをしたことには、わびを言おう。だが、お前たちは、自分たちが誰を相手にしているのかもわからんと見えたのでな。心配して閉じこめてやったのだ。少し、頭を冷やしてもらおうと思ってな」

「それはそれは。わしらは、礼を述べねばならんのかな」
ドンゴが、皮肉を込めて言った。
「あなたは、神竜たちを襲った者たちの正体を知っているのか」
鉄格子の前までやってきたオデュルークに、バリュウは訊ねた。
「悪魔王ルシファー……。かつて、ダークソル様やゼノンとともに、世の覇権を争って戦った闇の指導者の一人だよ。たとえ、その力のほとんどをボルカノンとミトゥラに封印されているとはいえ、お前たちだけではかなわぬ相手だ」
オデュルークの言葉に、カマリアはピクンと目許をひきつらせた。同様に、バリュウも驚きを新たにする。
「私たちが敵に回した相手は、ダークソルに匹敵するというのか」
「力の上では互角だった」
オデュルークは、バリュウに答えた。
賢者を名乗るとはいえ、知り過ぎているこの老人の正体に、バリュウたちは疑問をいだかずにはいられなかった。
「でも、バリュウはダークソルを倒したわ。そのルシファーがダークソルと同じ力の持ち主だというのなら、バリュウは決して負けたりしないわ。負けるものですか」
カリンの言葉に、今度はオデュルークが驚く番であった。

「なんと、そこの神竜一匹だけで、あの悪魔王を倒したというのか」
「いや、私一人の力ではない」
　バリュウは頭（かぶり）を振った。
「――だが、私と仲間たち（シャイニング・フォース）が、ダークソルを倒したのは事実だ。魔族とて無敵ではない。現に、私たちはここにくるまでにズィドゥールという魔物を倒してきている」
　神竜の言葉に、オデュルークは大声で笑いだした。
「一応、魔将軍を騙（かた）ってはいるが、ズィドゥールなど下っ端も下っ端。ダークソル様配下のミシャエラやゼノン配下のオッドアイなどの他の魔将軍とくらべても、地獄の番犬（ヘルハウンド）と大鼠（ヒュージラット）ほどの差があるわ。だが、これでよくわかった。なぜ、マヌアルに強い呪（のろ）いがかけられているのかが」
「呪い？　どういう意味だ、それは」
　バリュウが聞き返す。そのような話は、オトラントからも聞かされてはいない。もしかすると、マヌアルに触（ふ）れたときに彼が感じた、あのいいようのない不安と恐怖感。あれが呪いだというのであろうか。
「知らずにここまできたのか、いやはや、呆（あき）れたものだ。なぜ、マヌアルが東方の封魔の刻印を施された箱に納められているのか、その理由にお前たちは気づかなかったのか」
　オデュルークの言葉に、バリュウはパイパーを振り返った。質問するよりも早く、魔道士が

首を横に振る。どうやら、彼もこのことは知らなかったらしい。
「おそらく、マヌアルは一時期ダークソル様の手にあったのだろう。あの方の他に、これほど強い呪いをかけられる方はおらんからな。それにしても、とんでもない呪いがかかっているものだ」
「いったい、どんな呪いがかかっているというの」
　微かに声を震わせながら、カリンが聞いた。もともと、彼女はマヌアルのことをあまりよく感じてはいなかった。その感覚に、呪いという単語が与えられたのだ。漠然とした不安は、よりはっきりとした不安に形を変える。
「もしマヌアルの力を使おうとすれば、必ずなんらかの代償が必要となる。また、魔族以外の者は長くあれを手にすることはできないのだ。持ち主は必ず不幸に見舞われて、マヌアルを手放すこととなるだろう。やがて、魅せられた数多の手を渡り歩いた末に、あれは魔族の下に戻ってくる。よくできたものだよ」
　はたして、バリュウもまたその呪いにかかってしまっていたのだろうか。カリンは、惑いと不安の入り交じった目でバリュウを見つめた。
「しかし、これでよりはっきりした。絶対に、お前たちを火の山へいかすわけにはいかん。いけば、間違いなくルシファーにマヌアルを奪われるだろう。そうなれば、奴は大地の力を使って、破壊と破滅の快楽に身をゆだねることになる」

そうであろうがと、オデュルークは一同を鉄格子越しに見渡した。一人、カマリアだけが、明確にその視線をはねのける。

「ルシファーは、神竜たちの持っていたマヌアルで、大地の力の封印を完全に解いてしまっています。ただ、その後マヌアルが損なわれてしまったため、力を完全に操ることができないでいるのです。彼は、大地の力を自由に操る術をマヌアルに求めています。放っておけば、ルシファーは不完全なマヌアルを使ってでも大地の力を動かそうとするでしょう。それは力の暴走、破滅を意味します。あなたは、それを放っておけとお言いになるのですか」

きつい語調で、カマリアは老人に問いただした。

「それは神託かな」

揶揄するように、オデュルークはカマリアに聞き返した。

「どうとでもおとりなさい」

カマリアは、厳しいまなざしで老人を見据えた。

「マヌアルを使ったからといって、大地の力は完全に自由にできるようなものではない。誰も、そのことを理解しておらんようだの」

老人はコツコツと靴音を響かせながら、牢の前をいったりきたりし始めた。その歩みは、知識と事実のみを追い求める学者のように見える。

「力とは点ではない、すべての力は連なっているのだ。都合よく、力を一点に集中させるなど

ということはできんのだよ。どこかに破壊の力をむけようとすれば、それは他の場所に歪みを引き起こす。歪んだ力は安定を失い、すべての力を破壊へとつなげていくのだ。一は二を呼び、二は四を呼び、四はすべてを呼び起こす。一つの野心は、すべてを滅ぼすのだ。――カマリア……だったかな。だから、わしは野心を捨て去ったのだよ。ルシファーたちには、まだそれが理解できんとみえる。古き力も、今はもういらぬ」

オデュルークは、深い溜め息をついた。ふたたびあげた顔は、カマリアにむけられていた。その視線の意味することに、カマリアは困惑するように眉根をよせた。

「いろいろなことを知っているようだが、あなたは一体何者なんだ」

バリュウが叫んだ。オデュルークは彼を振り返ると、含みを持った笑みを返した。

「役に立たないものを集めるのが趣味の、ただのおいぼれだよ。王はチェスの相手だと思っているし、町の人々はただの物知りなじいさんだと思っている。愚かな者たちにとっては賢者かな。――どちらにしろ、お前たちの好きなように呼ぶがいいだろう。それが、お前にとっての、わしなのだからな」

「答になってませんわ」

ツィッギーが不満を述べた。

「そうかな。隠居して、やっと何者でもない者になることができたのだ。隠居するということは、自分自身にもとらわれないことを意味するからの。いまさら、昔に戻るつもりはないな。

過去はしょせん過去でしかないからの」

老人は、自嘲ぎみに嘯いた。

「神竜たちには悪いが、わしは大地の力などなくなってしまえばいいと思っとるのだよ。そも、大地の力とはなんだと思うかな」

問われて、バリュウは返事に困った。大いなる力としか、彼はカマリアから聞き及んではいない。

「大地の力とは、このパルメキア大陸に点在する神々の遺産に力を送っているからくりそのものをさすのだよ。地の奥底から汲みあげた熱を力に換えて、各地の遺跡に送っているのだ。たとえば、光の道を思いうかべてみるがいい。遥か空高く、星々の間を漂う虚空の城まで行き来できるほどの力を持つ魔道の通廊も、すべては大地の力で動いておる。それら古代の力のすべての源が、お前たちの呼ぶ大地の力なのだ」

「素晴らしい。そのような力なら、我々魔道士が管理すれば、どれほど人々のために役立てられることか」

パイパーが知識の触手を動かす。この場にクリンがいたら、彼女はなんと意見を述べたことだろうか。

「愚かなことを……」

オデュルークは、にべもなくパイパーの意見を退けた。

「神々の遺産など、何の役に立つ。あんな物は禍の種にしかならん。もともと、古き神々はその遺産の使い道を誤ったために滅んだのであろうが。あれは遺産などではない。しょせんは過去の遺物だよ。幻想という呪いのかけられたな。――大地の力の供給さえなくなれば、一部をのぞいてほとんどの遺跡は無害ながらくたと化す。わしのコレクションのようにな。もともと、遺跡というのは何かの力をもつようなものではなく、ただ、時を越えて語りかけてくるものではないのかな。力を失ってこそ、遺跡は本当の意味での遺跡になるのだ。過去のものなら過去のものらしく、おとなしく転がっておればいい」
「でも、それでは神竜たちが滅んでしまいます。火の山の神竜たちもまた、大地の力の恩恵を受けているのですよ。それがなくなれば、やがて彼らは滅んでしまうのです」
「しかたがあるまい」
カマリアに対して、オデュルークは一言で片をつけた。いきりたったカリンが、鉄格子に顔を押しつけんばかりにして老人に詰めよった。
「ひどい。あなたに、神竜の未来を好きにできる権利なんてないはずよ。それでは、そのルシファーやズィドゥールたちと同じじゃない」
「かもしれんな」
オデュルークは何がおかしいのか、突然大声で笑いだした。その声は、カマリアの耳にひどく障った。

老人の反応にむっとしながらも、バリュウは自分の気持ちを代弁してくれたカリンに感謝した。

「結局、大地の力か悪魔王のどちらかが消えてなくなればよいと御老体は考えておられるのだな。ならば、話は簡単だ。その悪魔王をわしらで倒してしまえばいい」

ドンゴの言葉に、オデュルークはぴたりと笑い声をとめた。

「大言を吐くドワーフだの。確かに、放っておけば、奴は同じことを何度でも繰り返すことだろう。ルシファーの脅威が完全に取り除かれれば、それに勝ることはない。——もっとも、ルシファーが滅んで喜ぶのは、わしよりもグランドシールの柱に封印された悪魔王ゼノンの方であろうがな」

パイパーがドンゴに同調した。

「やる前からできないと決めつけるのは、年寄りの悪い癖ですな」

二人は、バリュウに過大な期待をよせているのだろうか。いや、きっと彼らに問えば、それは期待ではなく信頼であると答えることだろう。

「だが、誰が倒すというのだ。お前たちでは無理なことは明白であろうが。このわしにあっけなくしてやられるようでは、とても悪魔王の相手などはできまい。勝てる見込みはないに等しいぞ」

バリュウたちは耳が痛かったが、だからといって引き下がるわけにもいかなかった。

「いえ、可能性がないわけではありません」
カマリアが、オデュルークの言葉を否定した。
「ルシファーは、冷たき身体の服従は得ても、熱き心の信頼は得ておりません。忠誠を誓う臣下を持たぬ王は、しょせん偽りの王。案外に脆いものですわ」
「そんなことがなぜわかる」
「神託……と申しておきましょう」
カマリアの答に、オデュルークはふんと鼻を鳴らした。
「仮にそうだとして、お前たちは無傷でいられるのか？」
その言葉に、カマリアはびくんと身体を強ばらせた。その微かなふるえを握り潰すように、彼女は胸の前で片手をきつく握り締めた。バリュウは……、言葉を発しなかった。
「私たちを自由にしてください。ルシファーを倒し、神竜たちを救い、そして、この地のすべての生き物に対しての平和を……」
「——らしくない言葉だ」
言い残して、オデュルークは地下室の出口へと足をむけた。
「待ってくれ、話を聞いてくれ。私たちをここから出してくれ。オデュルーク老!!」
鉄格子を握り締めながら、バリュウが叫んだ。
「無駄だよ。力でも魔法でも、その格子は破れはしない。当然、他の壁もだ。自分たちの力を

過大評価しなくなるまで、じっくりと頭を冷やすがよい。──後で、朝食を届けさせよう」
　バリュウの叫びを無視して、オデュルークは地下牢から去っていった。

6

　しばらくして、オデュルークの召使いが食事を運んできた。
　だが、とりつく島もなく、食事を格子の間から差し入れた召使いは会話を避けるようにして去っていく。それは、昼食以降も同じであった。
　──丸一日が過ぎ去った。
　むろん、バリュウたちとて、ただ手をこまねいて過ごしていたわけではない。
　だが、パイパーたちの魔法は、まるで効果を発揮しなかった。鉄格子はドンゴの力でも曲がらなかったし、バリュウの竜雷気息にも耐え抜いた。カリンは抜け穴になりそうな場所を探しまわったが、見つけることはできなかった。
　しまいには、業をにやしたカマリアが、前にドンゴからもらった短剣を使って、鉄格子に刻みこまれた呪紋を削りとろうとまでした。とりあげられなかった得物は、それしかなかったのだ。だが、鉄の格子を短剣などで削れるはずもない。刃こぼれするだけ無駄だと、ドンゴが慌てて彼女をとめた。
　気は急いたが、だからといって、それでどうなるわけでもなかった。

幸いなことに、部屋には個室の厠もついていた。おかげで、女性たちが大騒ぎするはめにはおちいらなかった。だが、この部屋がもともとなんのために使われていた部屋かを想像すると、あまり気持ちのいいものではなかった。

人数分の毛布もあったが、ほとんどが床で雑魚寝せねばならない状況に変わりはない。

はがゆさで眠れぬ夜を過ごした後、召使いが四度目の食事を運んでくる時間になった。だが、彼はなかなか現れなかった。

バリュウが不審に思い始めたころ、地下室の扉が開いた。

予想に反して、地下室に降りてきたのは、一昨日にバリュウたちをこの館へ案内してくれたケンタウロスであった。

「やはりここだったか」

エルリックは、人間用に造られた階段に難儀しながら地下室へ降りてきた。

「どうやってここへ。あの老人はどうしたんだ」

バリュウがケンタウロスに質問した。彼は、なぜここに現れたのだろう。老人の仲間なのだろうか、あるいは、彼の敵としてなのか。

「町を出ていった様子がなかったのでね。まさかと思って探りを入れたのだが、もののみごとにオデュルーク老にしてやられたようだな」

輪に通された鍵の束をガチャガチャいわせながら、エルリックは答えた。

「彼は、いまごろは王とチェスの真っ最中だろう。さっき、私が迎えにきたのだから間違いはない」
順に鍵を鍵穴で確かめながら、エルリックは言葉を継いだ。
「でも、召使いがいたでしょうが」
「ああ、酒好きの彼なら、特製のやつでみごとに眠ってますよ。思った以上にあっけなかったですね」
カリンに答えながら鍵を回す彼の耳に、カチリと留め金の外れる音が聞こえた。エルリックは、満面に笑みを浮かべると鉄格子を開いた。
「さあ、囚われの姫君たちよ、どうぞ自由の世界へ」
おどけた虚礼の構えをとって、エルリックがカリンたちを手招いた。
「ありがとうよ」
野太い声で礼を言いながら、ドンゴが先頭で出てくる。彼に続くのがパイパーにバリュウだった。広げた手のやり場に困って、エルリックは苦虫を嚙み潰した顔になった。とはいえ、それも最後に出てきたツィッギーが、背伸びをしながら頰にお礼のキスしてくれるまでの短い間のことだったが。
「ありがとう。おかげで助かりました。だけど、私たちを逃がしてしまって、あなたは大丈夫なのですか」

訊ねるバリュウに、エルリックはちょっと困ったような顔になった。
「正直言うと、あまり自信はありませんね。たぶん、オデュルーク老はかんかんに怒るでしょう」
「じゃあ、なぜ……」
「私も、あなたたちと一緒に連れていってもらいたいと思いましてね」
エルリックの真意をはかりかねて、バリュウたちは思わず顔を見あわせた。彼は、バリュウたちの目的地を知った上で、ものを言っているのであろうか。
「私の求めるものは、この山地の中央にそびえる火の山にあると直感しているんですが、オデュルーク老が王に進言して登山の許可をくれないのですよ。いわば、私もあなた方のようにこの町に閉じこめられていたわけです。それに、さすがに、あの老人から情報を聞きだすことは私も諦めました」
「それで強行手段に出ようというわけですかな」
パイパーが聞き返した。そうだと、エルリックがうなずく。
「幸い、あなた方の中には地理に詳しい人がいるようだ。見知らぬ山に一人で迷いこむ愚だけはおかしたくないですから」
「出発するなら早いほうがいい」
荷物をかかえながら、ドンゴが皆に言った。ありがたいことに、バリュウたちの荷物はすべ

て地下室の角に無造作に積みあげられていた。

「大変、マヌアルがないわ」

　カリンが叫んだ。

「マヌアルは、私が探しましょう。とにかく、急いで上の部屋へ」

　カマリアが急かした。

　微かな不安が、彼女の胸に去来していた。不安……。何を恐れるというのだろう。何を失うのが怖いのか。以前なら思いもしなかった感情に、カマリアは密かに困惑した。

　屋敷の一階に出ると、マヌアルは意外と簡単に見つかった。とはいえ、オデュルークのコレクションの山の中にさり気なく埋められていたのであって、カマリアの宝玉の力がなければ見つけだすのは実に困難であっただろう。カマリアは、素早くマヌアルの入った背嚢を背負った。

「気づかれる前に町を出ましょう。ついてきてください」

　エルリックの先導で、バリュウたちは屋敷の外へとむかった。

　途中、テーブルの上にだらしなく突っ伏した召使いの横を音をたてないようにして通っていく。本当に眠っているのかとちょっかいを出しかけるツィッギーの手を、カリンは慌てて引っ張った。

　無事にオデュルークの屋敷を脱出したバリュウたちは、ポンペイの町の裏門を目指した。町を逃げだすにしても、そちらの方が表門よりは手薄なはずだ。

「変ね、門番がいない」
そっと門の様子をうかがいにいったカリンは、戻ってくるなり首をかしげた。
「好都合ですわ」
ツィッギーが、一人喜ぶ。
「ま、この子の意見はおいておくとして」
パイパーが、ぽんとツィッギーの頭に手をのせた。
「用心するにこしたことはないですが、機会を逸するというのもまた愚策というもの」
「おいおい、何を言っているのかよくわからんぞ」
ドンゴが、相棒に呆れた視線をむける。
「行動あるのみということだね」
バリュウはドンゴに答えると、率先して門に近づいていった。
張り番の詰めているはずの小屋は空っぽだ。本当に誰もいないらしい。
「外へいこう」
閂を外すと、バリュウは扉を内側に引いた。軽い軋みをあげて門が開く。
「わしが先にいこう」
先陣を申し出たドンゴが、門の敷居をまたごうとした。が、その場で見えない壁に阻まれて動きをとめる。体当たりをしようが、一歩も外に出ることができない。バリュウが、空から壁

を越えてみようとしたが、同じことだった。たぶん、町の外壁に沿うようにして、くまなく結界が張り巡らされているのだろう。

「参ったな、あの老人は思ったより抜け目がない」

「私がやってみましょう。私たちには解けないと思っていたのか、これはあまり強力な結界ではないようです。この程度なら、この宝玉の力で解けるかもしれません」

困り果てるバリュウに、カマリアが申し出た。

門の前に進み出ると、娘は跪(ひざまず)いて両手を組み合わせた。軽く目を閉じて、祈りにも似た呪文(じゅもん)を唱え始める。呼応するように、カマリアの飾環(サークレット)の宝石が鈍く輝きを放った。

「東に水霊、西に風霊、南に火霊、北に地霊。四霊を魔とし、四位を方と定め、しかしてこれを陣となさしめん。我、今、風を解き放ち、方を崩さんと欲す。陣をつくりし者、クリードの名において命ずる。門を開きて、我に道をあけよ」

それは微(かす)かなささやきに近く、はっきりと聞きとれた者はいなかった。

呪文を唱え終えたカマリアが、静かに立ちあがる。

門に変化があったようには見えなかった。もっとも、もともとの結界の障壁自体見えなかったのだから、目で何かが確認できる必然はない。

「いきましょう」

カマリアが、バリュウたちを促した。

先頭に立った彼女が、するりと門をくぐり抜ける。バリュウがその後に続き、残りの者も次々に町の外へと出ていった。

「みんな出られたな。よし、先へ進もう」

バリュウは全員を確認すると、火竜の尻尾の奥深くへむかって歩きだした。一同が、その後に続く。

だが、カマリアは素直にその一歩が踏みだせないでいた。

ここにきて、オデュルークと名乗っている老人の言葉が耳によみがえる。彼の言う通りではないのだろうかと、彼女の心の中で一つの声がささやいていた。彼とまったく同じではないにしろ、一つのよくない結果は彼女にも想像できる。確かに、破滅よりは厄災の方がましだ。西ではなく、東へ。火の山ではなく、船の待つ海へ。傷つく戦いにむかってではなく……。

――ここからルーン大陸へ戻りましょう。

その言葉を、カマリアは喉元に絡ませて苦しんでいた。もし、バリュウに問われたならば、それは間違いなく口に上っていたことだろう。

だが、バリュウは違った。

「さあ、カマリアも一緒にいこう」

彼はそう言って手をさしのべた。

戻ることよりも進むことを彼は彼女に示唆したのだった。たとえ、彼がそれを意識していな

かったとしても、効果は同じであった。

「ええ、今いきます」

カマリアは、バリュウたちの後を追って歩きだした。

7

火の山へむかう道すがら、エルリックの顔はだんだんと渋いものに変わっていった。行動をともにすると言う彼に、バリュウが順を追って説明したからだ。この先待ち受けているであろう敵のことを隠しておくのは間違いだし、余分な危険を呼びこむ基ともなりかねない。

「それは少し無謀だと思う。確かに、少数の精鋭で敵の中枢を叩く（たた）という戦法は、古来まったくなかったわけではないが。しかし、それは奇襲や奇策の類に入るものだ」

「では、あなたならどうすると？」

カマリアが訊ねた（たず）。

「私なら、ボルカノン神殿のそばに住む、ビドー国の鳥人（バードマン）たちに助力を求めますね。圧倒的な戦力を整えて敵を威圧し、半月に山を包囲する。そのとき、わざと一方向をあけておきます。そこから敵を逃がすことによって火の山を手中に納めるわけです。攻める側は敵に倍する戦力を持つのが、戦の常道（セオリー）だと教えこまれてきましたからね」

話についていけないツィッギーは、エルリックの上で小首をかしげた。

鬱蒼とした木々の間の山道はきついだろうと、エルリックは女性たちを乗せて運ぶことを申し出ていたのだった。もっとも、足に自信のあるカリンとカマリアは、あっさりとそれを辞退した。そのため、ツィッギーだけがその恩恵にあずかっている。

「カリンお姉様も乗せてもらえばいいのにと、ツィッギーはエルリックの背の上で何度かつぶやいた。カリンにしてみれば、鞍のないケンタウロスの背に女の子二人でだきあいながらしがみつくというのは、あまり嬉しい状況とは言い難い。ツィッギーの言葉を避けるように、カリンは別の話題を振った。

「けれども、その国は遠いのでしょう?」

カリンの問いに、エルリックとカマリアが同時にうなずく。

「――だとしたら、間に合わなくなる可能性の方が高いわね」

「マヌアルはこちらにあるのだから、時間は稼げそうだが」

「でも、神竜たちには、時間を稼ぐ術はないわ」

パイパーの意見を、カリンは否定した。

歩みをとめずに、それぞれが意見を交わしあう。

バリュウは、あえて聞き手に回った。今の彼には、感情的にならずに方針をたてる自信がない。

そして、カマリアはどちらの意見を支持していいのか真剣に悩んでいた。このまま火の山の

悪魔王の下へいくことが、絶対に正しいと彼女は言い切れなくなっていた。かといって、いまさらボルカノン神の下へいくこともできかねる。

知らず知らずのうちに彼女の足取りは重くなり、いつしかふっと立ち止まってしまっていた。後ろを歩いていたバリュウが、避けきれずに彼女にぶつかる。バリュウは、倒れかかるカマリアの身体（からだ）を、慌（あわ）てて後ろからだきとめた。

「どうしたんだ、カマリア？」

バリュウが訊（たず）ねた。

何事かと、一行の足がとまる。

「いいえ、つい考えごとを……」

カマリアが答えかけたとき、前方の木立がざわめいた。とっさにバリュウたちは身構えた。予想にもれず、道の先から小鬼（ゴブリン）の小集団が現れる。

小走りに道を急いでいた魔物たちは、バリュウたちを見つけると奇声をあげてむかってきた。双方の間には距離があった。間合いが近づく間に、ゴブリンたちが得物を構える。

「降りて!!」

エルリックが、背中のツィッギーにむかって叫んだ。カリンが、もたつく少女をつかんで引きずり下ろす。小さな悲鳴をあげて、少女はカリンの腕の中に転げ落ちてきた。

身軽になったエルリックが、先陣を切ってゴブリンたちに突進（チャージ）をかける。がっちりと構えら

れた金属製の騎槍が、先頭のゴブリンの身体を捉えた。小鬼の身体を騎槍の穂先にぶら下げたまま、少しも勢いを減じることなくケンタウロスの騎士は敵の間を駆け抜けた。

仲間の身体にはね飛ばされ、ゴブリンたちは地面に転がった。めまいのする頭をあげたとき、彼らの前には白い竜が立っていた。魔物の浅黒い顔が神竜よりも蒼白になるよりも早く、強靭な腕や尾の一振りがあっけなく彼らを屠っていった。

「どこへいくつもりだった」

樹に押しつけたゴブリンの喉に短剣をあてながら、カマリアが問いただす。仲間が一匹残らず倒されるのを目のあたりにして、彼女の手の中のゴブリンは言葉を詰まらせた。再度、答えろとカマリアが脅した。

「ポ、ポンペイ、襲う。神竜たち、みんな殺して、マヌアル奪う。だから、様子見てくる。それ、命令。――俺、許す、欲しい。全部、殺すつもり、ない。お願い、カミ……」

片言のゴブリンの言葉に、カマリアの目がしかめられた。哀願するゴブリンの喉の上で、短剣がすっと横に動かされた。短剣とともに流れるように動いたカマリアの身体の横で、放されたゴブリンの身体が前のめりに倒れる。魔物の喉からは鮮血が吹きだし、声は血を泡立てる音となってついえていった。

「バリュウ、魔物たちはポンペイの町を襲うつもりだわ」

カマリアが叫んだ。

「なんだって。いったい、どのくらいの数の魔物が町にむかったんだ」
　エルリックがいろめきたった。
「さあ、おそらくこの魔物たちは先鋒の偵察隊かなにかでしょう。いくらなんでも、こんな小物しか送り出さないほど、ルシファーは愚か者ではないはずですから。だとすれば、斥候を送り出すほどの規模だということです」
　賢しいとカマリアは思う。雑兵を一気につぎこんできたに違いない。そこにどのような意志が働いているのか。カマリアは、必死にそれを推し量ろうとした。
「——戻ろう」
　エルリックが提案した。
「このことを、早くポンペイの人たちに知らせなければならない。ポンペイ王に対して、私は世話になった恩義がある」
「いいえ、このまま火の山へむかうべきです」
　カマリアは、きっぱりと言い放った。ルシファーは動いたのだ。迷いは、振っ切らなければならない。
「ポンペイの人々を、あなたは見捨てろと言うのか」
　エルリックが声を荒げた。
「私たちが戻ったところで、多少優位に立てるだけでしょう。それよりも、かの者たちの狙い

はマヌアルなのです。町にマヌアルがあると思っている限り、魔物たちは攻撃の手を休めないでしょう。だから、私たちがいないほうが、ポンペイの人々は安全なのです。それに、魔物たちがポンペイに押しよせているとすれば、火の山は手薄のはずです。これは、私たちにとって好機なのではありませんか」

「ポンペイの人たちを囮(おとり)に使おうというのか」

ドンゴが、気にくわんという顔をする。

「結果的には」

端的にカマリアは答えた。

バリュウは、またも選択を迫られた。

「私のせいで、人々を危険な目にあわせるのは本意じゃない」

「私ではなく、私たちでしょ」

カリンが、バリュウの言葉を咎(とが)めた。今までずっとわだかまり続けていた歯がゆさが、彼女の胸を苦しくさせる。

「一人で全部をしょい込もうとするのは、あなたのもっとも悪い癖だわ」

「今はそんなことを話してはいないだろう」

できるだけやんわりと、バリュウはカリンに言い返した。

「わかった。確かに、機を見ざるは愚者の行い。ここで全員が引き返すことは、逆にポンペイ

の人々を窮地に追いこむだろう。だから、ポンペイへは私一人で戻ろう」
瞳に決意の光を宿して、エルリックが言った。
「たった一人で町に戻るなど、それこそ危険ではないのか。途中で、今みたいに魔物たちと出会ったらどうするつもりなのですかな」
パイパーが、無謀だと彼を引きとめた。
「だが、誰かが知らせに戻らなければならない。奇襲を受ければ、ポンペイの兵士たちとてひとたまりもないだろう。それに、この中では私がバリュウ殿についで足が速い。他に適任の者がいるのならば、教えていただきたい」
エルリックは、ぐるりと一同を見回した。反対するものは、もう誰もいなかった。
「なあに、危なくなったら、あなたたちは逃げだした後だと敵に教えてやりますよ。もっとも、それまで何日か、たっぷりと時間を稼いでみせますがね」
「——ありがとう」
バリュウは、目の前の騎士に深い感謝の念を表した。
「カリン、できれば君も……」
言いかけたバリュウを遮ると、カリンは静かに首を振った。
「危険であることは、どこも同じよ。だったら、あたしはバリュウのそばがいい」
彼女に同意するかのように、他の仲間たちも小さくバリュウにうなずいた。

「あなたがたの御武運をお祈りします。では、一刻を争いますので、これにてごめん」
「エルリック殿も、どうか御無事で」
バリュウたちの言葉を背に受けて、エルリックは今まできた道を駆け戻っていった。
「急ぎましょう。彼らの与えてくれる、貴重な時間を無駄にしないためにも」
カマリアがバリュウを促した。
バリュウが進軍の判断をくだす。一行は、ふたたび火の山にむかって動きだした。カマリアが、敵と出会わないように踏み分け道をそれて木立の間に進路を取る。
「道はわかるのか？」
パイパーが訝しげに訊ねた。
「ここまでくればわかります。前にドンゴ殿の洞窟で言ったと思いますが、この近くにあれとよく似たものがあるのです。神託で見た風景に間違いがなければ、入口は必ず見つけ出せます」
答えつつ、カマリアは歩みをゆるめなかった。
「神託っていうのは、そこまで具体的なものなの？」
カリンが、隣を進むツィッギーに訊ねた。
「私は、神託を受けるほど修行をつんでおりませんからあ。カリンお姉様に、うまく説明はできませんわ」

少女は、ちょっぴり悔しそうな顔で答えた。

「しかし、少々蒸し暑いですな」

灌木（かんぼく）の細い枝を払いのけながら、パイパーが手の甲で額の汗をぬぐった。高地へ登ってきているのに、かなり暑く感じる。気温自体が、ずいぶんとあがっているのではないだろうか。

「火の山が近い証拠です。大地の力によって、地面の温度そのものがあがっているのですわ。さあ、もう少しです。頑張（がんば）って」

カマリアに励まされ、一行は先を急いだ。

第五章 光輝の淵源

1

川の浸食によってできた渓谷で、カマリアは足をとめた。
「どうした、いきどまりではないか。方向を間違えたのか？」
翡翠色の細い川を遥かに見下ろしながら、ドンゴがカマリアに訊ねた。
もともと道のないところを進んできたので、それきり前に進むことはできない。谷底に落ちでもしたら、一巻の終わりだ。
「いいえ、ここでいいのです。入口は、あそこにあるのですから」
カマリアは、対岸の絶壁を指さした。
「何も見えませんけどお」
額に手をかざして、ツィッギーが目を凝らす。
「まさか、あそこじゃないでしょうね」
カリンが、岸壁の中ほどをはしる大きな亀裂をさした。カマリアが、うなずく。

「だが、どうやっていくつもりですかな。まさか、空を飛んでいくつもりではないでしょうに」

パイパーの言葉に、カマリアは笑わなかった。彼女は、はなからそのつもりだったらしい。

バリュウは、みなまで言われないうちに、カマリアの意図をくみとった。

「確かに、飛べない者には無理だね。だけど、神竜の私ならば楽にいくことができる。一人ずつなら、確実に運べるさ」

バリュウは、すぐに自分の言葉を実行に移した。

最初に亀裂の中に敵がいないことを確認した後、バリュウはカマリアから運び始めた。

首に両腕を回してしがみついたカマリアをかかえると、神竜は地面を蹴(け)って断崖(だんがい)から空中に身をおどらせた。翼が浮力を得るまで、支えの地面を失った二人の身体(からだ)ががくんと落下する。

喪失感に、娘がわずかに腕に力を込めた。

微(かす)かな息苦しさを我慢(がまん)しながら、バリュウはきれいに滑空して亀裂の中に飛びこんでいった。

翼の角度を変えて、洞窟(どうくつ)となっている亀裂の内部にふわりと降り立つ。そこは、意外に広い空間だった。バリュウがゆったりと翼を広げられるほどの高さと幅がある。そして、外から中へと風が吹いていた。

「さあ、もうついたよ。カマリア……!?」

足が地についたにもかかわらず、依然、カマリアは神竜の首をだきしめたままだった。洞窟

内を吹き抜ける風に、娘の黒髪が躍って音をたてた。
「バリュウ……」
娘が、神竜の名を呼んだ。声が、首筋から直接バリュウの身体に響いてくる。
「——ここから先は、何が起こるかわかりません。それでも、よろしいのですね」
「いまさら聞くべきことではないよ、カマリア。僕は、意地や義務感からここにきたんじゃない。僕は、神竜として確かめにきたんだ。だから、それを果たすまでは後戻りはしない」
バリュウの言葉に、カマリアは諦めにも似た仕草で腕から力を抜いた。絹の布地がすべり落ちるようにして、バリュウの首筋からカマリアの両腕が離れていく。
「みんなを運んでくる。ここで待っていてくれ、カマリア」
娘に背をむけると、バリュウは外へと飛び立っていった。
カマリアは、自らの名前の余韻をそっと胸にだきしめた。
神竜による何度かの往復の後、無事に移動し終えた一行は洞窟の奥にむかって歩き始めた。
低い唸り声のような音が間断なく聞こえる。
「何か、いるんですの」
不安がるツィッギーに、カマリアは風を起こす道具の音だと答えた。この風穴は、火の山の中にある神竜の住処へ空気を送っているのだ。
遥か奥の方に、微かに明かりが見える。それ以外に光はなく、入口からの光が届かなくなっ

たところから、一行は足元に注意しながら暗闇の中をゆっくりと進んでいった。
途中、バリュウの尾を踏みつけたツィッギーが、胸からドンゴの頭上に倒れこむという事故もあったが、おおむねは無事に洞窟の終点にまでたどりつくことができた。
「ほら、もう着いたわよ」
カリンが、ぴったりと背中に張りついたツィッギーを振り返った。ドワーフの固い頭で豊かな胸を潰しかけた少女は、ほっとしたようにカリンの肩から両手を離した。
一行の目の前には、人の背丈ほどもある巨大な回転翼がぐるぐると回っていた。十文字の柱に中心を固定され、危なくないように金網で覆われている。光は、そのむこうからさしこんでいた。回転翼のむこう側は、どうやら人工の建造物らしい。
「バリュウ、これを壊せますか?」
「やってみよう」
みんなを下がらせると、バリュウは竜雷気息を放った。
激しい火花が飛び散り、焦げた匂いとともに回転がとまった。カマリアが、危険のなくなった回転翼を蹴り飛ばす。脆くなっていた柱が折れ、金網ごと回転翼が向こう側へ崩れ落ちた。
「これは……。わしらの洞窟とよく似ているではないか」
中に入ったドンゴは、周りを見回して感嘆した。
それまでのごつごつした岩の洞窟から一転して、そこはアーチ状の天井を持つまっすぐな地

下通路となっていた。床や壁は平面で、かなりの部分に金属の輝きが見える。特に、床には四本の流れる道が左右にむかって走っていた。

「これに乗って、火の山の中心にむかいます」

カマリアは、率先して流れる道に飛び乗った。おいていかれては大変と、他の者も慌てて川のような流れる道に飛び移る。

「この道はどこに通じているんだい」

バリュウがカマリアに訊ねた。動く足元になじめないのか、翼を広げてバランスをとっている。

「この道は、火の山を中心に、いくつかの山々を結んでいるものの一つです。このまま進めば、じきに神竜たちのいる中央にたどりつけるでしょう」

流れる道の上をすたすたと歩きながら、カマリアは神竜に答えた。

2

途中の分岐点でカマリアが宝玉で方向を確かめながら、バリュウたちは流れる道をいくつも乗りついで進んでいった。

単調な風景は、時間の感覚を麻痺させる。

いったい、どれほどの時間、地下通路を進んできたのだろうか。

「そろそろ、火の山の中央に着くでしょう。火の山は幾層もの階(フロア)に分かれていて、中央部は火口から最下層までが吹き抜けの空洞になっています。神竜たちは、そこにたてこもっているはずです。そして、そこが大地の力の中心でもあります」

カマリアが説明した。やがて、彼女の言葉通り、流れる道(ベルトウェイ)の終点に達する。

「これは……」

そこに横たわるものを見て、バリュウがうめいた。

戦いの跡が、そこに広がっていた。いくつかの魔物の死体と、そして、神竜の死体が歩廊のあちこちに見える。

「このあたりから、戦いは始まっていたようだな」

「ええ。でも、ここで戦いが行われたのは随分前のようです。魔の者の気配は、近くにはありません。きっと、戦いの場はもっと中央の方へと移っているのでしょう」

カマリアが、バリュウに答えた。

鎧(よろい)姿の神竜の骸(むくろ)にむかって、ツィッギーが祈りを捧(ささ)げる。バリュウは、無言でそれにならった。長い年月の果てに初めて巡りあえた同族が、物言わぬ死体であったことは、悲しみ以外のなにものでもない。

「急いだ方がよさそうですな。神竜たちが助けを求めてきてから、もうかなりの日数が経(た)っていますから。大地の力が完全に暴走していないとはいえ、それは神竜たちが持ちこたえている

という確かな証しとはなりえませんぞ」
　パイパーが、バリュウを急かした。その言葉に、彼は同族に対する不安をより大きくした。ふたたび一族の最後の一人になることに、今のバリュウは耐えられる自信がなかった。
「ちょっと待ってください。ここを離れる前に、あなたに渡したい物があります」
　カマリアはバリュウを引きとめると、神竜の骸に手をのばした。
　竜用の鎧の胸元に飾られた宝石を指でつまむ。あっさりと、その宝石が外れた。とたん、神竜の身体をつつんでいた鎧が銀色の砂となって床に崩れ落ちた。
　驚くバリュウにむかって、カマリアが神竜から取りあげた宝石をさしだした。
「神竜たちが纏っているのは、念砂の鎧です。この宝石を身につけた者の思い描く形の鎧となって、念者の身体を守ってくれるのです。その者の持つ意志が強ければ強いほど、鎧も強固な物となります。ここから先、あなたも身を守る物が必要でしょう」
　カリンが、カマリアの言うとおりだとバリュウを促した。
　バリュウは宝石を受け取ると、胸にあててみた。そして、鎧を思い浮かべる。床にこぼれていた銀砂が、さらさらと音をたてながらバリュウの身体に集まってきた。彼の身体を這い登るようにして、身体の要所に集まっていく。
　やがて、銀砂はバリュウの身体を守る鎧として結晶化した。
　カリンたちが、思わず溜め息をつく。

白と銀を基調とした美しい鎧が、バリュウの身体を覆っていた。胸鎧は厚く、切っ先を逸らす優雅な曲面を描いている。腰から脚絆にかけては、長い草摺に覆われていた。両腕には、涙滴を縦半分に割ったような細長い盾がついている。

「思ったより軽いな」

　バリュウが軽く腕をあげてみた。関節部はやわらかく、伸縮も効くようだ。腕や足の動きにあわせて、自在に曲がる。

「悪くない。これなら、多少の攻撃になら、みんなの盾になることもできそうだ。さあ、先を急ごう」

　バリュウは先頭に立つと、足早に歩きだした。

　歩廊を抜けると、広いホールに出た。所々、床と天井が吹き抜けになっている。

「ここは、どの辺になるのだろうか」

　ドンゴが、自分たちの半影を薄く映す床を見やりながらつぶやいた。床は陶器のようにも見え、また、金属のようにも見える。

「よく壁をごらんなさい。わずかに曲がっているでしょう。ここを歩いていけば、一周してまた戻ってこられるはずです。ここは、巨大な回廊なのです」

「ちょっと待ってくだされ。曲がっているといっても、それはほんのわずかですぞ。この曲がり具合で円を描くとなると、その大きさは……」

カマリアの言葉に、パイパーは驚きを隠さなかった。
「つまり、ここはすでに火の山の外周にあたるわけだ」
バリュウが、答を口にする。カマリアが、小さくうなずいた。
「ええ。おそらくは、その中腹あたりでしょう。この回廊のどこかに、さらに中に入る通路があるはずです」
「本当に、お山一つがおっきな建物ですのね」
ツィッギーが、呆れた顔をする。
「神々の造られたものですからね。私たちの想像を遥かに超えて当然です。さあ、ぐずぐずしないで入口を探しましょう」
カマリアに促されて、一行は回廊と呼ぶにはあまりに広い空間を歩き始めた。
「ここには、神々がたくさん住んでいたのだろうか」
所々にある椅子やテーブルらしき物を眺めながら、バリュウが淋しげにつぶやいた。
「さあ、そういうこともあったかもしれません。仮にそうだとしても、それは遥か大昔のことです。今ではありませんわ」
カマリアの言うとおりだった。今のこの場所に、生き物はバリュウたちのほかには誰もいない。それは事実だ。
吹き抜けから上下に見える階層へは、いくつかの動く階段が乗る者もなく流れ続けていた。

「あそこから下へいけそうですわ」
走りだそうとしたツィッギーを、カリンが押しとどめた。
コツコツと、床を棒で叩くような奇妙な音が聞こえる。
「なんなの、あれは……」
振りむいたカリンの視界に、四本の足で球体を支えた蜘蛛のような機械が映った。
「トーチアイ!!」
叫ぶなり、バリュウはカリンの前に飛びだして盾を構えた。バリュウの盾の表面が、赤く輝いた。遅れて、彼の足元の床が、細い溝を穿たれるようにして溶かされていく。
「床が……、魔法か!?」
突然溶けだした床を見て、パイパーが叫んだ。無理もない。トーチアイの放つ殺光(レーザー)は、霧や煙などで乱反射しない限り人の目で見ることはできない。
バリュウは、神竜の鎧の強靭さに心底感謝した。かつて、神々の遺跡を守るこの機械に襲われたときは、かなり手ひどい目にあったものだ。
「警備の機械(メタルガーディアン)兵が動いているなんて……。危険です。急いでここを離れましょう。じきに、他の機械兵がやってきます。あそこの扉まで、走って!」
カマリアが、閉ざされた扉(ゲート)をさした。
「いくんだ」

バリュウが振り返らずに叫んだ。竜雷気息（ライトニングブレス）で、目前のトーチアイをショートさせる。

だが、カマリアの言葉通り、新手はすぐにやってきた。カシャカシャと細い脚を曲げながら、トーチアイの集団がやってくる。その頭上には、細長い卵型の機械がいくつか浮かんでいた。ジェットと呼ばれる機械兵（メタルガーディアン）だ。

バリュウがトーチアイたちの相手をしている間に、カマリアたちが扉へと走る。

「下がっていてください」

扉の右側にあるスイッチパネルに、カマリアは指をすべらせた。鋭く息を吐きだすような音が響く。ぴたりと閉ざされていた扉が、大きく左右に開いた。

浮遊（ホバリング）するジェットの単眼（センサー）が、バリュウを捉（とら）えた。後部の推進器が唸（うな）り、真一文字に突進してくる。

バリュウは敵の力に逆らわず、ジェットを盾で横へ払いのけた。数体のジェットが進路を変えられて床に激突する。爆発が起こり、炎と煙が舞い上がった。

「早く中に入って」

カマリアに促され、カリンたちが彼女の横をすり抜けて扉の中に入っていく。

「早く扉を閉めるんだ！」

バリュウの命令に、カマリアがスイッチパネルに手をのばす。その手をカリンが乱暴につかんでとめた。

「だめよ、まだバリュウが外にいるわ」
「わかりました」
カマリアは外へ飛びだすと、大声でバリュウを呼び戻した。
トーチアイの殺光(レーザー)の光条が錯綜(さくそう)する中、神竜がとって返す。後を追ったジェットが、味方の光に焼かれて、火につつまれた。
「危ない、カマリア！」
炎の塊と化して、ジェットの残骸(ざんがい)がカマリアを襲(おそ)った。間一髪、バリュウが彼女に被(おお)いかぶさって守る。
扉から吹きこんでくる爆風に、カリンたちが奥へと下がった。その間に、ひとりでに扉が閉まり始める。ジェットの爆発の衝撃で、開閉装置が誤作動したらしい。
「カリン!!」
慌(あわ)ててバリュウが扉に手をかけようとしたが間に合わなかった。分厚い扉の中で、微(かす)かにカリンたちの怒鳴(どな)る声が聞こえる。
「待ってろ、今ここを開けてそっちへいく」
バリュウは、扉にむかって竜雷気息(ライトニングブレス)を放とうとした。慌(あわ)ててカマリアが押しとどめる。
「無茶はしないで。この扉がある限りカリンたちは安全なのですから」
「しかし、離れ離れになってしまったら……」

困惑するバリュウたちの左右から、トーチアイの群が近づいてきた。

「光壁よ！」

慌ててカマリアが叫ぶ。光の障壁が二人をつつんだ。直後、殺光（レーザー）がその周りを飛び交う。光壁に弾（はじ）かれた殺光（レーザー）が床を溶かす。

二人の足元が崩れた。

床の破片とともに、カマリアが悲鳴をあげながら落下する。バリュウは途中で彼女の身体（からだ）をつかまえると、そのまま下の階を滑空して逃げた。

「くそ。上へ戻るぞ、カマリア」

「——ここは先を急ぎましょう」

「カリンたちを見殺しにしろと君は言うのか」

バリュウは、恐ろしい形相でカマリアを睨（にら）みつけた。

「違います、違います」

カマリアは、激しく首を振った。

「冷静になって、バリュウ。カリンたちが、そう簡単にやられるはずがありません。ここで戻るよりも、中央で落ち合う方が賢明です」

「それまでカリンが安全だという保証はないだろう」

「でも、ここから戻って彼女たちを探すよりは早いはずです。すべての道は、中心へむかって

います。彼女たちだって、火の山の中心を目指すはずです。彼女たちの力を信じて」

「だが……」

「バリュウ、あなた一人ですべてができるわけではないのですよ。あなた以外の人の強さを信じなさい」

カマリアは、強くバリュウをさとした。

「——と、カリンなら、きっとそう言うでしょうね」

さあ、どうしますとカマリアはバリュウを見つめ返した。バリュウの顔から、一時の激情が引いていく。

「中心はここから近いのか」

彼は、カマリアに訊(たず)ねた。ええと彼女がうなずく。

バリュウは新たな扉を探して通路を進んでいった。

3

カマリアをかかえて通路の中を飛びながら、バリュウはその顔をしかめた。

前に進むにつれ、建物のあちこちに戦いの傷跡が目立つようになった。魔物と神竜たちの戦いは、かなり奥の方でも行われたようだ。

幸いなことに敵は外側の回廊に集中してくれたらしい。バリュウたちは、さしたる抵抗にも

あわずに先を急ぐことができた。だが、その静けさが、また不気味でもある。
「間に合わなかったのかもしれないな」
倒れたまま放置してある神竜の死体から目をそむけると、バリュウは力なくつぶやいた。白いバリュウとは違って、青銅(ブロンズ)や銅(あかがね)の肌をした神竜たちは、死して何も語らない。
「いえ、たとえそうであったとしても、あなたは銀竜の声を聞いたはずです。そして、彼の願いを聞き届けたはずです。彼の願いは、ひとえに神竜だけを救ってほしいというものではなかったはず……」
「そうだな。逝(い)ってしまった仲間よりも、今は生きているかもしれない仲間、そして何よりもカリンたちの方が大事だ」
バリュウの腕の中で、カマリアがうなずいた。
やがて、通路は終点を迎えた。つきあたった扉を開けて中に入ったバリュウは、顔を打つ強い熱気に噎(む)せ返った。
間違いなく、火の山の中心にたどりついたのだ。
張りだした広い露台(バルコニー)を進むと、バリュウは火の山の内部の全景を自分の目で確かめた。
カマリアが言ったとおり、火の山の中央は吹き抜けの空洞であった。頭上遥(はる)かに、火の山の火口がぽっかりと口をあけている。火口の近くには、巨大な反射三稜鏡(プリズム)の集まった物が備えつけてあった。見下ろせば、最下層の中央には、円形の開閉口があった。渦巻き状の遮蔽板(しゃへいばん)は開

いており、下にある溶岩溜りが熱気と赤い光をのぞかせている。それが、本当の火口なのだろう。その周囲には、パオトレインで見たような複雑な機械が、壁を埋め尽くすようにして配置されていた。

「降りるぞ、カマリア」

ふたたび娘をだきかかえると、バリュウは空中に身を躍らせた。翼を広げると、大きく螺旋を描くようにして降下していく。

円筒形の内部は、巨大な塔の内部を思わせた。何十という階層ごとに、環状の露台が張りだしている。

各階は露台の階段で連絡されているようだ。カリンたちが無事にここまでたどりついてくれれば、自力で下に降りるなりバリュウが迎えにいくことは可能だろう。

それにしても、露台の所々に備えられた巨大な花の置物は何であろうか。花弁は、一様に山頂にむいている。金属でできていることから機械兵かとも思ったが、別段襲いかかってくる様子はない。さりとて、ただの飾りとも思えなかった。

最下層が近づくにつれて、翼が風よりも熱を感じる。階層ごとの照明が作りだす光の膜の縞模様に染められながら、バリュウは下降を続けた。

そして、ついに両足が床を踏みしめる。

だきかかえていたカマリアの身体を放すと、バリュウはぐるりと周りを見回した。中央には、

巨大な溶鉱炉のような真の火口が熱と光を噴きあげている。壁際にある機械は、今まで見てきたものをすべて集めたかのようだった。プロンプトの古(いにしえ)の塔やマナリナのオババ様の研究室、そして、ドワーフの隠し坑道やパオトレイン、その集大成がここにはあった。

「誰(だれ)かいないのか。私は、バリュウ。ルーン大陸に住む神竜の長(おさ)だ。パルメキアの神竜たち、銀竜殿、いたら返事をしてもらいたい」

バリュウの声は、誰もいない建物の中でひどく虚(うつ)ろに響いた。

「やはり、誰もいないのだろうか……」

神竜は、カマリアを振り返った。

ルシファー自身もポンペイへむかったのだろうかとバリュウは危惧(きぐ)した。いずれそれはわかるだろうと、カマリアは意味深に答えた。

「とにかく、今のうちにマヌアルを使って大地の力をとめてしまおう。いや、その前に機械兵(メタルガーディアン)たちをとめなければ」

バリュウがカマリアに機械兵(メタルガーディアン)を操っている装置を聞こうとしたとき、上の方から聞き覚えのある声がした。カリンたちだ。

「カリン!!　パイパーたちも、無事か」

バリュウの顔が、一瞬にして明るく輝いた。間をおかずして、カリンたち全員の元気な声が返ってくる。声の大きさからして、三十階ほど上にいるらしい。

「よかった。早く降りておいで」

陽気に言った後、バリュウはカマリアにマヌアルを出してくれるように頼んだ。これから竜血晶の封印を解き、暴走しかけている大地の力をとめなければならない。その方法は、ボルカノンの神託を受けたカマリアにしかわからないことであった。

カマリアはカリンに代わってそれまで背負ってきた背嚢を外すと、中から黒檀の箱を取り出した。箱を手にした娘は、微かに眉間に皺をよせる。

数歩前に進むと、カマリアは黒檀の箱を高くかかげた。そして、娘はゆっくりと口を開いた。

「ルシファー様、ただいまマヌアルをお持ちいたしました」

バリュウたちは己が耳を疑った。カマリアは、今、誰に、なんと言ったのだ。

階段を降りていたカリンたちは、思わず途中で立ち止まって彼女を見下ろした。

「よくやった。我が下部よ」

声が響いた。

反響した声が集まるかのように、中央付近に人影が現れる。

重装甲の甲冑に全身をかためた悪魔王は、わずかに顔をあげた。目と口だけが刳り抜かれた黒い仮面の下で、口元がわずかに歪んだ。

彼の後ろには、一人の剣士が無言で立っていた。全身を鎧でつつんではいても、無骨な悪魔王とくらべると、しなやかで洗練された印象を与える。面頬を下ろしたその表情は、うかがう

ことはできなかった。
「さあ、マヌアルを」
ルシファーに呼ばれて、カマリアの上体が前にかしいだ。バリュウが、彼女を引きとめようと手をのばす。だが、寸前で彼女は神竜と悪魔王の間に転移した。彼の手がむなしく空をきる。
「カマリア!!」
娘の背中にむかってバリュウは叫んだ。
「私は、カマリアという名ではありません……」
振り返らずに、娘は答えた。そして、ゆっくりと飾環（サークレット）を外す。黒かった髪がざわめき、みるみるうちに赤紫に染まっていった。
驚くバリュウたちの前で、娘が振り返る。
「我が名はカミーラ。魔軍を率いる魔将軍カミーラ」
緋色（ひいろ）のマントを翻して、娘は名乗った。深紅の軽鎧（けいがい）に身をつつんだ娘の額からは、左右にのびる魔物の角があった。角の中央、額の部分には、さきほどまで飾環（サークレット）についていた赤いジュエルが塡（は）め込まれている。
「なんてことだ……」
その光景を上から見ていたパイパーがうめいた。
「お前は、わしらをだましていたのか！」

ドンゴが叫んだ。
「私の使命は、ルーン大陸の神竜の手からマヌアルを奪い、そして持ち帰ること。そのために、私はあなたたちとともに旅をしてきた」
カミーラが答えた。
「では、すべては嘘だったというのか。神竜のことも、ボルカノンのことも！」
身体の奥底から、絞りだすようにバリュウが叫んだ。
「すべてというわけではない」
言い澱むカミーラに代わって、ルシファーが答えた。
「ルシファー……」
バリュウは、悪魔王を睨みつけた。
「ボルカノンの神託を受けた者が、神竜を訪ねてルーン大陸にむかったのは事実だ。ここにあった神々の知識は、ボルカノンの持つものと同等のものだ。我々が同じ手段を考えてはいけないという理由はあるまい。当然、目的は別だがな。使者の船や持ち物を奪うのに手間はかからなかったぞ。本来ならば、そのままカミーラを正式な使者にしたてあげる予定だったのだ。ズィドゥールの愚か者がちっぽけな野心などを出さなければ、事はもっとうまく運んでいたはずだった」
「貴様は、ここで何をするつもりだ」

「取り戻すのだよ、私自身を」
ルシファーは答えた。
「太古の戦いにおいてボルカノンに封じられた魔力を返してもらうのだよ、ボルカノンを倒してな。この遺跡は、地下から地脈の力を取り出している。その地脈は、遥かな地下を伝ってボルカノンの眠るボルカノ山ともつながっているのだ。力を暴走させ歪ませれば、ボルカノンごと奴の山は大爆発を起こす。休眠中のボルカノンは、なす術もなく溶岩に呑み込まれていくことだろう」
「それを防ぐために、ボルカノンは私をよんだのか」
バリュウのつぶやきを、ルシファーは嘲るように一笑にふした。
「貴様ではない、マヌアルをだ」
ルシファーが訂正する。
「神竜など、マヌアルを守るためのただの守護人形でしかない。神々の遺産を守るために生み出された造り物の命だ。たかが神々の操り人形に、いったい何ができるというのだ。現に、この遺跡を守っていた神竜たちも我らに屈したではないか。ただ、予想外だったのは、戦いでマヌアルが破損していたことだがな。おかげで、活性化させた大地の力が、制御不可能になってしまった」
ルシファーの言葉に、バリュウは愕然とした。

「神竜が、造り物だと。神竜の一族は、神々が遺産の番人として造った人形だというのか。作り事を言うな！」

「作り事ではない。そのようなつまらぬ謀をしてなんの意味がある。素直に認めよ、これは事実だ。貴様は、マヌアルを守ること以外には喜びも値打ちも見出せない、ただの神々の操り人形だよ。つまらぬ存在の内のたかが一匹だ。いや、今では、貴重な最後の一匹となってしまったのだったな」

ルシファーは、バリュウの困惑を楽しみながら弄んだ。

自らの意志の存在を真っ向から否定され、バリュウは何も言い返せなかった。

探し求めていた、神竜であることの意味の答がこれなのだろうか。だとすれば、自分の存在に、どれほどの価値があるというのだ。悪魔王の言葉の真偽を確かめようにも、問うべき相手であったはずの神竜は、すでに滅ぼされてしまっている。否、神竜が自らの意志も持たぬ存在であるのなら、それは滅ぶべき物だったのだ。

「バリュウ、惑わされてはだめよ。あなたは人形なんかじゃない。バリュウ、思い出して。あなたは、両親から生まれた最初の神竜なのよ」

カリンの声が、バリュウを衝撃から呼び戻した。彼女の言うとおり、ルシファーの言葉は、バリュウという存在においてのみ唯一矛盾する。

「ふむ、面白い。神竜とは、マヌアルによって千年ごとに命の炎をおぎなわなければ、活動を

停止する。マヌアルに依存し、決して離れられぬようにするために神々が定めた宿命によってな。だが、そこの神竜は、新たな世代だというのだな。カミーラの報告から興味をいだいてはいたが、いったいどのようにして造りだしたのだ。ルーン大陸では、神竜を新たに造りだす方法を見つけたとでもいうのか。それが本当なら、新たに神竜、いや、魔竜の軍団を造ることも夢ではない。その謎を知るために、カミーラに命じてお前をここへくるようにしむけたのだ。もっとも、同族という餌に簡単に食らいついてくれたお前に、くだらぬ小細工は必要なかったがな。まあよい。おいおいと、そのことは調べるとしよう。貴様の、その身体を細かに刻みながらな。――カミーラ、マヌアルを取り出せ」

「ルシファーの命令に、カミーラはジュエルの魔力で黒檀の箱を自分の前の空中に浮かべた。

「よせ、カマリア!」

バリュウがカミーラにむかって叫んだ。

遠すぎて手出しのできないカリンたちが、急いで階段を駆け降りる。

神竜の呼びかけを無視して、カミーラは軽く自らの小指を嚙んだ。指から赤い血がにじみだす。指の腹を伝わっていった血は指先で集まり、一滴の深紅の滴となった。

「以前、あなたの怪我を治すときに、一滴だけ吸ったあなたの血です」

カミーラが、呪文を唱えて軽く指先を振った。一滴の血潮は霧となって、宙に魔文字を描く。結ばれた印に従って、血煙の魔文字が黒檀の箱をつつみこんだ。鈍く罅の入る音が響きわたる。

次の瞬間、黒檀の箱が粉々に砕け散った。

黒檀の細かな破片が舞い落ちる中、輝けるマヌアルの結晶板(リーフ)が空中に浮かびあがった。

「バリュウ、マヌアルを壊して!!」

カリンが叫んだ。マヌアルの輝きは、神々しくも禍々(まがまが)しい物に彼女の目に映っていた。

今、マヌアルに届く位置にいるのはバリュウしかいない。カリンの言葉につき動かされて、神竜は飛びだした。だが、マヌアルに触(ふ)れた瞬間、彼の身体(からだ)は雷光に撃たれたかのように後ろへ弾(はじ)き飛ばされた。

床に倒れるバリュウを見て、カリンが悲鳴をあげた。

「愚か者め、自分がマヌアルに付属する存在だということがまだわからんのか。お前たちは、マヌアルに傷一つつけられないように、神々によって定められているのだ。それが運命だ。自らの分をわきまえるのだな」

ルシファーが、見下すようにバリュウに視線を投げた。

「立って、バリュウ!」

カリンが、ルシファーにむけて矢を放った。

悪魔王は動かない。

代わりに、彼の横に控えていた魔将軍が飛びだした。

まるで見えない足場があるように一気に宙を駆け登り、一刀の下に空中で矢を叩(たた)き落とす。

二つに折れて床に落ちた矢が、雷光をあげて爆発する。下から突きあげる爆風に、深紅のマントが脹れ上がり、閃光が魔将軍の姿をカリンたちの目に焼きつけた。
「お前たちは、おとなしくそこで見ているのだ。――いいな」
空中に浮かんだ魔将軍が、言い含めるようにカリンたちに言った。若々しく澄んだ声が響き渡る。
軽くマントを翻して、魔将軍はゆっくりと下へ降りていった。
「大儀であった。オッドアイ」
ルシファーは、カミーラの横にならんだ魔将軍に声をかけた。自らの配下の中でも双璧と呼べる二人の魔将軍を、悪魔王は満足そうに見渡した。
「さあ、くるがよいカミーラよ、我が下へマヌアルを！」
ルシファーが、魔将軍を手招いた。カミーラの手が、空中に浮かぶマヌアルをつかむ。
「よせ、よすんだ、カマリア……」
なんとか上体だけ起こしたバリュウが、必死にカミーラに呼びかけた。マヌアルの呪縛は、彼の身体を麻痺させていた。
彼の声に、カミーラが振り返った。
カミーラの顔が、ゆっくりと微笑みをたたえていく。
彼女がカマリアとしてバリュウやカリンに接していたときと、少しのかわりもない笑顔。

その笑顔の意味をはかりかねて、バリュウは戸惑(とまど)った。
カミーラが頭(こうべ)を巡らす。
うつむきがちに伏せられた顔がゆっくりと上がっていく。悪魔王にむけられた顔には、バリュウにむけたものとはうって変わった嘲笑(ちょうしょう)とも呼べる薄く冷酷な笑いが浮かんでいた。
ルシファーが、のばした腕を戻した。仮面にあいた穴から見える目と口に、あからさまに不快の色が表れている。
「ほしければ、ここまで自分の足で取りにくるがいい、ルシファーよ」
カミーラはマヌアルを悪魔王に見せつけると、素早く横にいたオッドアイに投げ渡した。
「どういう意味だ。二人とも、血迷ったか」
ルシファーが脅しを込めて叫ぶ。だが、二人の魔将軍は、少しも動じる素振りを見せなかった。
「貴様の最期のときがきたということだ、ルシファー。ゼノン様に仕える私たちが、貴様に忠誠を誓うと信じたのが貴様の間違いだ。我らは二君には仕えん」
「おのれ、オッドアイ。最初から仕組んだな」
「ほざくがいい。――さあ、神竜とその仲間たちよ、我らに力を貸してくれ。目的は同じはず。ルシファーを倒すのは今だ!」
オッドアイの言葉を引金に、建物のあちらこちらから魔物たちが飛びだした。彼が温存して

いた、直属の部下たちだ。魔戦士から魔獣まで、多種多様の魔物が悪魔王だけを目指して殺到した。
翼を持った鷲頭獅子（グリフォン）やハーピーなどの機動性にとんだ魔物たちと、ルシファーがたちまち戦闘に入る。
「下等な使い魔の分際で、王であるこの私に触（ふ）れるな!!」
ルシファーが叫んだ。彼の周りに、降雷撃（スパーク）の閃光（せんこう）が走る。抵抗力のない魔物はその雷光に焼かれ、炭化しながら床に落ちて砕けた。
「機械兵（メタルガーディアン）どもよ、ここにいる生き物をすべて始末しろ!!」
悪魔王の命令とともに、各階（フロア）の扉が一斉に開いた。その中から、ジェットやトーチアイ、他にも、大型の爪（クロー）と小口径のレーザーを備えたブレインメタルなどという機械兵たちがわらわらと飛びだしてくる。
中央塔の内部は、あっという間に乱戦の坩堝（るつぼ）と化した。
そのさなか、カミーラがうずくまるバリュウにかけよる。
「大丈夫ですか、バリュウ。今、解呪（アンチドウテ）の魔法をかけてあげます」
彼女の魔法が、彼の身体（からだ）をマヌアルによる麻痺（まひ）から解放した。
立ちあがったバリュウは、無言でカミーラを見据えた。なんと言葉を発していいのか、彼は悩んだ。彼女は、敵なのか、味方なのか……。

「だましていたことは謝ります。でも、それはすべてルシファーを倒したいがためのこと。奴は、破壊のためのみに力を欲しているのです。決して私たちと同じではありません。それだけは信じてください」

バリュウは、彼女の心の中を見透かすように目を細めた。そんなことで彼女の心が見えるはずはないのだが、彼の腕をつかむカミーラの手の温もりだけは感じることができた。少なくとも、彼女はバリュウを信頼している。ならば、バリュウとしても、彼女に示さなければならないものは信頼だった。ザッパが言っていたではないか、我らは信頼しあえるからこそ、シャイニング・フォースと呼ばれるのだと。

「わかった、話はルシファーを倒した後でゆっくりと聞こう。僕はルシファーとマヌアルをなんとかする。カマリアは、カリンたちを頼む」

「まだ——私をカマリアと呼んでくれるのですか」

途切れがちに、カミーラが訊ねた。

「あたりまえだ。さあ、急いで」

バリュウは、力強くカミーラに呼びかけた。

4

「これだけの数、今までどこに隠れていたのだ」

ルシファーに殺到する魔物たちを見て、パイパーが驚きの声をあげた。

「これだけ広い建物だもの、隠れるところはいくらでもあったでしょう。それよりも、これからどうするかよ。誰と戦えばいいの」

カリンが混乱して叫んだ。

「魔物はわしらを襲うつもりはないようだが、鉄でできた奴らはそうもいかないらしい」

ドンゴはカリンたちを後ろに下がらせると、近づいてきたブレインメタルと対峙した。

振り下ろされるクローの強烈な一撃を、ドワーフは戦斧で受けとめた。パイパーなら確実に吹き飛ばされるような衝撃に、ドンゴが耐え抜く。両者は力の押し合いになった。

ドンゴを巻き込むことを恐れて、カリンたちは攻撃を躊躇した。それが手遅れとなる。ブレインメタルの肩にあるレーザー発振器が、ドンゴの頭に焦点を定める。

殺光が発射される寸前、横から飛んできた鉄球が機械兵の側面に激突した。吹き飛ばされたブレインメタルが、大きくひしゃげながら床に転がる。

「カマリア！」

ドンゴを救った者の姿を見て、カリンが叫んだ。

「この場合、わしは礼を言わなくてはならんのか、カマリアよ」

魔将軍をねめつけながらドンゴが訊ねた。

「いいえ、無用です」

カミーラが短く答える。
「それよりも、ルシファーを倒すためにみなさんの力を貸してください」
「裏切り者が、よく言う。ならば、マヌアルをわしらに返してもらおうか」
ドンゴは容赦なかった。
「それは……」
カミーラが口ごもる。すでに、マヌアルは彼女の手を離れてしまっていた。
「私を信じてはいただけないのでしょうか」
「証(あか)しがない」
ドンゴは、カミーラの願いを突っぱねた。
「ならば証しを立てればよろしいのですね」
言うなり、彼女は胸鎧(ブレストプレート)の合わせ目に指をかけた。むしり取るようにして、手に力を込める。背甲(バックプレート)との留め金があっけなく引き千切られ、前後に別れた上半身の鎧(よろい)が音をたてて床に転がった。鎧の下にあてていた厚手の下着(クロス)さえも破り捨て、カミーラは豊かな胸を惜し気もなくあらわにする。そして、ドンゴの前に片膝(かたひざ)をついて腰を屈(かが)めると、左の胸にかつてドンゴからもらった短剣の切っ先をあてがった。ドンゴの手を取り、短剣の柄(つか)の上にのせる。
「誓いをたてましょう。私は決してあなた方を裏切らないと。それが信じられなくば、迷わずこの剣を突いてください」

「わしがそんなことはできないとふんでおるのだろう。こずるいことだ」

「そんなこと……。ドンゴ、そこまで私は信用できませんか？」

カミーラは、淋しそうに力なく笑った。信頼を裏切った代償は、かくも大きいものなのだろうか。ならば、それにみあったものを捧げるしかないとカミーラは決意した。

「――ならば、せめてルシファーを倒すまではオッドアイ様の力になってあげてください。その間は、魔物は一切あなたたちに手出しをしないでしょう。ルシファーを倒せるのならば、いますぐ我が命を捧げましょう」

「おい、待て、カマリア、馬鹿な真似はよすんじゃ」

ドンゴの手ごと握り締めた短剣の柄に、カミーラがゆっくりと力を込める。慌てたドンゴは、渾身の力を込めて短剣を引き戻しながら叫んだ。

「やめなさい、二人とも」

二人をとめに、カリンがかけつける。

カミーラは、思わず短剣から手を離した。カリンが、反射的に短剣の刃をつかんでカミーラをとめようとしたからだ。むろん、刃の部分をつかんだカリンの手のひらはざっくりと切れて、五指を真っ赤に染めるほど血があふれ出している。一方のカミーラも、短剣の切っ先が浅く胸に突き刺さって、流れる血で胸元を濡らしていた。

「ツィッギー、早く二人を看てやってくれ」
ドンゴが、急いでツィッギーを呼んだ。流れ出た血の多さに血相を変えた少女が、慌てて治癒の呪文を唱える。
「私たちが争う必要なんてないのよ」
ツィッギーの力で傷口がふさがっていく間、カリンは痛さをかみしめながら言った。
「わかったよ。つまらん意地を張ったわしが悪かった。——ほれ、落とし物だ」
ドンゴは床に落ちた短剣を拾うと、カミーラに手渡した。
よろしいのですかと、カミーラが訊ねる。
「わしが返せと言うまで、きっちりと預かっておけ。いいか、わしが返せと言うまでだぞ」
「ええ、わかりました。喜んでお預かりします」
カミーラは、礼を述べると短剣を大事そうに受け取った。
「取り込み中すまんが、わし一人ではあれだけの敵を押さえ切れん。早く手を貸してくれ！」
パイパーが叫んだ。最後の方は、悲鳴に近い声になる。彼の前には、隊列を組んだトーチアイの集団が迫っていた。
「早く、こちらへ」
カミーラが叫んだ。氷結嵐を放って敵を足留めしたパイパーが、転がりかねない勢いでカリンたちに合流する。

ちに定めた。
「光壁よ！」
「光盾よ！」
ツィッギーとカマリアが同時に呪文を唱える。その間に、トーチアイたちは照準をカリンた
「我らをつつみて、聖なる守りとなれ!!」
五人をまばゆい光がつつむ。そこへ、トーチアイの放った殺光が集中した。激しい光の鬩ぎ
合いの後に、殺光が反射されて四散する。
間髪を入れず、カミーラが飛びだした。彼女の振る鎖つきの鉄球が炎につつまれ、敵を叩き
潰すとともに焼き尽くす。一歩遅れてドンゴがかけつける。二人の手で、トーチアイは次々に
叩き潰されていった。
「早く、バリュウと合流しなければ……」
カリンが言ったとき、突然いくつかのまばゆい光条が山頂めがけて走った。火口のあげる水
蒸気に、光条の軌跡が乱反射して見えたものだ。
三稜鏡にあたった光線が、収束して空へと昇っていく。
それが、光の降臨の正体だった。
各階に備えつけられていた花のような置物は、大型のエネルギー発射装置であった。大地の
力を源とした光線は、トーチアイとは比べ物にならないほどの威力を持っている。

本来ならば、光に変えられた大地の力が、遥か上空にある神々の作った星の一つに反射されて各地の遺跡に送られる。遠くからは、それは神々が大地に突き立てた巨大な光の剣にも見えたことだろう。

プリズムフラワーの一つが、角度を変えて下をむいた。薙ぎ払うようにして、光線が通り過ぎた。射線上にいた魔物と機械兵が蒸発する。敵も味方もおかまいなしだった。ルシファーにとっては、その双方がこの世から消し去っても惜しくない存在なのだ。

「馬鹿な、ルシファーはこの中でプリズムフラワーを使おうというのか!?」

カミーラが叫んだ。

たいていの魔物は一撃で塵一つ残らずに蒸発した。それにとどまらず、強すぎる力はこの建物まで破壊しかねない。

幸いなことは、動いているのが下層のいくつかだけだということだ。

断続的に発射されるプリズムフラワーの輝きを苦々しく見やりながら、カミーラは下を見下ろしてルシファーを探した。その瞳に、バリュウとオッドアイの姿が映る。彼らの前にルシファーがいた。

「私は、バリュウを助けにいきます。カリンたちは、プリズムフラワーを破壊してください」

後をカリンたちに任すと、カミーラは下へむかった。残ったカリンたちが、その階のプリズムフラワーにむかう。

そばにいた二体のブレインメタルを、カリンとパイパーがそれぞれ仕留める。
「これを壊せばいいんですのお?」
ツィッギーが、杖を握り締めながら訊ねた。彼女が安全に倒すには、こんなふうに動かないものが最適と言える。
「ちょっと待った。——これは、もしかしたらわしたちにも動かせるんじゃないのか」
プリズムフラワーの背後に回ったパイパーがつぶやいた。手動に切り替えれば、強力な武器を手にいれられることになる。
「本当なの?」
「だてにオババ様の研究室に出入りしていたわけではないですぞ。なっ、ドンゴよ」
カリンの問いに答えながら、パイパーはドンゴに同意を求めた。

5

「大地の力をとめる方法は知っているのか」
バリュウの問いに、オッドアイはもちろんとうなずいた。
「ならば、ルシファーは私が相手をする。その隙に早く」
バリュウはオッドアイを下がらせると、単身悪魔王に立ちむかった。
「ルシファー! 貴様は私が倒す」

「生意気な、たかが操り人形の分際で……」

悪魔王が剣を振りあげた。横跳びに切っ先を避（よ）けたバリュウが、竜雷気息（ライトニングブレス）を放つ。それに耐え抜いた悪魔王は、目を赤く輝かせながらバリュウを睨（にら）みつけた。

「闇（やみ）にひそみし悪意よ、憎悪の怨霊（おんりょう）よ。そなたらに一瞬の形を与えよう。悪魔の吐息となって、我が敵の魂を食らうがいい。デーモンブレス!!」

ルシファーの呪詛（じゅそ）とともに、悪魔王の前面の空間に強大な負の力が発生した。実体となった悪意の塊が、激流となってバリュウを襲（おそ）う。魂を削（けず）りとられるような衝撃に、神竜は後ろへと吹き飛ばされた。

「大丈夫ですか、バリュウ」

そこへ、四本腕の魔戦士（カオスウォーリア）の一団をつれたカミーラがかけつけた。プリズムフラワーを操っている装置は、ガーゴイルたちに破壊するように命じてある。

魔戦士たちが、バリュウとルシファーの間に割って入る。

「たいした傷は負ってないようですね」

カミーラは、消耗（しょうもう）したバリュウに活力を注ぎこみながら安堵（あんど）の溜（た）め息をついた。

「おのれ、どいつもこいつも支配されるべき下等な存在の分際で、万物の王たらんとするこのルシファーに逆らいおって。貴様らは、それほどまでに消去してほしいのか」

怒りに燃えたルシファーが、バリュウとカミーラにむけて叫んだ。その彼の足元が突然に溶

けだす。悪魔王は熱に悶(もだ)えながら後退した。その後を、カオスウォーリアたちが追う。
よもや自分自身がプリズムフラワーの標的にされるとは、さすがの悪魔王も予想しなかっただろう。一時的に、彼は魔物たちとの戦いで手一杯になる。

「カリンも、手荒なことをするものね」

面白そうにカミーラは笑った。どうやら、他のプリズムフラワーは動きがとまったようだ。

バリュウやカリンがルシファーの相手をしている間に、オッドアイはマヌアルを中央制御盤(メインコンソール)にセットし終えていた。

三枚あるマヌアルのうちの一枚が操作盤のパネルにセットされ、虹色(にじいろ)の輝点をその表面にいくつも走らせている。

オッドアイは、この日のために調べあげた知識を総動員して大地の力を操ろうとした。

マヌアルは、その分子結合レベルの結晶構造自体がデーターの記録と演算処理を行う回路となっていた。その入力は、接触による精神感応の形態をとる。マヌアル自体が擬似生命体、あるいは擬似精神体として、操作者の意図を読みとっているのだ。特定の装置および必要量のエネルギー源と、直接あるいは間接的に接続(コンタクト)できれば、マヌアルは操作者の意図したプログラムを実行する。

基本設定は終了した。後は、実行の命令を与えるだけだ。それによって、オッドアイの長年の悲願が達成されるのだった。

今やまばゆい輝きを放つマヌアルに、彼は最後の命令を与えるべく手をのばした。
「そこまでだ、オッドアイ」
その手が、突然何者かによってつかまれる。
「オデュルーク！」
「クリード！」
オッドアイの腕をつかんだ老人の姿を見て、バリュウとカミーラが同時に別々の名を叫んだ。
「お前は、ダークソルの軍師であった悪魔クリードか!?」
驚くオッドアイを、クリードが老人とは思えぬ力で振り飛ばした。不覚をとったオッドアイが、バリュウたちの前で体勢を立てなおす。
「昔のことなど忘れたわい」
クリードは、バリュウたちの方を振りむいた。
「それよりも、だまされるでないぞ、神竜よ。オッドアイは、地脈（マントル）の力をボルカノ山ではなくグランドシールにむかわせてゼノンの封印（ふういん）を解くつもりだ」
「ゼノンだと!?」
バリュウが聞き返す。
「我らが仕える、最強の悪魔王。偉大なるゼノン様です」
カミーラが答えた。クリードがその先を続ける。

「今のゼノンは、ボルカノンによってグランス島のグランドシールという塔に封印されておる。オッドアイは、ルシファーがボルカノ山にむけようとした大地の力を、グランドシールの塔を破壊するために使おうとしておるのだ。――塔が破壊されれば、ゼノンは自由になれる。さすれば、いま一人の、そして最大の悪魔王が復活することになるのだ。それこそが、あえてルシファーの配下に身をやっしてまで実行しようとした、お前の真の目的であろうが、オッドアイ」

「だからどうだというのだ」

オッドアイが開きなおる。

「臣下である我らが、自らの主を救おうとしてなぜ悪い」

「お前も、肝心なことは知らぬのだな。誰にも地脈の力を使わせてはならん、いや、使えるわけがないのだ。マヌアルは、力にみあうだけの代償を求めるのだぞ。生命の解放には生命を贄とし、力の解放には破壊を贄とし、空間の解放には時を贄とする。集中した力はお前たちとルシファーの両方の望みを果たすだろう、ただし、満たしはしないがな。つまり、大地の力を意図的に増大させて破壊に使えば、グランス島をも含んだパルメキア大陸すべてを破壊させてしまうことになるのだ」

「戯れ言を。私を惑わすつもりか」

オッドアイは、あからさまに否定した。だが、クリードの言葉を明確に否定する根拠を、彼

は持ちあわせてはいなかった。
「ダークソル様がこの大陸を追われるまでの間、大地の力とマヌアルを研究していたわしの言葉が信じられんか。愚かなことだ。その瞳とともに、心の目まで閉じてしまったのか、オッドアイよ。――お前たちが自滅したいというのなら、それを眺めるのもまた一興ではあろう。だが、わしは、そんなことで大事なチェス仲間を失いたくないのだよ」
クリードの言葉に、オッドアイは兜の面頬をあげた。美少年とも呼ぶべき端整な顔があらわになる。だが、その瞳は固く閉じられたままであった。
「馴れ合いの戯れ言はやめろ!!」
怒号とともに、カオスウォーリアたちを倒したルシファーが乱入してきた。大上段に振りかぶった大剣を斬り降ろしながら、頭上からバリュウたちに襲いかかる。
弾かれるようにして、四人が飛び退いた。
一瞬遅れて、ルシファーが床に大剣を叩きつける。魔剣なのだろう、大剣の作りだす衝撃波が床を砕いて穴を穿ち、その破片を周囲にまき散らした。
クリードとカミーラが、光壁を作りだして飛礫からバリュウとオッドアイを守る。そこへ、ルシファーが左右同時に雷撃波を放った。
光壁を越えてくる電撃に、バリュウたちが怯んだ。
「マヌアルは返してもらうぞ」

悪魔王が、制御盤(コンソール)にむかった。数羽のハーピーが、奇声をあげて襲(おそ)いかかる。

「邪魔だ」

ルシファーが、デーモンブレスを浴びせかけた。生命力を奪い去られたハーピーたちの身体(からだ)が、灰と化して消し飛んでいく。

「みんな、避(よ)けて!!」

上の階(フロア)からカリンの声が響いた。ルシファーめがけて、パイパーの操るプリズムフラワーから光の奔流(ほんりゅう)が迸(ほとばし)る。

さすがに、悪魔王が直撃を避ける。痛手から回復したオッドアイが、電光石火で後を追った。ルシファーが着地すると同時に追いついたオッドアイの剣が、頭上から悪魔王を襲う。ルシファーは、かろうじて大剣で受けとめると、唸(うな)りながらさらに後退した。

オッドアイが口笛を鳴らす、魔獣(イビルビースト)が、ルシファーの退路を絶つように回りこんだ。

「神竜よ、今のうちにマヌアルを外せ」

クリードに言われて、バリュウが制御盤(コンソール)にむかう。

小さく舌打ちすると、オッドアイはルシファーを魔獣たちに任せて素早くとって返した。

「マヌアルに触れるな」

魔将軍は、剣をむけてバリュウを威嚇(いかく)した。

「いくら脅しても無駄だ。マヌアルで大地の力をとめさせてもらう」

「脅しではない」
オッドアイが、かかげた剣を振り下ろした。応戦しようとするバリュウの前に、突然カミーラが立ちはだかった。身をていしてオッドアイからバリュウを守る。驚いた魔将軍が剣をとめようとした。だが完全にはとめることができず、カミーラの肩口を浅くオッドアイの剣先が切り裂いた。
「カマリア!」
バリュウが、倒れかかってきたカミーラを両手でだきとめた。
「血迷ったか、カミーラ。なぜ私に逆らう」
最も信頼をよせていた者の予想外の行動に、オッドアイは驚きを隠せなかった。
「違います、オッドアイ様。お願いですから、大地の力をとめてください」
傷口を押さえて出血を防ぎながら、カミーラはオッドアイに懇願した。
「大地の力が暴走しては、何にもならないではないですか。我らの支配する大地が、守るべき生命がなくては。臣下なき王国の孤独な王にいかばかりの価値がございましょう。まして、在るべき大地さえないのでは。私たちはルシファーとは違うはずです。お願いです、オッドアイ様、ゼノン様の復活には他の方法を……」
カミーラの言葉にゆれる心に、オッドアイはきつく唇を引き締めた。
「三人とも、後ろだ!」

クリードが警告の声をあげた。
「遅いわ!!」
振りむいたバリュウたちに、ルシファーのデーモンブレスが襲(おそ)いかかった。避ける暇なく、三人は悪意の嵐(あらし)にその身をつつまれた。
「バリュウ、カマリア、立って……、立ちなさい!」
床に倒れた三人に近づくルシファーにむかって、カリンが矢を放った。
「こうるさい人間め」
ルシファーは片手でカリンの矢を払いのけると、操作盤(コンソールパネル)の上のマヌアルの一枚をつかみとった。ようやっと立ちあがったオッドアイがかけつける前に、床の上をすべるようにして壁際を後退していく。追いすがる魔将軍の行手を、上の階(フロア)から降りてきたブレインメタルが遮(さえぎ)った。
「まんまと大地のマヌアルを奪いおったか。ルシファーめ」
クリードは残された二枚のマヌアルを手に取ると、貫斬光(スパーク)で操作盤(コンソールパネル)を破壊した。
「だが、これでもはやマヌアルを使うことは不可能だ」
優位を強調するクリードに、ルシファーは大声で笑いだした。悪魔王の不敵な態度に、彼は片眉(かたまゆ)を大きく顰(ひそ)めた。
「これは、ダークソルの下でマヌアルを研究していた者とは思えない言葉だな、クリードよ。真に力ある者にとって、マヌアルを直接使うことは不可能ではないのだ。よろしい、一つ面白

いものを見せてやろう」

ルシファーは中央の火口のそばに移動すると、おもむろに右手をかざした。

悪魔王の手の先の空中に、別のマヌアルが現れる。火の山の神竜たちから奪い取ったマヌアルの一つに相違ない。

「これは、遺跡を守るすべてのガーディアンを支配する力を持つマヌアルだ。これのおかげで、機械兵(メタルガーディアン)は我が望みのままに働いてくれた。これが、もっと早く神竜の手から我が手に移っていれば、奴ら(やつ)を滅ぼす必要もなかったのだがな」

ルシファーの右腕の鎧(よろい)の隙間(すきま)から、細い触手状の細胞繊維がずるりと這(は)いだしてくる。みるみるうちにそれは、彼の眼前のマヌアルを被(おお)い尽くした。

「このうえ、何をするつもりだ」

オッドアイが、ルシファーに問いただした。

「すぐにわかる。さあ、新たなる我が下部(しもべ)よ、存分に戦ってみせよ」

悪魔王の細胞につつまれたマヌアルが、赤黒い肉塊を発光させるほどに強い輝きを放つ。その妖(あや)しい赤の光に照らされて、カミーラに治癒(ちゆ)の魔法を施されていた最中のバリュウが、ゆらりと立ちあがった。

「どうしたの、バリュウ……!?」

神竜の様子に不安を覚えたカミーラが、屈(かが)めていた身を起こして訊(たず)ねる。その彼女の頭めが

けて、バリュウが鋭い爪を振り下ろした。
「何をするの……、バリュウ！」
とっさにモーニングスターの鎖で神竜の腕を受けとめたカミーラは、信じられないものを見る目でバリュウを見つめた。呼びかけても、返事はない。それどころか、神竜は躊躇せずに腕に込めた力を強めた。抗う間もなく、壁際へと追い詰められる。
「バリュウ、やめて……」
カミーラにとって、自分よりもバリュウの治療を優先させたことが仇となった。先にオッドアイから受けた傷口が開き、流れだす血とともに激痛が彼女を襲った。両手で左右にはった鎖から、腕の力が抜けていく。対する神竜の力はさらに増し、カミーラはゆっくりと組みしかれていった。
「バリュウ、何をやっているの。やめて、正気に戻って!!」
二人の争う姿を見つけたカリンが、声を嗄して叫ぶ。
「ルシファーの持つマヌアルを壊せ。それしか呪縛を解く手だてはない！」
クリードが叫んだ。
「言われなくとも、そのつもりだ！」
悪魔王にむかってオッドアイが走る。
下段に構えた剣を斬りあげようとした刹那、彼の心眼に、カミーラとバリュウの姿が映った。

「戦え、カミーラ」
オッドアイが叫ぶ。だが、カミーラは、神竜に反撃することができずにいた。バリュウを傷つけたくはなかった。それは、たとえ自分が傷ついたとしても、絶対にやってはいけないことだと強く彼女に思えたからだ。
けれども、心を失っているバリュウには、カミーラは殺すべき対象物でしかなかった。カミーラの頭を食い千切らんばかりに、神竜の顎(あご)が大きく開かれる。息を吸いこんだ胸が大きく盛りあがり、神竜の口の中で微(かす)かな放電が起こり始めた。
この至近距離で竜雷気息(ライトニングブレス)を受けたらただではすまない。カミーラは、初めて戦いの中で恐怖を覚えた。
オッドアイは短く舌打ちすると、身を翻してルシファーに背をむけた。
「退(の)け、神竜！」
かけつけたオッドアイがバリュウの首筋をめがけて剣を横に薙(な)いだ。バリュウの腕があがり、盾ががっしりと剣を受けとめる。縛(いまし)めをとかれたその一瞬に、カミーラは身体を床に投げだして、強く壁を蹴(け)った。背中から床の上を滑りながらその場を逃れる。間一髪、放たれた竜雷(ライトニング)気息(ブレス)が、彼女のいた場所を雷光で焼き尽くした。
体勢を立てなおして、二人の魔将軍がバリュウをはさんで立つ。神竜は二人をさっと見渡すと、翼を広げて空へと逃げた。

本能的に、二人は光壁を張った。そこへ、悪魔王の強烈なデーモンブレスが襲いかかった。規模も威力も、さきほどまでのものとは比べものにならない。

「なんだ、この力は！」

同様に光壁を張って身を守ったクリードが叫んだ。

「マヌアルを手中に納めた今、母大地の力は我がものだ。素晴らしいぞ、この力は」

悪魔王は、左腕にバリュウたちのマヌアルを取り込んでいた。二つのマヌアルが、ルシファーの体組織につつまれて激しく明滅する。

「さあ、お前たちもその身で味わうがよい」

ルシファーが、デーモンブレスに込めた力をさらに強めた。オッドアイの光壁が、形を崩し始める。

「オッドアイ様！」

カミーラが彼の前に移動した。だが、彼女の光壁とて限界だった。光の壁が千々に吹き飛ぶ。倒れこむカミーラの身体をだきとめながら、オッドアイは壁際まで押し飛ばされた。クリードとて例外ではない。

そのとき、プリズムフラワーのビームがルシファーを襲った。直撃のはずが、悪魔王の直前で光の束が四散する。ぎろりと、ルシファーがカリンたちを睨んだ。

「もう一度よ」

カリンがパイパーを促した。

彼女たちは、生き残りの魔物たちと一団となって砲台を機械兵(メタルガーディアン)から守っていた。

「見逃しておいたとも知らずに、図にのりおって」

ルシファーがつぶやく。一時的に攻撃がやみ、倒れていたカミーラたちがうめきながら身を起こす。悪魔王が、素早くバリュウに目配せをした。

「いいですぞ、もう一度撃てます」

パイパーが、狙(ねら)いを定めた。その射線に、バリュウが割りこんでくる。

「撃っちゃだめ！」

カリンが、慌(あわ)ててパイパーの手を押さえた。その間に、飛んできたバリュウが、プリズムフラワーの直前まで移動する。

雷光が走った。

「伏せろ！」

パイパーが、カリンを押し倒すようにしてプリズムフラワーから離れた。同時に、竜雷気息(ライトニングブレス)を受けた機械の花が爆発を起こす。爆炎が、その場にいた者を押しつつんだ。魔物と機械兵のいくつかが、爆風で最下層へ転がり落ち、互いに元の姿を失った。

バリュウが、機械の破片の散乱する床を見回した。ドンゴが、ツィッギーが、パイパーが、そして、カリンが倒れているのが、感情のこもらない蒼(あお)い目に映る。

立つ者のいないことを確認すると、バリュウは悪魔王の下へ戻っていった。ルシファーは、神竜にカミーラたちの止めをささせるつもりなのであろう。

「——大丈夫かな、カリン……」

あえぎながら、小さな声でパイパーがカリンに訊ねた。彼の身体の下から、無傷の娘が這いだしてきた。

「大丈夫よ。それよりも、あなたの方は」

短く礼を述べてから、カリンが聞き返した。

「なんとか生きてはいますよ。カマリアやツィッギーに、何度か防御の魔法をかけてもらっていたおかげですかな」

パイパーは、無理に笑って見せようとした。が、その顔が痛みでひきつる。

ドンゴやツィッギーも生きてはいるようだ。だが、立ちあがることができずに床でうめいている。

「バリュウをなんとかしなくちゃ。あの人は、こんなことをしちゃいけないのよ、絶対に」

カリンは、唇を噛みしめた。

「悪魔王の右手に取り込まれたマヌアルを壊せれば、バリュウは正気に戻るかもしれない。できますかな、カリン」

「やってみるわ」

カリンはパイパーのそばを離れると、自分の弓と矢を探した。爆風で、手放してしまったのだ。
探し物はすぐに見つかった。だが、雷弾をつけた矢は一本しか残っておらず、弓は弦が切れていた。これでは、役に立たない。
矢を握り締めたまま、カリンは絶望に打ちのめされかけた。
ふいに、カタカタと音がした。
見ると、魔戦士(カオスウォーリア)の死体の横で、ハーピーが一羽震えていた。倒れている魔戦士の陰になったおかげで無事だったのだろう。だが、魔物の娘は怯(おび)えきり、完全に戦意を失っていた。
カリンは、ルシファーとハーピーを交互に見た。無理ではないかもしれない。
「あなた、飛べるわね。あたしをルシファーの所まで運びなさい」
ハーピーは、カリンの言葉に悲鳴をあげた。今の状態の魔物に、そんなことをする勇気がわくはずもない。
業(ごう)をにやしたカリンは、魔物の喉(のど)に鏃(やじり)をつきつけた。
「やらなければ、あなたを殺すわ」
たとえ魔物とはいえ、生きる者の命を脅して命令するなど、決して気持ちのいいものではない。だが、今のカリンは、なりふりをかまいはしなかった。
「ルシファーの真上にいくだけでいい。さあ、飛びなさい」

カリンが矢を押した。魔物の喉が少し裂け、血が一筋流れだす。

　おいたてられるようにして、ハーピーが羽ばたいた。

　カリンは矢を口に銜(くわ)えると、魔物の足を両手でつかんだ。ふわりと、両足が床を離れる。

「引き返してはだめよ。そのときは、この雷弾であなたの身体(からだ)を粉微塵(こなみじん)にするわ」

　脅されるままに、ハーピーが中央に立つルシファーを目指す。その羽音に気づいた悪魔王が、バリュウを呼び戻した。

　満身創痍(そうい)のカミーラたちと戦っていた神竜が、矛先をカリンにむける。

「ルシファー！」

　悪魔王の顔をめがけてカマリアが短剣を投げつける。反射的に、ルシファーはそれを神竜に弾(はじ)かせた。神竜の爪(つめ)の一振りで、刃が粉々に砕け散る。

　その一瞬に隙(すき)が生まれた。

　カリンはハーピーの足を放すと、両手で雷弾のついた矢を握り締めながら落ちていった。

「なにい！」

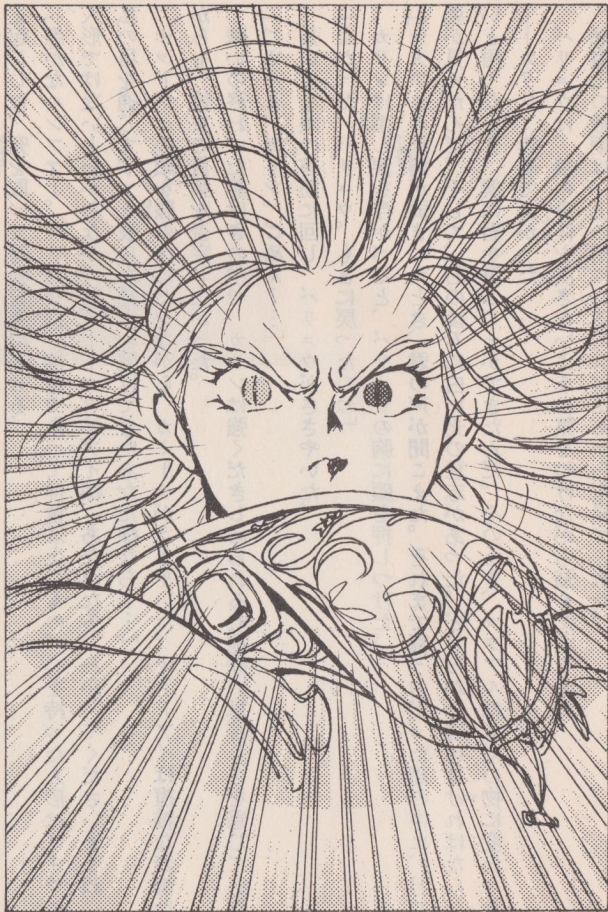
　頭上から真一文字に襲(おそ)いくるカリンを、ルシファーが見上げた。予想外のことに、悪魔王の動きが遅れた。

「解放されなさい、バリュウ!!」

　カリンは、渾身(こんしん)の力を込めて矢の先を悪魔王の右手に叩(たた)きつけた。雷光とともに激しい爆発

が起こる。爆風でカリンの身体が持ちあげられ、後ろむきに吹き飛ばされた。
悪魔王の右手は、これでマヌアルごと粉々になったはずだった。そうでなければ、もはやカリンたちに後はない。
どんと、カリンの身体が何かにぶつかる。それは、ぐったりとした彼女の身体をかかえて振りむかせた。
「……バリュウ」
カリンは安堵の吐息をもらした。バリュウが受けとめてくれたということは、呪縛が解けたに違いない。
だが、カリンの想いとは反対に、神竜は娘の両肩をつかんだ手に力を込めた。
「そうだ、そのまま引き裂いてしまえ」
ルシファーが叫んだ。彼の右手はカリンによって吹き飛ばされていたが、マヌアルはまだ健在であった。空中に浮かぶ虹色のプレートに、再生の始まった悪魔王の腕がふたたび絡みつき始める。
「……い、痛い。やめて、バリュウ、あたしがわからないの」
神竜の手の中で、娘が悲鳴をあげた。神竜の長い首の先で、細い頭が虚ろにゆれる。腕をつかんだ指が、もどかしげに何度も握りなおそうと蠢いた。
「カ……リ……ン……」

神竜が娘の名を口にする。その言葉は、彼にとって呪縛(じゅばく)なのか、あるいは解放(かいほう)の呪文(じゅもん)なのか。
神竜が苦しげにうめいた。
「バリュウ、しっかりして、思い出して」
必死にカリンが呼びかける。
「何を手間取っている！」
たかが小娘一人引き裂くことに躊躇(ちゅうちょ)する神竜に、ルシファーが業(ごう)をにやして命令した。
神竜の口が、大きく開かれる。竜雷気息(ライトニングブレス)を放つつもりだ。カリンは、覚悟した。他の誰(だれ)にでもない、バリュウに殺されるのなら諦(あきら)めがつくかもしれない。でも、彼女を殺した後のバリュウは、その事実をどう受けとめていくのだろう。バリュウに自分を殺させることだけは、カリンは嫌だった。
「やめなさい、バリュウ。あなたが殺そうとしているのは、カリンなのよ!!」
カミーラが、ぼろぼろの身体(からだ)を引きずりながら二人にむかって進んだ。だが、走ることもままならなくては、とても間に合わない。
「バリュウ!!」
カリンが叫ぶ。雷光が放たれた。
「なんだと!?」
ルシファーが、驚きの声をあげる。バリュウの竜雷気息(ライトニングブレス)は、カリンの頭上からマヌアルに

むけて放たれたのだ。
「神竜が、マヌアルを壊すなどありえん……」
虹色の結晶板を砕き、雷光が悪魔王の身体に突き刺さる。
「ルシファー!!」
火口間際まで押しやられたルシファーにむかって、オッドアイが突進していった。クリードにわけ与えられたわずかの活力と気力を振り絞って、魔将軍が走る。
ルシファーは、とっさにデーモンブレスをオッドアイに放った。致死の嵐が、魔将軍の身体を押しつつむ。唸り声をあげながらも、彼は怯まなかった。
そして、その目が初めて開かれた。
金と赤とに輝く瞳が、悪魔王を睨みつけた。一瞬後にルシファーの身体が妖光につつまれ、その光が爆炎と化す。魔物たちがこの少年を恐れる最大の理由、それがこの見る者を焼き尽くす魔眼であった。
よろめく悪魔王に、オッドアイは剣で渾身の一撃をみまった。ルシファーの仮面が割れ、皮膚のない醜悪な顔があらわになる。
「おのれ、神竜。おのれ、オッドアイ……!!」
仰向けに倒れたルシファーが、火口に落ちていく。
オッドアイは、剣を落とすとその場に倒れこんだ。カミーラが彼にかけよって、そっとかか

え起こした。兜を取って呼吸を楽にさせる。
「愚かなルシファー。バリュウは、神竜であって神竜以上のもの。心を持った人形は、すでに人形ではないとわからなかった。——オッドアイ様、あなたなら、わかってくださいますね。私の目を通じてずっと彼らを見つめ続けてきたあなた様なら……」
オッドアイの頭を膝の上にだきながら、カミーラがささやいた。オッドアイは複雑な表情ながらも、彼女の言葉を否定しなかった。
戦いの終わった静けさの中で、カリンは強くだきしめられる心地好い息苦しさを感じていた。
「ごめんよ、カリン。ごめん……」
長い首を娘の首筋に回し、バリュウがささやいた。
「よかった、バリュウ。もとに戻ったのね」
カリンは嬉し涙を浮かべると、バリュウの胸に顔を押しつけた。
「マヌアルの呪縛が弱まったとき、君の声が聞こえた。それまで真っ白だった頭の中に、君の姿が見えたんだ。そして、君の後ろに白い光の意志があった。どちらかを選ばなければならないと悟ったとき、僕は君を選ぶことができたんだ。そのとき、マヌアルはただの物に変わった。——カリン、無事でよかった」
バリュウは、娘の身体を潰さないように気をつけながら強くだきしめた。
悪魔王の最期は、上の階にいるドンゴたちからも見てとれた。

「勝てたのかな」
ツィッギーの手あてを受けながら、パイパーは隣に座っているドンゴに問いかけた。魔道士と同じように壁にもたれかかっていたドワーフは、そのようだなとだけ答えた。パイパー同様に少女をかばったため、怪我のひどさでは旧友と甲乙つけがたい。今は、喋るだけでも痛みが身体を走るため、できることならば一言も喋りたくはなかったのだ。
「嫌なお人形さんたちは、動かなくなったようですわね。生き残った魔物たちも、ずいぶんと少ないようですわ」
ドンゴの傷に手をかざしながら、ツィッギーはバリュウたちの方を見下ろした。
「結局、大地の力を統べるマヌアルは、ルシファーとともに火の海の中か。やれやれ、ここが暴走する前にポンペイの者たちを避難させねばならんな。さて、お前たちはどうするのかな」
クリードは、オッドアイとバリュウにそれぞれ訊ねた。
「これ以上の争いは無益です。退きましょう、オッドアイ様」
オッドアイをささえたカミーラが進言した。
魔将軍は、無言でバリュウの方に顔をむけた。魔眼を持つその両目は固く閉じられている。彼は、形を見る者ではなかった。それゆえ、彼にはより多くのものが見えるのだろう。
「しかたあるまい。機会はまたある。ポンペイへむかった魔物を呼び戻して再起をはかるとしよう。これ以上神竜たちには手を出さん。――それでよいのだな、カミーラ」

カミーラは、オッドアイに深い感謝と忠誠を誓った。
「バリュウ、あたしたちはどうするの」
カリンが不安げにバリュウを見上げた。
「確かに、今は両方とも戦えるような状態じゃない。ここは、退くべきなんだろう。だが、君たちがルシファーのような別の悪魔王の復活を目指しているのなら、今決着をつけるべきなのかもしれない」
バリュウの言葉に、カリンとカミーラが息を呑んだ。ふたたび、その場に緊張が走る。
「やはり、光とはあいいれないものなのか。ならば、私と神竜だけで決着をつけよう。戦いの途中も、決着がついてからも、他の者にはいっさい手出しはさせない。クリード、あなたが立ちあい人だ」
指名されて、クリードが露骨に嫌な顔をする。
「どうして、お前たちはそう馬鹿者なのだ。自分で自分を縛ることはないだろうに。周りの者の気持ちも考えんか。だいたい、神とか正義とかにその身を捧げるなど、最も愚かな……」
クリードが二人の仲裁に入ろうとしたとき、突然建物が激しくゆれだした。
「また、大地の力が不安定になったのか」
「違う、これは……」
倒れまいと必死になりながら、クリードがオッドアイに叫んだ。その言葉が終わらないうち

に、中央の火口から、凄まじい熱気がふきあげてくる。
「早く、火口の蓋を閉じるのだ。早く！」
損傷のないプリズムフラワーが一斉に動きだす。
「馬鹿な、動きはとめたはずなのに」
カミーラが、一斉に下をむく無数の花を見上げた。
光が放たれる。大陸すべての遺跡を動かすほどの力が、光の奔流となって火口に吸いこまれていった。
「火口から離れるんだ」
カリンをだきかかえたままバリュウが叫んだ。彼らが下がると同時に、火口から炎の柱が噴きあがった。
「噴火か。いや、違うぞ、これは。まさか……、まだ生きているのか、ルシファー!!」
クリードの叫びに応えるかのように、噴きあがった溶岩が人の形になり始めた。燃え盛る超高温の巨人が、火口からその上半身を現す。顔の部分の、口らしき裂け目が弓型に歪んだ。
「我は不死身だ。マヌアルによって大地から力を得る限り、貴様たちのような取るに足らない存在に私を倒すことはできん。だが、貴様たちはよく戦った。だから、褒美を取らせよう。このパルメキアを貴様たちにくれてやろうというのだ。どうだ、オッドアイにカミーラよ、嬉しいであろうが」

溶岩の巨人と化した悪魔王が喋(しゃべ)った。建物の内部にわんわんと響く声は、すでに声とは呼べず、溶岩のわきたつ音のようであった。

「何が言いたいのだ、ルシファー」

オッドアイが、姿の変わった悪魔王に言い返した。

「この大陸ごと、貴様たちを吹き飛ばしてやろうというのだ。ボルカノンもゼノンも、その他すべての生き物を道連れに、熱き火の海にパルメキアを沈めてやろう。すべての命と一緒に、地獄の業火(ごうか)に焼かれるがよいわ」

「そんなことをして、貴様はどうするつもりだ」

「我が身が大地と一体になるのならば、汚(けが)らわしい生き物を我が身の上にすまわすつもりはない。すべて消え去ればいいのだ。そも、大地の始まりは混沌(こんとん)。すべては混沌により浄化され、混沌によって新たに造りかえられる。我が心のままにな。――パルメキアを溶かして新たな大地に作り変えたら、次はお前たちのルーン大陸を浄化してやることとしよう」

巨人の腕が、神竜をさした。ぼたぼたと滴り落ちる溶岩が、床を溶かして白い煙をあげる。

「なんだと。そんなことをさせてたまるか。この大地も、この自然も、この命も、お前のような者に好きにはさせない」

バリュウが、怒りを込めて叫んだ。

「愚かな。この世のすべてを作り変える力と権利を持った神に逆らおうなどとは。身のほどを

知るがいい」
ルシファーの口が大きく開く。そこから、溶岩の塊を伴ったデーモンブレスが噴きだした。素早く、バリュウたちが四方に散る。一瞬の差で、床は灼熱の火の海と化した。
「奴を倒さねば、我らのすむ大地は失われる。自らのために、悪魔王ルシファーを倒せ！」
オッドアイの言葉に、生き残った魔物たちが一斉にルシファーに戦いを挑んでいった。
「オデュルーク、いや、クリードでしたね。カリンを頼みます」
カリンをクリードに預けると、バリュウも戦いの中に身を投じていった。

6

戦いは圧倒的にバリュウたちが不利だった。身体そのものが敵を焼き尽くす武器である悪魔王に対して、直接接触するような攻撃はできない。迂闊にもそれを試みた魔物は、炎につつまれて灰となった。
「火はだめだ。凍らせる以外に方法はなかろう」
パイパーが氷結嵐を唱える。冷気の嵐は、悪魔王の身体の一部を黒い岩に変えた。かさぶたが剝がれるように、冷えて固まった岩がごとりと下に落ちる。
効果はあった。だが、巨大な溶岩の巨人にしてみれば、すぐにも再生可能な傷でしかない。
諦めずに冷凍攻撃を繰り返すパイパーをまねて、魔力を持つ魔物たちが同様の攻撃を放った。

瞬間的に固くなる巨人の身体にむかって、バリュウは竜雷気息を収束して放った。脆くなった部分が大きく吹き飛ぶ。これは、少し効果があったようだ。

怒ったルシファーが、呪文を唱えていたハーピーをつかんで握り潰す。悲鳴をも握り潰し、命が焼き潰されて灰と化していく。

ルシファーは、そのまま炎の拳をパイパーたちにむかって叩きつけた。

避ける間がない。

迫りくる溶岩の塊に、パイパーたちはすくんだ。

「パイパー！」

バリュウが叫んだ。ルシファーの手が、彼らの直前でとまった。

「早く……逃げなさい。そんなに、もたないわ」

悪魔のジュエルの力で作りだした強力な光壁で、カミーラはルシファーの拳を受けとめていた。額の宝玉が赤い光につつまれる。激しい閃光が起こり、溶岩の拳と光の障壁が激しい押し合いを演じた。カミーラの顔に、玉の汗が浮かぶ。宝玉の光が、脈動するように明滅を繰り返す。

「急いで！」

カミーラの叫びに、パイパーたちは慌ててその場を離れた。

「生意気な、押し潰してくれる」

悪魔王が力を増した。光壁が崩れ始める。
「もたないか……」
カミーラが歯を食いしばったとき、ルシファーの腕が肘のあたりで砕け散った。飛び散る溶岩が床を焼き、崩れ落ちた腕は何層もの階層の露台を飴のように溶かしながら流れ落ちていく。
「大丈夫か、カミーラ」
魔眼の力で溶岩の巨人の腕を吹き飛ばしたオッドアイが叫ぶ。肩で息をしながらも、空中に浮かんだカミーラはこくりとうなずいた。
「頭を狙うんだ」
怯んだルシファーをさして、バリュウが叫ぶ。魔物たちが巨人の頭に冷気を集中させた。黒い岩に変わった頭に、神竜は収束させた竜雷気息を放った。悪魔王の頭が粉々に砕け散る。
「やったか!?」
頭と片腕を失ったルシファーを見て、バリュウがつぶやいた。巨人は動きがとまったかのように見える。
だが、沸き立つ肩の間から新たな頭が再生されるのに、さして時間はかからなかった。盛り上がった燃える岩は、さきほどよりも悪意ある表情を造りだしていた。
「我が力は無限。地下に熱き地脈のある限り、私を滅ぼすことなど不可能だ」

「ルシファーがファイヤーデーモンブレスを放った。

神竜にむかって、悪意ある炎と灼熱(しゃくねつ)した火山岩が吹きつける。バリュウは、竜雷気息(ライトニングブレス)で岩を砕いて身を守ろうとした。だが、砕けた岩は飛礫(つぶて)となって彼を襲(おそ)う。盾を前面で合わせて防御しても、衝撃をなくすことはできない。全身を焼けた石に叩(たた)かれ、バリュウは白い煙を引きながら墜落した。床に散乱した瓦礫(がれき)の中に突っ込み、神竜は動かなくなった。

「神竜!」

バリュウにかけよろうとするオッドアイにも、ルシファーはファイヤーデーモンブレスを浴びせた。光壁を張った魔将軍を、障壁ごと壁まで吹き飛ばす。したたかに背中を壁に打ちつけて、魔将軍はうめいた。

「そろそろ、遊びは終わりにしよう」

ルシファーは再生した手を左右に広げると、大きく咆哮(ほうこう)した。

溶岩の巨人の全身が強い光につつまれる。灼熱の光が、全員を襲った。ルシファーの近くにいたハーピーやグリフォンの羽根が、熱で炎をあげる。建物の内部の温度が、急激な上昇を始めた。熱にあおられた者たちが、次々に倒れていく。

「ツィッギー、大丈夫か。しっかりしろ」

崩れるようにして倒れた少女を、ドンゴは慌(あわ)ててだきとめた。

「無理もない。この熱は……」

言いかけて、熱にあおられたパイパーが床にしゃがみ込んだ。
「バリュウ、なんとかしてくれ」
二人をだきよせながら、ドンゴが声を嗄して叫んだ。
だが、神竜は瓦礫に埋もれたまま動かない。
カリンは身の危険も省みず、バリュウの下にかけよろうとした。
「待て、光壁の外へ出るでない」
クリードはカリンの腕をつかむと、自分の方に引き戻した。もう一方の手で印を切ると、周囲にぐるりと張り巡らせた光壁を強める。
「今、わしの結界の外は灼熱の熱さだ。お前など、一歩出たとたんに熱で倒れてしまうぞ」
「だからって、ここでじっとしているなんてできない。このままじゃみんなが、バリュウが死んじゃう！」
カリンは、クリードの胸を無茶苦茶に叩きながら叫んだ。
「落ち着かんか、これ」
取り乱す娘を落ち着かせようと、クリードはカリンの肩に手をおいた。
「あなたは、悪魔なんでしょ。だったら、なんとかしてよ。バリュウを助けてくれるならなんでもする。魂が欲しいというなら、あたしの魂をあげるから。だからお願い、バリュウを助けて……」

クリードは、泣きじゃくる娘に途方にくれた。逃げるようにして視線を周りにさまよわせる。その目に、フロアの角の透明な円筒(カプセル)が映った。試験管を伏せたような形をしたそれは、かつて黒き竜(ダーク・ドラゴン)に生命力を転送した装置に酷似していた。プロンプトの古(いにしえ)の塔で、ダークソルがマヌアルを使って動かしたものだ。もちろん、その使い方を研究していたのは、クリード自身である。

「これが使えるかもしれんか……」

クリードはつぶやいた。どのみち、このままでは全滅してしまう。

「今の言葉、本当だな?」

問い返すクリードに、カリンがしっかりとうなずく。

「ならばくるがいい。私は悪魔だ。魂の契約は絶対に守る。命を捧(ささ)げるというのならば、それにみあった力は約束しよう」

カリンを伴って、クリードは目的の機械まで移動した。ルシファーは大きく腕を広げたポーズのまま動かず、周囲に熱を放ち続けている。焼けた壁や床によって、どこかの死体が焼けているのだろうか。熱風とともに、胸の悪くなる臭(にお)いが充満しつつあった。

「この中に入るのだ。この機械で、お前の生命力を吸いだして神竜に与えることができる。一時的にではあるが、お前の命の炎を燃やして、神竜は大きな力を得るだろう。もはや、そのわずかな時間にかけるしかあるまい。だが、中に入った者は、すべての生命力と精神力を失うの

だ。それは、確実な死を意味する。それでもいいのだな」
答える代わりに、カリンは自ら中に入っていった。
「力を得るためには失わなければならない物がある。そして、悪意を消し去るためには、得なければならぬものも。後は、おまえさんの生命力と神竜を想う心次第だ」
クリードは、二枚あるマヌアルの片方を取り出すと、円筒の側面にある操作盤にセットした。マヌアルが虹色に輝き始める。
円筒の上部から、雷光にも似た光が激しくカリンを打った。絡みつく閃光に持ちあげられて、カリンの身体がわずかに浮きあがる。衣服が、細かな灰となって崩れていく。獣の皮や植物の繊維から作られたものは、生命力を搾り取る光に耐えることはできなかった。
カリンの身体が大きくのけぞり、その口から苦悶の叫びがほとばしった。あたりまえだ。今、彼女は魂そのものを削られているのだから。その苦痛は想像するだに余りある。
「すまぬ、しばらく耐えてくれ」
マヌアルに手をあてながら、クリードはつぶやいた。
熱を放出していたルシファーが、彼らに気づいた。一時的に熱の放出をとめる。
「クリードめ、まだ何か企てるつもりか。じわじわと焼き殺すつもりだったが、気が変わった。ひと思いに消滅させてくれよう」
ルシファーは、クリードとカリンめがけてファイヤーデーモンブレスを放った。

「いかん。神竜はまだ目覚めんのか!」
光壁を張りつつ、クリードが叫んだ。カリンを残して、この場を離れることはできない。かといって、悪魔のジュエルを持たない今のクリードでは、ルシファーの力をすべて防ぐことは不可能だった。
「ままよ」
クリードは、光壁のもってくれることを祈った。
炎の悪意が、怒濤となって光壁に激突する。クリードとカリンを残して、周りの床や壁が吹き飛んだ。
「もったのか!?」
目を細めながらクリードがつぶやいた。光壁と炎の接点に、ぼんやりと人影が見える。雄々しく立ちふさがるその姿は、カミーラのものであった。
クリードの光壁の前で、彼女は光壁を張ってファイヤーデーモンブレスを防いでいた。一枚の光壁では完全に防げなくとも、弱められた炎は二枚目の光壁によって弾かれる。だが、その間にいるカミーラは、弱まったとはいえ、ルシファーの吐く炎をまともにその身に受けていた。むきだしの胸が、熱に焼かれて焦がされていく。
「カリンは、貴様などに殺させはしない。――クリード、何かするのなら、早くして!!」
悪魔王の炎に身を焼きながら、カミーラは叫んだ。

「愚か者めが、自分以外の者の盾となるというのか。面白い、いつまでもつかな」
悪魔王は、攻撃の手をゆるめない。
その様子を、ドンゴたちは朦朧とする頭をかかえながら見ていた。パイパーが床や壁を凍らせることで、彼らはかろうじてもちこたえてはいた。だが、それが限界だった。
「そんな、カリン姉様から、命の光が流れだしていきますわ……。やめて、そんなことをしたら、死んでしまいますわ。だめえ！」
今行われていることの意味をおぼろに悟ったツィッギーが叫んだ。解けてしまった髪を振り乱して叫んでみても、どうすることもできない。せめて自分にできることはないかと模索した彼女は、指輪をはめた手を組み合わせて祈りを捧げ始めた。

7

「生きているか、神竜」
ルシファーの気がそれたすきに、オッドアイはバリュウを助けだしにかかった。
瓦礫をどけると、下から現れた神竜は微かにうめいた。失っていた意識が、やっと戻ったらしい。
「まだ、戦えるか」
問いかけたオッドアイが、異変に気づいたのはそのときだった。バリュウの身体がほのかに

輝いている。
「なんだ、この光は」
魔将軍が思わず後退った。
現と夢との狭間で、バリュウはカリンの声を聞いていた。
——目覚めて、バリュウ。あなたに、私の力をあげる。……だから立ちあがって。お願い。
光となって半分透き通ったカリンの姿が、バリュウの意識の間近にあった。ささやくようなやさしい声が聞こえる。
——友達はみんな笑ったけれど、私はあなたを神竜としてではなく、バリュウとして好きだったのよ。そして、私の好きなあなたは、こんなことで決して負けたりしない。だから戦って、私のすべてを使っていいから。私は後悔なんかしていないから……。
カリンの身体がバリュウに重なり、光となってとけ込んできた。純粋な輝きが、バリュウの心の中で輝く。
力がわいてくる。あたたかく、なにものにもかえがたい力が。カリンの想いが、伝わってくる。それこそが、自分にとってのシャイニング・フォースなのだとバリュウは悟る。
バリュウは現実世界の目を開けると、力強く立ちあがった。彼の身体をつつみ込んでいる光がいや増していく。
「ルシファーが、神竜の姿に気づいた。

「なんだ、その輝きは。気分が悪くなる。ええい、その光を消せ！」
ファイヤーデーモンブレスをとめてルシファーが叫んだ。ひどい火傷（やけど）をおったカミーラが、床に倒れ込む。
「消せというのに。ええい、消さぬのなら、貴様ごと消し去ってくれる」
ルシファーは、神竜にむかってファイヤーデーモンブレスを放った。バリュウはその場を一歩も動かず、両翼でその身をつつむようにして防御した。
炎がバリュウをつつみ込む。
灰も残さず燃え尽きてしまうがいいと、ルシファーが内心で笑みを浮かべた。
バリュウが吠（ほ）えた。
大気をゆるがす咆哮（ほうこう）をあげると、純白のマントをはだくようにして翼を広げた。神竜の鎧（よろい）とともに、彼の身体に纏（まと）わりついていた炎が勢いよく弾（はじ）け飛ぶ。銀砂が彼の周りに飛び散り、渦をまいた。
火傷一つ負わぬ純白の身体が強い光を放ち、その輝きが大きくふくれあがっていった。みるみるうちに、バリュウの身体がルシファーと同じ大きささまで巨大化していく。いや、実際に彼の身体が大きくなったわけではない。バリュウの身体をつつんでいた光が、彼の姿そのままに大きくなったのだった。
「このような力、神竜ごときがなぜ……」

ふたたび、ルシファーがファイヤーデーモンブレスを放った。バリュウが、竜雷気息(ライトニングブレス)で迎え撃つ。それは、彼を中心にして広がった光の大神竜の顎(あぎと)から放たれた光輝の奔流(ほんりゅう)だった。

炎と光がぶつかりあい、空中で激しく鬩(せめ)ぎあう。両者ともに一歩も引かない。均衡は、どちらかが力尽きるまで続くだろう。

吸魂の閃光(せんこう)の中で、カリンが叫び声をあげた。カミーラは、耳をふさぎたくなるのを必死に我慢(がまん)した。

「まだだ、まだ燃え尽きてはいかん。今しばらくの間、命の炎を燃やすのだ!」

クリードが、必死にカリンに呼びかけた。

娘の力が尽きてしまえば、今の神竜の力は失われる。逆に、バリュウの力が悪魔王に打ち勝つことができなければ、彼とともにカリンの命も使い果たされてしまうだろう。

「カリン、バリュウ、頑張(がんば)って。他人を想(おも)う心を私に教えてくれたあなたたちの力を、私に信じさせて……」

カリンの入った円筒(カプセル)にすがりつきながら、カミーラが祈りにも似た言葉を口にした。

離れたところで、パイパーとドンゴに支えられたツィッギーも祈りを捧(ささ)げる。

そして、オッドアイは時を待った。

わずか数秒の時が、永遠にも感じられる。やがて、均衡の破れる瞬間がおとずれる。

苦痛に身悶(みもだ)えしながら、それすらもはね飛ばすように、カリンが渾身(こんしん)の力と想いを込めて神

竜の名を叫んだ。
瞬間、光でできたバリュウの身体に、陽炎のようなカリンの影が重なる。
バリュウの放つ光がまばゆいばかりに輝いた。圧倒する光はルシファーの放つ炎を陵駕し、溶岩の巨人の身体を呑み込んでいく。巨人の手や頭が、模倣の形を失って元の溶けた岩に戻っていった。風に飛ばされる飛沫のように千々に光に吹き飛ばされ、胴体の名残りの溶岩の柱だけがかろうじて残される。
再度、バリュウが竜族の雄叫びをあげた。
光の竜が、急激に収束する。力が、バリュウを中心にして集まっていく。密集した輝きはバリュウの身体をとかしこみ、彼の身体が光そのものとなる。
光の矢が放たれるように、神竜がルシファーにむかって突っ込んでいった。大地の唸りともつかない叫び声が、響き渡った。
光の矢に撃ちぬかれ、溶岩の柱に大きな穴があく。
バリュウは、つきぬけた柱の反対側でゆっくりと身体を翻した。
溶岩の柱が崩れ始め、溶けた岩が大地の穴に流れ落ちていく。やがて、溶け落ちる岩の中から、崩れかけたルシファーの姿が現れた。悪魔王の胸から腹にかけてが大きく欠損している。その身体からは、内臓に代わって何枚ものマヌアルが顔をのぞかせていた。長い時をかけて、彼が大陸中から集め、体内に吸収してきた神々の遺産だった。

「あわれな。悪魔王ともあろう者が、滅び去った神々の愚かな意志に取り込まれおって……」
クリードが、ルシファーの姿を見てつぶやいた。
「おおおお、大地の力よ、活性化しろ。今一度、我に力を与えるのだ。この私が……暗黒の神々の一人であるこの私が、負けるわけが……ない……」
体組織が崩れかかった顔を醜く歪めながら、ルシファーは欠けたマヌアルに呼びかけた。
「貴様に与えられた機会はもうない。認めるがいい。これは事実だ」
ルシファーの高さまで浮上してきたオッドアイが冷たく言い放った。
「認めぬ!!　そのようなことが……」
「消えされ、ルシファー!!」
バリュウの声が響いた。
咆哮する悪魔王の身体を、オッドアイの魔眼とバリュウの竜雷気息が前後から押しつつんだ。雷光と妖光の中、すべてのマヌアルが砕け散り、悪魔王の身体が灰も残さずに消滅していく。
「カリン！」
悪魔王の消滅を見とどけると、バリュウは一直線にカリンの下へむかった。
円筒の扉を引き千切るようにして開く。蝶番の壊れた扉が、音をたてて床に転がった。倒れたまま動かないカリンをだきあげると、バリュウは彼女を外へと連れ出した。

「しっかりしてくれ、カリン。死なないでくれ、死んじゃだめだ」
バリュウは娘の身体をきつくだきしめると、涙を流しながら彼女の名を呼んだ。
その声に、カリンが微かに反応して動く。
「カリン！」
喜びの声をあげて、バリュウはカリンに頬をよせた。
「バリュウ、あたし……生きているの!?」
そっと手を持ちあげて、カリンがバリュウの顔にふれる。
「そんなはずはない、この娘の命は、一人分まるまる吸いだされたはずなのだぞ」
クリードが驚きの声をあげた。彼は、人間一人の持つすべての命の炎を神竜に送り与えたはずだ。普通ならば生きているはずがない。
「いいや、カリンは一人ではなかった」
中央の火口をはさんだむこうから、ドンゴの声が響いてきた。その腕には、ぐったりとしたツィッギーがだきかかえられている。解けた豊かな髪と左腕の指先が、かかえるドワーフの低い背丈のために床についてしまっている。少女の薬指には、治癒の力を使い果たしてしまった白の指輪の燃え尽きた跡が残っていた。
「そう、カリンは私たちのカリンであり、バリュウは私たちのバリュウであったのだから」
オッドアイに上半身をだきあげられ、傷の治癒を受けていたカミーラがクリードに言い添え

た。
「そんな身体で、この娘に自らの力をわけ与えたのか。いかに魔性の者の生命力が強靭だとはいえ、限度というものがあるのだぞ。あそこの娘も、同じことをしたというのか。まったく、わしには、そうだな——理解できんよ」
　クリードは、わざとわからないそぶりをしてみせた。
　そのとき、下から突きあげるような振動がバリュウたちを襲った。床の一部が盛りあがり、床を二分するように大きな亀裂が走る。
　クリードの顔色が変わった。
「ルシファーめ、とんだ置き土産を残しおったな。大地の力の暴走を引きだしてから消滅しおった。じきに、ここは吹き飛ぶぞ」
　クリードが叫んだ。
「それは……、なんとかしてとめなければ」
「無理だ。マヌアルが失われた今、大地の力の暴走をとめることはできん。火竜の尻尾は消滅するだろう」
　カリンをだきかかえたバリュウに、クリードは冷たく首を振った。
「そんな……。ポンペイの人たちは、エルリックたちはどうなるの。なんとかして、あの人たちを助けなきゃ」

カリンの言葉に、クリードが考え込んだ。
「彼らを救う方法がないわけではない」
クリードはカミーラに近づいていった。
「ボルカノンが、マヌアルを見つけるために使者に渡したのだろうが。まさか、わしの魔力を封じ込めた悪魔のジュエルがこの手に戻ってくるとは思わなかったな。悪魔の力は封じるとボルカノンに約束したのだが、いたしかたあるまい」
言いつつ、彼女の額の宝石に指をふれる。
「わしの力、返してもらうぞ」
クリードの指先で、カミーラの額の宝玉が赤い光を発した。その光が、彼の身体（からだ）に吸い込まれていく。魔力を放出し終わった宝玉が、赤から翠（みどり）に変わる。
「これでよし」
満足げにうなずくと、クリードはマヌアルの最後の一枚を取り出した。
「早くここを離れるのだ。オッドアイ、神竜たちとカミーラを連れて、火竜の尻尾（しっぽ）の外まで転移してくれ」
オッドアイは、クリードの言葉にうなずいた。魔力の大半を失ったカミーラには、そこまで遠くに転移する力はない。
「どうするつもりだ」

「マヌアルの力を使って、火竜の尻尾を安全な空間に一時転移させる。ここにいては、転移に巻き込まれるぞ」

バリュウの問いに、クリードは答えた。

「巻き込まれるとまずいのか」

「言ったろう、空間を操る力は時を贄とすると。他の場所に転移させては世界が歪む。これだけの規模の転移は、時のない空間へしかできんのだよ。時のない空間から元に戻る方法は、空間に歪みを残さないためには、時間を歪めるしかないのだ。これからおいおい研究するさ」

「そんな」

無責任だとカリンが言おうとした。

「それしか方法がないのだ。しのごの言わず、早くいけ」

「でも、ツィッギーたちが……」

なおも、カリンがくいさがった。

「ここはもうもたない。早くこっちへきてくれ」

バリュウは、上の方にいるドンゴたちを手招きした。

「だめだ、階段が溶け落ちている。わしらはいい、バリュウとカリンだけでも逃げだせ。わしらを、お前さんたちの足枷にしないでくれ！」

パイパーが叫ぶ。

床が鳴動した。飛びたとうとしたバリュウが、バランスを崩してよろける。床に走った亀裂から、溶岩が噴きだしてきた。

「くそ」

行手を噴きあがる溶岩の壁に阻まれて、バリュウが唸った。

「彼らはわしに任せておけ。時間がない、いけ、オッドアイ！」

光壁で飛んでくる溶岩の滴を防ぎながらクリードが叫んだ。

「だめだ、彼らを……」

抗う神竜を、オッドアイがつかんだ。

バリュウの視界が、奇妙な形にねじれた。瞬間的に平衡感覚が消え、バリュウたちは火の山から転移した。

8

遥か空中高くに、バリュウたち四人は浮かんでいた。オッドアイに支えられてカミーラは浮遊し、カリンはバリュウの腕にだきかかえられていた。

眼下には見覚えのある泉と森が広がり、西の方角には火竜の尻尾の山々の連なりが見える。

火の山を中心にして、光の降臨にも似た一本の光条が空へと昇っていった。上空にたれこめ

ていた雲を貫き、穴を穿（うが）って渦巻かせる。光はじょじょにその太さを増していき、巨大な光の柱として火竜の尻尾をつつみ込んでいった。

光の柱が火竜の尻尾の外輪山以外のすべてをつつみ込んだとき、その内部で大爆発が起こった。

柱の内部で爆炎と炎が渦を巻く。

だが、爆発の力は光の柱に封じ込められ、その外には一切漏れてはこなかった。

「バリュウ……」

カリンが、バリュウの腕をきゅっと握り締めた。ツィッギーたちはどうなったのだろう、そして、クリードは、ポンペイの人たちは……。

バリュウには、気休めの言葉を口にすることしかできなかった。

光の柱が収束していく。ゆっくりと細くなっていき、やがて一筋の光条となって消えていった。

あとに残ったものは、盆地と化した火竜の尻尾と、そこに広がる広大な砂漠であった。後に悪魔の尻尾と人々が呼ぶ土地が、このときに誕生したのだった。

「降りるぞ、神竜」

オッドアイがバリュウを促した。

マントの裾（すそ）をはためかせながら、カミーラの肩を支えたオッドアイがまっすぐに下降してい

く。

バリュウはカリンにうなずくと、ゆったりとした螺旋を描きながら地上へとむかった。

地上では、人影が一つ彼らを待っていた。

「クリード」

バリュウたちが、彼の名を呼ぶ。

「まあ、うまくやれたと思うよ。ポンペイの人々も、神竜の仲間たちも時の封土に無事避難させることができた」

「パイパーたちに会うことはできないの」

カリンがクリードに訊ねた。自分の足で地上に降り立った彼女は、カミーラのさしだしてくれた深紅のマントを身体にまきつけている。

「それは無理だな。だが、おかげでいい研究の目的ができた。彼らをこの世界に呼び戻す方法を見つけることが、しばらくのわしの楽しみとなるだろうて。首尾よく見つけだしたら、彼らはある日ひょっこりとお前さんたちの前に現れるだろうよ」

クリードがカリンに片目をつぶってみせる。

「神竜、いや、バリュウとお呼びするべきかな。マヌアルはすべて失われた。愚かな古の神々の取り決めごとも効果を失い、大地の力を失った多数の遺跡は、本当の遺跡となっていくはずだ。真に自由の身となった今、あなたはどうするつもりかな」

ふいに言葉を改めると、クリードはバリュウに問うた。
「カリンを連れて、パルメキアへ帰らなければならない。だが……」
神竜は、すっと魔将軍に視線を流した。
「私たちのことなら、今は心配しなくてもいい。私たちは、グランス島に渡って、しばらく眠りにつくつもりだ。百年か二百年か、あるいはもっと長くか。いずれにしろ、今は時ではない。世が平和である限り、我々は眠り続けることにするさ。だから、安心して国に戻るがいい」
オッドアイは、毅然とした態度でバリュウに告げた。もはや争うべき時は過ぎ去ったことを、二人は無言のうちに確認しあった。
「カマリアもいってしまうの……」
「ええ。私はゼノン様に忠誠を誓った身。そして、オッドアイ様に心を捧げた身ですから」
カミーラは、オッドアイにわずかにもたれながら答えた。
「もし望むならば、我々と一緒にこないか」
オッドアイが、バリュウに呼びかけた。
「このまま、人間どもの間で異端として一生を送るよりは、そのほうが幸福だと思うが。私もカミーラも、異存はない。我々は、人間などとくらべたらよほど神竜に近い存在だと思っている」
カリンは不安を隠しきれず、きつくバリュウの腕を握り締めた。バリュウを見つめるカミー

ラの穏やかな瞳を、これほど怖いと思ったことはない。彼女は、本当にバリュウを連れていってしまうつもりなのであろうか。

だが、バリュウは迷わなかった。即座に、小さく首を振る。

「やめておこう。人からも魔物からも、私は外れた存在だ。今まで通り、一人静かに暮らすよ。カリンの訪ねてくるのを楽しみとしながらね」

「そうして、くるはずもない神竜の仲間を待ち続けるのですか」

さあと、バリュウはカマリアに嘯いた。

「好きにするさ。マヌアルのなくなった今、お前の寿命は千年。考える時間はたっぷりとある。気が変われば、いつでも訪ねてくるがいい」

オッドアイの言葉に、カリンは微かに心を震えさせた。

別れの時がくる。

「せめて、別れの時は、この姿で送りましょう」

今ひとたびだけ、カミーラがカマリアの姿に戻る。

「もしかしたら、今はこちらの姿の方が本当の私に近いのかもしれませんね。カリン、バリュウ、いつまでもおしあわせに」

カミーラの言葉に見送られて、カリンをだきかかえたバリュウは力強く翼で大気を打った。

白い身体が、大空へと飛びあがる。

「いくのか」
バリュウを見送ったクリードが、オッドアイに訊ねた。少年がこくりとうなずく。
「しがらみなど捨て去って、わしのように自由気ままになればいいものを」
「しかたない。それが私の選んだ道だ。いくぞ、カミーラ」
「はい、オッドアイ様」
一礼するカミーラを、オッドアイは自らのマントの中にだきよせた。
「いずれまた、会うこともあるだろう。さらばだ、クリード」
その言葉を最後に、オッドアイとカミーラはクリードの前から姿を消していった。

第六章　神竜の血脈

1

パタンと、バリュウは書きかけの日記帳を勢いよく閉じた。
ドラゴニアの住み慣れた自分の家に、バリュウは独りで戻ってきていた。
静けさが不快だった。
独りには慣れていたのではなかったのか。
カリンとウランバートルで別れて以来、彼は一時も心を落ち着けることができなかった。クリンを迎えにパオ平原へむかうカリンを、バリュウは独りで送り出したのだ。
「しかたないじゃないか。僕は竜で、カリンは人だ。種族も、姿かたちも、寿命も……、あまりに違い過ぎるじゃないか」
誰（だれ）に問われるでもなく、カリンに告げた言葉をバリュウは自分自身に言い続けた。言い続けることによってのみ、それが正しいことだと思い込もうとしていた。
「もし自分がカリンを受けいれれば、彼女は人として異端となるのではないだろうか。その考

えがバリュウの恐れであり、そして、未だにどうしても捨てきれない彼の弱さでもあった。
「不幸になるのは、彼女だ」
バリュウはそう決めつけた。
さらに数日が過ぎ、旅の詳細をあらためて記述した日記帳もいっぱいになった。
カリンはまだ戻ってきていないようだ。帰ってきたら知らせてくれるようにマロンに頼んではあるが。ウランバートルで別れてから、すでに一月以上経とうとしている。
パオトレインの修理が、予想以上にかかっているのだろうか。それで、クリンが帰れなくて、彼女もつきあっているのかもしれない。だが、それならそれで、手紙の一つぐらいあってもいいだろうに。
バリュウは、不条理にもカリンにむかって腹をたてた。
「そうだよ、連絡ぐらいよこしたっていいじゃないか。いくら、喧嘩別れのように別れたからって、いつも一緒にいたのにひどいじゃないか……」
口にしてみてから、バリュウは自分の言葉に戸惑った。
思うだに、カリンはいつも彼のそばにいたのだ。
今度の旅で、バリュウは何を得たのだろう。
カリンは、仔竜のときも、旅の間も、そしてたぶん今も、バリュウを神竜としてではなくバリュウとして見ていてくれたのではなかったか。彼女自身も、人としてではなく、カリンとし

てバリュウに接してきたはずだ。

——あなたは、神竜としてではなく、バリュウとして選ぶべきよ。だって、神竜である前に、バリュウはバリュウなのだから。あたしはあなたを信じてる。

以前、ザッパたちと囲んだ焚火(たきび)のそばでカリンが言った言葉が、バリュウの脳裏にまざまざとよみがえる。

ずっとカリンは、バリュウが心を開いてくれるのを待っていたのだ。

もし、彼女が不幸になるとすれば、それはバリュウの弱さが招くものに違いなかった。彼はずっと、自分の心だけを大切にして、カリンの心を無視してきたではないか。結局、自分を縛(しば)っていたのは、カリンではなくて自分自身の心であったことにようやっとバリュウは気がついた。

部屋の中を見回してみる。本棚には、ボーケンが送ってくれた本と、自分で書いた昔の日記がならんでいる。彼はバリュウに言ったはずだ、いつかは自分自身の物語を書き記すときがくるはずだと。

カリンは帰ってはこない。

バリュウの我慢(がまん)は、ついに限界に達した。

そう、このまま待っていたとしても、自分自身で行動しない限り何も起きはしないではないか。

カリンを迎えにいこう。
真っ白な日記帳を手に持ったまま、彼は外へむかった。
初めて本当の意味で、バリュウは自分の家から外へと飛びだしていったのだった。
ややあって。
入れ違うようにして、誰もいなくなった神竜の村を訪れる者があった。
「バリュウ様、いらっしゃいますか?」
戸口をとんとんと叩きながら、マロンは大きな声でバリュウを呼んだ。
答はない。
「クリンから手紙がきたんですよ。バリュウ様、手紙ですよ」
行き違いになったことも知らず、マロンはひたすらバリュウを呼び続けた。

2

自らの翼で、バリュウは海を越えてパオ平原にたどりついた。力強い翼と驚くべき神竜の体力は、わずか半日で彼をパオトレインに到着させた。
突然の来訪に、コロンは驚きを隠さなかった。同時に、女王はひどく喜んでもくれた。
聞けば、すでにパオトレインの修復は終わっており、カリンたち姉妹はマナリナにむかったとのことだ。

しかし、なぜルドル村に戻らないでマナリナなどへむかったのだろうか。パイパーのことは、すでにウランバートルにいる魔道士の遠話(えんわ)の魔法によって伝えられているはずだ。

とまれ、バリュウはコロンに暇(いとま)を告げると、すぐにマナリナへむかうことにした。

「急(せ)いていらっしゃるのですね」

バリュウの姿を見て、コロンがくすりと笑った。

「もう迷いから覚めたあなたには、本当ならば余分なことになるのかもしれませんが、マナリナでは予想外の驚きと喜びが待っていることでしょう。大いなる敬意をもって、私(わたくし)は祝福いたします、新しき神竜の一族の王よ」

コロンはたむけの言葉をバリュウにおくると、同格以上の者に対する正式な礼を彼に対して行った。

過分だと恐縮しながら、バリュウはパオを後にした。たった一人だけの一族の長(おさ)に、たくさんの人々を治める女王が深く頭を下げるなど恐れ多いと彼は思ったのだ。まして、王などと呼ばれるべきものではない。

そして、丸一日かけて、バリュウはバストークの山を越えて魔道士の都(マナリナ)へたどりついた。わきめもふらずにクリンがいるであろうオババ様の部屋を訪ねたバリュウは、そこで信じられないものと出逢(であ)った。

彼を迎えたものは、一匹の白い神竜だったのだ。

バリュウは、驚きで目をぱちくりさせた。パルメキアの神竜も滅び、もう世界に同族は誰もいないと思い込んでいた彼にとって、これは驚き以外のなにものでもなかった。
「驚いたでしょ、バリュウ」
悪戯っぽい笑みを浮かべながら、クリンとオババ様が神竜の後ろから姿を現した。
「驚いたも何も、こちらの方は誰なんだい。それと、カリンはどこにいるのかな。僕は彼女に伝えたいことがあって、慌ててやってきたんだ」
バリュウは、少し混乱しながら早口でクリンにまくしたてた。
呆れたように、クリンが横に立つ神竜に目配せをする。
「わからないの、ここにいるのが私のお姉ちゃん――カリンなのよ」
「えっ!?」
クリンの言った意味がよくのみこめず、バリュウはぽかんと目の前の神竜を見つめた。少しはにかむように、神竜が目を伏せる。
「カリン……!?　君は……、カリンなのかい?」
少し間の抜けたバリュウの言葉に、神竜はこくりとうなずいた。
「手紙を読まなかったの?」
問いただすクリンに、バリュウは小首をかしげた。
「ほっほっほっ。わしの研究のおかげじゃよ。すごいであろうが」

突然しゃしゃり出てきたオババ様が、唖然とカリンを見つめ続けるバリュウに詰めよった。かつてここで集めた細胞のおかげで、カリンを神竜に変えることができたらしい。
「わしの研究の集大成じゃぞ。他の誰にもこんなことはできはせんのだぞ」
暗に誉めろと、オババ様が強要する。バリュウはたじたじとなって、老人をクリンの方へと追いやった。
「だが、なんと思いきったことを。まさか、もう元の姿に戻れないなんてことはないんじゃないだろうね」
ふいに真顔になってバリュウは訊ねた。
「お姉ちゃんは、そのつもりよ。人間捨てちゃう気だったらしいから。それでもいいって聞かなかったの。一生に一度だけの決意よ。お姉ちゃんの人生だもの、私は何も言うことはできないわ。——さあ、バリュウ、どう責任を取るつもり」
「責任って……」
唐突に責められて、バリュウは困ったようにクリンとカリンを交互に見比べた。
「人間じゃなくて、神竜を好きになっちゃうなんてね。他に類を見ないほどの変わり者だけど、一応は私のお姉ちゃんなんだから。もっとも、私は竜の義兄ができたって、いっこうにかまわないけれど」
「迷惑だった？バリュウ」

恐る恐るカリンが訊ねた。

「そんなことはないさ。君はすごくきれいな竜だと思う」

迷わず、バリュウはカリンに自分の想いを口にした。

「でも、時間が経てば、また元の人間に戻ってしまうかもしれないの。あるいは、一生この姿のままか。——これは一時の夢なのかもしれないのよ」

恐れるように、カリンはささやいた。

「かまわないさ。僕は、カリンを迎えにドラゴニアから飛んできたんだ。人間のカリンでもなく、神竜のカリンでもない、カリンという一つの存在を。——僕は君を愛している」

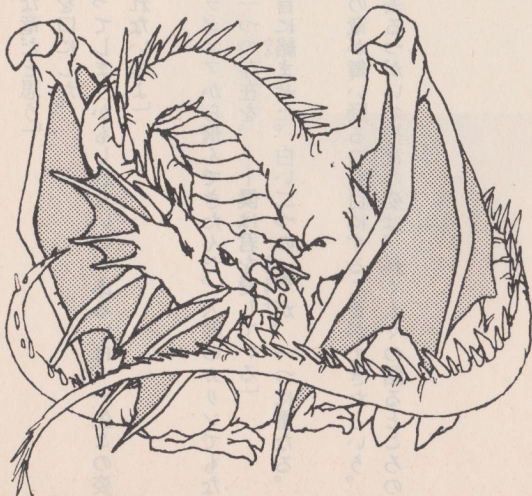
バリュウは、そっと自分の首をカリンの首に絡ませた。白い二つの影が、一つに重なる。

二竜は、そのまま長い時を過ごした。

マナリナの人々は、その夜、星空に二匹の竜が舞い踊るのを目にすることができたという。

そして、東の空へむかって連れ添って飛び去るつがいの神竜の姿は、長く人々の語るところのものとなっていった。

Long, Long ago

こうして、バリュウはカリンと一緒になったの。
二人の間にはたくさんの仔竜が生まれたわ。
そして、二人から新たな神竜の一族が始まったのよ。
それは遠い遠い昔の話。
ドラゴニアが神竜で満ちるずっと前、私たちの血脈をたどっていった先の、始まりの物語。
ぼうや、覚えておきなさい。
むかしむかし、バリュウという名の一匹の仔竜がいたの……。

あとがき

『シャイニング・フォース　神竜の血脈』いかがだったでしょうか。
もとは、セガのメガドライブ用にⅠ・Ⅱが、ゲームギア用に外伝のⅠ・Ⅱが出ている、タクティカルコンバット式のRPGです。
実は、私はメガドライブは持っていません。しかたないので知合いから機械とソフトを借りてきて、鬼のように解きました。本伝のⅠ・Ⅱを四日という異常な早解きです。ちゃんとエンディングも見てます。
面白かったですね。
サクサクと、楽しく遊ばせてもらいました。
お気に入りのキャラは、バリュウ・ドミンゴ・ツィッギー・リンダ・シーラというところですか。ゲーム中では、ずいぶんとお世話になったキャラたちでもあります。やはり、体力と魔力の強いキャラは基本ですねえ。
今回は、あえて小説としてのオリジナルキャラを排しています。純粋なオリジナルは一人だ

けです。とはいえ、カリン・クリン・コロンをはじめとして、メインキャラたちはかなりリファインしてありますが。

ゲームを解いた方は、懐かしいサブキャラのオンパレードに、結構楽しんでいただけると思います。外伝のキャラもちょこっと出てきます。岩清水の森の泉で、ツィッギーが「こんなところで溺(おぼ)れる人はいませんわ」なんて言っているのも、IIを解いた人は、にやりとできるかもしれません。もちろん、ゲームを知らない方も十分楽しんで読めますのでご心配なく。

ツィッギーといえば、文中ではハーフエルフとなっています。実は、ゲームの設定は人間なのですが、イラストはもろエルフなんですよね。打ち合わせのときに確認の質問をしたのですが、「さあ、どちらだっけ」ということになり、結局、「ハーフエルフということにしましょう」におちついたわけです。ついでに、リンダもハーフエルフです。だから、設定間違ったわけじゃないのよお。決して、関係者全員で笑ってごまかしたなどということは……。

それにしても、「バリュウが主人公だよーん」と言ったら、知合いはみんな驚いていました。結局よほど意外だったのだろうか。サラ・ロイド・バッカスの諸国漫遊記も考えてはいたけど、結局、この話にしてしまったものね。いいの、竜が好きだから。といっても、バリュウは純粋な竜とはちょっと違うけど。

さて、読み終わった方は、しまってあったＲＯＭを引っ張りだして、久しぶりにゲームをやってみるのもいいかもしれません。きっとキャラたちの違った面が見えてくると思います。そして、解いた後にまたこの本を読んでもらえば、また新しい発見があるかもしれません。

願わくば、皆様の楽しみがロンドとなりますように……。

篠崎砂美

一、この文庫本は、㈱セガ・エンタープライゼスの許諾を得て発行されたものです。

二、この文庫本に引用された商標「MEGA DRIVE」及び図形商標「MD」は㈱セガ・エンタープライゼスの商標です。

シャイニング・フォース

神竜(しんりゅう)の血脈(けつみやく)

篠崎砂美(しのさきさみ)

角川文庫 9402

平成六年七月一日　初版発行

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話　編集部(〇三)三八一七—八四五一

営業部(〇三)三八一七—八五二一

〒一〇二　振替東京③一九五二〇八

印刷所——新興印刷　製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

S 32-6

ISBN4-04-413206-2　C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

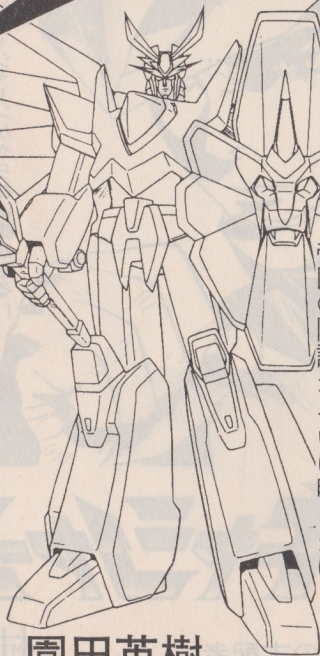
〈ファンレターのあて先〉
〒113 東京都文京区本郷5-24-5
角川書店 書籍第一編集部気付
「篠崎砂美先生」係

方向音痴のマッパー兼詩人
パステルを筆頭に
初心者の6人と1匹のパーティが
はらはらドキドキの大冒険！
大好評RPGファンタジー!!
胸キュン冒険ストーリー。
スニーカー文庫
SNEAKER BUNKO

麻宮騎亜　原作/監修
重馬　敬　著
イラスト:麻宮騎亜

麻宮騎亜　原作/監修
重馬　敬　著
イラスト:菊池通隆

麻宮騎亜　原作
辻　壮一　著
イラスト:菊池通隆

絶対無敵
ライジンオー
ライジンオー出動!!
地球防衛組にとっての最大の敵・ジャーク
帝国の陰謀が、ついに明らかに……?!
僕たち地球防衛組(上)
僕たち地球防衛組(中)
僕たち地球防衛組(下)
園田英樹
ILLUSTRATION 武内 啓
スニーカー文庫
SNEAKER BUNKO

角川スニーカー文庫
篠崎砂美作品集

魔封の大地アンクローゼ[上]
魔封の大地アンクローゼ[下]
歌姫—カンタービレ—
Ⅰ歌姫の騎士
歌姫—カンタービレ—
Ⅱ歌姫の旅路
歌姫—カンタービレ—
Ⅲ歌姫の迷夢
シャイニング・フォース
神竜の血脈

カバー　旭印刷

9784044132064

ISBN4-04-413206-2

C0193 P600E 定価600円
（本体583円）

1910193006002

あの戦いの後、独りドラゴニアで暮らしていたバリュウ。だが神竜としての運命が、彼を戦場へと呼び戻した。港に漂着した難破船の生き残りの娘カマリアは、パルメキアの神竜を救うため、秘伝の書（マヌアル）を求めてかの地（パルメキア）から渡ってきたという。秘伝の書（マヌアル）を探しに、バリュウ達は旅立つ！　襲いくる遙かな地（パルメキア）からの魔物（モンスター）達。彼らの真の目的は……。ルーンとパルメキア、二つの大陸を駆けめぐる新たなる光の軍団（シャイニング・フォース）。オリジナルサイドストーリー。

SNEAKER BUNKO

シャイニング・フォース
神竜の血脈

篠崎砂美

角川スニーカー文庫

32-6
600

シャイニング・フォース 神竜の血脈 篠崎砂美 角川スニーカー文庫

9784044132064

ISBN4-04-413206-2
C0193 P600E 定価600円
（本体583円）

1910193006002

あの戦いの後、独りドラゴニアで暮らしていたバリュウ。だが神竜としての運命が、彼を戦場へと呼び戻した。港に漂着した難破船の生き残りの娘カマリアは、パルメキアの神竜を救うため、秘伝の書（マヌアル）を求めてかの地（パルメキア）から渡ってきたという。秘伝の書（マヌアル）を探しに、バリュウ達は旅立つ！ 襲いくる遙かな地（パルメキア）からの魔物（モンスター）達。彼らの真の目的は……。ルーンとパルメキア、二つの大陸を駆けめぐる新たなる光の軍団（シャイニング・フォース）。オリジナルサイドストーリー。

シャイニング・フォース
神竜の血脈
篠崎砂美
角川文庫
9402

スニーカー文庫

二つの大陸をつなぐ（ルーンとパルメキア）

新たな戦いが始まる――

今月の新刊

スニーカー文庫は毎月1日発売です。

定価600円（本体583円）

スニーカー文庫

Ⓟ 600

角川文庫

8月刊行予定・スニーカー文庫は毎月1日発売です。

特捜戦車隊ドミニオン①
ねむるあんず〈イラスト〉士郎政宗・大貫健一

サイバーナイトⅡ
地球帝国の野望
山本 弘とグループSNE〈イラスト〉青木 純

ヤマトタケル
光のカオン
井内秀治〈イラスト〉岸田隆宏

薔薇のエピタフ
サイレントメビウス外伝 幕末闇婦始末記4
麻宮騎亜＝原作 大沼弘幸＝著〈イラスト〉麻宮騎亜

戦―少女（イクサーガール）イクセリオン（上）
新星紀編
平野俊弘＝原作
中村 学＝構成・設定監修
早見裕司＝著〈イラスト〉平野俊弘

竜剣少女伝説
復活の王子
渡邊由自〈イラスト〉衣谷 遊

卒業Ⅱ
夏・空があれば
塚本裕美子〈イラスト〉こばやしひよこ

おそれいりますが
50円切手を
お貼りください。

郵便はがき

東京都千代田区富士見2-10-36
飯田橋郵便局留置
「角川スニーカー文庫編集部」行

お名前	年齢　　歳	性別　男・女
ご住所 〒		
Tel	学年または職業	

ご協力ありがとうございました。アンケートにお答えいただいた方には抽選で毎月50名様に特製テレホンカードを差し上げます。
発表は、発送をもってかえさせていただきます。

今回お買い上げいただいた作品名 [　　　　　　　　]

Q. この作品については、何で知りましたか？（いくつでも○印をつけてください）

a）雑誌で　誌名 [　　　　　　　　]
b）他の文庫本のリストで　作品名 [　　　　　　　　]
c）チラシで　d）文庫の帯を見て　e）ラジオCMで　f）友人から　g）書店で見て
h）その他 [　　　　　　　　]

Q. いつごろからスニーカー文庫、スニーカー・G文庫を読んでいますか？

スニーカー文庫：　年　歳から　スニーカー・G文庫：　年　歳から

Q.好きな作家を教えてください。(何人でも)

[ ]

Q.好きなイラストレーターを教えてください。(何人でも)

[ ]

Q.好きな漫画家を教えてください。(何人でも)

[ ]

Q.よく買う雑誌を教えてください。(いくつでも)

[ ]

Q.過去1年間に読んでおもしろかったスニーカー文庫、スニーカー・G文庫のタイトルを3つあげてください。

スニーカー文庫 [ ]
スニーカー・G文庫 [ ]

Q.スニーカー文庫、スニーカー・G文庫以外によく読む文庫に○印をつけてください。その中で好きな作品名、作者名をあげてください。

a) X文庫ホワイトハート [ ]
b) キャンバス文庫 [ ]
c) コバルト文庫 [ ]
d) スーパーファンタジー文庫 [ ]
e) 電撃文庫 [ ]
f) 富士見ファンタジア文庫 [ ]
g) ログアウト冒険文庫 [ ]
h) その他 [ ]

Q.過去1年間にやっておもしろかったゲームのタイトルを教えてください。(いくつでも)

a) 家庭用、パソコン(機種名も) [ ]
b) アーケード [ ]
c) TRPG、ボード [ ]
d) その他 [ ]

Q.スニーカー文庫、スニーカー・G文庫を何冊くらいもっていますか?

スニーカー文庫　　冊　　スニーカー・G文庫　　冊

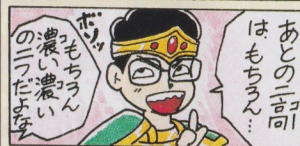
Q.1年間に、スニーカー文庫、スニーカー・G文庫を何冊くらい買いますか?

スニーカー文庫　　冊　　スニーカー・G文庫　　冊

Q.おこづかい(自由になるお金)は月にいくらくらいですか? [ ]

Q.今後スニーカー文庫、スニーカー・G文庫でどのようなものを読みたいですか?

[ ]

8月1日、いよいよ始動!

お便り大募集!

スニーカー文庫、スニーカー・G文庫の読者のためのコミュニケーション・ペーパーを創刊します。先生へのQ&A、イラスト・コーナーなど多数の企画を用意しています。先生に聞きたいこと、知りたいこと、大募集! もちろん、イラストや、スニーカー文庫に対する意見や感想でもOK。こういうコーナーが欲しい、なんていうのも待ってるぞ。手紙をくれた人の中から抽選で50人にオリジナル・テレカをプレゼント! さらに本紙に採用された君にはもっとすてきなプレゼントも用意されている。さあ、君もスニーカー・ワールドに参加しよう!

[お便りのあて先]
〒113 東京都文京区本郷
5-24-5 角川書店
「スニーカー文庫編集部」

角川書店
〒102 東京都千代田区富士見2-13-3
Tel.03(3817)8521(営)振替東京3-195208

特集

スニーカー文庫、スニーカー・G文庫の中から、最注目の作家・作品を大特集！ 第1回目は冴木忍先生。先生自ら選んでもらった「××なキャラクターベスト3」を発表するぞ。どんな「××」かって？ それは見てのお楽しみ！

TRPG卓上劇場

TRPGって知ってるかい？ テーブルトーク・ロールプレイング・ゲームのことなんだ。スニーカー文庫の読者ならたぶん一度くらいは聞いたことがあるんじゃないかな。スニーカー・G文庫の読者なら当然知っているよね。そのTRPGのAからZまで、このコーナーで教えちゃうぞ！

さあ、たくさんのワクワクが登場するぞ！ 読者のみんなと先生たちのコミュニケーション・ペーパー、いよいよ8月1日創刊だ。いろいろなコーナーが君たちの参加を待っている！

不条理シアター

イラストレーター＆マンガ家の先生の日常がコミックに！ 第1回目は『小娘オーバードライブ』で人気爆発のむっちりむうにい先生。あの美麗なイラストを産み出す原動力は日常のどこに潜んでいるのか？ 超注目!!

なんでもQ&A

君たちの知りたいことをなんでも受け付けて答えちゃうぞ！ 先生に聞きたいこと、作品の刊行予定など、赤裸々に答えてしまうのだ！

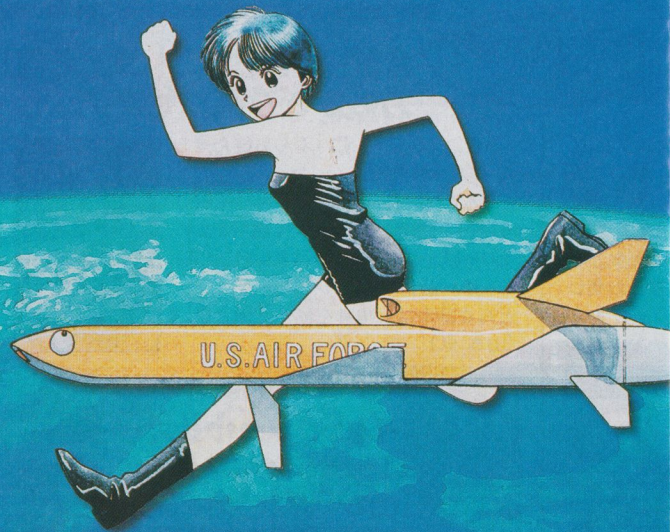
スニーカー大事典

スニーカー文庫に入っているあの作品は読んだかな？ もしまだだったらここで大解説しちゃうから読んでみてね。最初に取り上げるのは、『機動戦士ガンダム』。あのガンダム・ストーリーの原点だ！

私の好きなもの リレー・エッセイ

先生方の「私の好きなもの」をリレー・エッセイの形でばんばん紹介していきます。トップバッターは『MAZE（メイズ）☆爆熱時空』が絶好調、今ノリノリのあかほりさとる先生。ぽりりん先生の好きなものといったら……？

おたよりストリート

これこそみんなの活躍の場となるのだ！ 先生へのメッセージ、みんなに言いたいこと、キャラクターの似顔絵など、どんどん載せていっちゃうぞ！ ガンガン、ハガキを送ってね!!

スニーカー文庫
NEW BOOK NEWS

イラスト／ゆうきまさみ

SNEAKER BUNKO '94 7月

The Sneaker Special［夏］

女性のためのファンタジー雑誌
ザ・スニーカースペシャル

B5判／定価700円（税込）

創刊2号 7月5日発売

●総力特集
栗本薫
天才物語作家の虚と実

●エッセイ
水野良／ごとうしのぶ
中村うさぎ／西炯子

●イラストストーリィ
高田明美
加藤洋之＆加藤啓介

●創作
木下司
イラスト萩尾望都
岡野麻里安
イラスト田村由美
榊原姿保美
イラストりん
藤水名子
イラスト橋本正枝
菅浩江
イラスト波津彬子
塚本裕美子
イラストこばやしひよこ
作&イラスト
飛天

表紙イラスト／いのまたむつみ
角川書店

〒102 東京都千代田区富士見2-13-3
TEL 03(3817)8521(営)／振替東京3-195208

7月1日発売

●スニーカー文庫は毎月1日発売です。　※定価には消費税が含まれています。

機動戦士Vガンダム⑤ エンジェル・ハイロゥ

完結

富野由悠季〈イラスト〉美樹本晴彦・カトキハジメ

“天使の輪”に導かれた最後の戦い！ ウッソの前には憧れの人カテジナが立ちはだかる!! 感動巨編堂々完結。

薔薇のエピタフ

サイレントメビウス外伝　幕末闇婦始末記4

麻宮騎亜：原作　大沼弘幸：著〈イラスト〉麻宮騎亜

7年前アメリカで妖魔にさらわれた羅織の妹が、恐るべき敵となって江戸に現れる！ 大人気シリーズ第4弾!!

オルディコスの三使徒 2 紅蓮の絆

菅　浩江〈イラスト〉鈴木雅久

王都ラズルドーンへと入った3人。そこで彼らをむかえるものは……？ 待望の2巻、ついに登場!!

ギャラクシー・トリッパー美葉②

空のかなたのユートピア

山本　弘〈イラスト〉ゆうきまさみ

宇宙の放浪者(まいご)・美葉ちゃんとルーくんは、地球を探してあてどのない旅を続ける……。沈黙を破って久々登場！

ティルト・ワールド3 天地無用の冒険者

完結

安田　均：原案　友野　詳：著〈イラスト〉弘司

グンバルが生き返った!? ミュールの砦を目指し、混沌の荒れ野を突き進む6人組……。驚天動地の完結編!!

シャイニング・フォース 神

篠崎砂美〈イラスト〉SUEZEN

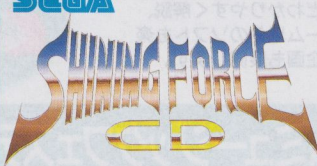
神竜(バリュウ)を誘(いざな)う過酷な宿命は、もう一つの光の軍隊(シャイニング・フォース)を創り出した……。

©1992 NHK総合ビジョン・G.TAC・SUEZEN

華麗なSUEZENワー

SUEZEN画

B4版変型・全100ページ　予価

「シャイニング・フォース」「ヤ
ろん、画集用描き下ろしオリ

あのシャイニング・フォースがメガ-C

SEGA
SHINING FORCE CD

邪神イ・オムの野望から
世界を救うのは誰か!!
メガ-CDが贈る
シリーズ最新作!!

7月22日発売　7,800円　©1993-1994 SEGA

●ゲームについてのお問い合わせは：〒144 東京都大田区羽田1-2-12 お客様相談センター
フリーダイヤル 0120-012235 受付/月～金曜日：10時～17時（祝祭日除く）

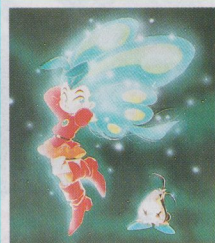
〒102 東京都千代田区富士見2-13-3 角川書店
TEL 03(3817)8521(営)／振替東京3-195208

7月1日発売　最新刊！

ハィロウ 完結
感動巨編堂々完結。

シャイニング・フォース 神竜の血脈

篠崎砂美〈イラスト〉SUEZEN

神竜を誘う過酷な宿命は、もう一つの光の軍隊を創り出した……。2つの世界をつなぐ、新たな伝説。

華麗なSUEZENワールドがきみの手に!!

SUEZEN画集 8月下旬発売予定

B4版変型・全100ページ 予価2,900円(税込) 角川書店

「シャイニング・フォース」「ヤダモン」のイラストはもちろん、画集用描き下ろしオリジナルイラストも満載！

©1992 NHK総合ビジョン・G.TAC・SUEZEN

シリーズ第4弾!!

の絆

いに登場!!

②

あのシャイニング・フォースがメガ-CDについに登場!!

SEGA

SHINING FORCE CD

邪神イ・オムの野望から世界を救うのは誰か！メガ-CDが贈るシリーズ最新作!!

7月22日発売 7,800円 ©1993-1994 SEGA

●ゲームについてのお問い合わせは：〒144 東京都大田区羽田1-2-12 お客様相談センター フリーダイヤル 0120-012235 受付/月～金曜日：10時～17時(祝祭日除く)

を破って久々登場!

険者 完結

天動地の完結編!!

新刊TOPICS

おまたせしましたっ！待望の続刊ついに登場!!

お待たせいたしました。「オルディコスの三使徒[2] 紅蓮の絆」をお届けします。[1]はブラウ中心でしたが、今度は王都のイシュ、赤い色を求めるタグ、新キャラのサッターやおてんば王女、そろそろ見えてくるテーマなどなどお楽しみください。最終巻はこのあとすぐです！（菅 浩江）

きみはもう読んだかな？ 大反響の第1巻、絶賛発売中！

オルディコスの三使徒 [1]

妖魔の爪 500円

菅 浩江〈イラスト〉鈴木雅久

楽師、香師、夢師――オルディコスの三使徒は、邪神と戦うため旅立つ!! 運命にたぐられた彼らを待ちかまえるものは!?

合言葉は「奇想天外、荒唐無稽」力のかぎり笑わせます！

どうも、山本です。ずいぶんお待たせしちゃってすいません。
ところで、タイトルを「ギャラクシー・ストリッパー」と間違える人が多くて困ってます。そりゃ確かに脱ぐシーンは多いけど（笑）、そーゆー話じゃないんだよ～ん。
どんな話かは、中身を見てください。
（山本 弘）

みんなっ、忘れてないよね!? 爆笑第1巻、大好評発売中！

ギャラクシー・トリッパー美葉①

10万光年のエスケープ 520円

山本 弘〈イラスト〉ゆうきまさみ

あたし飾美葉14歳。学校の屋上で、命令実行中の巡航ミサイルに道を訊かれて……。と～んでもない宇宙放浪記。

〈好評既刊〉

魔動王グランゾートY 南海の魔王 560円
広井王子＆レッド・カンパニー〈イラスト〉芦田豊雄

恐竜拳士リュウコ 520円
工藤 治〈イラスト〉山下敏成（ゼロGルーム）

隻腕の神の島 成就の章 完結 560円
前田珠子〈イラスト〉麻々原絵里依

ラングリッサーII（上） 470円
紙井 中〈イラスト〉うるし原智志・中村春勝